

# ファウスト

FAUST. EINE TRAGODIE

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ

青空文庫



薦むる詞ことば

昔我が濁れる目に夙はやく浮びしことある

よろめける姿どもよ。再び我前に近づき来たるよ。

いでや、こたびはしも汝達なんたちを捉へんことを試みんか。

我心猶なおそのかみの夢を懐かしみすと覚ゆや。

汝達我に薄せまる。さらば好し。靄もやと霧との中より

我身のめぐりに浮び出でて、さながらに立ち振舞へかし。

汝達の列つらのめぐりに漂へる、奇くしき息に、

我胸は若やかに揺らるゝ心地す。

樂しかりし日のくさ／＼の象かたを汝達もたらは齎もたらせり。

さて許多あまたのめでたき影ども浮び出づ。

半ば忘れぬる古き物語の如く、

初恋も始ての友情も諸共に立ち現る。

歎は新になりぬ。訴は我世の

蜘蛛<sup>くもで</sup>手なし迷へる歩<sup>あゆみ</sup>を繰り返す。

さて幸<sup>さいち</sup>に欺かれて、美しかりぬべき時を失ひ、

我に先立ちて去<sup>い</sup>にし善<sup>よ</sup>き人等の名を呼ぶ。

15

我が初<sup>すうけつ</sup>の数 を歌ひて聞せし霊<sup>たま</sup>等は

後の数 をば聞かじ。

親しかりし団<sup>まと</sup>欒<sup>とい</sup>は散<sup>あら</sup>けぬ。

あはれ、始て聞きつる反響は消えぬ。

我歎は知らぬ群の耳に入る。

その群の褒むる声さへ我心を傷ましむ。

かつて我歌を楽み聞きし誰彼

猶世にありとも、そは今所々に散りて流離<sup>さすら</sup>ひをれり。

20

昔あこがれし、静けく、<sup>いかめ</sup>厳しき靈の国をば

久しく忘れたりしに、その係<sup>あこがれ</sup>恋に我また襲はる。

我が囁く曲は、アイオルス<sup>こと</sup>の箏の如く、

定かならぬ音<sup>ね</sup>をなして漂へり。

我<sup>わ</sup>慄<sup>おる</sup>に襲<sup>い</sup>はる。<sup>なみだ</sup>涙相踵いで墮<sup>お</sup>つ。

厳<sup>なご</sup>しき心和み軟げるを覚ゆ。

今我<sup>も</sup>が持たる物遠き処にあるかと見えて、

消え失せつる物、我がためには、現前せる姿になれり。

劇場にての前戯ぜんき

座長。座附詩人。道化方。

座長

これまで度々難儀に逢った時も、

わたくしの手助になつてくれた君方ふたり二人だ。

こん度の企くわだてがこの独逸国でどの位成功するだろうか、

一つ君方の見込が聞きたいのだがね。

殊に見物は自分達が楽しんで、人にも楽ませようとしているのだから、

わたくしもなるたけ見物の氣に入るようにしたいのです。

もう小屋も掛かり、舞台も出来ていて、

みんながさあ、これからがお慰なぐさめだと待っている。

誰も彼もゆつたりと腰を落ち着けて、眉毛を吊つるし上げて、

さあ、どうぞびつくりするような目に逢わせて貰いたいと思っている。

わたくしだって、どうすれば大勢の氣に入ると云うことは知っている。  
しかしこん程度どうして好いか分からないことはないのです。

何も見物が最善のものに慣れていると云うのではない。

ですが、兎に角いろんな物を恐ろしく沢山読んでいるのですな。

何もかも新らしく見えて、そして意義があつて

人の氣に入るようにするには、どうしたら好いでしょう。

なぜそう云うかと云うと、わたくしは一番大当りがさせて見たい。

見物が人波を打つてこの小屋へ寄せて来て、

狭い恵の門口を通ろうとして、何度押し戻されても

また力一ぱいに押し押しして、

まだ明るいうちに、四時にもならないうちに、

腕ずくで札売場の口に漕ぎ附けて、

丁度饑饉の年に麴包屋の戸口に来るように、

一枚の入場券を首に賭けても取ろうとする、

そう云う奇蹟を、一人々々趣味の違う見物の群に起させるのは

詩人だけですな。どうぞ、君、こん度はそんな按排あんばいに願いたいですな。

詩人

いや。どうぞあの見物と云う、色変りの寄合勢れいの事を

言わないで下さい。あれを見ると、詩人の霊れいは逃げるのです。

あの、厭いやがるわたくし共を、無理に渦巻に巻き込もうとする

人の波を、わたくし共の目に見せないように隠して下さい。

それと違って、詩人だけに清い歓喜の花を咲かせて見せる、

静かな天上の隠家へ、わたくしを遣って下さい。

あそこでは愛と友情とが、神々の手で、

わたくし共の胸の祝福を造って、育ててくれるのです。

あそこで胸の底から流れ出るのを、

口が片言のようにはにかみながら囁いて見て、

どうかすると出来損ね、ひよいとまた旨く出来る。

それをあらゆる刹那の力が呑み込んでしまうのです。



どうかすると、何年も立つて見てから、  
やつと完璧になることもあります。

ちよいと光つて目立つものは一時のために生れたので、  
真しんなるものが後の世までも滅びずにいるのですね。

### 道化方

後の世がどうのこうのと云うことだけはわたくしは聞きたくありませんな。  
わたくしなんぞが後の世に構っていた日には、  
誰が今の人を笑わせるでしょう。

みんなが笑いたがつているし、また笑わせなくてはならないのです。  
役者にちやんとした野郎が一匹いると云うのは、  
兎に角一ひと廉かどの利方だと、わたくしには思われます。

まあ、気持の好い調子に遣る男でさえあれば、  
人の機嫌を気に掛けるような事はありませんまい。  
そう云う男は、見物の頭数を多くした方が、  
却て感動させ易いから、その方を望むのです。

まあ、あなたは平気で、しっかりした態度を示して、空想に、あるだけの取巻を附けて聞せて下さるですな。取巻は理性に悟性に感覚に熱情、なんでも結構でさあ。だが、おどけと云う奴を忘れてはいけませんぜ。

座長

なんでも出来事の多いが好いのですよ。

みんなは見に来るのです。見るのが大好きなのです。

見物が驚いて、口を開いて見ているように、

目の前でいろんな事が発展して行くようにすれば、

多数が身方になってくれることは受合です。

そうなればあなたは人気作者だ。

なんでも大勢を手に入れるには、嵩でかさこなすに限る。

そうすれば、その中から手ん手に何かしら捜し出します。

沢山物を出して見せれば何かしら見附ける人の数が殖える。

そこで誰も彼も満足して帰って行くのですね。

纏まとった筋の狂言でも、なるたけ砕いて見せて下さい。

こう骨董こつちやに羹と云う按排に、お手際で出来そうなものだ。

骨の折れない工夫で、骨の折れないお膳立をするのです。

縦よしやあなたの方で纏った物を出したところで、

どうせ見物はこわして見るのですからな。

### 詩人

いや。そんな細工がどの位悪いか、あなた方には分からないのです。

真の芸術家にどの位不似合だか、分からないのです。

その様子では、いかがわしい先生方の白人しろうとしごと為事が、

あなた方の所では、金科玉条になっていると見えますね。

### 座長

そんな悪口を言ったって、わたくしはおこらない。

なんでも男が為事を成功させようと云うには、

一番好い道具を使うと云うところに目を附けるのです。

思つて御覧なさい。あなた方は軟い木を割る役だ。

誰を相手に書くのだから、目を開いて見て下さい。

退屈まぎれに来る客もあれば、

えらい馳走に逢った跡で、腹ごなしに来る客もある。

それから一番の困りものは

新聞雑誌を読み厭あきてから遣つて来る。

仮装舞踏へでも行くように、うつかりして駆け附ける。

その足を早めるのは、物見高い心持ばかりです。

女客と来た日には、顔とお作りを見せに来て、

給金なしで一しよに芸をしてくれる。

一体あなた方は詩人の高みでなんの夢を見ているのです。

大入がなんであなた方は嬉しいのです。

まあ、その愛顧のお客様を近く寄つて御覧なさい。

半分は冷澹で半分は野蠻です。

芝居がはねたら、トランプをしようと云うのもあれば、

娼妓の胸に食つ附いて、一夜を暴れ明かそうと云うのもある。

そうした目的であって見れば、優しい詩の女神達めがみに

ひどく苦勞をさせるのは、馬鹿正直ではないでしょうか。

まあ、わたくしの意見では、たつぷり馳走をするですな。

どこまでもたつぷり遣るですな。それならはずれっこなしだ。

どうせ人間を満足させるわけには行かないから、

ただ烟けむに巻いて遣るようにすれば好い。

おや。どうしたのです。感心したのですか。せつないのですか。

# 詩人

いや、そう云うわけならあなたの奴隸を外から連れておいでなさい。

天が詩人には最上の権を、

人權を与えている。

それをあなたのために擲なげうたなくてはならないのですか。

一体詩人はなんでみんなの胸を波立たせるのです。

なんで地水火風に打ち勝つのです。

その胸から迫り出て、全世界をその胸に

畳み込ませる諧調でないでしょうか。

自然は無際限なる長さの糸に、

意味もなく縫<sup>より</sup>を掛けて紡<sup>つむ</sup>錘に巻くに過ぎない。

万物の雑然たる群は

不精々々に互に響を合せているに過ぎない。

そのいつも一様に流れて行く列を、

節奏が附いて動くように、賑やかに句切るのは誰ですか。

一つ一つに離れたものを総ての秩序に呼び入れて、

調子が美しく合うようにするのは誰ですか。

誰が怒罵号泣の暴風<sup>あらし</sup>を吹き荒<sup>すさ</sup>ませるのです。

夕映を意味深い色に染め出すのです。

誰が恋中の二人<sup>ふたり</sup>が歩む道のゆく手に

美しい春の花を蒔<sup>ま</sup>くのです。

誰が種々の功<sup>いさお</sup>を立てた人のために

見栄<sup>みばえ</sup>のしない青葉を誉の輪飾に編むのです。

誰がオリンポスの山を崩さずに置いて、神々を集わせるのです。人間の力が詩人によって啓示せられるのではありませんか。

### 道化方

そんならあなたその美しい力を使つて、

詩人商売をお遣りなさるが好いでしょう。

まあ、ちよいと色事をするようなものでしょうね。

ふいと落ち合つて、なんとか思つて足が留まる。

それから段々もつ纏れ合つて来る。

初手は嬉しい中になる。それから傍はたが水をさす。

浮れて遊ぶ隙もなく、いつか苦勞が出来て来る。

なんの気なしでいるうちに、つい小説になつている。

狂言もこんな風に為しく組んで見せようじゃありませんか。

充実している人生の真ん中に手を下くだすですね。

誰でも遣つてゐる事で、そこに誰でもは氣が附かぬ。

あなたが攫つかみ出して来れば、そこが面白くなるのですね。

誰彼となく旨がつて、為めになると思うような、

170

極上の酒を醸すには、

交った色を賑やかに、澄んだ処を少くして、

間違だらけの間から、<sup>あいだ</sup>真理の光をちよいと見せる。

そうすればあなたの狂言を、青年男女の<sup>よりぬき</sup>選抜が

見物しに寄つて来て、あなたの啓示に耳を<sup>そばだ</sup>欽てるのです。

175

そうすれば心の優しい限の人があなたの作から

メランコリアの露を吸い取るのです。

そうすれば人の心のそこそこをそそつて、

誰の胸にも応えるのです。

そう云う若い連中なら、まだ笑いでも泣きでもする。

180

はずんだ事がまだ<sup>すき</sup>好で、見えや形を面白がる。

出来上がった人間には、どんなにしても気には入らない。

<sup>ありがた</sup>難有く思うのは、出来掛かっている人間です。

詩人



なるほどそうかも知れないが、そんならこのわたくしが  
やはり出来掛かった人間であつた時を返して下さい。

185

内から迫り出るような詩の泉が

絶間なく湧いていた、あの時です。

霧に世界は包まれていて、

含める<sup>ふふ</sup>苔<sup>つぼみ</sup>に咲いての後の奇蹟を待たせられた時です。

谷々に咲き満ちている

190

千万の草の花をわたくしが摘んだ時です。

その頃わたくしは何も持つていずに満足していた。

真理を求めると同時に、幻を愛していたからです。

どうぞわたくしにあの時の欲望、

あの時の深い、そして多くの苦痛を伴っている幸福、

195

あの時の憎の力や愛の力を、耗<sup>へ</sup>らさずに返して下さい。

わたくしの青春をわたくしに返して下さい。

道化方

いや。その青春のなくてならない場合は少し違います。

戦場で敵にあなたが襲われた時、

愛くるしい娘の子が両の腕かいなに力を籠めて、

あなたの頸に抱き附いた時、

先を争う駆足に、遥か向うの決勝点から

名誉の輪飾があなたをさしまねいた時、

旋風にも譬たとえつべき、烈しい舞踏をした跡で、

宴うたげに幾夜をも飲み明そうとする時などがそれです。

それとは違って、大胆に、しかも優しく

馴れた音じめに演奏の手を下して、

自分で極めた大詰へみやびやかな迷の路を

さまよいながら運ばせる、

それはあなた方、老鍊な方々のお務です。

そしてわたくしどもはそのあなた方にも劣らぬ敬意を表します。

老いては子供に返るとは、世の人のさかしらで、

真の子供のままでいるのが、老人方の美点です。

座長

いや。議論はいろいろ伺ったが

この上は実行が拝見したいものですね。

あなた方のように、お世辞を言い合っている程なら、

その隙に何か役に立つ事が出来そうなものです。

気乗のした時遣りたいなどと、云っているのは駄目でしょう。

気兼をして遅疑する人には、調子が乗っては来ますまい。

詩人と名告<sup>なの</sup>って出られた以上は、

兵を使うと同じように、号令で詩を使って下さい。

わたくしどもの希望は御承知の通だ。

なんでも強い酒が飲ませてお貰<sup>もら</sup>いしたい。

どうぞ早速醸造に掛かって下さい。

きよう出来ないようなら、あすも駄目です。

一日だって無駄に過してはいけません。

髻たぶざを攫さらんで放さぬように、出来そうな事件を

決心がしっかり押えなくてはいけない。

またその決心がある以上は、押えたものを放しはなさるまい。

そこで厭でも事件は運んで行くですね。

230

御承知の通この独逸の舞台では

誰でも好きな事を遣つて見るのです。

ですからこん度の為事では

計画や道具に御遠慮はいらない。

上うわあかり明も大小ともにお使い下さい。

235

星も沢山お光らせなすつて宜しい。

水みずしかけ為掛かえんも好い。火も好い。岩組なども結構です。

鳥もお飛ばせなさい。獣もお駈けらせなさい。

造化万物何から何まで

狭い舞台にお並べ下さい。

240

さて落ち着きはらつて、すばしこく、天からこの世へ、  
この世から地獄へと事件を運ばせてお貰い申しましよう。

## 天上の序言

主。天宮の衛士。後にメフィストフェレス。

天使の長三人進み出づ。

ラファエル

昔のままの節博士<sup>ふしはかせ</sup>で、同胞<sup>はらから</sup>の星の群と、

日は合唱<sup>ね</sup>の音を立てている。

そして霹靂<sup>はたたがみ</sup>の歩<sup>あゆみ</sup>をして

極<sup>き</sup>まった軌道を行く処まで行く。

天使の中で誰一人その理<sup>ことわり</sup>を知ってはいぬが、

それを見たばかりで、天使は皆強みを覚える。

天地<sup>あめつち</sup>のなりいでた日に較べても、不思議な、

崇高な万物は同じ莊嚴を保っている。

ガブリエル

そして早く、不可思議に早く

美しい大地がみずから回転している。

天国のような明るさと

深い、恐ろしい夜とが交代する。

巖石の畳み成せる深い底から

幅広い潮流をなして海は泡立つ。

その巖も海も、永遠に早い軌道の歩に

引き入れられて、共に廻るのである。

### ミハエル

そして海から陸へ、陸から海へ、

暴風は怒号して往き、怒号して返る。

その往いては返る競争で、吹き過ぐる周囲に

深甚なる作用の連鎖が作られる。

ともすれば雷電の破壊の焰が

道のゆくてに燃え上がる。

しかし、主よ、御身の使徒等は  
御身の世の穩かなる推移を敬っている。

三人共に

天使の中で誰一人御身の心を知つてはいぬが、  
これを見たばかりで、天使は皆強みを覚える。  
そして御身が造れる一切の崇高な万物は  
天地あめつちのなりいでた日と同じ莊嚴を保っている。

メフィストフェレス

いや、檀那。お前さんがまた遣つて来て、  
こちとらの世界が、どんな工合になつてゐるか見て下さる。  
そして不断わたしをもひいき鼻厩びいぎにして下さるのだから、  
わたしもお前さんところ所の奉公人に交つて顔を出しました。  
御免なさいよ。ここいらの連中が冷かすかも知れないが、  
わたしには氣取つた言草いぐさは出来ない。  
わざと氣取つて見たところでお前さんが笑うだけだ。



それとも笑うなんと云うことはもう忘れていなさるかしら。

奉公人達の云う日だの星だのの事はわたしは知らない。

わたしは人間と云う奴の苦むのを見ているだけだ。

280

人間と云うこの世界の小さい神様は今も同じ性<sup>たち</sup>に出来ていて、

それこそ天<sup>あめつち</sup>地のなりいでし日と同じ気まぐれを保っています。

お前さんがあいつ等に天の光の影をお遣りなさらなかったら、

も少しは工合好く暮して行くのでしょうかね。

285

人間はあれを理性と謂ってどうそれを使うかと云うと、  
どの獣よりも獣らしく振舞うために使うのです。

まあ、お前さんの前だが、飛足のある虫の中の

<sup>こおろぎ</sup>  
と云う奴のように

飛んだり跳ねたりばかりしていて、

直ぐ草の中に潜っては昔のままの歌を歌う。

290

草のただけで我慢していてくれれば結構だが、

どどぶにも鼻を衝つ込みやあがるのですよ。

主

お前の云うことはそれだけかい。

いつでも苦情ばかり言いに来るのか。

いつまで立っても下界の事がお前には気に入らないのか。

メフィストフェレス

そうですね、檀那。わたしにはいつも随分厭いやに見えますね。

人間と云う奴が毎日苦んでいるのを見ると、気の毒になってしまう。

わたしでさえもう擲から揄かつて遣るのが厭になる位です。

主

ふん。お前ファウストを知っているか。

メフィストフェレス

あのドクトルですかい。

主

うん。己おれの子分だ。

メフィストフェレス

さようさ。あいつは妙な行方<sup>いきかた</sup>でお前さんに奉公しています。

あの変人はこの世の物を飲みも食<sup>く</sup>いもしませんね。

湧き立つ胸のごたごたが遠くの方へとあいつをこがれさせる。

自分が変だと云うことを半分知っているのでしょうか。

天の一番美しい星を取ろうとしているかと思えば、

地の一番深い<sup>たのしみ</sup>楽をも極めようとしています。

そして遠い望も近い望も、

あいつの湧き返っている胸に満足を与えないのですね。

# 主

なるほど、あれは今の処で夢中で奉公しているが、

早晩<sup>いつか</sup>心の澄む境へ己が導いて行つて遣る。

見い、植木屋でも、緑に芽ぐむ木を見れば、

翌年は花が咲き実がなるのを知るではないか。

# メフィストフェレス

どうです、檀那、何を賭けますか。あいつに裏切をさせて、

お前さんさえ承知なさりやあ、

そろそろわたしの道へ引き込んで遣りたいのですが。

主

それはあれが下界に生きている間は、

お前がどうしようと、己は別に止めはしない。

人は務めている間は、迷うに極まったものだからな。

メフィストフェレス

それは難有<sup>ありがと</sup>うございます。なぜと云うに、死人<sup>しびと</sup>なんぞに

構っているのは、わたしやあ本<sup>もと</sup>から厭ですから。

わたしやあふつくりした、色沢<sup>いろつや</sup>の好い頬つぺたが一番<sup>すき</sup>好だ。

亡者が来りやあわたしやあ留守を使つて遣ります。

猫だつて死んだ鼠は相手にしませんからね。

主

宜しい。そんならお前に任せて置く。

あの男の霊<sup>れい</sup>を、その本源から引き放して、

お前にそれが出来るなら、

お前の道へ連れて降りて見い。

だがな、いつかはお前恐れ入って、こう云うぞよ。

「善<sup>よ</sup>い人間は、よしや暗黒な内の促<sup>うながし</sup>に動されていても、始終正しい道を忘れてはいないものだ」と云うぞよ。

メフィストフェレス

好うがす。ただ少しの間の事です。

この賭に負ける心配はない積りだ。

わたしの思い通りになつたら、

どうま声で勝<sup>かち</sup>鬨<sup>どしき</sup>を揚げさせて下さい。

あの先生に五味を食わせて見せます。旨がつて食います。

わたしの姪の、あの評判の蛇のように。

主

好い。今度もお前の氣儘<sup>きまま</sup>にさせて遣る。

己は本からお前達の仲間を憎んだことはない。

物を否定する靈れいどもの中で、

己の一番荷厄介にしないのは横着物だ。

一体人間のしている事は兎角たゆみ勝ちになる。

少し間が好いと絶待的に休むのが好きだ。

そこで己は刺戟したり、ひねったりする奴を、

あいつ等に附けて置いて、悪魔として為事をさせるのだ。

さてお前達、本当の神の子等はな、

生々いきいきした、豊かな美しさを見て楽しむが好い。

永遠に製作し活動する生々せいせいの力が、

愛の優しい埒うちをお前達の周囲めぐりに結うようにしよう。

お前達はゆらぐ現象として漂っているものを、

持久する思惟しゆいで繋ぎ止めて行くが好い。

(天は閉ぢ、天使の長等散ず。)

メフィストフェレス(一人。)

己は折々あのお爺じいさんに逢うのが好すきだ。

そこで附<sup>つき</sup>合<sup>あい</sup>がまずくならないように気を附けている。  
悪魔にさえあんな風に人間らしく話をしてくれるのは、  
大檀那の身の上では感心な事さね。







悲壯劇の第一部

## 夜

狭き、ゴチック式の室の、高き円天井の下に、ファウストは不安なる態度にて、卓を前にし、椅子に坐してゐる。

ファウスト

はてさて、己は哲学も

法学も医学も

あらずもがなの神学も

熱心に勉強して、底の底まで研究した。

そうしてここにこうしている。気の毒な、馬鹿な己だな。

そのくせなんにもしなかつた昔より、ちつともえらくはなっていない。

マギステルでござるの、ドクトルでござるのと学位倒れで、

もう彼此十年が間、

吊り上げたり、引き卸したり、豎横十文字に、

学生どもの鼻柱を撮<sup>つ</sup>まんで引き廻している。

そして己達に何も知れるものでないと、己は見ているのだ。  
それを思えば、ほとんどこの胸が焦げそうだ。

365

勿論世間でドクトルだ、マギステルだ、学者だ、牧師だと云う、  
一切の馬鹿者どもに較べれば、己の方が気は利いている。

己は疑惑に悩まされるようなことはない。

地獄も悪魔もこわくはない。

370

その代り己には一切の歓喜がなくなった。

一 廉<sup>ひとかど</sup>の事を知っていると云う自<sup>うぬぼれ</sup>惚もなく、

人間を改良するように、濟度するように、  
教えることが出来ようと云う自惚もない。

それに己は金も品物も持っていない、

世間の榮華や名聞も持っていない。

375

この上こうしていると云ったら、狗<sup>いぬ</sup>もかぶりを振るだろう。  
それで靈<sup>れい</sup>の威力や啓示で、

いくらか秘密が己に分かるうかと思つて、  
己は魔法に這入った。

その秘密が分かつたら、辛酸の汗を流して、

うぬが知らぬ事を人に言わいでも済もうと思つたのだ。

一体この世界を奥の奥で統<sup>す</sup>べているのは何か。

それが知りたい。そこで働いている一切の力、一切の種子<sup>しゅし</sup>は何か。

それが見たい。それを知つて、それを見たら、

無用の舌を弄せないでも済もうと思つたのだ。

ああ。空に照<sup>そ</sup>っている、満ちた月。

この机の傍で、己が眠らずに

真夜中を過したのは幾度だろう。

この己の苦<sup>くるしみ</sup>をお前の照<sup>あ</sup>すのが、今宵を終<sup>おわり</sup>であれば好いに。

悲しげな友よ。そう云う晩にお前は

色々の書物や紙の上に照<sup>あ</sup>っていた。

ああ。お前のその可哀らしい光の下に、

高い山の背<sup>せ</sup>を歩くことは出来まいか。

霊<sup>れい</sup>どもと山の洞穴のあたりを飛行<sup>ひぎよう</sup>することは出来まいか。

野の上のお前の微かな影のうちに住むことは出来まいか。

あらゆる知識の塵の中から蟬<sup>せん</sup>脱<sup>だつ</sup>して、

お前の露を浴びて体を直すことは出来まいか。

ああ、せつない。己はまだこの牢屋<sup>ちやう</sup>に蟄<sup>ちつ</sup>しているのか。

ここは咀<sup>のろ</sup>われた、鬱陶しい石壁の穴だ。

可哀らしい空<sup>そら</sup>の光も、ここへは濁<sup>にご</sup>つて、

窓の硝子画を透<sup>とお</sup>つて通うのだ。

この穴はこの積み上げた書物で狭められている。

蠹<sup>し</sup>魚<sup>み</sup>に食われ、塵埃<sup>ちんあい</sup>に掩<sup>おほ</sup>われて、

円天井近くまで積み上げてある。

それに煤<sup>すす</sup>けた見出しの紙札<sup>はし</sup>が挿<sup>はさ</sup>んである。

この穴には瓶や缶が隅々に並べてある。  
色々の器械が所狭きまで詰め込んである。

お負けに先祖伝来の家具までが入れてある。

やれやれ。これが貴様の世界だ。これが世界と云われようか。

貴様はこんな処にいて、貴様の胸の中で心の臓が

窮屈げに艱<sup>なや</sup>んでいるのを、まだ不審がる気か。

あらゆる生<sup>せい</sup>の発動を、なぜか分からぬ苦<sup>くるしみ</sup>が

障<sup>しょうがい</sup>礙<sup>がい</sup>するのを、まだ不審がる気か。

神は人間を生きた自然の中へ

造り込んで置いてくれたのに、

お前は烟と腐敗した物との中で、

人や鳥<sup>とりけだもの</sup>獣<sup>けだもの</sup>の骸骨に取り巻かれているのだ。

さあ、逃げんか。広い世界へ出て行かぬか。

ここにノストラダムスが自筆で書いて、  
深秘しんぴを伝えた本がある。

420

貴様の旅立つ案内には、これがあれば足りるではないか。

そして自然の教を受けたなら、

星あゆみの歩がお前に知れて、

霊れいが霊に語るが如くに、

貴様の靈妙な力が醒めよう。

425

いや。こうして思慮を費して、

この神聖な符を味つていたつて駄目だ。

こりや。お前達、霊れいども。お前達は己の傍にさまよつていよう。

己の詞ことばが聞えるなら、返事をせい。

(書を開き、大天地の符を観る。)

430

や。これを見ると、己のあらゆる官能に  
忽ちたちまなんとも言えぬ歓喜みなぎが漲る。

青春の、神聖なる生の幸福が新に燃えるように



己の脈絡や神経の中を流れるのが分かる。

この符を書いたのは神ではあるまいか。

己の内生活の騷擾を鎮めて、

歓喜を己の不便な胸のうちに充たし、

己の身を取り巻いている自然の、一切の力を、

微妙に促して暴露させて見せるのはこの符だ。

己が神ではあるまいか。不思議に心が澄んで来る。

この符の清浄な画を見ているうちに、

活動している自然が、己の霊のために現前する。

今やつと思ひ当るのは、古の賢人の詞だ。

「霊の世界は鎖されたるにあらず。

汝が耳目壅れり。汝が心胸死せり。

起て、学徒。誓ひて退転せず、

塵界の胸を暁天の光に浴せしめよ。」

(符を観る。)

一々の物が全体に氣息を通じて、

物と物とが相互にそれぞれ交感し合っている。

黄金こがねの釣瓶つるべを卸してはまた汲む如く、天上の

諸もろもろの力が降くだつてはまた昇る。

その総てが、祝福の香を送る翼を振つて、

天から下界とよへ通つて来て、

諧調をなして万有のうちに鳴り渡る。

なんと云う壯観だろう。だが、惜むらくは見物みものたるに過ぎぬ。

ああ、無辺際なる自然よ。己はどこを攫つかまえよう。

一切の物の乳房等よ。己はどれを手に取りよう。

天地の命根の通っている、一切の生せいの泉等よ。

枯れ衰えた己の胸のあこがれ迫る泉等よ。汝達は湧いている。

汝達は人に飲ませている。それに己は徒いたずらに渴せねばならぬか。

(憤慨せる様にて書を翻し、地の精せいの符を観る。)

はて、この符の己に感じる工合はよほど違う。

こりや、地の精。お前は大ぶ己に近い。

もう己の力が加わって来るらしい。

もう新しい酒に酔ったような気がする。

危険を冒して世の中に出て、

下界の苦痛をも、下界の幸福をも受け、

暴風<sup>さから</sup>に逆って奮闘し、沈まんとする舟のきしめきにも  
しゅんじゅん

逡巡<sup>しゅんじゅん</sup>しない勇気を身に覚える。

はあ。己の頭の上に雲が湧いて来た。

月の光が隠れてしまった。

燈火も見えなくなった。

湯気のようなものが立つ。己の頭の周囲<sup>まわり</sup>に

稲妻<sup>はのわ</sup>のように赤い<sup>ほのお</sup>が閃く。円天井から

陰森の気が吹き卸して来て、

己の身を襲う。

己は感じる。お前、身みの辺ほとりに漂っているな。招き寄せた霊奴れいめ。  
形を顕せ。

475

はあ。己の胸の底へ引き弔つるようにひびく。

新しい感じに

あらゆる己の官能が掻き乱される。

己の心を全くお前に委ねたように感じる。

480

形を顕せ。形を顕せ。己の命を取られても好い。

（本を手に取り、地の精の呪文を深秘なる調子にて唱ふ。赤き  
燃え立ちて、精霊  
の中に現る。）

霊

己を呼ぶのは誰だ。

ファウスト（顔を背向く。そむ）

気味の悪い姿だな。

霊

お前は長い間己の境界に、吸引の力を逞たくましくうして、

強く己を引き寄せたな。  
そしてどうする。

ファウスト

ああ、せつない。己はもう堪えられぬ。

霊

お前はと息を衝きながら己に目のあたり逢つて、

己の声を聞き、己の顔を見ようと願う。

お前の霊の願が己を引き寄せている。

さあ、ここに來ている。なんと云うけちな恐怖が

超人を以て居るお前を襲っているのだ。霊の叫はどこにある。

自分だけの世界を造つて、それを負うて、

培うた胸、己達霊どもと同じ高さの位置に立とうと、

歡喜の震を以て張った胸はどこにある。

己に声を聞せたファウスト

カーぱい己に薄つて來たファウストはどこにいる。

その男がお前か。己の息に触れたばかりで、  
性命の底から震い上がって、  
臆病にも縮んでいる虫がその男か。

ファウスト

ああ。の姿のそちを見て、なんの己がたじろくものか。  
己だ。ファウストだ。お前達の仲間だ。

霊

生の流に、事業の暴風あらしに  
身を委ねて降りては昇る。

かなたこなたへ往いては返る。

産さんの褥しとね、死つかあなの冢穴。

常世とこよの海原。

経緯たてぬきの糸まじりの交。

燃ゆる命。

かくて「時」のさわ立つ機を己は織る。

神の生ける衣<sup>きぬ</sup>を織る。

ファウスト

広い世界を飛びめぐる忙しい<sup>れい</sup>霊よ。

己はお前をどれ程か親しく思っているぞ。

霊

いや。お前に分かる霊にこそお前は似ている。

己には似ておらん。(消ゆ。)

ファウスト (挫け倒る。)

お前には似ておらんと云うか。

そんなら誰に似ている。

神の姿をそのままに写された己だ。

それがお前にさえ似ないと云うのか。

(戸を<sup>たた</sup>敲く音す。)

ああ、死だ。分かっている。あれは内の学僕だ。

己の最上の幸福が駄目になる。

これ程の顯現<sup>あらわれ</sup>の満ち満ちている刹那を、

520

あの拔足をして歩くような乾燥無味な男が妨げるのか。

（ワグネル寝衣を著、寝る時被る帽を被り、手に燈を取て登場。ファウスト不機嫌らしく顔を背向く。）

ワグネル

御免下さいまし。あなたの御朗読をなさるのが聞えましたので、  
お方グレシアの悲壯劇をお読みになるのだろうと存じました。  
わたくしも少し覚えて得<sup>とく</sup>をいたしたいと存じます。

なんでも当節はそう云うことは受<sup>うけ</sup>が好いのでございます。

525

誰やらが申すのを承りましたが、

俳優は牧師の師匠になっても宜しいと申すことで。

ファウスト

それは牧師が俳優であつたらそうであろう。

追々そんな風になるまいものでもない。

ワグネル



わたくしのように研究室の中に縛られていて、

世間を見るのは、やっと休日に

遠い処から遠目金で見るような事では、

どうして言論で世間を説き動すことが出来ましょう。

### フアウスト

それは君が自分で感じていて、それが肺腑から流れ出て、

聞いているみんなの心を

根強い興味で引き附けなくては、

世間を擒とりこにすることは出来ない。

そんなにして据たかわつていて、膠にかわで接つぎ合せて、

人の馳走の余物で骨董羹ごつちやにを拵こしらえて、

君の火消壺の中から

けちな火を吹き起しても、

それでは子供や猿どもでなくては感心はしない。

それが望ならそれまでの事だ。

どうせ君の肺腑から出た事でなくては、  
人の肺腑に徹するものではない。

545

## ワグネル

先生のお詞ですが、演説家は雄弁法で成功します。

どうもその研究が足りないのが、わたくしには分かっています。

## ファウスト

いや。成功しようと云うには、正直に遣らなくてはいかん。

鐘大鼓で叩き立てる馬鹿者になつてはいかん。

智慧があつて、切実な議論をするのなら、

550

技巧を弄せないでも演説は独りでに出来る。

何か真面目に言おうと思う事があるのなら、

なんの詞なんぞを飾るに及ぶものか。

どうかすると君方の演説は人世の紙屑で

上手な細工がしてあつて、光彩陸離としていても、

555

それは秋になつて枯葉を吹きまくる

湿った風のように気持の悪いものだ。

ワグネル

はいはい。「学芸はとこしえにして、

我等の生は短し」でございます。

御承知の通り、批評的研究を努めていますと、

折々頭や胸がどうかかなりはすまいかと氣遣われます。

なんでも淵源まで溯って行く

舟筏を得るのは、容易な事ではございません。

半途まで漕ぎ著けたところで、

まあ、我々不便な奴は死ぬるの（ふびん）でいいますね。

ファウスト

古文書がなんで一口飲んだだけで

永く渴を止める、神聖な泉のものか。

なんでも泉が自分の靈（れい）から湧いて出（で）んでは

心身を爽かにすることは出来ない。

## ワグネル

はい。先生はそう仰やるが、その時代々々の心になって、我々より前に聖賢がこう考えられたと云うことを見わたして、今日までの大きい進歩を思う程、愉快な事はございません。

## ファウスト

そうさ。天の星までも届く進歩だろうよ。

君に言うがな、過去の時代々々は我等のためには七つの鎖鑰さやくを施した巻物だ。

君方が時代々々の精神だと云うのも、それは原来その時代々々が先生等の霊の上に投写した影を認めるに過ぎない。

そんなわけだから、随分みじめな事がある。君方を一目見て人は逃げ出してしまう。

五味溜か、がらくたを打ち込んで置く蔵か。

高が<sup>おおしかけ</sup>大為掛の歴史劇に、  
でく<sup>せりふ</sup>傀儡の台詞に相応した

結構な処世訓が添えてある位なものだ。

### ワグネル

しかし、先生はそう仰やいますが、世界ですね、人の性情ですね、それを誰でも文献の中から少しなりと知り得たいと存じますので。

### ファウスト

いや。その知るだの、認識するだのと云う詞の意味だて。

本当に知つてもその本当の事があからさまに言われようか。

それは稀には幾らかの事を知つて、

おろかにもそれを胸にしまつて置かずに、

自分の観た所、感じた所を世俗に明かした人達もあるが、

そう云う人達は<sup>はりつけ</sup>磔にせられたり、焼き殺されたりした。

いや。彼此云ううちに、もう夜が更けた。

今宵は話はこれまでにしよう。

## ワグネル

はい。わたくしはいつまでも起きていて

こんな風にあなたと高尚なお話がいたしたいのでございますが、

さようなら已めやましょう。明みようとち日は復活祭の初の日でございます。

それを機としてまた二つ三つお話を伺うことにいたしました。

わたくしはこれまで随分研究には努力いたしました。

学問は大分ある積でございますが、一切の事が知りたいと存じまして。

(退場。)

## ファウスト (一人。)

いやはや。いつまでも一縷の望を繋いでいて

心は無用の事物に牽ひかれ、

宝を掘ろうと貪る手で、

蚯蚓みみずに掘り当てて喜んでいるとは、気の毒な事だ。

精霊の気が己を囲いによ繞うしていたこの室で、

あんな人間の声が響いて好いものか。

しかし下界にありとある人の中の人屑にも、

こん度は己が感謝せずばなるまい。

なぜと云うに、己の見聞<sup>けんもんかくち</sup>覚知を破壊しようとした

絶望の境から、あいつが己を救い出したのだ。

いや。あの顕<sup>あらわれ</sup>現<sup>げん</sup>が余り偉大なので、

全く自分が侏儒であるように、己は感じた。

神の姿をそのままに写された己は、

永遠なる真理の鏡<sup>せま</sup>に逼り近づいた積<sup>つもり</sup>で、

下界の子から蟬脱して

享樂の自己を天の光明のうちに置いていたのに、

己は光の天使にも増して、無礙<sup>むげ</sup>自在の力が

既に宇宙の脈の<sup>せい</sup>うちを流れ、

創造しつつ神の生<sup>せい</sup>を享けようと、

窃<sup>ひそ</sup>かに企てていたのに、なんと云う罰せられようだ。  
雷<sup>かみなり</sup>鳴のような一言が己をはね飛ばした。

お前に似ようと思うのが、そんなに僭越だろうか。

己はお前を引き寄せるだけの力は持っていたが、

お前を留めて置く力がなかったのだ。

想えばあの嬉しかった刹那に、

己は自己をどんなにか偉大に、またどんなにか小さく思っただろう。

お前は残酷にも己を不慥<sup>ふたし</sup>かな

人間の運命の圈内に衝き戻したな。

誰に己は教を受けよう。何を去り何に就こう。

あの内の促<sup>うながし</sup>のまにまに動いて好かろうか。

我等<sup>せい</sup>の生の道のゆくてを遮り塞ぐものは、

ああ、我等の受ける苦だけではない。我等のする事業も邪魔だ。



我等の靈<sup>れい</sup>の受けた、最も美しきものの周囲にも、  
約束したように無用の夾雜物が来て引つ著く。

635

この世界の善なるものに到達してから前途を見れば、  
一層善なるものが、憾<sup>うら</sup>むらくは虚無の幻影になって見える。  
生<sup>せい</sup>の我等に与えた美しき感じが

下界のとよみの中で凝り固まつてしまう。

不断は空想が大胆な 翱<sup>こう</sup>翔<sup>しょう</sup>を擅<sup>ほし</sup>に<sup>まま</sup>して、

640

希望に富んだ勢を以て、永遠の境まで拡がつても、  
「時」の渦巻に巻き込まれて、狙った幸福が一つ一つ毀れると、  
さすがの空想も萎靡<sup>いび</sup>して、狭い空間にせぐくまる。

その時直ぐに心の底に、「憂」と云うものが巢を食つて、  
ひそやかな痛<sup>いた</sup>みの種子<sup>たみ</sup>を蒔<sup>ま</sup>き、

645

自分も不安らしく身をもがいて、人の安穩と歓喜とを破る。  
この憂は種々の仮面<sup>めん</sup>を取り換えて被る。

家になり、地所になり、女房になり、子供になる。  
火になり、水になり、<sup>あいくち</sup>ヒ首になり、毒になる。

貴様<sup>あた</sup>は常にその中らぬもののために戦慄して、

その離れ去らぬもののために泣かなくてはならぬ。

いや。己は切に感ずる。己は神々には似ておらぬ。

塵芥<sup>ちんがい</sup>の中に蠢く蛆<sup>うじ</sup>に己は似ているのだ。

その塵芥に身を肥やして、生を偷<sup>ぬす</sup>んでいるうちに、

道行く人の足に踏まれて、殺されて埋められるのだ。

高い壁に沿うて、分類して百にも為切<sup>しき</sup>つてある棚の物が

己の周囲を隘<sup>せば</sup>めているのも、これも塵ではないか。

この紙魚<sup>しみ</sup>の世界で、己を窮屈がらせている

器具、千差万別の無用の骨董も塵ではないか。

己の求めているものが、この中で見附けられようか。

いつの世、どこの国でも人間が自ら苦んで、

その間に罕まれに一人位幸福な奴があつたと云うことを、

己に万巻の書の中で読めと云うのか。

空洞うつろな髑髏奴。なぜ己を睨にらんでいる。

お前の脳髓も己のと同じように、昔迷いつつ軽らかな

快い日を求め、重くろしい薄うすあかり明の中で、興味を以て

真理を追うて、みじめに失敗したと云う外はあるまい。

それからお前達器械だがな、車の輪や櫛の齒のような物、

熨斗のしの取手のような物やロラアから出来ている器械だがな、

お前達も己を馬鹿にしているに違ない。己が扉の前に

立っていた時、お前達は鍵になつてくれるはずであつた。

しかし鎖鬚はしきよりもちぢくれた鬚が生えていても、

鎖鑰じようあを開けてはくれなかつた。自然はなかなか秘密がついて、

青天白日にウエエルを脱いで見せてはくれない。

あいつが己の靈れいに見せてくれない物を、

槓杆てこや螺牡ねじで開けて見ることは出来ない。

己に用のない古道具奴。お前達は父の手沢しゅたくのお蔭でここにいる。火皿を吊る滑車奴。お前はこの机に濁った燈火がいぶつている限かぎり、夜な夜な煤けて行くばかりだ。

この少しばかりの物を、疾とつくに売り飛ばせば好かったに、己は重荷のようにそれを背負つて汗を掻いている。

貴様の先祖から譲り渡された物を、

貴様が占有するには、更にそれを贏かち得んではならん。

利用せずに置く物は重荷だ。

刹那が造つたものでなくては、刹那が使うことは出来ない。

はてな。なぜ己の目はあそこに食つ附いて離れないだろう。

あの瓶が己の目を引く磁石なのか。

なぜ己の心持が、夜の森を歩く時月が差して来たように、  
忽たちまちめでたく明るくなつて来たのだ。

この取り残された一つの瓶奴。お前を恭しく取り卸しながら、

己はお前に会釈をするぞよ。

人智と技術とをお前に対して敬するぞよ。

恵<sup>めぐみ</sup>ある 眠<sup>ねむりぐすり</sup> 薬<sup>せい</sup>の精奴。

あらゆる隠微な人を殺す諸力を選び抜いた靈液奴。

今この主人<sup>あるじ</sup>をお前の恵<sup>めぐみ</sup>に逢わせてくれい。

お前を見たばかりで、苦痛が軽くなるようだ。

お前の瓶を手にとれば、意欲が薄らいで来るようだ。

己の靈<sup>れい</sup>の潮流が次第々々に引いて行く。

高く湛えた海の上へ、己はさそい出されて、

我足の下には万象の影をうつす水鏡<sup>かがや</sup>が耀く。

新なる日が新なる岸へ己を呼ぶ。

軽らかに廻る火<sup>かえん</sup>の車が己を迎える。

瀧<sup>こうき</sup>氣<sup>うが</sup>を穿<sup>うが</sup>つて新しい道を進んで、

浄い事業の新しい境界へとこころざす

心の支度が出来たように己は感ずる。

705

こんな高遠な生活、こんな神々の歡喜のような歡喜。

まだ蛆でいる貴様になんの功があつてこれを受けるのだ。

好い。優しい下界の日の光に、

貴様は決然として背を向けるが好い。

誰も畏れて避けて通る門の戸を、

710

押し開けて入る勇氣があるなら行け。

空想が自己を苦痛の地獄に墮す

あの暗い洞窟の前におののかず、

狭い入口に地獄の総ての火が燃え立つ

あの狹隘の道を目ざして、

715

よしや誤つて虚無の中に滅し去る虞<sup>おそれ</sup>があらうとも、

晴やかな氣分でこの一步を敢てして、

神々の位を怖れぬ男兒の威嚴を、

事実の上に証して見せるなら、今がその時だ。

さあ、水晶の浄らな盃、ここへ降りて来い。

720

長い年月の間お前の事は忘れていたが、  
今その箱の中から出てもらおう。

己の先祖が祝賀の宴を張った時には、

お前は光り耀いていて、一人が一人へ差す毎に、  
蹙<sup>しか</sup>んだ客の顔色も晴やかになったものだ。

725

己も若かった昔の夜のうたげを覚えている。

お前の上に美しく鏤<sup>ちりば</sup>めてある、種々の絵模様を、  
飲む人の務<sup>つとめ</sup>として、詩の句で説き明かして

さて一口に中の酒を飲み干したものだ。

730

己はお前を今日に限って隣の客にも廻さず、  
お前の絵模様に拙い才を試みようともせぬ。  
ここにあるのは早く人を酔わせる酒だ。

己がかつて選んでかつて醸した

この褐色の液が<sup>えき</sup>お前<sup>なか</sup>の中に注<sup>つ</sup>がれるのだ。  
さあ、この最後の杯を挙げて、己は心から  
はればれしく寿をこの「暁」<sup>たてまつ</sup>に上<sup>あ</sup>るのだ。

（ファウスト杯を口に当つ。）

鐘の響、合唱の歌。

歌う天使の群

クリストはよみがへりたまひぬ。

身をも心をも損<sup>そこな</sup>ふべき、

緩やかに利く、親<sup>おやゆずり</sup>譲<sup>ゆずり</sup>の

害<sup>がい</sup>毒<sup>どく</sup>のまつはれたる、

死ぬべきもの等<sup>ら</sup>に喜<sup>よろこ</sup>あれ。

ファウスト

や。己の口から杯を強いて放させたあの声は  
なんと云う深いそよめき、高い音色であろう。  
それにあの鈍い鐘の音は、



もう復活祭の始まる時刻を知らせるのか。

745

さてはあの諸声は、昔冢穴の闇の夜に

天使の唇から響いて、新しき教の群に

固き基を与えた、慰藉なぐさめ多き詞であつたか。

歌う女の群

われ等、主しゅにまつろへる女子おみなごは

香料を

み体からだに塗りまつり、

臥ふさせまつりぬ。

巾きんをもて、紐きをもて

清つらに褰つみまつりぬ。

さるを、あなや、主しゅの

こゝにいまさぬ。

755

歌う天使の群

クリストはよみがへりたまひぬ。

いたましき、

浄からしめ、鍛ひ錬る

業を修し卒へたまへる、

物を愛します主よ。聖にいませ。

ファウスト

お前達、天の声等はなぜ力強く、しかも優しく

己をこの塵の中に覓めるのだ。

情の脆い人等の住むあたりに響き渡れば好いに。

なるほど使命の詞は聞える。しかし己には信仰がない。

奇蹟は信仰の愛子だ。

あの恵ある便を伝える声のする、

あの境界へは己は敢て這入ろうとは努めぬ。

しかし小さい時からあの声を聞き慣れていたのだ、

あの声が今己を生に呼び戻したのだ。

昔は沈んだ安息日の静けさの中に、

ゆくりなく天の愛の接吻が己にせられた。

その時意味ありげに、ゆたかな鐘の音が聞えて、

己の<sup>いのり</sup>祷は熱した受用であつた。

その時<sup>めぐみ</sup>恵ある不可思議な係<sup>あこがれ</sup>恋が

己を駆つて、森の中、野のほとりへ行かせた。

そして千行の熱涙の下<sup>くだ</sup>ると共に、

己のために新しい世界が涌出するように思つた。

面白い遊、春の祭の自由な幸福を、

あの歌が青春に寄与したものだ。

そう云う追憶が子供のような感情で、

今己の最後の<sup>かりそめ</sup>仮初ならぬ一步を引き留めたのだ。

お前達、優しい天<sup>てん</sup>の歌よ、好いから響き渡つてくれい。

ああ。涙が涌く。下界は己を取り戻した。

### 歌う徒弟の群

埋められたまひぬる、

生きて氣高くまします主は、

早くおこそ嚴かに

み空そら高くのぼらせ給ひしか。

なり出づるを樂む心もて

物造る喜よろこびを今し享けんとやし給ふ。

あはれ、悲しくも我等は

地つちの胸すがに縋りて、かくぞ世にある。

我等教子の友を、主しゅは

歎きつゝこゝに残りをらしめ給ひぬ。

あはれ、師の君よ。

おん身の幸に我等は泣く。

歌う天使の群

物を朽ちくず壊れしむる地つちの膝を

立ち離れつゝ、主しゅはよみがへりましぬ。

汝なんたち達は喜びて

きずな  
絆を断て。

おこない しゅ  
行もて主を称へまつり、

しゅ  
主に愛を捧げまつる、

はらから とぎ  
同胞めき斎に就き、

み教を弘めつゝ旅寐し、

こ ようこび  
来ん世の喜を知らする汝達よ。

師の君は汝達に近くおはす。

師の君は汝達のためにいます。

りよもん  
閭門の前

さま／＼の散歩する人出で行く。

職工の徒弟数人

なぜそつちへ出て行くのだい。

同じ徒弟の他の群

おいら達は獵師茶屋へ行くのだ。

初の数人

おいら達は擣屋つきやの方へ行くのだ。

徒弟の一人

それより河岸かしの茶屋の方が好いじゃないか。

第二の徒弟

あつちは途中がまるで詰まらないぜ。

第二の群

お前はどすする。

第三の徒弟

おいらはみんなと行く。

第四の徒弟

みんなお城の茶屋まで登って行けば好いいになあ。

あそこが女も一番好いのがいるし、ビールも旨い。

それに喧嘩だって面白い奴が出来るのだ。

### 第五の徒弟

人を馬鹿にしていやがらあ。

また背中をなぐられるのかい。三度目になるぜ。

己はあんなところへは行<sup>い</sup>かねえ。思つてもぞつとする。

### 下女

わたし厭<sup>いや</sup>になつちまうわ。町へ帰ろうかしら。

### 第二の女

まあ、あそこの柳の木のとこまで行つて御覧よ、来ているから。

### 初の下女

来ていたつてなんにもなりやしないわ。

きつとわたしには構わないで、お前と並んで歩いて、

踊場<sup>い</sup>へ行けば、お前とばかり踊るのだから。

お前が面白くつたつて、わたしにはなんにもならないわ。

### 第二の女

なに、きようはひとりじゃなくつてよ。

そら、あの髪の綺麗に縮れた人ね。あれと来ると云ったわ。

### 書生

やあ。気持の好い、活潑な歩きようをしているなあ。

君、来給え。あいつ等の行く方へ附いて行こう。

濃いビールに強い烟草。

それに化粧をした娘と云うのが、己の註文だ。

### 良家の処女

ちよいと、あの書生さん達を御覧なさいよ。

誰とでも御交際の出来る立派な方なのに

女中の跡なんぞに附いて行つて、

まあ、なんと云う恥曝しな事でしよう。

### 第二の書生（第一のに。）

おい、君、そんなに駆け出すなよ。あの跡から行く

二人を見給え。気の利いた風をしているだろう。



ひとりには僕の内の隣の娘だ。

あれが僕は好<sup>すき</sup>なんだ。

見給え。あんなにゆつくり歩いている。

一しよに行くと言うかも知れない。

### 第一の書生

廃<sup>よ</sup>し給えよ。僕は窮屈な事は真つ平だ。

早く来給え。切角の旨い山鯨を取り逃がしてしまう。

日曜日に僕達をさすらせるには、

土曜日に箒<sup>ほうき</sup>を持った手に限る。

### 市民

いや。こん度の市長にはわたくしは感心しませんなあ。

市長だと云うので、日にまし勝手な事をする。

そして市のためにあの人が何をしています。

一日々々と物事がまづくなるばかりじゃありませんか。

なんでも市民はこれまでになく言いなりになつて、

これまでになく金を沢山出すことになっています。

乞食（歌ふ。）

お情深いお檀那様や、お美しい奥様方。

お召はお立派で、お血色はお宜しい。

どうぞ皆様わたくしを御覧なさりまして、

わたくしの難儀にお目を留められ、お救なされて下さりませ。

こうしてお歎き申すのを、むだになさらないで下さりませ。

お恵をなさいでは、お樂はございませぬ。

皆様のお遊なさる日が、

わたくしの取入日でございます。

他の市民

日曜日や大祭日には

軍や関の声の話をするのが、わたしは一番好です。

遠いトルコの国で余所の兵隊同士が

ぶち合っているのが面白いじゃありませんか。

余所にそんな事があるのに、こっちはお茶屋の窓の側で

ビールを一杯飲み干して、美しい舟の川下へさがるのを眺めて、

日が暮れば楽しく内へ帰って、

難<sup>ありがた</sup>有<sup>い</sup>い太平の世のために、お<sup>のり</sup>禱をするのですな。

### 第三の市民

お隣の方の仰<sup>と</sup>やる通<sup>とおり</sup>です。わたくしもその通さ。

余所の奴等はお互に頭の割<sup>い</sup>りくらをするが好<sup>い</sup>い。

何もかも上を下へとごった返すが好<sup>い</sup>い。

よろず長屋に事なかれですよ。

### 一老女（良家の娘達に。）

やれやれ。えらいおめかしが出来ましたな。別品揃だ。

誰だつて迷わずにはいられますまい。

おや。そんなにつんけんなさらぬが好<sup>い</sup>い。その位で沢山だ。

お前さん達のお望<sup>のぞみ</sup>を<sup>かな</sup>愜えることなら、わたしにも出来る積<sup>つも</sup>りだ。

### 良家の娘の一人

アガアテ婆あさん。厭<sup>いや</sup>だよ。あっちへおいで。あんな魔法使<sup>つかい</sup>と往来を一しよに歩いて溜まるもんかね。

聖<sup>せい</sup>アンドレアスの晩に、わたしの御亭主になる人を見せにくれたには違<sup>ちが</sup>ないのだけれど。

### 他の娘

わたしにも水晶の中に現して見せてくれてよ。

なんでも軍人のようで大勢のきつい人の中にいましたの。

それからわたしどこかで逢うかと思つて気を附けていても、

まだその人らしいのに逢わなくつてよ。

### 兵卒等

牆<sup>しょうへき</sup> 壁 聳ゆる

堅固なる城壘よ。

傲<sup>おご</sup>り蔑<sup>なみ</sup>する

気性ある少女子よ。

占領したきはこの二つ。

艱難困苦は大<sup>だい</sup>なれど、  
その成功こそめでたけれ。

890

召募<sup>らっぼ</sup>の喇叭<sup>らっば</sup>よ。

汝<sup>な</sup>が響<sup>ひび</sup>くに任<sup>まか</sup>す。

飲<sup>よろこび</sup>の場<sup>にわ</sup>へも導<sup>みち</sup>け。

戦死<sup>せんし</sup>の野<sup>の</sup>へも導<sup>みち</sup>け。

これぞ競<sup>きこ</sup>なる。

これぞ命<sup>いのち</sup>なる。

895

城<sup>しろ</sup>壘<sup>り</sup>も落<sup>お</sup>ちざらめや。

少<sup>せう</sup>女<sup>にょ</sup>子<sup>こ</sup>も靡<sup>なび</sup>かざらめや。

艱難困苦は大<sup>だい</sup>なれど、

その成功<sup>せいこう</sup>こそめでたけれ。

900

かくぞ軍<sup>いくさ</sup>人<sup>びと</sup>は

門出<sup>もんしゅ</sup>する。

## ファウストとワグネルと

## ファウスト

春の恵ある、物呼び醒ます目に見られて、  
大河にも細流にも、もう氷がなくなつた。

谷間には希望の幸福が緑いろに萌えている。

冬は老いて衰えて

荒々しい山奥へ引つ込む。

そして逃げながらそこから

粒立った氷の一しぶきを、青み掛かる野へ、

段だらに痕の附くように蒔<sup>ま</sup>いている。

しかし日は白い物の残っているのを許さないで、

何物にも色彩を施そうとする。

そこにもここにも製作と努力とが見える。

それでもこの界限にはまだ花が咲いていない。

その代りに、日は晴衣を着た人を照している。

まあ、跡へ戻っておいで。この高みから

町の方を振り返って見ようじゃないか。

空洞で暗い里の門から、

色々の著物を著た人の群が出て来る。

きようは誰も誰も日向ぼこりがしたいのだ。

あれは皆主<sup>しゅ</sup>の復活の日を祝っている。

自分達も復活して、

低い家の鬱陶しい間から出たり、

手職や商売の平生の群を離れたり、

頭の上を押さえている屋根や搏風<sup>はふ</sup>の下を遁れたり、

肩の摩れ合うような狭い巷<sup>こうじ</sup>や

礼拝堂の尊い闇から出たりして、

外の明<sup>そとあかり</sup>を浴びているのだから、無理は無い。

あれを見給え。大勢が活潑に

田畑の上へ散らばって行く。

川には後先になったり並んだりして、  
面白げに騒ぐ人を載せた舟が通っている。

あの一番跡の舟なんぞは、

沈みそうな程人を沢山に載せて出て行くところだ。

あの山の半腹の遠い<sup>そばみち</sup>岨道にさえ

色々な衣裳の彩色が光って見える。

もう村の方からとよめきが聞えて来る。

大勢のためにはここが真の天国なのだね。

「ここでは己も人間だ、人間らしく振舞っても好い」と、  
老若ともに満足して叫んでいるのだね。

ワグネル

先生。あなたと散歩しますのは、

わたくしの名誉でもあるし、為めにもなります。

一体わたくしは荒々しい事は嫌で<sup>きらい</sup>ございますから、

御一しよでなくてはこんな所へは来ないでしましましょう。



ヴァイオリンを弾く音、人のどなる声、王様こかしの丸の響、  
どれもどれもわたくしは聞くのが随分つろうございます。

945

悪魔にでも焚き附けられているように騒ぎ廻つて、  
それを歌だ、慰だなぐさめと云うのでございますからね。

百姓等（菩提樹の下にて。）

舞踏と唱歌と。

羊飼奴ひつじかいめが踊に来ようとめかした。

著て出たジャケツは色変り。紐や飾が附いている。

950

さすが見た目が美しい。

菩提樹のまわりは疾うとから人籠ひとこみで、

どいつもこいつも狂つたような踊りよう。

ユホへ。ユホへ。

ユホハイザ。ハイザ。へエ。

955

胡弓がこんな音をする。

羊飼奴は気が急せいて、駆け附けた。

その時はずみに片肘が

ひとり  
一人の娘に打つ衝かる。

元気な尼つちよが顔を見て云った。

「お前さんよつぽどとんまだね。」

ユホへ。ユホへ。

ユホハイザ。ハイザ。ヘエ。

そう不行儀では困ります。

それでも始めるくるくる廻り。

右の方へ踊って行く。左の方へ踊って行く。

あれあれ上著がみんな飛ぶ。

赤くなったり、熱くなったり。

肘を繋いで、息を衝いて休む。

ユホへ。ユホへ。

ユホハイザ。ハイザ。ヘエ。

腰にお前の手が障る。

心こころやすだて安立、馴染振、余り早いと遣り込める。

女めおと夫約束固めても

騙だました人はたとある。

構わず騙して連れて退く。

菩提樹の方からは。

ユホへ。ユホへ。

ユホハイザ。ハイザ。ヘエ。

胡弓の音やら人の声。

### 百姓爺

やあ。先生様でござりますな。好くおいでなされました。

わたくしどもをお嫌きらないらさらずに

この人込の中へ

大先生様がいらつしやる。

このお杯さかづきが一番好い。

丁度注いだばかりだ。

どうぞ召し上つて下さりませい。

お吭のどのお乾かわきを止めてお上申あげすと云うだけではござりません。

これに這入っている酒の一滴ずつを丁寧に

勘定して見ます程、どうぞお命をお延べなさりませい。

ファウスト

切角の御親切だから頂戴しましょう。

これでお礼を申して、あなた方の御健康を祝します。

(衆人そのあたりに集ふ。)

百姓爺

ほんとにこう云うめでたい日に、

好うおいでなさりました。

先年わたくしどもが難儀をいたしました時は、

あなた様のお恵めぐみにあずかりました。

ここにこうしてながらえているものの中には、

えらい熱を煩っていたのを、

お亡くなりになった老先生様が、

あぶない際きわになつてから、直して助けて下さりました。

1000

その時分先生様はまだお若かったが、

どの隔離所をお見まい下された。

どこからも死骸をかつぎ出したのに、

先生様は御無事でおいでなされた。

なんでもあぶない迫門せとをお凌しのぎなされた。

1005

人をお助たすけなされたので、神様が先生様をお助なされた。

一同

先生様も御長寿をなさりまして、

これから大勢の人お救下すくいさりませい。

ファウスト

いや。人を救うことをお教下おしえされ、また救をお授下さすけさるのは、

あの天てんにいます神様だ。あれをお拝おがみなさるが好い。

1010

(ファウスト、ワグネルと共に歩み出す。)

## ワグネル

先生、大したものでございますね。どうぞでございます、みんなにあんな風に尊敬せられておいでになるお心持は。先生のように、自己の材能で人をあれまでに帰服させることが出来れば、幸福でございますね。

年寄は子供に指さしをして見せて遣る。

1015

誰だ誰だと問い合つて、押しつ押されつ、駆け寄つて来る。

胡弓の音が息む。踊手が足を止める。

お通になる所に人牆を造つて、

皆がばらばらと帽子を脱ぐ。

も少しで、晚餐のパンを入れた尊いお箱が通るように、膝を衝いて拝みそうでございますね。

1020

## ファウスト

もう少しだから、あの石の所まで行つて、大ぶ歩いたから休もうじゃないか。

己は好くひとりで物案じをして、この石に腰を掛けていた。  
断食や祈祷で身を責めていた時の事だ。

1025

あの時は希望も饒<sup>ゆた</sup>かで、信仰も堅かった。  
無理にも天<sup>てん</sup>にいます主<sup>しゅ</sup>にお願<sup>ねが</sup>い申<sup>い</sup>して、

あの恐ろしいペストの流行を止めてお貰<sup>もら</sup>い申<sup>い</sup>そうと、  
涙を流し、溜息を衝き、手の指を組み合せて悶えた。

今皆があんなに褒めるのが、己には嘲るように聞える。

1030

君には己のこの胸のうかが分かるまいが、

親爺にしろ己にしろ、あの褒詞を受ける程に  
働<sup>はたら</sup>き<sup>き</sup>をしてはいないのだ。

親爺は行跡に暗い痕のある学者だった。

自然や、神聖なる自然の種々の境界の事を、

誠実が無いではないが、自分流義に

1035

物数奇らしい骨の折方をして、窮めようとしていた。

例の鍊金術の免許取<sup>とり</sup>のお仲間で、

道場と云う暗い廚くりやに閉じ籠こもつて、  
際限のない、むずかしい方書ほうがきどおりに、  
気味の悪い物を煮交ぜたものだ。

1040

大胆に言い寄る男性の「赤獅子」を、  
鼎かなえの微温湯ぬるゆで女性の「百合」に逢わせる。  
それから二人を武火ぶかに掛けて、  
閨ねやから閨へ追い廻す。

1045

ようよう玻璃はりの器の中に  
色の度々変る「若い女王」が見えて来る。  
これが薬だ。病人は大勢死ぬる。

1050

誰が直ったかと、問う人は一人もない。  
そんな風で、この谷間から山奥へ掛けて  
病人に恐ろしい煉薬ねりやくを飲ませ廻ったから、  
己達親子はペストより余計に毒を流したらしい。  
己の飲ませて遣ったのでも何千人か知れぬ。



大抵衰えて死んだ。毒を遣った横著な人殺が  
褒められると云う経験を、己はしたのだ。

1055

## ワグネル

そんな事を御心配なさらなくつても好いではありませんか。  
人に授かった技術を、

誠実に、間違なくおこなつて行けば、

正しい人が責を尽したと云うものではありませんか。

先生はお若い時、老先生を御尊信なさつて、

喜んでそのお伝つたえをお受うけになる。

1060

それからお年をお取とりになつて、学問の知識をお殖やしになれば、  
御子息が一層高い境界にお達しなさろうと云うもので。

## ファウスト

いや。この迷の海から浮き上がることがあろうと、  
まだ望んでいることの出来るものは、しあわせ為合だ。

1065

なんでも用に立つ事は知ることが出来ず、

知っている事は用に立たぬ。

しかしこんな面白くない事を思つて、

お互にこの刹那の美しい幸福を縮めるには及ばぬ。

あの青い畑に取り巻かれてゐる百姓家が、

夕日の光を受けてかがやいてゐるのを御覧。

日は段々いざつて逃げる。きよう一日ももう過去に葬られ掛かる。

日はあそこを駆けて行つて、また新しい生活を促すのだ。

己のこの体に羽が生えて、あの跡を

どこまでも追つて行かれたら好かろう。

そうしたら永遠なる夕映の中に、

静かな世界が脚下に横わり、

高い所は皆紅に燃え、谷は皆静まり返つて、

白銀しろかねの小川が黄金こがねの江に流れ入るのが見えよう。

そうしたら深い谷々を蔵ぞうしている荒山あらかまも、

神々に似た己の歩あゆみを礙さまたげることとは出来まい。

1070

1075

1080

己の驚いて睜<sup>みは</sup>つた目の前に、潮の温まった

幾つかの入江をなした海原が、早くも広げられよう。

それでもとうとう女神は沈んでしまうだろう。

ただ新しい願望が目醒める。

女神の永遠なる光が飲みたさに、

夜<sup>よる</sup>を背<sup>せ</sup>にし昼<sup>おもて</sup>を面にし、

空を負い波に俯して、己は駆ける。

ああ。美しい夢だ。しかし夢は消え失せる。

幻に見る己の翼に、真実の翼が出来て

出合うと云うことは容易ではない。

兎に角この頭の上で、蒼々とした空間に隠れて、

告<sup>こうてんし</sup>天子が人を煽動するような歌を歌うとき、

樅の木の茂っている、険しい<sup>いただき</sup>巔の上の空に、

鷺が翼をひろげて漂っているとき、

広野の上、海原の上を渡って

1085

1090

1095

鴻雁が故郷へ還るとき、

感情が上の方へ、前の方へと

推し進められるのは、人間の生うまれつき附だ。

### ワグネル

わたくしも随分気まぐれな事を思う時がありますが、  
ついぞそんな欲望が起つたことはございません。

1100

森や野原の景色をたんのうするまで見れば済む。

これからも鳥の羽が羨ましゆうなろうとは思いません。

それとどの位違つか知れないのは精神上の快樂で、

一枚一枚、一冊一冊と読んで行く心持と云つてはありません。

1105

本を読めば、冬の夜も恵めぐみある、美しい夜になって、

神聖なる性命が手足を温めます。それが並なみの本でなくて、

珍奇な古文書でもあると、あなただつて

天上の生活が御自分の処へ降くだつたようでございましょう。

### ファウスト

いや。君は人生のただ一つの欲望をしか知らない。

1110

どうぞ生涯今一つの分を知らずにおらせたいものだ。

ああ。己の胸には二つの霊が住んでいる。

その一つが外の一つから離れようとしている。

一つは荒々しい愛惜の情を以て、章魚たこの足めいた

搦み附く道具で、下界に搦み附いている。

1115

今一つは無理に塵を離れて、

高い霊どもの世界に登ろうとしている。

ああ。この大気の中に、天と地との間に、

そこを支配しつつ漂っている霊どもがあるなら、

どうぞ黄金色の霞の中から降りて来て、

1120

己を新しい、色彩に富んだ生活へ連れ出してくれい。

せめて魔の外套でも手に入って、

それが己をつつ裏んで、余所の国々へ飛んで行けば好い。

己のためにはどんな錦繡にも、

帝王の衣にも換え難い宝だがなあ。

1125

ワグネル

どうぞあの知れ渡った鬼どもをお呼よびなさいますな。

あの鬼どもは雲のうちにさまよいつつ広がっていて、  
八方から人間に

千変万化の危害を加えようとしております。

1130

北からは齒の鋭い、矢のように尖った舌の鬼共が、  
先生の処へ襲つて来ましょう。

東から来る鬼どもは物を干からびさせて、

あなたの肺の臓で身を肥やそうとします。

中央があなたの頂いただきの上へ、火に火を重ねる鬼共を

沙漠の方から送つて来れば、

1135

西からはまた最初氣分を爽かにするようで、しまいには

あなたをも田畑をも水に埋める鬼共をよこします。

ああ云う鬼共は愉快げにすばしこくお詞ことばを聞いて、

仰やる通になります。それは先生を騙そうとするのです。

天<sup>てん</sup>からよこされた使のような風をして、

諛<sup>うそ</sup>ばかりを天使の詞で囁きます。

だがもう参りましょう。もうそこらが鼠色になりました。

風が涼しくなつて、霧が降りて来ました。

夕方になつて家の難有みは知れますなあ。おや。先生。

お立<sup>たちとまり</sup>留<sup>り</sup>なすつて、驚いたようなお顔で何を御覧なさいます。

あの薄<sup>うす</sup>明<sup>あかり</sup>の中に何があるので、そんなに御感動なさるのでしょう。

ファウスト

君あの刈株や苗の間を走っている黒犬が見えるかい。

ワグネル

はい。さつきから見えています、何も大した物ではないようです。

ファウスト

好く見給え。君はあの獣をなんだと思う。

ワグネル

彪犬むくいぬです。あいつ等の流義で、御苦労にも

見失った主人の跡を捜しているのです。ごさいます。

ファウスト

君あれが蝸牛でむしの背の渦卷のような、広い圈わをかいて、

次第々々に我々の方へ寄つて来るのが分かるか。

それに己の目のせいかも知れないが、あいつの歩く跡の道には火花が帯のように飛んでいるじゃないか。

ワグネル

わたくしには黒い彪犬しか見えません。

それは先生のお目の工合でございましょう。

ファウスト

どうも己の考では、未来の縁を結ぶために、

微かな蟲まじわの圈を己達の足の周圍まわりに引くらしい。

ワグネル

いや。わたくしの見た所では、主人でない、知らぬ人を

1150

1155

1160



二人見て、不安に恐ろしく思つて、周囲を飛び廻るので。

ファウスト

圈が段々狭くなつた。もう傍へ来た。

ワグネル

御覧なさい。犬です。化物ではございません。

うなつて、疑つたり、腹這つたり、

尾を掉<sup>ふ</sup>つたりします。みんな狗<sup>いぬ</sup>の癖です。

ファウスト

こら。己達の所へ来い。ここへ来い。

ワグネル

彪犬らしい気まぐれな奴でございます。

先生がお立<sup>たちとまり</sup>留になれば、前へ来て据わります。

お物を仰やれば、飛び附いて参ります。

何かおほうりになったら、取つて参りましょう。

水の中からステッキをも※<sup>くわ</sup>えて参るでしょう。

ファウスト

なるほど。君の云う通とおりかも知れん。どうも靈の痕がなくて、  
総てが躑つに過ぎないようだ。

ワグネル

いや。好く躑つけてある狗なら、  
賢い人にも氣に入りますよう。

不斷学生共の好い連になつてゐるのだから、  
先生の御愛顧を受ける値打たしは慥たしかにあります。

（二人閨門に入る。）

書齋

ファウストいぬ狗を伴ひて入る。

ファウスト

何か物を暗示するような、神聖な恐怖を起させて、

我等の善い方の霊を呼び醒そうとする、

深い夜による掩おおわれた

田畑から己は歸った。

総て荒々しい振舞をさせようとする、

粗暴な欲望は寐入った。

今は博愛の心、

神の愛の心が動いている。

1185

彪むくいぬ犬。じつとしていろ。そんなに往ったり来たりするな。

その出口の所へ行つて、何を嗅ぎ廻っている。

その煖炉の背後へ行つて寝ている。

己の一番好い布団を貸して遣る。

外で、あの坂道のような所で

飛んだり跳ねたりして己達を喜ばせた代りに、

1190

歓迎せられた、おとなしい客になつて、  
己の接待を受けるが好い。

この狭い書齋に

ランプがいつものように優しく附くと、

己達のこの胸の中、

自ら知り抜いている胸の中が明るくなる。

理性がまた物を言いはじめる。

希望の花がまた咲き出す。

ああ。生せいの小川おがわへ、生せいの元もとつ泉いづみへと

この心があこがれるなあ。

1200

彪犬。そんなになるな。今己の心の全幅を領している  
神聖なる物の音には、

獣の声では調子が合わない。

1195

人間が自分の解せぬ事を嘲り、

往々うるさい物に思う善や美を見て

ぐずぐず云うのには、

己達は慣れている。

狗もやっぱりそれをぐずぐず云うのかい。

1205

ああ。しかしもうなんでしょう、

この胸から満足が湧いて来ぬ。

なぜまた流ながれがこう早う涸れて

己達は渇に悩んでいなくてならんのか。

これは年来経験して知っている。

この欠陥を埋め合せようとして、

形而上のものを尊重するようになり、

啓示がほしいとあこがれる。

あのだの伝よりも尊く、美しく

1215

1210

新約全書の中に燃えている啓示がそれだ。

原本を開けて見て、

素直な感じのままに、一遍

神聖なる本文を

好きな独逸語に訳して見たい。<sup>すき</sup>

（一書巻を開き、翻訳の支度す。）

こう書いてある。「初にロゴスありき。<sup>ことば</sup>語ありき。」

もう此所<sup>ここ</sup>で己はつかえる。誰の助<sup>たすけ</sup>を借りて先へ進もう。

己には語をそれ程高く値踏することが出来ぬ。

なんとか別に訳せんではなるまい。

霊の正しい<sup>しめし</sup>示を受けているなら、それが出来よう。

こう書いてある。「初に意<sup>い</sup>ありき。」

軽卒に筆を下さぬように、

初句に心を用いんではなるまい。

あらゆる物を造り成すものが意<sup>い</sup>であろうか。

1220

1225

1230

一体こう書いてあるはずではないか。「初に力<sup>ちから</sup>ありき。」  
しかしこう紙に書いているうちに、

どうもこれでは安心出来ないと言ふ感じが起る。

はあ。靈の助<sup>たすけ</sup>だ。不意に思い附いて、

安んじてこう書く。「初に業<sup>わざ</sup>ありき。」

彪犬。己と一しよにこの部屋にいる積<sup>つも</sup>りなら、

うなることを廃<sup>よ</sup>せ。

吠えることを廃<sup>よ</sup>せ。

そんな邪魔をする奴を

傍に置いて我慢して遣ることは出来ぬ。

お前か己か、どちらかが

書齋を出て行<sup>い</sup>かなくてはならん。

己は客を逐うことは好まぬが

あの通り戸は開いている、出て行<sup>い</sup>くなら行<sup>い</sup>け。

はてな。妙に見えるな。

1235

1240

1245

自然にありそうもない事だ。

あれは幻か。<sup>うつつ</sup>現か。

あの彪犬は幅も広がり丈も伸びる。

勢好く起き上がって来る。

あれは狗の姿ではない。

己はなんと云う化物を内へ連れて来たのだろう。

もう火のような目、恐ろしい<sup>はなみ</sup>齒並をした

<sup>かば</sup>河馬のように見える。

はあ。もうお主は己の手の裏<sup>うち</sup>の物だ。

お主のような、半ば地獄に産み出されたものには、

クラウイクラ・サロモニスの呪<sup>よ</sup>が好い。

靈等（廊下にて。）

この中に一人<sup>ひとり</sup>捕われている。

皆外<sup>そと</sup>におれ。附いて這入るな。

係<sup>わな</sup>蹄に掛かった狐のように、

1250

1255

1260



地獄ふるの古リンクス奴が怯れている。

しかし気を附けて見ておれ。

あちらへ漂い、こちらへ漂い、

升のぼつては降りて見ておれ。

あいつはとうとう逃げて出よう。

あいつに手が貸されるなら、

あいつを棄て置かぬが好よい。

己達はいいつには

いろいろ世話になっている。

ファウスト

こんな獣に立ち向うには、

先しだいず四大まじないの呪まじないがいる。

「火せの精せい サラマンドル 燃えよ。

水の精 ウンデネ うねれ。

風の精 シルフエ 消えよ。

1265

1270

1275

土の精　コボルド　いそしめ。」

四大を、

その力、

その性<sup>さが</sup>を

知らぬものが、

なんで霊どもを御する

師になれよう。

「サラマンデルは

ほのお  
のうちに消えよ。

ウンデネは

さざめきて流れ寄れ。

シルフェは

隕<sup>いんせき</sup>石の美しさに耀<sup>かがや</sup>け。

インクブスは

木樵り水汲め。

1280

1285

1290

進み出でて終を告げよ。」

四大のどれも

あの獣のうちにはいぬ。

平気で蹲うすくまつて、己の顔を睨にらんでいる。

この呪ではまだ痛い目を見ぬと見える。

もう少し強いいのり禱を

聞せて遣ろう。

「奴。やつこ お前は地獄を

逃れ出たものか。

そんならこの印を見い。

これは暗黒の群が

項うなじを屈する印だ。」

はあ。もうとげとげしい毛を豎ててふくれるな。

「すたれものめ 廃物奴。」

これが読めるか。

1295

1300

1305

かつて芽ざさず、  
言<sup>ことあげ</sup>拳せられず、

あらゆる天<sup>てん</sup>に灌<sup>そそ</sup>がれ、

無慙<sup>むざん</sup>にも刺し貫かれた、これが読めるか。」

煖炉の背後に封<sup>ふう</sup>ぜられて、

象の大きにふくれ上がるな。

部屋一ぱいになる。

霧になつて散ろうとする。

天井へ升つてはならぬ。

師の脚下に身を倒せ。

見い。己はいたずらに嚇<sup>おど</sup>しはせぬ。

神聖なる火でお前を焼こうか。

三たび燃え立つ火を

待つなよ。

己の術の一番の奥の手を

待つなよ。

（霧落つると共に、メフィストフェレス旅の書生の装して煖炉の背後より現る。）

メフィストフェレス

そうお騒<sup>さわぎ</sup>になるには及びません。なんの御用ですか。

ファウスト

そんならこれが彪犬の正体であつたのか。

旅の書生だな。笑わせる事件だ。

メフィストフェレス

改めて御挨拶をいたします。博識でいらつしやる。

わたくしに汗をたつぷりお搔かせになりました。

ファウスト

名はなんと云うか。

メフィストフェレス

それは小さいお尋<sup>たずね</sup>かと存じます。

こ<sup>ことば</sup>語と云うものをおさげすみになり、

あらゆる外観をお遠ざけになつて、

ただ本体の深みをお探<sup>さぐり</sup>になるあなたとしては。

ファウスト

しかし君達のは名を聞くと、

大抵本体が読める。

蠅<sup>そこな</sup>の神、残<sup>そこな</sup>う者、偽る者などと云えば、

はつきり知れ過ぎるではないか。

そんなら好<sup>よ</sup>い。一体君はなんだ。

メフィストフェレス

常に悪を欲し、

却て常に善を為す、彼力の一部です。

ファウスト

ふん。その謎めいた詞<sup>ことば</sup>の意は。

メフィストフェレス

わたしは常に物を否定する<sup>れい</sup>霊です。

そしてそれが至当です。なぜと云うに、

一切の生ずるものは滅しても好い<sup>よ</sup>ものです。

して見れば、なんにも生ぜぬに如く<sup>し</sup>はない。

こうしたわけで、あなた方が罪惡だの、

破壊だの、約<sup>つづ</sup>めて言えば惡と仰やるものは、

皆わたしの分内の事です。

ファウスト

君は一部だと名告<sup>なの</sup>る。そして全体で己の前にいるのか。

1345

メフィストフェレス

それは少しばかりの真理を申したのです。

人間は、氣まぐれの小天地をなしていて、

大抵自分を全体だと思つていますが、

わたしなんぞは部分のまた部分です。

最初一切であつて、後に部分になつた暗黒の一部分です。

1350

暗黒の生んだ驕<sup>おご</sup>れる光明は、母の闇夜と古い位を争い、

空間を略取しようとする。

しかしいくら骨折つてもその出来ぬのは、

光明が捕われて物体にねばり附いているからです。

物体から流れて、物体を美しくする。

そしてその行く道は物体に礙さまたげられる。

あれでは、わたしの見当で見れば、光明が物体と

一しよに滅びてしまうのも遠い事ではありませんまい。

ファウスト

そこで君の結構な任務は分かった。

君は大体からは物を破壊することが出来んのぞ、

小さい所からなし崩しにこわし始めるのだな。

メフィストフェレス

そうです。勿論それが格別役にも立ちません。

無むに対して立っているある物

即ち不細工な世界ですな。こいつには、

1355

1360



これまでいろいろな企をして見ましたが、

どうにも手が著けようがありません。

海嘯、<sup>つなみ</sup>暴風、<sup>あらし</sup>地震、火事、どれを持って行つても

跡には陸と海とが依然としているですな。

それからあの禽獣とか人間とか云う<sup>のろ</sup>咀われた物は、

一層手が著けられませんね。

今までどれ程葬つたでしょう。

それでもやはり新しい爽かな血が<sup>めぐ</sup>循つています。

そんな風で万物は続いて行く。考えると、気が狂いそうです。

空気からも、水からも、土地からも、

乾いた所にも、濡れた所にも、熱い所にも、寒い所にも、

千万の物の芽が伸びる。

もしわたしが火と云う奴を保留して置かなかつたら、

これと云う特別な物がわたしの手に一つも無い所でした。

ファウスト

1365

1370

1375

そんな風で君は、永遠に息<sup>やす</sup>む時なく、

恵深く製作する威力に対して、

君の陰険に、空しく握り固めた、

冷やかな悪魔の拳<sup>こぶし</sup>を揮うのだ。

実に混沌の生んだ奇怪な倅ではある。

何かちと外の事を始めてはどうだね。

メフィストフェレス

実際そうですね。少し工夫して見ましょうよ。

いずれこの次にもっと精しくお話<sup>はなし</sup>します。

きょうはこれで御免を蒙りたいのですが。

ファウスト

なぜそれを己に問うのだから分らないな。

まあ、これで君にお近<sup>ちかづき</sup>附になつたと云うものだ。

いつでも君の気の向いた時にまた来給え。

そこには窓がある。そこには戸口もある。

1380

1385

1390

君にはあの煙突なんでも非常門になるのだろう。

メフィストフェレス

間が悪いが打明けて言いまししょう。わたしが出て行くには、ちよいとした邪魔があるのですよ。  
あの敷居にあるペンタグラ<sup>しるし</sup>ンマの印ですな。

ファウスト

ふん。あの印を君は気にするのか。

妙だね。あれに君は縛られるなら、這入る時は

どうして這入ったか。地獄の先生、それを言つて見給え。

そんな霊のある印を、どうごまかして這入ったのだ。

メフィストフェレス

好くあれを御覧なさい。本当に引いてないのです。

<sup>そこ</sup>外へ向いている一角が、

御覧の通、<sup>とおり</sup>少し開いています。

ファウスト

1395

1400

それは偶然の為しあわせ合あだった。

そこで君は己の俘とりこになっているわけだね。

これは意外な、旨い成功だった。

メフィストフェレス

実は彪犬は気が附かずに飛び込んだが、

今になつて見ると少し工合が違つていて、

どうも悪魔はこの部屋を出にくいのです。

ファウスト

ところで君なぜ窓から出ない。

メフィストフェレス

悪魔や化物には掟があつて、

這入つて来た口から、出て行かなくてはならんです。

初にすることは自由ですが、二度目は奴隸になるのです。

ファウスト

そんなら地獄にも法律はあるわけなんだね。

兎に角好都合だ。こうなると君達と

契約を結ぶことも、随分出来るわけだね。

1415

メフィストフェレス

それは約束をする上は、あなたに十分の権利がある。

なんのかのと云つて、それを狭めるような事はしません。

しかしそれはそう手短には行きませんから、

こん度の御相談にいたしましょう。

今度だけはお暇を下さるように、

1420

切にお願申すのがな。

ファウスト

それにしてもちよいと位好きそうなものだ。

面白い話が聞きたいのだが。

メフィストフェレス

いや。今度だけはお暇を下さい。直に帰<sup>すぐ</sup>つて来ます。

その時なんでもお尋下さい。

1425

## ファウスト

一体己が君を追ひ掛けたのではない。

君が自業自得で網に掛かったのだ。

悪魔なんと云うものが、手に這入っては手放せないね。  
また早速掴まえようと云うわけには行かんから。

## メフィストフェレス

いや。是非お伽をするのがお望だと云うことなら、

それはいてお上申あげしても好いですよ。

しかしお慰なぐさに何か術をして

御覽に入れても好いと云う条件附に願ひましょう。

## ファウスト

それは結構だ。君の勝手にし給え。

なるたけ気持の好い術にしてくれ給え。

## メフィストフェレス

それは承知です。単調極まる一年間に、

あなたの官能の享けたよりは、

この一時間に享けた方がたつぷりだと思わせて上げます。

これから優しい霊どもが歌つてお聞せ申したり、

美しい形を現<sup>あらわ</sup>してお見せ申すのは、

いたずらな幻の戯ではない。

鼻にも好い匂<sup>におい</sup>がしよう。

舌にも好い味がしよう。

それから心にも好い感じがしよう。

別に用意なんぞはいらない。

仲間はまだ揃っている。始めろ始めろ。

霊等

消えよ、目の上なる

暗き穹<sup>きゆうりゆう</sup>窿<sup>ろう</sup>。

蒼き瀬<sup>せい</sup>氣<sup>き</sup>よ。

やさしく美しく

1440

1445

1450

室<sup>むろ</sup>を窺<sup>のぞ</sup>へ。

暗<sup>くも</sup>き雲霧<sup>きり</sup>は

はや散り失せしよ。

星あまたきらめけり。

やさしき日等は

照りわたれり。

天<sup>てん</sup>の子等の

霊<sup>れい</sup>めく美しさよ。

揺りつゝ身を曲げて

漂<sup>たふ</sup>ひ過ぎよ。

あこがるゝ心もて

こなたへ続け。

その衣<sup>きぬ</sup>の

ひらめく帯は

下界を覆ひ、

1455

1460

1465



四阿あずまやを覆へ。

恋する二人が深き心もて

生涯を相委ぬる

四阿を覆へ。

四阿は四阿に並べり。

芽ぐむ蔓草つるくさあり。

枝たわわなる葡萄は

籠み合ふ酒蔵さかぐらの

桶そでに灌そそげり。

泡立つ酒は

小川おがわと流れ、

浄き宝玉の

川床にせゝらぎて、

山の上の高き処を

背せになしつゝ、

1470

1475

1480

事足れる

緑なる岡の辺<sup>べ</sup>の

<sup>みずうみ</sup>湖に入る。

群鳥<sup>むらとり</sup>は

<sup>よろこび</sup>喜を啜り、

日の方<sup>かた</sup>へ飛び、

波間に

漂ひ浮ける、

晴やかなる

島々の方へ飛ぶ。

その島には合唱の群の

歓び歌ふが聞え、

踊手の野の上に

踊るが見ゆ。

舞ひ歌ふ人皆

1485

1490

1495

四方<sup>よも</sup>にあらけぬ。

岡のつかさに

攀<sup>よ</sup>づるあり。

湖の上に

洒<sup>およ</sup>ぐあり。

空<sup>ひひ</sup>に沖るあり。

皆<sup>せい</sup>生に向へり。

聖<sup>せい</sup>なる恵<sup>めぐみ</sup>の

愛する星の

遠<sup>おちかた</sup>方に向へり。

メフィストフェレス

寐たな。身の軽い、やさしい小僧ども、好く遣つた。

好く真面目に骨を折つて寐入らせてくれた。

あの合奏のお礼は忘れはしないよ。

へん。悪魔を抑留しようとは、お前にはまだ過ぎた話だ。

小僧ども。こいつの夢に艶えんな姿を見せて遣れ。

1510

迷の海にしずめて遣れ。

ところでこの敷居の禁厭ましないを破るには

鼠の牙がいり用だ。

呼ぶには手間は掛からない。

そこらをがさがさ云わせる奴に、もう己の詞が聞えよう。

1515

こら。大鼠、小鼠、蠅に蛙に

南京虫、蝨しらみの王の

仰おおせだぞ。遠慮なく這つて出て、

その敷居をかじれかじれ。

ちよいと油を塗り附けると、

早速そこへ飛んで来る。

さあ、為事しごとに掛かれ掛かれ。邪魔なのは

その一番手前の角すみの所だ。

もう一かじりだ。それで好いいい。さようなら、ファウストさん、

1520

またお目に掛かるまで、たと夢を御覧なさい。

1525

ファウスト（醒めて。）

己はまた騙されたか。

夢に悪魔を見せられて、

彪犬に逃げられるのが、

意味の深い願の果か。

---

ファウスト。メフィストフェレス登場。

ファウスト

戸を敲いたな。<sup>たた</sup>おはいりなさい。誰がまた悩ましに來たのか。

1530

メフィストフェレス

わたくしです。

ファウスト

おはいりなさい。

メフィストフェレス

三度言つて下さいまし。

ファウスト

はてさて。おはいりなさい。

メフィストフェレス

それで宜しゅうございます。

そこで大抵中好く交際が出来る積つもりです。

あなたの気晴らしをしてお上申あげそうと思つて、

ちよつと貴公子と云うなりをして来ました。

赤い上衣に金の刺繡がしてある。

上に羽織つたのは、こわばる絹の外套です。

帽子には鳥の羽を挿けんしました。

そしてこんな長い、尖つた剣けんを吊りました。

そこで早い話が、あなたの方ほうでも

こう云う支度もらいをしてお貰申したいのです。

そこであらゆる絆きずなを絶つて、自由に

1535

1540

人生がどんなものだと言うことを御経験なさるのですね。

ファウスト

いや。この狭い下界の生活の苦は

どの著物を著ても逃れられまい。

一体己は当のない遊をするには、もう年を取り過ぎた。

あらゆる欲を断とうには、まだ年が若過ぎる。

世間が己に何を提供しよう。

闕乏<sup>けつぼう</sup>に堪えよ、忍べよと言うのが、

人の一生涯時々刻々

厭<sup>いや</sup>な声で歌われて、

誰の耳にも聞えて来る

永遠なる歌なのだ。

己は毎朝恐怖の念をして目を醒ます。

ただ一つの、ただ一つの願も<sup>かな</sup>慍えずに、

歓樂の暗示をさえ

1545

1550

1555

かたくなな批評で打ちこわし、  
活動している己の胸の創作を  
凡百の世相で妨碍する

日の目をまた見ることかと思えば、  
己は苦い涙を翻して泣きたくなる。

また夜闇が下界を包みに降りて来ても、

己は恐る恐る身を臥所に倒す。

そこでも甘寐の安さを貪ることは出来ずに、  
恐ろしい夢に驚かされる。

己のこの胸のうちに住んでいる神は  
心の深い底の底まで掻き乱すことは出来るが、  
己のあらゆる力の上に超然と座を占めている神は、  
外界の物を何一つ動かすことが出来ぬ。

それで己には世にあるのが重荷で、  
死が願わしく生が憎いのだ。

1560

1565

1570



メフィストフェレス

そのくせ死が真に客として歓迎せられることは決して無いのです。

ファウスト

いや。勝<sup>かちいくさ</sup>軍<sup>ぐん</sup>のかがやきのうちに

死が血に染まった月桂樹の枝を顚<sup>こめかみ</sup>顚<sup>ま</sup>に纏<sup>まと</sup>う人、

急調の楽につれて広間を踊り廻った揚句に、

少女の腕に支えられながら死を迎えた人は幸<sup>さいわい</sup>だ。

ああ。己もあの高い精霊を覲<sup>てきめん</sup>面<sup>めん</sup>に見たとき、

歓喜の余にその場に死んで倒れてしまえば好かつたに。

メフィストフェレス

でも誰やらあの晩に

茶色な汁を飲み干さなかつたようですね。

ファウスト

ふん。君は探偵が道楽だと見える。

メフィストフェレス

1575

1580

わたしは全知ではないが、大ぶいろんな事を知って居ますよ。

## ファウスト

あの恐ろしい心の乱みだれの中で、

馴れた優しい音色に牽ひかれ、

穢おさなかった世の記念かたみの感情が、

旧い歓楽の余韻に欺かれたとは云え、

餌おとりや囿おとりやまやかして人の霊とりこを擒とにし、

目をくもらしたり賺すかしたりして、

この悲哀の洞窟どうくつに繋いで置こうとするような、

あらゆる手段を己のろは咀くう。

人の霊が自ら高しとして我と我身の累るいをなす、

その慢心を先ず咀くう。

わが官能の小窓に迫る

現象の幻華を咀くう。

わが夢の世に来て欺く

名聞や身後の譽の迷を咀う。

妻となり子となり奴婢ぬひとなり鋤鍬となり、

占せんゆう有と称して人に媚ぶる一切の物を咀う。

宝を見せて促して冒険の業をもさせ、

また怠おこたりの快樂けらくに誘さそうて

軟しとねい茵を体の下にも置き直す、

あの金錢を己は咀う。

葡萄から醸す靈液を咀う。

恋の成就の快樂を咀う。

希望を咀う。信仰を咀う。

何より切に忍耐を咀う。

合唱する靈等（目に見えず。）

痛いたまし。痛まし。

強こぶしき拳もて

美しき世界を

汝<sup>なむじ</sup>毀ちぬ。

1610

世界は倒れ崩れぬ。

半ば神なる人毀ちぬ。

その屑<sup>くず</sup>を「無」のうちへ

我等負ひ行きつゝ、

失はれし美しさを

歎く。

1615

下界の子のうちの

力強き汝<sup>なむじ</sup>

先<sup>さき</sup>より美しく

そを再び建立せよ。

1620

汝<sup>な</sup>が胸のうちにそを建立せよ。

爽かなる目もて耳もて

新なる生<sup>せい</sup>の歩<sup>あゆみ</sup>を

始めよ。

さらば新しき歌

聞えむ。

メフィストフェレス

あれはわたしの仲間の

小僧どもです。

ませた言草いいぐさで歓楽や事業を

あなたに勧めるのをお聞なさい。

官能の働はたらき、体の汁の循めぐりの止まる

寂しい所から、

遠い世間へ

あいつ等はあなたを誘い出すのです。

くまたか  
角鷹うれえのようにあなたの命の根を啄つつく

「憂うれえ」をおもちやにするのはお廃よしなさい。

最下等の人間とでも一しよにいたら、

1625

1630

1635

人の中の人だと云うことがあなたにも感ぜられよう。

こう申したからとて、何もあなたを

<sup>げす</sup>下司の中へ連れ出そうと云うのではありません。

わたしはえらい人のお仲間ではない。

それでもあなたがわたしと一しよに

世間を渡つて見ようと云う思召がありやあ、

即座にわたしは甘んじて

あなたのものになってしまう。

まあ、兎に角お連になつて見て、

わたしのする事がお氣に入つたら、

<sup>ごけらい</sup>御家隸にもなるですね。

ファウスト

そしてその代<sup>かわり</sup>に己<sup>ほう</sup>の方からどうすれば好いのだ。

メフィストフェレス

そりやあまだ急ぐことはありません。

1640

1645

1650

ファウスト

いやいや。悪魔は利己主義だから、  
人の為<sup>ため</sup>になることを

容易に只でしてはくれまい、

条件をはつきり言つて貰おう。

そう云う家隸は己の内へ危険を及ぼしそうだから。

メフィストフェレス

そんならこの世でわたしはあなたに身を委ねて、  
休まずに顧で使われましょう。

そこであの世でお目に掛かった時は

あなたがあべこべに使われて下さるですね。

ファウスト

あの世なんぞは己は余り気にしない。

まあ、君がこの世界をこなごなに砕いたところで、  
別の世界がその跡へ出来ようというものだ。

1655

1660

この大地から己の歓喜は涌く。

この日が己の苦痛を照す。

己がこの天地に別れてしまうことが出来たら、  
それから先はどうにでもなるが好い。

未来に愛や憎<sup>にくみ</sup>があるか、

あの世にもまたこの世のように

上と下とがあるかなどと、

己は問うて見る気がないのだ。

メフィストフェレス

そう云うお考<sup>かんがえ</sup>なら思い切ってお遣なさい。

お約束なさい。その上は早速

わたしの術を面白く御覧になることが出来ます。

まだ人間の見たことのない物を御覧に入れます。

ファウスト

ふん。悪魔風情が何を見せる積<sup>つもり</sup>やら。

1665

1670

1675



向上の道にいそしむ人間の霊が  
君なんぞに分かつた例があるかい。

腹の太らない馳走か、

水銀のようになると

間断なく手のうちで散る赤い金か、

勝つことのない博奕か、

己の懷に抱かれていながら

隣の男を流眊に見る女か、

隕石のように消えてしまう

名望の、神のような快さをでも授けるのか。

摘まぬ間に腐る果でも、日毎に若葉の

茂る木でも、見せるなら己に見せて貰おう。

メフィストフェレス

そんな御註文には驚きません。

そう云う珍物が御用とあれば差し上げる。

しかしそれよりは落ち著いて、何か旨い物を  
食つていたいと云う時がおいおい近くなりますよ。

ファウスト

ふん。己が気楽になつて安樂椅子に寝ようとしたら、  
その時は己はどうなつても好い。

己を甘い詞ことばで騙して

己に自惚うぬぼれの心を起させ、

己を快樂で賺すかすことが君に出来たら、

それが己の最終の日だ。

賭をしよう。

メフィストフェレス

宜しい。

ファウスト

容赦はならぬ。

己がある「刹那」に「まあ、待て、

1690

1695

1700

お前は実に美しいから」と云つたら、  
君は己を縛り上げてくれても好い。

己はそれきり滅びても好い。

葬の鐘が鳴るだろう。

君の奉公がおしまいになるだろう。

時計が止ま<sup>と</sup>つて針が落ちるだろう。

己の一代はそれまでだ。

1705

メフィストフェレス

だが好く考えて御覧なさい。聞いた事は忘れませんよ。

ファウスト

己は軽はずみに大胆に振舞いはせぬから、

どうぞしつかり覚えていて貰おう。

1710

己が一所に停滞したら、己は奴隸だ。

メフィストフェレス

1715

そんならきょうの卒業宴会に

早速御家隸の役をしましょう。

ただ一つ願いたいのは、後に間違のないように

一寸二三行書いて置いてお貰<sup>もら</sup>いましょうか。

ファウスト

書<sup>かきもの</sup>物まで取るのかい。悪く堅い奴だな。

男同士の附合も男の詞の信用も知らないのか。

口で言つた己の詞が永遠に己の生涯を

自由にすると云うだけでは不満足なのかい。

一体世界のあらゆる潮流は頃<sup>けいこく</sup>刻<sup>やす</sup>も息まないのに、

己だけが契約一つで繋がれていると云うのも変だ。

しかしそう云う迷は誰の心にも深く刻まれていて、

誰も好んでそれを霽<sup>はら</sup>そうとするものがない。

胸の中に清浄に信義を懐いているものは幸福だ。

そう云う人はどんな犠牲をも辞するものではない。

1715

1720

1725

ところが、字を書いて印を押した巻紙を、

世間のものは皆化物のようにこわがっている。

いざ筆に上のぼるとなると、一字一句にも気きがおくれる。

そりや用紙、そりや封蠟と、どなたもお持もちまわり廻まわになる。

おい、悪あく霊りよう。君は何があいるのだ。

紙に書くのか、革かわに書くのか、石や金に彫ほるのかい。

鉛筆か、鵝ペンか、それとも鑿のみで書けと云うのか。

己は君の註文どおりにするのだがね。

メフィストフェレス

何もそんなにむきになつて誇張した

言草をしなくつたつて好いでしょう。

どんな紙切でも好いのです。

ただちよいと血を一滴出して署名して下さい。

ファウスト

それで君の気が済むことなら、

下らない為草だが異存はないよ。

メフィストフェレス

血という奴は兎に角特別な汁ですからね。

ファウスト

己が違約するだろうと云う御心配だけはいらぬ事だ。

平生力一ぱい遣つて見ようと思つてゐる事と、

君に約束する事とが一つなのだからね。

己は大きく丈高くなろうとして、ふくらみ過ぎた。

所詮君くらいの地位にいるはずの己だろう。

大なる霊は己を排斥して、

「自然」の戸は己の前に鎖された。

思量の糸は切れて、

あらゆる知識が嘔吐を催しそうになった。

どうぞ官能世界の深みに沈めて、

燃える情欲の渴を医いしてくれ給え。

1740

1745

1750

未だかつて<sup>かか</sup>擧げられたことのない秘密の<sup>たれぎぬ</sup>垂衣の背後に  
一つ一つの奇蹟が己達の窺うのを待っている。

さあ、「時」の早瀬に、事件の推移の中に  
この身を投げよう。

受用と痛苦と、

成就と失敗とが

あらん限の交錯をなして来るだろう。

活動して暫くも休まずにいてこそ男児だ。

メフィストフェレス

あなたにこれ程と云う尺度や、これまでと云う限界は示さない。

どうぞ到る処に<sup>つまみぐい</sup>撮食をして、

逃げしなに<sup>たのしみ</sup>好い物を引<sup>ひ</sup>つ手繰<sup>たくり</sup>なさるが好い。

たんとお楽<sup>たのしみ</sup>なさつて、跡腹の病めないようになさい。

兎に角すばしこく手をお出<sup>だし</sup>なさい。ぼんやりしていないで。

ファウスト

1755

1760

いや。先つきも云うとおり己は快樂は貪らない。

1765

最も悲しい受用に、受用のよろめきに身を委ねよう。

恋に迷う心の憎、爽快に伴う胸悪さに委ねよう。

物の識りたい欲を擲<sup>なげう</sup>つたこの胸は、

これから甘んじてどんな苦痛をも迎えて、

人間全体の受くるべきはずのものを

1770

この内の我で受けて味わって見よう。

この己の靈で人間の最上のもので深甚のものを捉えて、

歡喜をも苦痛をもこの胸の中に積んで、

この自我を即人生になるまで拡大して、

遂にはその人生と云うものと同じく、滅びて見よう。

1775

### メフィストフェレス

まあ、お聞<sup>きき</sup>なさい。わたしは何千年と云う間

この靱<sup>しわ</sup>いお料理を嚙<sup>か</sup>んでいるから、知っています。

揺<sup>ゆり</sup>籃<sup>かご</sup>から棺桶までの道中に、



この先祖伝来の饅頭種をこなす奴はありませんよ。  
 わたしどもは知っています。この一切の御馳走は  
 神と云う奴でなくてはこなせない。

1780

なんでもそいつが自分はいつも明るい所にいて、

わたしどもをいつも暗い所に置いて、

あなた方<sup>がた</sup>に夜<sup>よる</sup>昼<sup>ひる</sup>を寝たり起きたりして過させるのだ。

ファウスト

しかし己は遣つて見る。

メフィストフェレス

さあ、出来ないこともないでしょう。

1785

だが、気になることが一つありますよ。

時は短くして道は長しですな。

お望<sup>のぞみ</sup>の慇<sup>かな</sup>うような工夫をお授<sup>さづけ</sup>しましょうか。

一つ詩人と云う奴と結托なさるです。

そこでその先生が思想を馳騁<sup>ちてい</sup>して、

1790

宇宙の物のあらゆる榮譽を

あなたの頭<sup>とうかん</sup>銜<sup>かん</sup>に持つて来るのです。

胆<sup>たんだい</sup>大なること獅子の如く、

足早きこと鹿の如く、

血の熱することイタリア人の如く、

堅忍不拔は北辺の民の如しと云う工合です。

その先生にお頼<sup>たのみ</sup>なさつて、宏量と狡智とを兼ねて、

温い青春の血を失わずに、

予定の計画どおりに恋をすると云う

秘法を授けてお貰なさるが好い。

わたしもそう云う先生にお近附になりたいのです。

そして小天地先生の尊号<sup>たてまつ</sup>を上るですな。

ファウスト

しかしね、君。己が見聞覚知の限を尽して、

窮めようとしている人生の頂上が

1795

1800

窮められないものとしたら、己は一体何物だ。

1805

メフィストフェレス

あなたですか。あなたは、さよう、やつぱりあなたですな。

何百万本の ちぢれけ 毛を植えた仮髪をお被 かぶり なさつても、

何尺と云う高さの足駄をお穿 はき なさつても、

所詮あなたはあなたですな。

ファウスト

己もどうもそんな気がする。人智の集めた宝の限を、

1810

己はいたずらに身のまわりに掻き寄せて見た。

さてじつと据わつて考えて見ても、

内から新しい力は湧いて出ぬ。

毛一本の幅程も己の身の丈は加つていぬ。

己は一步も無極に近づいてはいぬ。

1815

メフィストフェレス

いや、先生、それは通途 つうず の物の見ようで

物を御覧になると云うものだ。

生の喜が逃げ去らぬ間に、取る物を取ろうとするには、  
も少し気の利いた手段をしなくてははいけません。

なに、べらぼうな。それは慥<sup>たし</sup>かにあなたの物と云うのは、  
手足や頭やし□だけでしよう。

しかしなんでも自分が新しく受用すりやあ、

それが自分の物でないとは云われません。

六匹の馬の代<sup>だい</sup>が払えたら、

その馬の力が自分のではないでしようか。

そいつに駆けさせりやあ、こっちは立派に

二十四本足のある男だ。

さあ、思い切つて出掛けましょう。思案なんぞは廃<sup>やめ</sup>にして

御一しよにまっしぐらに世間へ飛び出して見ましょう。

わたしがあなたに言いますがね。理窟を考えている奴は、

牛や馬が悪魔に取り附かれて、草の無い野原を

1820

1825

1830

圈なりに引き廻されているようなものです。

その外そとまわり 囿くわいにはどこにも牧草が茂っているのに。

ファウスト

そこで手始にどうしろと云うのだ。

メフィストフェレス

出掛けるですね。

一体ここはなんと云う拷問ごうもんじょ所です。

こんな所で自分も退屈し、学生どもをも退屈させるのが、  
生きていると云うものですか。

こんな事は御同僚の太っ腹に任せてお置おきなさい。

なんだって実みの無い藁わらをいつまでも扱こくのですか。

それにあなたに分かる学問の中で、一番大切な事は  
学生どもには言うことが出来ないのでしょうか。

そう云えば、さつきから廊下ひとりに一人来ているようですね。

ファウスト

1835

1840

今面会することは己には出来ないが。

メフィストフェレス

小僧大ぶ長く待っているのだから、

慰めて遣らずに帰すわけには行きますまい。

一寸その上衣と帽子とをわたしにお貸<sup>かし</sup>なさい。

こう云う服装はわたしには好く似合いそうです。

(メフィストフェレス著換ふ。)

これで好い。跡はわたしの頓智に任せてお置<sup>おき</sup>なさい。

十五分間もあれば沢山だ。

どうぞその隙に面白い旅の支度をして下さい。

(ファウスト退場。)

メフィストフェレス (ファウストの服装にて。)

へん。これからは人間最高の力だと云う

理性や学問を馬鹿にして、

幻術魔法によって、

1845

1850

偽<sup>いつわり</sup>の心を長ぜさせるが好い。

そうなりやあ先生こつちのものだ。

なんの箝<sup>けんせい</sup>制も受けずに、前へ前へと進んで行く

精神を運命に授けられたので、

先生慌<sup>わが</sup>ただしい努力のために、

下界の快<sup>けらく</sup>楽を飛び越して来たものだ。

これから己が先生を乱暴な生活、

平凡な俗事の中へ連れ込んで引き擦り廻し、

もがかせて、放さずに、こびり附かせて、

壓<sup>あ</sup>くことを知らない嗜<sup>あ</sup>欲の脣の前に、

旨い料理や旨い酒をみせびらかしてくれる。

先生医し難い渴に悶えるだろう。

そうになると、よしや悪魔に身を委ねていないでも、

破滅せずにはいられまいて。

一学生登場。

1855

1860

1865

## 学生

わたくしはこの土地へたつた今参つたばかりですが、  
どこで承つても御高名な

先生にお目に掛かつて、お話が伺いたいと存じまして、  
わざわざ罷り出しましたのですが。

## メフィストフェレス

これは御丁寧な挨拶で痛み入る。

わしも外に沢山いるとおりの並の男だ。

どうだね。少しはここの様子を見たかね。

## 学生

どうぞ何分宜しくお願ひします。

わたくしは体は丈夫で、学資もかなりありますし、  
奮発して出て参つたものでございます。

母はなかなか手放しませんでした、

是非余所でしたかりした修行がいたしたいので。



メフィストフェレス

それは君丁度好い土地へ来られた。

1880

学生

実の所はなんだかもう帰りたくなりました。

この高い石垣や広い建物を見ますと、

余り好<sup>よ</sup>い心持はいたしません。

なんだかこう窮屈らしい所で、

草や木のような青いものも見えませんし、

講堂に出て、ベンチに腰を掛けますと、

なんにも見えも聞えもしないで、頭さえぼんやりして来ます。

1885

メフィストフェレス

それは習慣ですよ。

生れたばかりの赤子に乳を含ませると、

すぐには吸い附かないものだ。

少し立てば旨がつて飲む。

1890

それと同じ事で今に君も知識の乳房にかじり附いて離れないようになるさ。

学生

それはわたくしも学問の懷に抱かれないのは山々です。どうしたらそこへ到達することが出来ましょう。

メフィストフェレス

まあ、外の話は跡の事にして何科に這入るつもりだか、それを言つて見給え。

学生

ええ。わたくしはなんでもえらい学者になりたいのです。

下界の事から天上の事まで窮めまして、

自然と学問とに

通じたいと存じます。

メフィストフェレス

それは至極のお考だ。

1895

1900

しかし余所見をしては行けませんよ。

学生

それは体をも魂をも委ねて遣ります。

しかし愉快的暑中休暇なんぞには

少しは自由を得てひまつぶし暇潰な事も

遣られるようだと好いのですが。

メフィストフェレス

光陰は過ぎ易いものだから、時間を善用せんと行かん。

なんでも規律を立てて遣ると、時間が儲かるよ。

まあ、わしに御相談とあれば、

最初に論理学を聴くだね。

そこで君の精神が訓練を受けて、

スパニアの長靴でふくらはぎ腓腸を締め附けられたように、

思慮の道を

改めてゆつくり歩くようになるのだ。

1905

1910

1915

烽火が空を飛ぶように、

縦横たてよこ十文字に跳ね廻つては行かん。

それから暫くはこう云う教育を受ける。

譬たとえば勝手に飲食のみくいをするように、

これまで何事も一息に、無造倣むぞうさにしたのを、

一、二、三と秩序を経て遣るようにする。

一体思想の工場こうばも

機屋の工場のようなもので、

一足踏めば千万本の糸が動いて、

梭ひは往つたり来たりする、

目に止まらずに糸を流れる、

一打打てば千万の交錯が出来ると云うわけだ。

哲学者と云う奴が出掛けて来て、

これはこうなくてはならんと、君に言つて聞せる。

第一段がこうだ、第二段がこうだ。

1920

1925

1930

それだから第三段、第四段がこうなくてはならん。

もし第一段、第二段がなかったら、

第三段、第四段は永久に有りようがないと云うのだ。

そんな理窟をどこの学生も難<sup>ありがた</sup>有<sup>が</sup>がつている。

しかし誰も織屋になつたものは無い。

誰でも何か活動している物質を認識しよう、

記述しようとするには、兎角精神を度外に置こうとする。

そこで一部分一部分は掌中に握っているが、

お気の毒ながら、精神的脈絡が通じていない。化学でそれを

エンハイレエジス・ナツレエ、「自然処置」と称している。

自ら欺く詞で、どうして好いか知らぬのだ。

学生

どうも仰やる事が皆は分かりません。

メフィストフェレス

それは君が複雑な事を単一に戻して、

1935

1940

それぞれ部門に入れて考えるようになると、  
おいおい今よりは好く分かるようになる。

1945

## 学生

どうも頭の中で擣屋つきやの車が廻っているようで、  
ぼうつとしてまいりました。

## メフィストフェレス

それから君、先ず何は措いても、  
形而上学に取り掛からなくてはいかん。  
なんでも人間の頭に嵌はまりにくい事を、  
あの学問で深邃しんすいに領略するのだね。

1950

頭に這入る事を斥さすにも、這入らない事を斥すにも  
立派な術語が出来ていて重宝なわけだ。

それはまあ、後の事として、最初半年は  
講義を聴く順序を旨く立てなくてはいかん。

1955

毎日五時間の課程がある。

鐘の鳴る時ちゃんど講堂に出ていなくてはいかん。  
聴く前に善く調べて置いて、

一章一章としつかり頭に入れて置くのだ。

そうすると、先生が本に書いてある事より外には  
なんにも言わないのが、跡で好く分かつて好い。

しかし筆記は勉強してしなくてはいいかん。

聖<sup>せい</sup>霊<sup>れい</sup>が口ずから授けて下さると云う考<sup>かん</sup>でね<sup>がえ</sup>。

学生

それは二度と仰やなくなつても好うございます。

筆記がどの位用に立つかと云うことは、好く分かつています。

なんでも白紙の上に黒い字で書いて置いたものは、

安心して内へ持つて帰ることが出来ますから。

メフィストフェレス

ところで君、兎に角何科にするのだね。

学生

1960

1965

どうも法律学は遣りたくありません。

### メフィストフェレス

わしもあの学科の現状は知っているから、君が気の進まないのも無理とは思わない。

兎角法律制度なんと云うものは

永遠な病気のように遺伝して行く。

先祖から子孫へぐずぐずに譲り渡されて、

国から国へゆるゆると広められる。

そのうち道理が非理になって、仁政が秕政ひせいになる。

人は澆季ぎょうきには生れたくないものだ。

さて人間生れながらの権利となると、

惜いかなどこでも問題になっていない。

### 学生

そのお話で厭なのが益々厭になりました。

先生のお指図を受けるものは、実に為合しあわせです。

1970

1975

1980



そこでわたくしは神学でも遣ろうかと存じますが。

メフィストフェレス

そうさな。君を方向に迷わせたくはない。

あの学問をして、

邪路に奔<sup>はし</sup>らないようにするのは、頗<sup>すこぶ</sup>るむずかしいて。

あの中には毒と見えない毒が沢山隠れている。

それを薬と見分けることがほとんど不可能だ。

まあ、一番都合の好いのは、ただ一人の講義を聴いて、

その先生の詞どおりを堅く守っているのだね。

概して詞に、言句にたよるに限る。

そうすれば不惑の門戸から

堅固の堂宇に入ることが出来る。

学生

しかし先生、詞には概念がなくてはなりませんまい。

メフィストフェレス

1985

1990

それはそうだ。だが、余り小心に考えて徒勞をせぬが好い。  
なぜと云うに、丁度概念の無い所へ、

1995

詞が猶予なく差し出<sup>で</sup>ているものだ。

詞で立派に議論が出来る。

詞で学問の系統が組み立てられる。

詞に都合好く信仰を托することが出来る。

詞の上ではグレシアのヨタの字一字も奪われない。

2000

### 学生

どうも色々伺って先生のお暇を潰して済みませんが、  
もし御面倒を願いたいのでございます。

どうぞ医学はどんなものだと言うことについても  
しっかりした御一言を承らせて下さいまし。

三年の学期は短いのに、

2005

学問の範囲は実に広いのです。

先生がちよいと一言方針を御示<sup>しめし</sup>下さいますと、

それにたよって探りながらも進んで行かれましょう。

メフィストフェレス（独語。）

もうそろそろ乾燥無味な調子に厭<sup>あ</sup>きて来た。

ちと本色の悪魔で行って遣るかな。

（声高く。）

医学の要旨は造做もないものだよ。

君は大天地と小天地とを窮めるのだ。

そして詰まる所はやはり神の思召どおりに、

なるがままにさせて置くのさ。

君がいくらあちこち学問をしようとしてさまよっても、

それは駄目だ。てんでに学ばれる事しか学ばれない。

ところで、なんでも旨く機会を掴まえるのが、

それが本当の男と云うものだ。

見た所が、君は大ぶ体格が好<sup>い</sup>い。

度胸もなくはないだろう。

2010

2015

2020

そこで君に自信が出来て来ると、

世間の人も自然に君を信じて来るのだ。

殊に女を旨く扱うことを修行しなくては行けない。

女と云う奴はここが痛い、かしこが苦しいのと、

いろいろな言葉の絶える時はない。

それがただ一箇所から直すことが出来るのだ。

そこで君がかなり真面目に遣つて行くと、

女どもはみんな君の手の裏にまるめられてしまう。

なんでも学位か何かがあつて、世間のいろいろな技術より

君の技術が優れていると信ぜさせるのが第一だ。

さてお客になつて遣つて来たら、人の何年も掛かつて

障られない ところどころ 所々を、初対面の印に しるし いじつて遣る。

脈なんぞを旨く取るのだね。

そして細い腰が、どの位堅く締めてあるかと云うことを、

熱心らしい、狡猾めつきそうな目附をして、

2025

2030

2035

探つて見て遣るのだね。

学生

そう云うお話なら、何をどうすると云うことが分かつて結構です。

メフィストフェレス

兎に角君に教えるがね。一切の理論は灰いろで、

緑なのは黄金<sup>こがね</sup>なす生活の木だ。

学生

正直に申しますが、わたくしはどうも夢を見ているようです。

2040

また改めて先生のお説の極深い処を伺いに

参りましたも宜しゅうございましたか。

メフィストフェレス

なんでもわしに出来る事なら喜んでして上げる。

学生

恐れ入りますが、お暇乞をいたすには

この記念帖にお書<sup>かき</sup>入<sup>いれ</sup>を願わなくてはなりません。

2045

どうぞ先生の御眷顧ごけんこを蒙もらりましたお印しるしを。

メフィストフェレス

お易い事で。

（書きて渡す。）

学生（読む。）

エリチス・シイクト・デウス・スチエンテス・ボヌム・エツト・マルム

（爾等知善与悪。則応如神。）

（恭しく帖を閉ぢて退場。）

メフィストフェレス

その古語の通とおにしろ。己の姪の蛇の云う通とおにしろ。

一度は貴様も自分が神のようなのがこわくなるだろう。

ファウスト登場。

ファウスト

さあ、どこへ行くのだ。

メフィストフェレス

お好きな所へ行きましょう。<sup>すき</sup>

先ず御一しよに小天地を見て、それから大天地を見ます。

まあ、一通の修行を遣<sup>とおり</sup>つて御覧なさい。

なかなか面白くて有益ですよ。

ファウスト

しかしこの長い髯の看板どおりに、

気軽な世間の渡<sup>わたり</sup>様は己には出来ない。

所詮遣つて見ても旨くは行くまいて。

己には世間に調子を合せると云うことが出来たことがない。

人の前に出ると、自分が小さく思われてならない。

己は間が悪がつてばかりいるだろうて。

メフィストフェレス

そんな事はどうかになりますよ。

万事わたしにお任せなさると、直<sup>すぐ</sup>に調子が分ります。

ファウスト

そこでどうしてこの家を出て行くのだ。

馬や車や供<sup>とも</sup>なんぞはどこにある。

メフィストフェレス

それはついこの外套を払げれば好<sup>い</sup>い。

これに乗って空を飛んで行くのです。

この大胆な門出には

大きな荷物だけは御免蒙ります。

わたしが少しばかりの瓦斯<sup>ガス</sup>を製造しますと、

そいつが造做なく二人を地から捲き上げてくれます。

そこで荷が軽<sup>のほ</sup>いだけ早く升れる。

新生涯の序開だ。ちよつとおよろこびを申します。

ライブチヒなるアウエルバハ<sup>あなぐら</sup>の窖

2065

2070



面白げなる連中の酒宴

フロツシュ

おい。誰も飲んだり、笑ったりせんか。

陰気な面<sup>つら</sup>をしていると、僕が承知しないぞ。

いつでも好く燃えるくせに、

きようはなぜ湿った藁<sup>わら</sup>のようになっているのだ。

ブランデル

それは君のせいだ、君がなんにも提供しないからだ。

いつもの馬鹿げた事か、下卑た事を遣れば好い。

フロツシュ（ブランデルの頭の上に一杯の酒を澆<sup>そそ</sup>ぐ。）

そんならこれでどっちも済まそう。

ブランデル

豕<sup>ぶた</sup>に倍した所行だ。

フロツシュ

君が下卑た事を遣れと云ったじゃないか。

ジイベル

誰でも喧嘩をする奴は、戸の外へ出て行け。

胸襟を開いてルンダ・ルンダでも歌わんか。飲め、騒げ。

さあ、遣れ遣れ。ホルラア。ホオ。

アルトマイエル

溜らない。参った参った。

誰か綿があるならくれえ。あいつのお蔭で聾になる。

ジイベル

馬鹿言え。天井が反響をする位でなくては、

バツソオの根本的威力は発揮せられないのだ。

フロツシュ

賛成々々。苦情を言う奴は逐い出してしまえ。

アア。タラ。ララ。ダア。

アルトマイエル

アア。タラ。ララ。ダア。

フロツシユ

さあ、吭のどの調子は合つた。

(歌ふ。)

愛すべき、神聖なるロオマ帝国よ。

いかにして猶なほ纔ずかに維持せらるゝぞ。

ブランデル

厭いやな歌だなあ。いやはや。政治的の歌と来ている。

下くだらない歌だ。ロオマ帝国がどうなろうと構わない。

難ありがた有い身の上だと、君方は毎朝神に謝するが好いい。

僕なんぞは国王でもなけりやあ、宰相でもないのを、

兎に角よほどの利益だと思つてゐる。

しかし我々だつて首領なしではいられない。

さあいつもの法皇を選挙しようじゃないか。

どんな資格が大事だとか、その人を高めるとか云うことは、

君方は知つてゐるなあ。

2090

2095

2100

フロツシユ（歌ふ。）

飛び立てや、鶯。

恋人に言伝てよ、百千度。

ジイベル

恋人に言<sup>ことづて</sup>伝なんかいらん。そんな事は聞きたくない。

フロツシユ

恋人に言伝をする。キスをする。君のお世話にはならない。

（歌ふ。）

門の戸開<sup>あ</sup>けよ。静けき夜はに。

門の戸開<sup>あ</sup>けよ。風流男寝<sup>みやびおいね</sup>ず。

門の戸させ。朝まだきに。

ジイベル

ふん。沢山歌うが好<sup>い</sup>い。あんな女を褒めるが好<sup>い</sup>い。

今に僕の笑つて遣る時が来る。

僕を騙<sup>と</sup>した通<sup>とおり</sup>に、今に君を騙すのだ。

あいつの色には地の精か何かがなつて、  
夜の四辻でふぎけるが好い。

そこへブロッケンの山から駆けて帰る、年の寄つた山羊やぎの牡おすが  
通り掛かつて、あいつに今晚はと挨拶すると丁度好い。

正真正銘の血や肉を持つている立派な男は、

あいつの相手には惜しいのだ。

あいつに言伝なんぞをすることがあるものか。

窓に石でも打ぶつ附けて遣るが好い。

ブランドル（卓の上を打つ。）

東西東西。僕の言うことを聞き給え。

僕が附つき合あいを心得ていることには、諸君同意だろう。

ここに女に迷つた人達があります。

その人達に今晚の告別に、身分相応の忠告を

僕がして遣ろうと思います。

東西。最新の調子の歌だぞ。

合唱の所をしつかり頼むぞ。

(歌ふ。)

2125

牡鼠が穴倉に巢食つて、

餌は脂えさあぶらにバタばかり。

ルテル先生見たように

でっぷり太つてしまった。

そいつにおさんが毒を飼った。

鼠は世間が狭せもうなった。

胸に恋でもあるように。

合唱者(謹呼かんこする如く。)

胸に恋でもあるように。

ブランデル

そこらを廻つて飛び出して、

どのどぶからも水を飲んだ。

かじる、引つ掻く、家いえ中じゆうを。

2135

2130

どんなに荒れても駄目だった。

苦しまぎれに飛び上る。

とうとう程なく荒れ止んだ。

胸に恋でもあるように。

合唱者

胸に恋でもあるように。

ブランドル

昼の日なかによろよと

台所まで駆けて出て、

へつつい  
竈の隅に打つ附かり、

びくつき、倒れて虫の息。

おさんは見附けて嘖き出した。

きき  
お聞よ、笛の吹きじまい。

胸に恋でもあるように。

合唱者

2140

2145

胸に恋でもあるように。

ジイベル

凡俗どものあの面白がりようはどうだ。

可哀そうに。鼠に毒を食わせる位が

丁度好<sup>いはたらき</sup>い働<sup>はたらき</sup>だろう。

ブランデル

君はひどく鼠が鼠<sup>ひいき</sup>肩<sup>ひいき</sup>だね。

アルトマイエル

太っ腹の禿頭奴。

運が悪くて気が折れて、お情深くおなり遊ばした。

病み腫れた鼠の姿が

丁度先生そっくりだ。

ファウスト、メフィストフェレス登場。

メフィストフェレス

極面白がっている連中を

2150

2155



何より先にお目<sup>さき</sup>に掛けよう。これを御覧になると、

世間がどの位気楽に渡れると云うことがお分かりになる。

2160

この連中にはどの日も同じ祭日です。

小才を利かせて、大満足をして、

尻尾<sup>しっぽ</sup>を※<sup>くわ</sup>えてくるくる廻る小猫のように、

てんでに狭い間<sup>あいだ</sup>を踊っています。

※<sup>かけ</sup>が借りていられる間は、

2165

頭痛でもする日の外は、

心配なしに楽しんでます。

ブランデル

そこに来た奴等の様子を見給え。

旅から来た奴等だと云うことがすぐ分かる。

まだ著いてから一時間も立つまい。

2170

フロツシュ

なるほど、君の云う通だ。僕はライブチヒに謳歌する。

小パリイと云うだけあつて、ここにいると品が好くなる。

ジイベル

君はあの旅人どもを何者だと思ふ。

フロツシュ

僕が行つて来るから見てい給え。一杯飲ませて、

あいつ等の鼻の穴から蛆<sup>うじ</sup>を引き出すのは、

子供の齒を抜くより優しいのだ。

なんでも好い家柄の奴には違<sup>ちが</sup>ひない。

高慢げで、そして物事に満足しない様子だから。

ブランドル

なに。僕は賭をしよう。あいつ等は山師だよ。

アルトマイエル

そうかも知れないなあ。

フロツシュ

氣を附けて見ていろ。探<sup>さぐり</sup>を入れて遣るから。

メフィストフェレス（ファウストに。）

悪魔はあいつ等には分かりません。

うぬが領髪えりがみを攫つかまれていても分からないのです。

ファウスト

皆さん、今晩は。

ジイベル

今晩は。

（メフィストフェレスを横より覗き、小声にて。）

おや、あいつは片々の脚が短いようだぜ。

メフィストフェレス

どうでしょう。そちらへ割り込んでもお邪魔ではないでしょうか。

どうせ旨い酒なんぞはなさそうですから、

面白いお話でも代かわりに伺いたいのですが。

アルトマイエル

君達は大ぶ口が奢っていると見えますね。

フロツシュ

君達はお方リツパハの駅しゆくを遅く立つたのだろう。

あの駅のハンス君と一しよに夕飯を食ってから立つたのじゃないか。

2190

メフィストフェレス

生憎きようは逢わずに通つて来ましたよ。

この前の度にわたし共が逢つて話した時、

あなた方の事をいろいろ噂をしましてね、

どなたにも宜しく申してくれと云いましたよ。

(メフィストフェレスはこの詞ことばと共にフロツシュに会釈す。)

アルトマイエル (小声にて。)

一本参つたな。向うが旨く遣りおつた。

ジイベル

食えない奴だ。

2195

フロツシュ

まあ、黙つて見ている。今に遣つ附けるから。

メフィストフェレス

先刻大ぶお稽古の詰んだ声で

合唱をしていられたようでしたね。

ここでお歌いになったら、

あの円天井から旨く反響することでしょう。

フロツシュ

君達は音楽家でもあるのかね。

メフィストフェレス

どういたしまして。下手の横好よこずきです。

アルトマイエル

何か一つ歌い給え。

メフィストフェレス

のぞみ  
お望なら幾らでも歌います。

ジイベル

極新しいのでなくちゃあいけない。

## メフィストフェレス

わたしどもは丁度スパニアから帰ったところです。

2205

あそこは酒と歌を本場に行っている美しい国ですからね。

（歌ふ。）

昔昔王がいた。

大きな蚤<sup>のみ</sup>を持っていた。

フロツシュ

聞いたか。蚤だによ。諸君分かったかい。

蚤と来ちゃあ、僕なんぞは随分清潔なお客だと思う。

2210

メフィストフェレス（歌ふ。）

昔昔王がいた。

大きな蚤を持っていた。

自分の生ませた子のように

可哀がって飼っていた。

ある時服屋を呼んで来た。

2215

服屋が早速遣つて来た。

「この若殿の召すような

上衣うわぎとずぼんの寸を取れ。」

ブランデル

服屋に好くそう云わなくちやいけないぜ。

寸尺を間違えないようにして、

笠の台が惜しけりやあ、

ずぼんに襷ひだの出来ないようにするのだ。

メフィストフェレス

天鵝絨じたて為立、絹仕立、

仕立おろし卸を著こなした。

上衣にや紐が附いている。

十字章さえ下げである。

すぐ大臣を言い附かる。

大きな勲章をぶら下げる。

兄弟までも宮中で

立派なお役にあり附いた。

2230

文官武官貴夫人が

参内すれば責められる。

お后<sup>きさき</sup>さまでも宮女でも

ちくちく螫<sup>さ</sup>される、かじられる。

押さえてぶつりと潰したり、

搔いたりしては相成らぬ。

2235

己達ならば蚤なぞが

ちよぴりと螫<sup>さ</sup>せばすぐ潰す。

合唱者（歓呼する如く。）

己達ならば蚤なぞが

ちよぴりと螫<sup>さ</sup>せばすぐ潰す。

2240

フロツシュ



旨い旨い。こいつは好かった。

ジイベル

蚤なんぞはそんな風に遣つ附けべしだ。

ブランデル

指を伸ばして旨くつままなくちやいかん。

アルトマイエル

自由万歳だ。酒万歳だ。

メフィストフェレス

わたくしも自由の光榮のために一杯飲みたいのですが、それにつけても少し酒が好ければ好いと思ひますよ。

ジイベル

そんな事は二度とは聞きたくないものだ。

メフィストフェレス

ここの主人が小言を言わない事なら、わたくし共の酒蔵にあるのを、何か一つ

あなた方に献上したいのですが。

2250

ジイベル

さあ、さあ、遠慮なしに出し給え。小言は僕が引き受ける。

フロツシュ

旨い奴を一杯飲ませてくれれば、僕は感謝するね。

ことわって置くが、あんまりぼつちりではいけない。

僕に利酒をさせようと云うには、

口へたつぷり一ぱい入れてくれなくちやあ出来ない。

2255

アルトマイエル（小声にて。）

なんでもあいつ等はライン地方の奴だぜ。僕の目利<sup>めきき</sup>では。

メフィストフェレス

ちよいと錐を持って来させて下さい。

ブランデル

錐をなんにするのだね。

まさかその戸の外まで樽が来ているわけでもあるまい。

アルトマイエル

それ、あそこの背後<sup>うしろ</sup>に亭主が道具箱を置いている。

メフィストフェレス

(錐を手に取り、フロツシュに。)

あなたの飲みたい酒を伺いましょう。

フロツシュ

聞いてどうしようと云うのだね。そんなに色々あるのかね。

メフィストフェレス

どなたにもお望<sup>のぞみ</sup>の酒を献じます。

アルトマイエル (フロツシュに。)

ははあ。君はもう口なめずりを始めたな。

フロツシュ

宜しい。僕が所望して好いなら、ラインの葡萄酒にしよう。

なんでも本国産が一番の御馳走だ。

メフィストフェレス

（フロツシユの坐せる辺の卓の縁に、錐にて穴を揉みつゝ。）

少し蠟を取り寄せて下さい。すぐに栓をしなくちやあ。

アルトマイエル

ははあ。手品だね。

メフィストフェレス（ブランデルに。）

そこであなたは。

ブランデル

僕はシャンパンにしよう。

好く泡の立つ奴でなくてはいけない。

（メフィストフェレス錐を揉む。一人蠟の栓を作りて塞ぐ。）

どうも外国産の物を絶待に避けるわけにはいかんて。

好い物が遠国に出来ることがあるからなあ。

本当のドイツ人はフランス人は好かないが、

フランスの酒なら喜んで飲むね。

ジイベル

(メフィストフェレスの坐せる辺に近づきつゝ。)

正直を言えば僕は酸っぱい酒は嫌だ。<sup>きらい</sup>

僕には本物の甘い奴を一杯くれ給え。

メフィストフェレス (錐を揉む。)

そんならあなたの杯にはすぐトカイ酒を注がせます。

アルトマイエル

ねえ、君達、僕の方を真つ直に見て返事をし給え。

君達は僕なんぞを騙すのに違ない。<sup>ちがひ</sup>

メフィストフェレス

飛んだ事です。あなた方のような立派なお客に

そんな事をするのは、少し冒険過ぎますからね。

お早く願います。どうぞ御遠慮なく仰やい。

どんな酒を献じましょう。

アルトマイエル

なんでも宜しい。うるさく問わないで下さい。

メフィストフェレス

(穴を悉く揉み<sup>ことごと</sup>畢り、栓をなしたる後、怪しげなる身振にて。)

「葡萄は葡萄の蔓になる。

角は山羊<sup>やぎ</sup>の額に生える。

酒は水で、葡萄は木だ。

木卓<sup>きづくえ</sup>からも酒は涌く。

自然の奥を窺う一目。

これが奇蹟だ。信仰なされい。」

さあ、皆さん、栓を抜いて召し上がれ。

一同

(栓を抜けば各自の杯に所望の酒涌きて入るゆゑ。)

やあ。これは結構な噴水だ。

メフィストフェレス

兎に角<sup>こぼ</sup>翻さないように願います。

一同

(皆反覆して飲み、さて歌ふやうに。)

愉快だ、愉快だ。人の肉食う夷のよう<sup>にくく えびす</sup>に。

五百の豚<sup>ぶた</sup>の群<sup>よ</sup>の様に。

メフィストフェレス

御覧なさい。自由の民だ。あれが鼓腹の樂だ。

ファウスト

己はそろそろ行きたいがなあ。

メフィストフェレス

いや。これから氣を附けて見ておいでなさい。

盛んに獸性が發揮せられるのですからね。

ジイベル

(手づつなる飲み様をし、酒を床に翻す。<sup>ほのお</sup>燃え立つ。)

助けてくれ。火事だ。助けてくれ。地獄が燃える。

メフィストフェレス (火<sup>かえん</sup>に向ひて唱ふ。)

「鎮まれ。親しき<sup>いちだい</sup>一大。」

(人々に。)

まあ、こん度は一滴の業火ごうかで済みました。

ジイベル

これはなんだ。待て。只では済まんぞ。

全体我々をなんだと思っている。

フロツシュ

もう一遍あんな真似をして見ろ。

アルトマイエル

僕はこつそりあいつ等を追っ払ってしまおうと思うのだが。

ジイベル

おい。その先生。利いた風な。

我々の目を昏くらます積つもりか。

メフィストフェレス

黙れ。酒樽の古手奴。

ジイベル



なに。<sup>ほうき</sup>箒の柄が。

我々に失敬な事を言う積か。<sup>つもり</sup>

ブランドル

待つていろ。拳骨が雨のように降るぞ。

アルトマイエル

(残りたる一つの栓を抜けば、火 面を撲つ。)

やあ。僕は火傷<sup>やけど</sup>をする。

ジイベル

魔法だ。

遣つ附けろ。そいつは無籍者だ。

(皆々小刀の鞘を払ひて、メフィストフェレスに掛かる。)

メフィストフェレス(真面目らしき態度にて。)

「仮現<sup>かげん</sup>の形。<sup>こもつ</sup>虚妄の詞。

心を転じ、境<sup>きよう</sup>を転ず。

「ここにあれ。またかしここにあれ。」

(一同驚きて立ちをり、互に顔を見合す。)

アルトマイエル

ここはどこだ。好い景色だなあ。

フロツシュ

葡萄畑だ。本当か知らん。

ジイベル

それに葡萄に手が届く。

ブランデル

この青い屋根の下に

こんな好い蔓がある。こんな好い葡萄がある。

(ジイベルの鼻を撮<sup>つま</sup>む。外の人々も互に鼻を撮み合ひて、手にく小刀を閃す。)

メフィストフェレス(同上の態度にて。)

「迷惑<sup>とまがら</sup>の輩。目を覆<sup>きん</sup>う巾を去れ。

記念せよ。魔の遊戯の奈何<sup>いかな</sup>を。」

(ファウストと共に退場。人々互に手を放す。)

ジイベル

どうしたのだ。

アルトマイエル

これはどうだ。

フロツシュ

今のは君の鼻だったか。

ブランデル（ジイベルに。）

僕は君のを撮まんでいたのか。

アルトマイエル

なんだかこうぴりつと来て、節々に響いたようだ。

その椅子を借してくれ。僕は倒れそうだから。

フロツシュ

一体どうしたと云うのだろう。

ジイベル

あいつはどこへ行つた。こんど見附けたら、

生かしては置かない積<sup>つも</sup>りだ。

アルトマイエル

あいつが酒樽に騎つて、この店の戸を出て行くのを

僕はこの目で見たよ。

僕は足が鉛にでもなったように重くてならない。

(卓の方へ向く。)

ああ。酒はまだ出るか知らん。

ジイベル

皆<sup>うそ</sup>嘘さ。目を昏ましたのだ。

フロツシュ

僕は実際酒を飲んでいるような気がしたが。

ブランデル

それはそうとあの葡萄はどうしたのだろう。

アルトマイエル

どうだい。これでは不思議と云うものがないとは云われまい。

魔女の厨くりや

（低き竈の火の上に、大いなる鍋掛けあり。その鍋より立ち升のぼる蒸気の中に種々の形象を現ず。尾長猿の牝鍋の傍に蹲うずくまり、鍋の中を掻き廻し、煮え越さぬやうにす。尾長猿の牡と小猿等とはその傍に蹲り、火に当りゐる。天井と四壁とは魔女の用ゐる極めて異様な器械にて裝飾しあり。）

ファウスト、メフィストフェレス登場。

## ファウスト

己は氣違染みた魔法騷さわぎは氣に食わぬ。

この物狂おしい混雑の中で

己の体がなおると、君は受け合うのか。

己に婆あさんの指図を受けさせて、

この腐料理くされりょうりで取った年を三十も

跡へ戻してくれようと云うのか。

これ以上の智慧が君にないなら、己はもう駄目だ。

己の希望の影はもう消えてしまった。

一体自然か哲人かがこれまでに

何か靈藥のようなものを一つ位見出さなかったのか。

メフィストフェレス

いや。あなたはまた理窟を言い出しましたね。

それはあなたを若返らせるには、自然的な方法もあります。

しかし全く別な本に書いてある

奇妙な一章ですよ。

ファウスト

己はそれが知りたい。

メフィストフェレス

宜しい。それは金も医者も

魔法もなしに獲られる方です。

2345

2350

すぐに野らへお出掛<sup>でかけ</sup>なさい。

そして鋤鍬を使い始めるですネ。

それから極狭い範囲の内に、

自己と自己の精神とを閉じ籠めて置くですネ。

食物は交<sup>まじり</sup>のない物を食う。家畜と一しよに

家畜になつて生きる。自分の取<sup>とり</sup>入<sup>いれ</sup>をする畑は、

自分で肥やしをするのを不都合とは思わない。

これなら八十になつても若くていられる

絶好の手段だと云うことを、御信用なさつて宜しい。

#### ファウスト

それは己の慣れぬ事で、手に鋤を取るとまでは、

どうも己は身を落すことが出来ない。

その上狭い範囲の生活も己の柄にない。

#### メフィストフェレス

するとやはり魔女の厄介になるですな。

2355

2360

2365

## ファウスト

しかしなぜ婆あでなくてはならんのか。  
君が自分でその薬を調合したって好いだろう。

## メフィストフェレス

そいつは難<sup>ありがた</sup>有過ぎた暇<sup>ひまつぶし</sup>潰<sup>つぶ</sup>ですて。そんな暇があると、  
魔の橋と云うのがあるが、わたしは橋を千位掛けます。

ああ云う薬は學術ばかりでは出来ない。

忍耐<sup>にんたい</sup>がなくては駄目です。

静かに落ち著いた奴が長の年月骨を折つて、

その間にただ「時」が薬の発酵を強くするのです。

それに調合が複雑で、

中には不思議な物が這入るのです。

無論それも悪魔が授けた方ですが、

悪魔が自身で拵えるわけには行きません。

(獸等を見て。)



御覧なさい。なんと云う可哀らしい奴等でしょう。  
あいつが女中で、あいつが家隸けらいです。

(獸等に。)

お上さんは留守らしいね。

獸等

煙出けむだしから

内を抜け出て

馳走になりに行きました。

メフィストフェレス

いつもどの位の間ぶら附いて帰るのだい。

獸等

わたしどもが手をあぶっている間の留守です。

メフィストフェレス (ファウストに。)

どうです。あのきやしやな畜生どもは。

ファウスト

己の見た物の中で、この位ぶざまな物はないな。

メフィストフェレス

いやいや。今こいつ等と遣るような会話が

わたしは一番好<sup>すき</sup>なのです。

(獸等に。)

おい。咀<sup>のろ</sup>われた人形ども。お前達に聞くのだが、

そのどろどろした物を掻き交ぜているのはなんだい。

獸等

これですか。乞食に施<sup>うす</sup>す稀い粥です。

メフィストフェレス

そんならお客はおお勢だな。

牡猿

(歩み寄り、メフィストフェレスに追<sup>ついしやう</sup>従す。)

どうぞすぐに旨<sup>さい</sup>い采の目を出して、

わたしに儲けさせて、

わたしを金持にして下さい。

随分みじめな身の上です。

これで金さえ持っていると、

も少し智慧も出るのです。

メフィストフェレス

分かつているよ。富籤にでも中<sup>あた</sup>つたら、

猿も為<sup>しあわせ</sup>合<sup>あ</sup>だろうがな。

(この間小猿等大いなる丸<sup>たま</sup>を弄びゐたるが、その丸を転がし出す。)

牡猿

これが世界だ。

上がつたり降りたり、

止<sup>とめど</sup>所なく廻っている。

丸<sup>たま</sup>は硝子の音がする。

こわれるのに造<sup>ぞうき</sup>倣はない。

中<sup>なか</sup>は空<sup>うつろ</sup>洞だ。

あそこは光る。

あそこは猶なほ光る。

丸たまめ奴は生きている。

己の好い子だ。

おもちゃにするな。

そちや死ぬるのだ。

丸は土つちやき焼、

かけらが出来る。

メフィストフェレス

あの篩ふるいはなんにするのだい。

牡猿（篩を取り卸す。）

もしあなたが盗どろぼう坊なら、

これですぐに見あらわします。

（牝猿の所に持ち行き、透かし見さす。）

さあ、篩で透かして見ろ。

もし盜坊が分かってても、

うっかり口で言いつこなしだ。

メフィストフェレス（火に近づきつゝ。）

そんならこの鍋は。

牝牡の猿

馬鹿なお方だ。

鍋一つ御存じない。

釜一つ御存じない。

メフィストフェレス

失敬な畜生だな。

牡猿

このほっす私子をこう持つて、

その腰掛にお掛けなさい。

（メフィストフェレスを椅子に掛けさす。）

ファウスト

(この間大鏡の前に立ちて、半ばそれに歩み近づき、また半ばそれに歩み遠ざかり  
ゐたるが。)

この己の目に見える、あれはなんだ。この魔の鏡に映るのは、  
まあ、なんと云う美しい姿だろう。

2430

愛の神に頼むが、お前の翼の一番早いのを貸して、  
己をあの女のいる境へ遣つてくれい。

己がここに立ち止ま<sup>たと</sup>つていずに、

鏡の傍へ寄つて行くと、

姿は霧を隔てて見るようにぼやけて見える。

2435

女と云うものの一番美しい姿はこれだ。

こうも美しい女の姿が世にあらうか。

この横わった体に

天と云う天の精<sup>せい</sup>を見ずばなるまい。

所詮<sup>ち</sup>地にはこんな物はないのだから。

2440

メフィストフェレス

なんの不思議なものですか。神が六日の間働いて、

最後に自分で喝采したのだから、何か少しは

気の利いたものが出来ていなくてはなりません。

差当りあれをたんのうするまで御覧なさい。

今にあなたにあんな好い子を見附けて上げます。

運が好くてあんなの婿になる奴は

しあわせもの  
為合者ですね。

（ファウストは依然鏡の中の像を見ゐる。メフィストフェレスは椅子の上にて伸のびをし、払子を揮ひつゝ語り続く。）

こここの所一寸王が玉座に著いたと云う形だ。

君主の杖も持っている。頭に冠かんむりがないばかりだ。

獸等

（これまで種々の怪しげなる動作をなしゐたるが、この時大声にて叫び交しつゝ冠一つ持ち来て、メフィストフェレスに捧ぐ。）

お願ですから

2445

2450

この冠を

汗と血とで著けて下さい。

(手づつなる持もてあつかい 扱あつかぎまをして、冠を二つに割り、そのかけらを持ちて跳り廻る

。)

とうとうおしまいだ。

口でしゃべって目では見る。

耳では聞いて歌にする。

ファウスト (鏡に向ひて。)

ああ、どうしよう。己はどうやら気が狂いそうだ。

メフィストフェレス (獣等を指さす。)

もうこうなると己でさえ頭がぐらぐらして来る。

獣等

こつちとらに出来るなら、

こつちとらがして好いいなら、

そんならそれかんがえが考だ。



ファウスト（前の如き態度にて。）

ああ。己の胸は燃えて来た。

どうぞ一しよに早く逃げてくれ。

メフィストフェレス（前の如き態度にて。）

兎に角正直に告白する

詩人だとは認めて遣らなくてはなるまい。

ふ。（この間牝猿の等閑になしゐたる鍋煮え越す。大いなる火かえん燃え立ちて、烟突に向  
ふ。魔女恐ろしき叫声をなし、烟突より火の中を穿うがちて降る。）

魔女

アウ。アウ。アウ。アウ。

咀われた畜生奴。豕奴ぶた。

鍋はほうって置く。上さんには火傷やけどをさせる。

咀われた畜生奴。

（ファウスト、メフィストフェレスの二人を見て。）

（い）には何事がある。

お前達は何者だ。

2470

ここへは何しに来た。

なぜ留守に這い込んだ。

お前達は骨々に

火で焼く痛<sup>いたみ</sup>が見たいのか。

(魔女杓子にて鍋を掻き廻し、ファウスト、メフィストフェレス、獸等<sup>おそ</sup>に<sup>ほのお</sup>を弾き掛く。獸等<sup>おそ</sup>懼れうめく。)

メフィストフェレス

(手に持ちたる杓子を逆にして、柄にてあたりの土器、玻璃器<sup>はりき</sup>を敲<sup>たた</sup>き立つ。)

2475

ぶ  
打ち破れ。打ち破れ。

粥は引つ繰り返れ。

硝子はかけらになれ。

これでも洒落だよ。

くされおんなめ  
腐女奴。

手前の歌に合せる拍子だ。

2480

(魔女の憤り且つ驚きて退くを見つゝ。)

やい。骸骨奴。案山子奴。<sup>かかし</sup>己を見忘れやがったか。

檀那樣、お師匠様を見忘れやがったか。

実は遠慮はいらんのだ。手前も猫の怪物も、腕を出せば、敲き潰して遣るのだぞ。

いつ赤い胴著がこわくなくなつたのだ。

帽子に挿した鳥の羽が見えんか。

己が面<sup>つら</sup>でも隠しているかい。

己に名告<sup>なぐり</sup>をしろと云うのかい。

### 魔女

やあ。檀那。飛んだ御無礼をいたしました。

蹄を隠していらつしやるもんだから。

それに二羽の鴉<sup>からす</sup>はどうなさいました。

### メフィストフェレス

こん度だけは特別で恕<sup>ゆる</sup>して遣る。

それは顔を合せないことが

大ぶ久しくなっているからな。

それに文化と云う奴が世の中を甜め廻して、

悪魔をも只では置かねえのだ。

北国生れのお化はな、もう見る**ばけ**ことが出来ないよ。

それ、角や、尻尾や、爪なんぞは見えまいが。

ただ足は無いと不自由だが、

見せては世間の通**とお**が悪い。

そこでもうよほど前から、若い奴等がするように、

腓腸ふくらはぎの贗物にせものを食つ附けて歩いているのよ。

魔女（踊りつゝ。）

サタンの檀那がおいででは、

わしや嬉しゅうて気が狂う。

メフィストフェレス

こら。そんな名を口に出すと云うことがあるか。

2495

2500

2505

## 魔女

そりやなぜでございます。あの名がなんといたしました。

メフィストフェレス

あれはな、もうお伽話に書かれてから久しゆうなる。  
そのくせ人間のためには好くはならない。

一人の悪魔はいなくとも、悪人はおお勢いるからな。

兎に角これからは己を男爵閣下と云うが好い。

華族のうようよいる中の己も華族の一人なのだ。

まさか己の血筋が怪しいとは云うまい。

それ、己の紋所はこれだ。

(猥褻わいせつなる身振をなす。)

魔女(止所とめどなく笑ふ。)

へ。へ。お前様のお極きまりだ。

やっぱり今でも昔のままの横著者でいらつしやる。

メフィストフェレス(ファウストに。)

どうです。覚えてお置おきなさい。

これが魔女の扱あつかい振ぶりです。

### 魔女

そこであなた方の御用向は。

### メフィストフェレス

実は例の薬をたつぷり一杯貰もらいたいのだ。

だが一番年を食った好い奴でなくてはいけない。

一年増ましに強く利くのだからな。

### 魔女

お易い御用でございます。ここに一ひと瓶びん

わたくしのちよいちよい舐なめるのがございます。

もうちつとも臭くはございません。

これ一杯献じましょう。(小声にて。)

ですが、御承知とおりの通とお、禁まじ厭ないなしにあの方が上がると、

一時間とは生きていられませんよ。

メフィストフェレス

いいや。大事な友達だ。好く利かなくてはならない。

手前の台所の一番好いものが飲せたいのだ。

手前例の圈わをかいて、文句を言つて、

たつぷり一杯上げてくれ。

2530

(魔女怪しげなる動作にて圈をかき、その中に種々の物を排置す。そのうち玻璃器、金属器自ら鳴りて樂を奏し始む。最後に猿等を圈の中に入れ、大いなる書籍を取り出し、一匹の猿を卓にしてそれを載せ、他の猿には炬を乗とらしむ。さてファウストを招きて圈の中に入らしむ。)

ファウスト (メフィストフェレスに。)

君これはどうすると云うのだい。

こんな馬鹿げた真似、氣違染みた為草しぐさ、

無趣味極まる欺瞞まやかは

僕は疾<sup>と</sup>うから知っている。大<sup>だい</sup>嫌<sup>きら</sup>だ。

メフィストフェレス

何を気にするのです。ただ笑わせるまでですよ。

そんなに窮屈に考えなくても好いじやありませんか。

あいつも医者だから、薬が好く利くように、

禁<sup>まし</sup>厭<sup>ない</sup>をして飲ませなくては気が済まないのです。

(ファウストを強ひて圈の中に入らしむ。)

魔女

(大袈裟なるこれ見よかしの表情にて、書の中より朗読し始む。)

「汝<sup>すべ</sup>須<sup>か</sup>らく会<sup>え</sup>すべし。

一より十を作<sup>な</sup>せ。

二は去るに任せよ。

而して徑<sup>ただ</sup>ちに三<sup>ゆ</sup>に之<sup>け</sup>け。

然らば則ち汝は富まむ。

四は喪失せよ。

2535

2540

2545



五と六とより

七と八とを生ぜしめよ。

是の如く魔女は説く。

是においてや成就すべし。

九は則ち一なり。

十は則ち無なり。

之を魔女の九九と謂ふ。」

ファウスト

婆あさん熱に浮かされているのじやあるまいか。

メフィストフェレス

まだなかなかあんな物じやありません。

わたしは好く知っていますが、あの本は皆あんな調子です。

随分あれで暇を潰したこともあります。

なぜと云うと、まるで矛盾した事は

智者にも愚者にも深秘らしく聞えますからね。

あなたに言いますが、学術は新しいようで古い。

原来三と一だの、一と三だのと云つて、

真理の代に妄想かわりを教えるのは

いつの世にもある遺方やりかたです。そんな工合に

誰にも邪魔をせられずに饒舌しゃべつて教えています。

誰が馬鹿に構うものですか。

大抵人間はただ詞ことばばかりを聞せられると、

何かそれに由つて考えられるはずだと思うのです。

魔女（誦し続く。）

「夫れ学術の

崇高なる威力は

全世界に秘せらる。

然れども思量せざる者

贈遺の如くに得べし。

劳苦もちすることを須もちゐず。」

2560

2565

2570

## ファウスト

なんの無意味な事を己達に言つて聞せるのだ。  
もう直すにこの頭が割れそうになつて来る。

己にはなんだか馬鹿が十万人も  
群むれをなしてしゃべっているように思われる。

2575

## メフィストフェレス

もう好いい、好いい。えらい巫子みこさん。

早く藥を持って来て、杯の縁まで

一ぱいに注いでくれ。

己の友達にはあの藥が障る氣遣はない。

2580

この人はこれまでにいろんな藥を飲んで見て、  
大ぶ位の附いている人だから。

(魔女複雑なる作法をなして藥を杯に注ぐ。それをファウスト受けて唇に当つると

き、軽き 燃え立つ。)

構わずにぐいとお飲のみなさい。休まずにぐいと。

すぐに好い心持になります。

悪魔と君だの僕だのと云うあなたが、  
火なんぞをこわがるのですか。

（魔女圏を解く。ファウスト脱出す。）

メフィストフェレス

さあ、すぐに出掛けましょう。じつとしてはいけません。

魔女

もし、あなた、お薬が好く利くようにお祈<sup>いのり</sup>申します。

メフィストフェレス（魔女に。）

何か返礼に己に頼みたい事があるなら、

ワルプルギスの晩に遠慮なく言うが好い。

魔女

それからこの歌の本を上げますから、時々お歌<sup>うたい</sup>なさい。

不思議な利目がございますからね。

メフィストフェレス（ファウストに。）

さあ、わたしが案内しますから、早くおいでなさい。  
薬が内外<sup>うちそと</sup>一面に染みるように、

汗を出さなくてはいけません。

これから高尚な懶惰<sup>らんだ</sup>の価値を分かせて上げる。

今にあなたの体の中で、愛の神が動き出して

折々跳ね廻るのを、面白くお感じになるのだ。

ファウスト

まあ、待ってくれ。一寸今一度あの鏡を見なくては。

あの女の姿があんまり好かつたから。

メフィストフェレス

お廃<sup>よし</sup>なさい。お廃なさい。今にあらゆる女の手本になるのを、正味で御覧に入れますから。

(聞えぬやうに。)

あの薬が這入っているから、

今にどの女でもヘレナに見える。

## 街

ファウスト登場。マルガレエテ通り過ぐ。

ファウスト

もし、美しいお嬢さん。不躰ですが、この肘をあなたにお貸申して、送ってお上<sup>あげ</sup>申しましょう。

マルガレエテ

わたくしはお嬢さんではございません。美しくもございません。送って下さらなくても、ひとりで内へ帰ります。

(振り放して退場。)

ファウスト

途方もない好<sup>い</sup>女だ。

これまであんなのは見たことがない。

あんなに行儀が好くておとなしくて、  
そのくせ少しはつんけんもしている。  
あの赤い唇や頬のかがやきを、  
己は生涯忘れることが出来まい。  
あの伏目になった様子が

2615

己の胸に刻み込まれてしまった。  
それからあの手短に撥ね附けた処が、  
溜まらなく嬉しいのだ。

(メフィストフェレス登場。)  
おい。あの女を己の手に入れてくれ。

メフィストフェレス  
どの女ですか。

2620

ファウスト  
今通って行つた奴だ。  
メフィストフェレス

あれですか。あれは今坊主の所から帰るのです。  
懺悔<sup>ざんげ</sup>して罪の免除を受けて来たのです。

わたしは坊主の椅子の傍を忍んで通ったが、  
なんにも持たずに懺悔に行った、

ひどく罪のない娘ですよ。

あんなのはわたしの手に合いませんね。

ファウスト

でも満十四歳にはなっているだろうが。

メフィストフェレス

丸で道楽息子のような口の利きようをしますね。

どの美しい花をも自分の手に入れようとして、

自分の手で摘み取ることの出来ない

恋や情はないはずだと思<sup>たち</sup>う性ですね。

ところがなかなかいつもそうは行きませんよ。

ファウスト

2625

2630



おい。道学先生。

どうぞ道德の掟を己に当て嵌めることだけは免<sup>ゆる</sup>してくれ。

それから君に手短に言つて置くがね。

あの旨そうな若々しい肌に

今宵己の手が触れることが出来なかつたら、

夜なかまで待たずに君とお分<sup>わかれ</sup>にするよ。

メフィストフェレス

しかし出来る事と出来ない事とは考えて下さい。

探偵して機会を捕えるまでに、

少くも十四日は掛かるのです。

ファウスト

己なんぞは七時間遊んでいられると、

あんな物を騙して遣るには、

悪魔の手を借るまでもないがなあ。

メフィストフェレス

2635

2640

もうフランス人のような物の言いようをしますね。

だがお願ですから、気を悪くしないで下さい。

何もすぐに手に入れるのが面白いのではありません。

南の方ほうの国の話に随分あるように、

先ずいろいろな前狂言をして、

あの人形をあっちこっち

捏こね廻したり躡けたりするのが、

却つて手に入れた時より面白いものです。

### ファウスト

そんな面倒をしなくつても、己は直すぐにその氣になれる。

### メフィストフェレス

まあ、洒落や笑じょうだん談は廢よじにして、わたしは度々

言う代に、一度はつきり言つて置きますが、

あの好いい子を手に入れるのは、そう早くは行きませんよ。

一挙して抜くと云う砦ではない。

2645

2650

2655

詭<sup>いつわり</sup>の謀と云う面倒なので我慢しなくては。

ファウスト

そんならあいつの持物でも己の手に入れてくれ。

あいつのいつも腰を掛ける場所へでも連れて行つてくれ。

あいつの胸に触れたことのある中<sup>きれ</sup>でも、

沓<sup>くつたひ</sup>鞆の紐でも好いから、恋の形見に手に入れてくれ。

メフィストフェレス

わたしがあなたの苦<sup>くるしみ</sup>をどうにかして上げる

お手伝をする気だと云うことが、あなたにも分かるように、

手間を取らせずに、きょうのうちに

あなたをあの娘の部屋へ連れて行きます。

ファウスト

そして逢われるのか。手に入れられるのか。

メフィストフェレス

いいえ。

2660

2665

当人は隣の上さんの所へ行っているでしょう。

その隙にあなたがひとりで

未来の樂を思ひ浮べながら、あの娘の肌の香の

籠っている所にいるのを心遣になさるが好い。

ファウスト

そんなら今から行かれるのか。

メフィストフェレス

まだ早過ぎます。

ファウスト

そんなら何かお土産に遣る物を心配して置いてくれ。

メフィストフェレス

直に遣りますか。それはごうぎだ。それなら成功します。

方々の好い所に昔埋めて置いた

宝のあるのを、わたしは知っています。

まあ、少し調べて見なくては。（退場。）

2670

2675

夕

小さき清げなる室。

マルガレエテべんぱつ辮髪を編み結びなどしつゝ。

マルガレエテ

きょうのお方がどなただか知れるなら、

何か代かわりに出しても好いと思うわ。

大そうはきはきしたお方のようだったこと。

きつと好い内かたの方だわ。

わたしお顔を見たら、すぐ分かってしまった。

でなくては、あんな不慮な事はなさらないわ。  
(退場。)

メフィストフェレス、ファウスト登場。

メフィストフェレス

さあ、這入るのです。そつと、構わずに。

ファウスト（暫く黙りゐて。）

どうぞ己をひとりで置いて行つてくれ。

メフィストフェレス（四辺を探るやうに見つゝ。）

なかなかどの娘でもこう綺麗にしているものではないて。（退場。）

ファウスト（あたりを見廻す。）

この神聖な場所を籠めてくれる、

優しい、薄暗い黄昏時よ。たそがれとき 好く来てくれた。

渇して纔かに吸う希望の露に命を繋いでいる、

優しい恋の艱よ。なやみ 己の胸を占めてくれい。

静けさ、秩序ある片附方、物に満足している心持が、

なんとなくこの周囲に浮動しているではないか。

この物足らぬ中になんと云う豊富なことだろう。

この人屋めいた中になんと云う祝福のあることだろう。

（寝台の傍の鞆革なめしがわの椅子に身を倚す。）

この椅子はあれがまだ生れぬ世を、喜につけ悲につけ、  
腕<sup>かいな</sup>を拡げて迎え容れた椅子であらう。

2695

己に掛けされてくれ。家の長老の座のこの椅子に、  
幾度か取り巻く子等の群がぶら下がったことであらう。  
事に依つたら、あの子がまだふくらんだ頬をしていた時、  
神聖なクリストの恩を謝して、この椅子に靠<sup>よ</sup>っている  
家の長老の萎びた手に、敬虔なキスをしたかも知れぬ。  
ああ。好<sup>い</sup>い子よ。毎日お前に母のような指図をして、

2700

この卓の上に巾<sup>きん</sup>を綺麗にひろげさせ、

足に踏む砂をさえ美しく波立つようにさせる、

その饒<sup>ゆた</sup>けさと整<sup>ととの</sup>いの精神が、

2705

身の辺に戦<sup>そよ</sup>いでいるのを己は感ずる。

まあ、なんと云う可哀い手だろう。神々の手のような。

お前のお蔭でこの小屋が天堂になるのだ。

そしてここは。

（手にて寝台の帷の一ひらを拵ぐ。）

まあ、なんと云うぞつとする嬉しさが襲うだろう。

己はたつぷり何時間もここに立ちもおつていたい。

自然よ。お前はここで軽らかな夢の中に、

ただ一度しか生れぬ天使を育てたのだ。

優しい胸に温い生命の満ちている

穉子<sup>おさなご</sup>がここにいたのだ。

物を織り成す、神聖な、清浄な力で、

あの神々しい<sup>こうごう</sup>姿<sup>すがた</sup>貌<sup>かたち</sup>がここで発展したのだ。

そこで貴様はどうだ。何がここへ連れて来たか。

己は心の底から感動させられてしまう。

貴様はここで何をしようと思う。なぜそう胸が苦しゅうなる。

吝<sup>けち</sup>なファウスト奴。貴様は見違えた奴になったなあ。

2710

2715

2720



禁厭まじないの靄もやが己をここで包んでいるだろうか。

慕直まぐじきに受用しようと云う促うながしが己を駆つて来たのに、

恋の夢に己は解けて流れるように感ずるではないか。

空気あつの圧あつの変るまに己は弄ばれて変るのか。

もしこの刹那にあれがここへ這入つて来たら、

己の無作法はどんなにか罪なわれるだろう。

大きなのろま男奴。なんと云う小さくなりようだ。

大方おおかたあれが足の前に蕩とろけた様になつて俯さるだろう。

メフィストフェレス登場。

メフィストフェレス

早くおしなさい。娘が下を遣つて来ます。

ファウスト

行こう、行こう。己はもうここへは来ない。

メフィストフェレス

ここにある所から持つて来た、

一寸目方のある箱がありますがな。

兎も角もこれをその箆<sup>たんす</sup>筒に入れてお置きなさい。

あの娘が見て気が遠くなる程欲しがることは受<sup>うけあい</sup>合です。

あいつの体のいろんな物があなたのおもちゃになるように、

わたしがこの箱にいろんなおもちゃを入れて置きました。

相手の子供は子供でもこっちの細工は細工ですから。

ファウスト

さればさ。そんな事をしたものだろうか。

メフィストフェレス

それに文句がありますか。

それともこの品物をあなたが持つていなさる積<sup>つもり</sup>ですか。

そんならあなたも色気なんぞを出して

結構な暇を潰<sup>よし</sup>すことをお廃<sup>よし</sup>になり、

わたしにもこれから先の骨折<sup>さき</sup>を免じてお貰<sup>さ</sup>申したい。

2735

2740

まさかあなたは吝けちなわけではありませんまいね。

あの可哀らしい小娘を

あなたの胸のお望のぞみどおりに靡なびかせようとしている

わたしに、頭を搔かせたり、手を摩さらせたりするのですか。

（小箱を箆へら筒に入れ、鑰じょうを卸す。）

さあ、早く逃げましょう。

なんです、その顔は。

今から講堂へでも出て行こうと云うのですか。

形而下学と形而上学とがさながら現われて来て、

灰色の顔をしてあなたの前にでも立っていると云うのですか。

さあ、逃げましょう。（退場。）

マルガレエテ燈とを乗のりて登場。

マルガレエテ

なんだかここは鬱陶ふさふさしくて、むつとするようなこと。

（窓を開く。）

そのくせ外そとはそんなに暑くもないのに。

2755

わたしなんだか分からないが、変な心持がするわ。

早く母かあさんがお内へお帰かえりだと好い。

なんだかこう 体からだ中じゆうがぞくぞくしてならない。

まあ、わたしはなんと云う馬鹿げた、臆病な女だろう。

(著物を脱ぎつゝ歌ひ始む。)

「昔ツウレに王ありき。

2760

盟ちかめえ渝えせぬ君にとて、

妹いもは黄金こがねの杯を

遺してひとりみまかりぬ。

こよなき宝の杯を

乾ほしけり宴うたげの度毎に。

2765

この杯ゆ飲む酒は

涙をさそふ酒なりき。

死なん日近くなりし時

国の<sup>あがた</sup>県の数々を

世<sup>よつぎ</sup>嗣の君に譲りしに、

杯のみは<sup>と</sup>留め置きぬ。

2770

海に臨める城<sup>き</sup>の上に

王は宴を催しつ。

壮<sup>ますらお</sup>士あまた宮<sup>みやぬち</sup>内に、

御座<sup>おまし</sup>の下に集ひけり。

これを限<sup>かぎり</sup>の命の火

盛れる杯飲み干して、

その杯を立ちながら

海にぞ王は投げてける。

2775

落ちて傾き、沈み行く

杯を見てうつむきぬ。

王は宴の果てゝより

飲まずなりにき零だに。」

（著物を納めんと、箆筒を開き、小箱を見る。）

おや。どうしてこんな美しい箱が這入っているのだろう。

わたし錠は慥かに卸して置いたのに。

本当に不思議なこと。何が入れてあるのだろう。

誰か母あ様にお金を借りに来て

質に入れて置いたのかしら。

おや。ここに鍵が紐で縛り附けてあるわ。

わたし開けて見ようや。

まあ、これはなんだろう。大した物だわ。こんな物は

わたし生れてからついぞ見たことがないわ。

2780

2785

2790

装飾品だわ。どんな貴婦人がどんな宴会へでも  
附けて行かれるだろうと思うわ。

わたしにでも似合うかしら。

一体誰のだろう。

（装飾品を身に付けて鏡に向ふ。）

この耳輪だけでもわたしのだと好い。

別の顔のように美しく見えるわ。

ほんとに若くても綺麗でもなんにもなりやしない。

それだけでも好いには好いのだけれど、

人もそれだけにしきや思つてはくれない。

褒めるにでも気の毒がりながら褒めるのなもの。

みんなに附いて来られるのも、

ちやほやして貰われるのも、お金次第だわ。

わたしなんぞのように貧乏では為方しかたがないわ。

## 散歩

ファウスト物を思ひつゝあちこち歩みある。そこへメフィストフェレス来掛る。

メフィストフェレス

ええ。食っただけの肘鉄砲とでも云おうか。地獄の

2805

あらゆる景物とでも云おうか。これより胸の悪い事はない。

ファウスト

どうしたのだ。腹でもひどく痛いのかい。

己は生れてからそんな顔をしている奴を見たことがない。

メフィストフェレス

わたしはもし自分が悪魔でなかったら、

すぐに悪魔にさらって行つて貰いたい位です。

ファウスト

2810



頭の中で何かが居いどころがわり所変へでもしたのかい。

気違のように跳ね廻るのは君の柄にはあるが。

### メフィストフェレス

まあ、思っても見て下さい。娘に遣ろうと思つて搜した、あの装飾品は坊主がふんだくつて行きました。

お袋があれを見附けるや否や、

なんだか気味が悪くなつたのですね。

一体あの女はいやに鼻の利く奴で、

いつも讚美歌集を嗅いでいたり、

道具は一々鼻を当てて、これは神聖な物だ、

これは世間の物だと嗅ぎ分けたりするのです。

そこであの飾かざりにあまり祝福なんぞが

附たしいていないのを、慥たしかに嗅ぎ出したのです。

お袋はこう云いました。「お前、筋の悪い品物は

持つていても気が詰まる。苦勞になつて血まで耗へる。

これは聖母様にお上げ申そうね。

2825

そうすると天の蜜を下さるから」と云いました。  
すると娘は口を歪ゆがめてこう思つたです。

「まあ、貰つた馬は何とやらと云うことがある。

それに誰が神様に背くかと云うと、

あれを親切にここへ持つて来た人ではあるまい。」

2830

そこでお袋が坊主を呼んで来る。

坊主は話を聞か聞かぬに、

もう貨物しろものに見とれている。

その言草いいぐさが好い。「それは御殊勝な事でござります。

欲しい物をお捐すてになるだけ、それだけ御利益があります。

2835

お寺の胃の腑は大丈夫でござります。

これまで国を幾つも召し上がっても、

ついで食傷はなさりませぬ。

筋の悪い品物を召し上がって消化なさるのは、

お前様方にわしが言うが、お寺ばかりだ。」

ファウスト

それは天下通用の遣方だ。

猶太人<sup>ユダヤ</sup>も王様にも出来る。

メフィストフェレス

坊主は腕輪や指輪や鎖なんぞを、

三文もしない物のように引つ手繰<sup>く</sup>つて、

胡桃<sup>くるみ</sup>を籠<sup>かご</sup>に一つ貰<sup>もら</sup>った程の

礼も言わずに、

いずれ報<sup>むくい</sup>は天からあると約束しました。

女どもはそれを難<sup>ありがた</sup>有<sup>あ</sup>がったのですね。

ファウスト

そこでマルガレエテは。

メフィストフェレス

気が落ち著かぬと云う風で、

何がしたいか、どうしたいか、自分で自分が分からずに、  
よるひる夜昼貰った宝の事を、それよりもくれた人の事を、  
思い続けているのです。

ファウスト

あの娘がそう胸を痛めては可哀そうだ。  
君すぐに外の宝を捜し出して遣り給え。  
初のはそう大した物でもなかったから。

メフィストフェレス

そうでしょう。檀那様が見れば万事子供の戯だ。

ファウスト

そしてさっさと己の考通にして貰いたい。  
先ず君がああ隣の女を手に入れなくちやいかん。  
悪魔が粥のようにべたべたしては困る。  
外の装飾品を急いで持って来給え。

メフィストフェレス

2850

2855

2860

へえへえ。お易い御用でございます。

(ファウスト退場。)

女にのろい男と云う奴は、その女のためになら、

月でも日でも星を皆でも、

暇潰しに花火のように打ち上げでもします。(退場。)

## 隣の女の家

マルテ一人登場しゐる。

マルテ

まあ、内の檀那さんに罰が中<sup>あた</sup>らねば<sup>いい</sup>が。

わたしを随分ひどい目にお逢<sup>あ</sup>わせなされた。

藁<sup>わら</sup>の上へひとり残して置いて、

自分は世間へ飛び出しておしまいなされた。

不断腹をお立たてになるようなことをせず、  
どんなにも大切あけにしてお上申つもりす積つでいるのに。

(泣く。)

事によつたらもうお亡くなりなされたかも知れぬ。  
鶴亀々々。せめて死亡証でも手に入つたら。

マルガレエテ登場。

マルガレエテ

おばさん。

マルテ

グレエテさんかえ。なんだい。

マルガレエテ

わたしびっくりして膝を衝ついてしまいそうだったの。

またこんな箱がわたしの箆たんすに

あったのですもの。箱は黒檀くわんでしょう。

中に這入はっているものと云つたら、

こないだのより、もつと、もつと立派なの。

マルテ

そうかい。それはおつ母さんに言わないが好いよ。

また懺悔ざんげの時に持つて行くといけないから。

マルガレエテ

まあ、見て御覧なさいよ。それ。

マルテ（マルガレエテを裝飾す。）

まあ、お前さんはなんと云う為しあわせ合な子だろう。

マルガレエテ

だって、こうして往来へ出たり、お寺へ行ったりすることが出来ないのだから、詰まらないわねえ。

マルテ

いつだつてわたしの所へ来て、

そつと体に附けて見るが好いよ。

そして暫くの間、鏡の前を往つたり来たりして御覧。

わたしが一しよに楽しんであげるからね。

その中にはお祭かなんかで、好い折が出来ようから、目立たないようにぼつぼつ体に附けて出るさ。

最初は鎖を掛けて出る。それから耳に真珠を嵌める。

おつ母さん<sup>か</sup>も気は附くまいが、また何とか云い様もあろうよ。

マルガレエテ

ねえ、お婆さん。この箱を持って来たのは誰でしょう。

なんだか気味が悪いじやありませんか。

(戸を敲く音。)

おや。大変だわ。おつ母さんじゃないでしょうか。

マルテ(窓掛を透し視る。)

知らない男の方だよ。お這入下さいまし。

メフィストフェレス登場。

メフィストフェレス

失礼ですが、ずんずん這入ってまいりました。

2890

2895



どうぞ御免なさって下さいまし。

(マルガレエテに敬意を表してしりぞ卻く。)

マルテ・シユウエルトラインさんにお目に掛かりたいのですが。

マルテ

マルテはわたくしでございます。なんの御用で。

メフィストフェレス(小声にてマルテに。)

お前さんですか。こうしてお目に掛つて置けば好い。

お客様はどちらの令嬢ですか。

どうも飛んだ失礼をしましたね。

いずれ午過ぎにでもまた来ましょう。

マルテ(声高く。)

あら、まあ。グレエテさん。お聞きこよ。

この方がお前の事をどこかの令嬢だろうとさ。

マルガレエテ

まあ。わたし貧乏人の娘なのに、

このお方がそんな事にお思<sup>おも</sup>なさつては困るわ。  
飾は皆わたしの物でもないのに。

メフィストフェレス

いえ。御装飾品だけを見て云ったものではありません。

御様子と、それにお目が鋭いので。

このままいて宜しければ、こんな難<sup>ありがた</sup>有<sup>ありがた</sup>い事はありません。

マルテ

御用はなんですか。早く伺いたいもので。

メフィストフェレス

さよう。もつとめでたいお知らせだと好いが。

持って来たわたしが怨まれなければ好いと思うのですよ。

御亭主が亡くなりましたよ。お前さんに宜しくと云うことで。

マルテ

おや、まあ。とうとう亡くなりましたの。

可哀そうに。本当に亡くなったのでしょうか。ああ。

2910

2915

マルガレエテ

まあ。おばさんしつかりなさいよ。

メフィストフェレス

まあ、気の毒な最期を聞いて下さい。

マルガレエテ

だからわたし生涯男は持たなくつてよ。

亡くなつた時どんなにか哀しいでしょう。

メフィストフェレス

かなしみ  
悲の隣に喜よろこびがあり、喜の隣に悲があるのです。

マルテ

どうぞ亡くなつた宿がどうなつたかお話はなしなすつて。

メフィストフェレス

あのパズアの聖アントニウスのお傍で、

極難有い場所に

葬つて貰われて、

そこを永遠に冷たい臥所ふしどにしておられますよ。

マルテ

その外には何もおことづかりなすつたことはございませんか。

メフィストフェレス

まだ大したむずかしい事があるですよ。

お前さんに三百度のミサを読ませて貰いたいそうで、それから遺物ゆいもつと云うものは何ありませんでした。

マルテ

まあ。諸国を廻る職人の徒弟でも、笈おいの底に

飾の一つや、変かわりせん錢の一つ位は取って置いて、

縦たとえ餓えても、乞食たどをしても、

それは記念かたみに残すのに。

メフィストフェレス

どうもお前さんには実にお気の毒ですよ。

しかし実際無駄遣をしたわけでもありません。

自分でも悪かったと云つて後悔していました。

そう。それよりも不<sup>ふ</sup>為<sup>し</sup>合<sup>あ</sup>を怨<sup>うら</sup>んでいましたつけ。

マルガレエテ

まあ。人間は不<sup>ふ</sup>為<sup>し</sup>合<sup>あ</sup>のあるものでございますね。

わたくしもその方<sup>かた</sup>のために少しレクウィエムでもお唱<sup>とな</sup>申しましょう。

メフィストフェレス

お見<sup>み</sup>受<sup>う</sup>申<sup>け</sup>す所、あなたはもう直<sup>す</sup>にお嫁入をなさつても

宜<sup>よろ</sup>しそうでございます。愛敬のおありになる方<sup>かた</sup>ですね。

マルガレエテ

あら。まだなかなかそんな事は出来ませんわ。

メフィストフェレス

それは御亭主でなくても、差<sup>さ</sup>当<sup>あた</sup>りよ、好<sup>よ</sup>い方<sup>かた</sup>と

御交際なさるが好<sup>い</sup>い。ただいといい、可<sup>お</sup>哀<sup>も</sup>いと

抱<sup>おも</sup>き合<sup>た</sup>うばかりでも、世の中の主<sup>おも</sup>な楽<sup>たの</sup>の一つです。

マルガレエテ

そんな事はこの土地ではいたさぬ事になっています。

メフィストフェレス

そうなつていても、いなくても、すれば直<sup>すぐ</sup>出来ます。

マルテ

もし。まだお話がございましょうか。

メフィストフェレス

ええ。息を引き取りなさる所に、

わたしは附いていましたが、五味溜よりは少し好い、

腐り掛かった藁の上でした。でも信者として

死なれましたよ。まだ大<sup>つみほろほし</sup>罪滅がせずにあると云つて。

そう云われましたつけ。「己は自分<sup>しん</sup>が心からいやだ。

こんな渡世のお蔭で、女房をああして置いて死ぬるのだから。

ああ。思い出すと溜<sup>ゆる</sup>まらなくなる。

どうぞこの世で己の罪を免<sup>ゆる</sup>してくれれば好いが。」

マルテ（泣きつゝ。）

2950

2955

可哀そうに。わたしはもう疾とづくに免して上げたのに。

メフィストフェレス

「だが神様が御存じだ。己より女房が悪かったのだ。」

マルテ

嘘うそばっかし。そんな事を。死際に嘘を衝つくなんて。

メフィストフェレス

へえ。わたしには余りよくは分らないが、

断末魔の讒うわごと語ことだったかも知れません。

そう云いましたつけ。「己はうっかりぽんとしていたことはなかった。

子供は出来る、パンを稼かせぎ出さなくてはならぬ。

パンも極きよく広い意味のパンだからなあ。

そして落ち著ついて己の分を食うことも出来なんだ。」

マルテ

まあ。あんなにわたしは夜よる昼ひるとなく働いて、

万事親切に世話をして上げたのを忘れてさ。

## メフィストフェレス

いいえ。その事は心<sup>しん</sup>から喜んでいたのですよ。  
そう云いましたつけ。「マルタ島を立つ時は、  
己は女房子供のために、心<sup>しん</sup>からの祈祷をした。

2970

丁度首尾好くスルタンの

宝を積んだトルコの船を

こつちの船が攫<sup>つか</sup>まえた。

2975

骨折甲斐のある為<sup>しごと</sup>事で、

貰うだけの割前は

己も貰った。」

## マルテ

まあ。どうしたでしょう。どこかへ埋めでもしたでしょうか。

## メフィストフェレス

ところがそれを東西南北、どこへ風が飛ばしたやら。

2980

ナポリへ著いて知らぬ町をぶらついているうちに、



綺麗首が銜え込んで、

死ぬる日まであの男の骨に応える、

結構なおもてなしをしたのですね。

マルテ

まあ、ひどい人だこと。孫子の物を盗んだのだよ。

どんなに落ちぶれても、困つても、

浮気は止まなかったのかねえ。

メフィストフェレス

そうですよ。だがその報むくいには死にました。

まあわたしがお前さんなら、

こここの所一年程おとなしく喪に籠つていて、

そのうちそろそろ替の人でも捜すですね。

マルテ

そんな事を仰やっても、先の亭主のような人は、

世間は広いが、めつたに見附かりません。

ほんに可哀い氣前の男でござんした。

疵きずはあんまり旅すきが好で、

よその女やよその酒うつつに現うつつを抜かし、

お負まけに博奕ばくちを打ちました。

メフィストフェレス

なるほど、なるほど。そこで男ほうの方からも、

ざつとその位大目に見ていたとすると、

随分旨い話でしたな。

そんな条件の附く事なら、わたしなんでも

難有くあなたの御亭主になりますなあ。

マルテ

おや。御笑談ばかり仰やいます。

メフィストフェレス（独語。）

おつとどっこい。そろそろこの場を逃げなくては。

本物の悪魔の詞ことば質じちをもこの女は取り兼ねんぞ。

2995

3000

3005

(マルガレエテに。)

ところで、あなたのお胸の御都合は。

マルガレエテ

へえ。なんと仰やいます。

メフィストフェレス(独語。)

ふん。憎い程おぼこだなあ。

(声高く。)

いや。どなたも御機嫌好う。

マルガレエテ

さようなら。

マルテ

あの、ちよつと伺いますが、

宿がいつ、どちらで、どんな風に亡くなつたと云う

書附がありましたらと存じます。

わたくしは何事も極まりの附かないことが嫌で、

出来ます事なら新聞にも書いてお貰<sup>もら</sup>申したいので。

メフィストフェレス

なに、お前さん。証人が二人あれば、

どこでも言分は通ります。

わたしには好<sup>い</sup>い友達が一人いますが、

そいつが一しよになん時でも裁判所へ出て上げます。

そのうち連れて来ましょうよ。

マルテ

そんならどうぞそんな事に。

メフィストフェレス

ええと、このお嬢さんもここにおいでになるのですね。

わたしの友達は好<sup>い</sup>い奴です。世間を広く渡つて来て、

御婦人方に失礼な事はいたしません。

マルガレエテ

あんな事を仰やるのですもの。お恥かしくて。

3015

3020

メフィストフェレス

いえ。王様の前へお出になつてもお恥かしがりなさいますな。

マルテ

そんならあちらの奥庭で、お二人のおいでを  
お待申しておりますよう。

## 街

ファウストとメフィストフェレスと登場。

ファウスト

どうだい。運ぶかい。近いうちにどうかなるかい。

メフィストフェレス

えらい。大ぶ気乗がして来ましたね。

もう程なくグレエテはお手に入ります。

隣のマルテと云う女の所で今晚おひきあわせ引合をします。

取持とりもちや橋はし渡わたしには

持つて来いと云う女ですよ。

ファウスト

旨いな。

メフィストフエレス

所でこちらも物を頼まりましたよ。

ファウスト

それは魚心あれば水心だ。

メフィストフエレス

なに。その女の亡くなった亭主のされこうべ髑髏むくろが、

パズアの難ありがた有ありい墓地に埋めてあると云う、

法律上に有効な証書を書いて遣るだけです。

ファウスト

好いとも。そんならパズアへ行つて来なくては。

メフィストフェレス

サンクタ・シンプリチタスだ。神聖なるおめでたさ加減だ。それに及ぶものですか。知らずに書いて遣るのです。

ファウスト

外に智慧が出ないのなら、その計画は廃案だ。

メフィストフェレス

いやはや。おえらいぞ。そこで君子<sup>くんし</sup>をお出しになる。

一体偽証と云うものをなさるのが、

こん度が始<sup>はじめ</sup>のお積<sup>つもり</sup>ですかい。

これまであなたは仰山らしく、神はどうだ、世界や

その中に動いている物はどうだ、人間やその心の中で

考えている事はどうだと、定義をお下<sup>くだ</sup>しになる。

しかもしやあしやあとして大胆にお下しになる。

好く胸に手を置いて考えて御覧なさいよ。

正直のところ、そんな事をシュウエルトラインと云う男の

死んだ事より確かに知っておいになったのですか。

ファウスト

ソフィスト奴<sup>め</sup>。どこまでも君は謏<sup>うそつき</sup>衝<sup>つ</sup>だなあ。

メフィストフェレス

そのあなたの腹をもつと深く知らなんだら、

恐れ入るでしょうよ。あしたになると済まし込んで、  
心<sup>しん</sup>からお前を愛するなんぞと、

あのグレエテを騙すのでしようが。

ファウスト

それは心から愛しているのだ。

メフィストフェレス

宜しい。

それから何物にも打ち勝つ、ただ一つの熱情だの、  
永遠に渝<sup>かわ</sup>ることのない恋愛だの真実だのと、  
いろいろ並べるのも心からでしょうか。

3050

3055



ファウスト

廃<sup>よ</sup>せ。それは心からだ。己が感じて、

その感じ、その胸の悶<sup>もだえ</sup>を

なんとか名づけようとして、詞<sup>ことば</sup>が見附からないで、

そこで心の及ぶ限、宇宙の間を捜し廻<sup>めぐ</sup>った挙句に、

最上級の詞を攫<sup>つか</sup>まえて、

己の体を焚くような情の火を、

無窮極だ、無辺際だ、永遠だと云つたと云つて、

それが悪魔もどきの謊事かい。

メフィストフェレス

それでもわたしのが本当です。

ファウスト

おい。これだけは覚えていろ。

頼むから、己の吭<sup>のど</sup>を少しいたわつて貰いたい。

誰と議論をする時でも、ただ一言しか言わずにいれば、

3060

3065

それは勝つに極きまっている。

3070

そろそろ行こう。もう己も饒舌しゃべり厭あきた。

君のが本当だとも。己は外に為方しかたがないのだから。

## 園

マルガレエテはファウストの肘に手を掛け、マルテはメフィストフェレスに伴はれて、園内を往反す。

### マルガレエテ

あなたわたくしをおいたわりになって、ばつを合せていらつしやるかと存じますと、お恥かしゆうございますの。

3075

旅をなさるお方のお癖で、詰まらない事をも

お情なさけに我慢してお聞遊ききばすのですわ。

いろいろな目にお逢になつたお方に、詰まらないお話が

お慰なぐさにならないのは、好く分かつていますわ。

ファウスト

あなたが、一目ちよいと見て、一言ちよいと言つて下さると、それが世界のあらゆる知識より面白いのです。

(女の手に接吻す。)

マルガレエテ

あら、我慢してそんな事をなさらないが宜しゅうございますわ。こんな手にキスを遊ばして。こんな見苦しいがさがさした手にそれはいたさなくてはならない為事しごとが沢山ございますの。  
母か様が随分やかましゅうございますから。

(行き過ぐ。)

マルテ

そしてあなたはこれから旅ばかりなさいますの。

メフィストフェレス

ええ。どうも職業と義務とに迫り廻されるので。

土地によつては立つて行くのがつらいのですが、  
居据しかたわることが出来ないから為方しかたがありません。

マルテ

それはお若いうちに、そんなに世界中をあちこちと  
所嫌わずにお歩きになるのも好いでしよう。

でもいつかお年よりがお寄よりになつて、

おれこやもめ

鰥夫おれこやもめのままで墓へ行く道を足を引き摩こつて

おいでになるのは、どなただつておいやでしょうに。

メフィストフェレス

そうです。それが向うに見えるから不気味です。

マルテ

ですから早くそのお積つもりで御思案をなさらなくては。

(行き過ぐ。)

マルガレエテ

だつてお目の前にいなくなれば、お忘わすれなさいますわ。

お世辞を仰やり附けていらつしやるのですもの。

わたくしなんぞより物事のお分かりになるお友達に、

これまで度々お逢あいになりましたでしょう。

ファウスト

おおちちがい  
大違だい

です。物事が分かつていると云うのが、どうかすると

うぬうぬぼぼれ  
自惚うぬ

と鼻の先思案ですよ。

マルガレエテ

ええ。

ファウスト

実に無邪氣と罪のなさだが、自分を知らずに、

自分の神聖な値打を知らずにいるのが不思議です。

一体謙遜だの卑下だのと云うものこそ、博愛な

自然くはいたまものの配くはる賜たまの一番上等なものですのに。

マルガレエテ

本当にあなたがちよいとの間構ままっています

下さいますと、わたくしは生涯お忘<sup>わすれ</sup>申さないのですが。

ファウスト

あなたは一人でおいでの手が多いのでしようね。

マルガレエテ

ええ。わたくし共の所は小さい世帯でございますが、それでもどうにかいたして行かなくてはなりませんの。

女中はいませんでしょう。煮炊やら、お掃除やら、編物やら、<sup>したて</sup>為立物やらいします。朝から晩まで駆けて歩きます。

それは母あ様は何につけても

几帳面でございますから。

本当はそんな儉約をいたさなくても済みますの。

余所よりはよっぽど暮らして行き好うございますの。

父がちよいといたした財産と、町はずれに

庭の附いた小さな家を残してくれましたものですから。

でも此頃は太ふ落著いて暮らす日がございますの。

兄は兵隊に出ますし、  
妹は亡くなりますし。

3120

随分わたくしあの赤さんには困りましたわ。

そのくせあの世話ならもう一度いたしたいと思いますの。  
本当に可哀い赤さんでしたもの。

ファウスト

あなたに似たら、天使でしたでしょう。

マルガレエテ

わたくしが育てたものですから、好く馴染んでいましたの。

3125

お父様<sup>とう</sup>が亡くなってから生れましたでしよう。

母<sup>か</sup>あ様はとても助からないと云われる程

お弱<sup>よわり</sup>になつて休んでいらつしやいましたの。

ですからおひだちになるのもじりじりでございましてね。

ですから赤さんにお乳をお上げなさることなんぞは

3130

思いも寄らなかつたので、

わたくしが一人で牛乳に水を割って

育てましたの。ですからわたくしの子になりましたの。  
抱っこして遣ったり、膝に載つけて遣ったりいたすと、  
嬉しがって、跳ねて、段々大きくなりましたの。

### ファウスト

あなたはきつと人生の最清い幸福を味ったのです。

### マルガレエテ

それでも随分つらい時もございましたわ。

夜になりますと、赤さんの寝台を

わたくしの寝台の傍に置いて、ちよいと動くと

目が醒めるようにいたして置きましたの。

お乳を飲ませたり、抱っこして寝たりしましても、

泣き罷やまないときは、抱いて起きて、

ゆさぶりながら部屋の中を歩きました。

それでも朝は早く起きて、お洗濯物をいたします。



それから市場へまいたり、煮炊をしたりいたします。  
毎日毎日そんな按排あんばいでございましたの。

ですからいつも気が勇んではいませんでしたわ。

その代御飯かわりがおいしくて、夜は好く休まれますのね。

（行き過ぐ。）

マルテ

女は本当にどうして好いか分かりません。

一人が好いと仰やる方は手の附けようがないのですもの。

メフィストフェレス

わたしなんぞを改心させるのは、

お前さんのような方かたの腕次第です。

マルテ

打ち明けて仰やいよ。まだ好人をお見附なさらないの。  
もうどこかの人にお極きめになつてゐるのではありませんか。

メフィストフェレス

諺がありますね。「じま<sup>かまじ</sup>えの竈に実のある女房は  
金<sup>きん</sup>と真珠の値打がある。」

マルテ

どこかでその気におなりになったでしょうと云うのですよ。

メフィストフェレス

ええ。随分方々で丁寧にしてくれましたよ。

マルテ

でも真面目にお気に入ったのはありませんかと云うのですよ。

メフィストフェレス

婦人方に笑談なんか云つては済みませんとも。

マルテ

あら。お分かりにならないのですね。

メフィストフェレス

どうも申しわけがありません。

兎に角あなたが御親切だと云うことは分かっています。

(行き過ぐ。)

ファウスト

わたしだと云うことが、庭へ這入った時

すぐに分かりましたか。

マルガレエテ

わたくしの俯目になったのがお分かりにならなくつて。

ファウスト

そんならこないだお寺からお帰<sup>かえり</sup>なさる時、

御遠慮もしないで、厚かましい事をしたのを、

堪忍して下さるでしょうね。

マルガレエテ

今までついぞない事ですから、びっくりしましたわ。

わたくし悪い評判をせられた事はありませんでしょう。

ですからどこかわたくしの様子に下卑た、不行儀な

処のあるのをお見附<sup>みつけ</sup>なされたかと存じて。

どうにでもなる女だと、

すぐお思おもになつたようでしたもの。

申してしまいますが、その時はあなたが好いお方かただと思

う心持がし始めたのには、気が附きませんでしたの。

でももつとおこつてお上申あげすことの出来なかつたのは、

慥たしかに悔やしいと存じましたわ。

ファウスト

可哀い事を言うね。

マルガレエテ

ちよつと御免なさいまし。

(アステルの花を摘み、弁を一枚一枚むしる。)

ファウスト

どうするの。花束。

マルガレエテ

いいえ。遊事ですの。

ファウスト

え。

マルガレエテ

厭。<sup>いや</sup>お笑あそばすから。<sup>わらい</sup>

(マルガレエテ弁をむしりつつぶやく。)

ファウスト

何を言っているの。

マルガレエテ(中音にて。)

お好。<sup>すき</sup>お嫌。<sup>きらひ</sup>

ファウスト

可哀い顔をしていることね。

マルガレエテ(依然つぶやく。)

お好。お嫌。お好。お嫌。

(最後の弁をむしりて、さも喜ばしげに。)

お好だわ。

ファウスト

好だとも。その花の占うらないを

神々の詞ことばだと思おもい。わたしはきつとお前すを好すいている。

お前分るかい。男に好かれていると云う意味が。

(ファウスト娘の両手を把る。)

マルガレエテ

わたくしなんだか体がぞつとしますわ。

ファウスト

そんなにこわがるのじゃない。このお前を視る目、

お前の手を握る手に、口に言われない事を

言わせておくれ。

わたしは命をお前に遣る。そして

永遠でなくてはならない喜よろこびを感じる。永遠だ。

もしこの心持が消える時が来たら、絶望だ。

いや。消える時は無い。終は無い。

3185

3190

(マルガレエテ手を強く締めて、さて振り放し、走り去る。ファウスト立ち止まりて思案すること暫くにして、跡に附き行く。)

マルテ (登場しつゝ。)

もう日が暮れます。

メフィストフェレス

そうです。わたくし共は行かなくては。

マルテ

も少しお止申<sup>とめ</sup>したいのですが、

何分人気の悪い土地で、

近所のものとする事なす事を見張つてゐるより外、

誰一人自分の用事は

ないかとさえ思われるのでございます。ですからどんなに

気を付けても、兎角彼此申します。

あのお二人は。

メフィストフェレス

あの道を駆けて行きましたよ。

夏の小鳥のように元気な人達だ。

マルテ

あの方のお気に入ったようですね。

メフィストフェレス

娘さんも気があるらしい。世間はそうしたものですよ。

あずまや  
四阿

マルガレエテ飛び込み、扉の背後に躲<sup>かく</sup>れ、右の示指の尖を脣に当て、隙間より外を窺ふ。

マルガレエテ

いらしった。

ファウスト登場。



ファウスト

横着ものだね。わたしを押搦うなんて。

そら攫まえたぞ。（接吻す。）

マルガレエテ

（抱き着き、接吻し返す。）

あなた。心から可哀くてよ。

メフィストフェレス戸を敲く。

ファウスト（足踏す。）

誰だ。

メフィストフェレス

お連です。

ファウスト

畜生。

メフィストフェレス

そろそろお切上きりあげなさらなくては。

マルテ登場。

マルテ

本当に遅くなりますよ。

ファウスト

送って行つてはいけないかい。

マルガレエテ

それこそ母<sup>か</sup>あ様が。さようなら。

ファウスト

行かなくてはならんかなあ。

そんならこれで。

マルテ

御機嫌好う。

マルガレエテ

こん度はお早くね。

(ファウスト、メフィストフェレス退場。)

まあ。ああ云う男の方と云うものは  
いろいろな事にお氣が附くこと。

わたしぼんやりして立っていて伺つて、

何を仰やつても、はいはいと云うきりだわ。

わたし、まあ、なんと云う馬鹿な子だろ。

わたしのどこがお氣に入るのかしら。（退場。）

3215

## 森と洞

ファウスト一人。

ファウスト

崇高なる地の精。お前は己に授けた。己の求めたものを  
皆授けた。<sup>ほのお</sup>の中でお前の顔を

己に向けてくれたのも、徒<sup>いたずらごと</sup>事ではなかった。

美しい自然を領地として己にくれた。

3220

それを感じ、受用する力をくれた。ただ冷かに境に対して驚歎の目を睜<sup>みは</sup>ることを

許してくれたばかりでなく、友達の胸のように自然の深い胸を覗いて見させてくれた。

お前は活動しているものの列<sup>れつ</sup>を、己の前を連れて通って、森や虚空や水に棲む

3225

兄弟どもを己に引き合せてくれた。

それから暴風<sup>あらし</sup>が森をざわつかせ、きしめかして、折れた櫓の太木が隣の梢、

隣の枝に傍杖を食<sup>く</sup>わせて落ち、

3230

その音が鈍く、うつろに丘陵に飢響<sup>こしたま</sup>する時、

お前は己を静かな洞穴に連れ込んで、己に己を自ら省みさせた。その時己の胸の底の

秘密な、深い奇蹟が暴露する。

そして己の目の前に清い月影が己を宥<sup>なだ</sup>めるように

3235

差し升<sup>のぼ</sup>つて来る時、岩の壁から、

湿<sup>くさむら</sup>った草叢<sup>むら</sup>から、前世界の

白<sup>しろ</sup>金<sup>かね</sup>の形等が浮び出て、

己の観念の辛辣な興味を柔らげる。

ああ。人間には一つも全き物の与えられぬことを

3240

己は今感ずる。お前は己を神々に

近く、近くするこの喜<sup>よろこび</sup>を授けると同時に、

己に道<sup>みちづれ</sup>連<sup>づ</sup>れをくれた。それがもう手放されぬ

道連で、そいつが冷刻に、不遠慮に

3245

己を自ら陋<sup>いや</sup>しく思わせ、切角お前のくれた物を、  
嘘<sup>ふ</sup>き掛けたただの一息で、無<sup>む</sup>にするのを忍ばねばならぬ。

そいつが己の胸に、いつかあの鏡の姿を見た時から、

烈しい火を忙しげに吹き起した。

そこで己は欲望から受用へよろめいて行つて、

受用の<sup>なかば</sup>央にまた欲望にあこがれるのだ。

3250

メフィストフェレス登場。

メフィストフェレス

もう今までの生活は此位で沢山でしょう。

そう長引いてはあなたに面白いはずがありませんから。

それは一度はためして見るのも好いのです。

これからはまた何か新しい事を始めなくては。

ファウスト

ふん。己の気分の好いのに、来て己を責めるよりは、

3255

君にだつてもつと沢山用事があるだろうが。

メフィストフェレス

いいえ。御休息のお邪魔はしません。

そんな事をわたしに真面目で言つては困ります。

あなたのような荒々しい、不愛想な、気違染みた

友達は無くて惜しくはありません。

3260

昼間中手一ぱいの用がある。

何をして好いかよいか、  
 廃よして好いか、

いつも顔を見ていても知れないのですから。

### ファウスト

それが己に物を言う、丁度好い調子だろう。己を

退屈させて、お負にそれを難ありがた有がたがらせようと云うのか。

### メフィストフェレス

わたしがいなかったら、あなたのような

この世界の人間はどんな生活をしたのですか。

人間の想像のしどろもどろを

わたしが当分起らぬようにして上げた。

それにわたしがいなかったら、あなたはもう

疾とつくにこの地球にお暇乞とをしていなさる。

なんのためにあなたは木みみずく兎うのように

洞穴や岩の隙間にもぐっているのです。

なぜ陰気な苔や雫の垂る石に附いた餌を

蟾ひきかえる 蜷すす のように啜すすっているのです。

結構な、甘ったるい暇の潰しようだ。

あなたの体からはまだ学者先生が抜けませんね。

ファウスト

うん。こうして人里離れた所に来てみると、

生活の力が養われるが、君には分かるまい。

もしそれが分かっていたら、そんな幸福を己に享けさせまいと、

悪魔根性を出して邪魔をするだろう。

メフィストフェレス

現世以上の快樂ですね。

闇と露との間に、山深く寝て、

天地を好いい気持に懷に抱いて、

自分を神のようにふくらませて、

推思の努力で大地の髓を掻とき撈り、

3275

3280

3285



六日の神業<sup>かみわざ</sup>を自分の胸に体験し、

傲<sup>おご</sup>る力を感じつつ、何やら知らぬ物を味い、

時としてはまた溢れる愛を万物に及ぼし、

下界の人の子たる処が消えて無くなって、

そこでその高尚な、理窟を離れた觀察の尻を、

一寸口では申し兼ねるが、

(猥褻<sup>わいせつ</sup>なる身振。)

これで結ぼうと云うのですね。

ファウスト

ふん。怪しからん。

メフィストフェレス

お気に召しませんかな。

御上品に「怪しからん」呼<sup>よ</sup>わりをなさるが宜しい。

潔白な胸の棄て難いものも、

潔白な耳に聞せてはならないのですから。

手短に申せば、折々は自ら欺く快さを

お味いなさるのも妨なしです。

だが長くは我慢が出来ますまいよ。

もう大ぶお疲<sup>つか</sup>れが見えている。

これがもつと続くと、陽気にお氣が狂うか、

陰氣に臆病になつてお果<sup>はて</sup>になる。

もう沢山だ。あの子は内にすくんでいて、

なんでもかでも狭苦しく物哀しく見ていますよ。

あなたの事がどうしても忘れられない。

あなたが無法に可哀いのですね。

あなたの烈しい恋愛が、最初雪<sup>ゆきどけ</sup>解のした跡で、

小川<sup>こがわ</sup>が溢れるように溢れて、そいつをあなたは

あの子の胸に流し込んだ。

そこでああなたの川は浅くなつたのですね。

わたくし共の考では、檀那様が森の中の

3300

3305

3310

玉座に据わつておいでになるより、

あの赤ん坊のような好い子に、惚れてくれた

御褒美をお遣<sup>やり</sup>になるのが宜しいようだ。

あの子は溜まらない程日が長いと見えて、

窓に立つて、煤けた町の廓の上を、

雲の飛ぶのを見ています。

「わしが小鳥であつたなら。」こんな小歌を

昼はひねもす夜はよもすがら歌っています。

どうかするとはしゃいでいる。大抵は萎<sup>しお</sup>れている。

ひどく泣き腫れているかと思えば、

また諦めているらしい時もあります。

だが思っていることはのべつですよ。

ファウスト

蛇奴が。蛇奴が。

メフィストフェレス

どうです。生捕られましたか。

ファウスト

悪党。もうここにいてくれるな。

そしてあの美しい娘の名を言ってくれな。

半分気の狂いそうになっている己の心の中に、

あの娘の体を慕う欲望を起させては困るからな。

メフィストフェレス

どうしようと云うのです。娘はあなたが逃げた  
と  
思っている。実際半分逃げ掛かっているのですね。

ファウスト

いや。実は己はやはりあいつの傍にいる。よしや、もつと  
遠く離れていたと云って、己は忘れはせん、棄てはせん。

己はあいつの唇が触れるかと思うと、  
主しゅの体さえ妬ねたましくなるのだ。

メフィストフェレス

3325

3330

3335

そうでしょうとも。薔薇の下で草を食っている  
鹿の仔ふたごと云う奴には、わたしでさえ気が揉めた。

ファウスト

もうどこかへ行け。口入屋奴。

メフィストフェレス

沢山悪口をなさい。わたしは可笑おかしい。

男と女とを拵えた神様も、

自分がすぐに取持とりもちをして見て、

こんな好い為事しごとはないと思つたのです。

まあ、行つてお遣やりなさい。悲惨極きわまっています。

何も死ぬる所へおいでなさいとは云わない。

好い人の閨ねやへおいでなさいと云うのですよ。

ファウスト

それはあれを抱いているのは、天国にいるように嬉しいがな、  
あいつの胸で温まっている間でも、

あいつの苦勞を察して遣らずにはいられぬ。

己は亡命者ではないか。無宿ものでは。

己は<sup>あて</sup>当もなく休まずに生きている人非人だ。

譬<sup>たと</sup>えば好き<sup>す</sup>好<sup>この</sup>んで烈しく谷底へ落ちようと、

岩から岩を伝<sup>くだ</sup>つて下<sup>たき</sup>る瀑布の水のようなものだ。

それにあの子はどうだ。子供らしい、ぼうつとした

心持で、脇へ避けて、アルピの野の小家に住むように、

家の中である程の事は、

皆小さい天地の間に限られている。

それなのに、神に憎まれた己は、

岩々に打ち当って、

それを粉な粉なに砕いても

まだ厭<sup>あ</sup>き足らずに、

あの娘を、あの娘の平和を埋めねばなんのか。

地獄奴。これ程の犠牲が是非いるのか。

3350

3355

3360

悪魔奴。どうぞ己のこの煩悶の期間を縮めてくれ。

どうせこうなると云う事を、すぐさせてくれ。

あの娘の運命が己の頭に落ち掛かって、

己を引<sup>ひ</sup>つ<sup>ひ</sup>浚<sup>さら</sup>って底の深みに落ちてても好い。

メフィストフェレス

3365

また煮え立つて、燃え上がって来ましたな。

早く行<sup>すか</sup>つて賺<sup>やり</sup>してお遣<sup>やり</sup>なさい。馬鹿な先生だ。

兎角小さい頭だと云うと、一寸出口が知れないと、

すぐに死ぬることを考えたがる。

なんでも我慢し通す奴が万歳です。

あなたなんぞはもう大ぶ悪魔じみて来ていなさる。

絶望のために狼狽している悪魔程

不似合なものは、先ず世界にありますまいぜ。

3370

## マルガレエテの部屋

マルガレエテ一人 いとぐるま 車の傍に坐しゐる。

マルガレエテ

心の落著おちつき無くなりて、

胸苦しくぞなりにける。

尋ねとも、その落著は

つひに帰らじ、とこしへに。

3375

彼人まさねば、いつかたも

冢穴つかあなにしも異ならず。

苦にがきを嘗なむる所とぞ

世の中は皆なりにける。

3380

物狂ほしくもなれるかな、



あはれわがこの頭<sup>こゝろ</sup>。

ちぎれくになりしかな、

あはれわがこの心。

心の落著なくなりて、

胸苦しくぞなりにける。

尋ぬとも、その落著は

つひに歸らじ、とこしへに。

小窓よりわが見出だすは、

彼人<sup>くる</sup>来やと待つばかり。

門の外<sup>と</sup>へわが出で行くは、

彼人迎へに行くばかり。

ををしき彼人の歩みざま。

けだかき彼人の姿。

3395

その脣の微笑。

そのまなざしの力。

その物語の

たえながれ  
妙なる流。

我手取りますそのみ手よ。

3400

さて、あはれ、その口くちづけ附よ。

心の落著なくなりて、

胸苦しくぞなりにける。

尋ぬとも、その落著は

つひに帰らじ、とこしへに。

3405

胸の願は彼人に

そはんとおもふ外ぞなき。

わが腕<sup>かいな</sup>もて彼人を

捉へまつり、止めまつらばや。

さて心ゆくまで彼人に

口<sup>くちづけ</sup>附しまつらばや。

よしやわが身は彼人に

口附せられて消えぬとも。

### マルテの家の園

マルガレエテとファウスト登場。

マルガレエテ

あなた、お誓<sup>ちかい</sup>なすつて下さいましな。

ファウスト

うん。なんでも誓う。

マルガレエテ

あのお宗旨の事はどう思っているの。

あなたは大層お優しい方なのですが、

お宗旨の事は格別に思っているのではないようね。

ファウスト

そんな事は措いてくれ。己がお前を好いていることは

分かるだろう。己は好いている人達のためには血も肉も

惜まない。またその人達の感情や宗教を奪おうとはしない。

マルガレエテ

あなたそれは悪いわ。お信じなさらなくては。

ファウスト

信ぜなくてはならんなあ。

マルガレエテ

あなた秘蹟だってお敬うやまいなさらないでしょう。  
ほんにどうにかしてお上あげ申したいわ。

ファウスト

敬っている。

マルガレエテ

でも心しんから願ねがいたいと思召しんさないでしょう。

ミサや懺悔ざんげにも長らくお出でなさらないでしょう。

神様をお信じなすって。

ファウスト

ふん。一体誰でも「己は神を信ずる」と

云うことが出来ると思うかい。

司祭にでも聖人にでもそんな風に問うて見るが好い。

その返事はただ問うた人を

嘲るようにしか聞えはしないのだ。

マルガレエテ

ではお信じなさらないの。

3430

ファウスト

おい。はき違<sup>ちがえ</sup>をするのじゃないぞ。

一体神の御名<sup>みな</sup>を口に唱えて、

「己は神を信ずる」と

告白することの出来るものがあるのか。

また自分がそう感じて、

「己は信ぜない」と云うことを

敢てすることの出来るものがあるのか。

万物を包んでいるもの、

万物を保<sup>たも</sup>たせて行くものであつて見れば、

お前をも、己をも、自身をも

包んでいて、保たせて行くだろうじゃないか。

天はあんなに上の方で中高になつてゐるじゃないか。

地はこんなに下の方で堅固になつてゐるじゃないか。

3440

3435

そして永遠な星は優しい目をして  
升<sup>のぼ</sup>って来るではないか。

3445

こうして己とお前と目を見合せていると、

あらゆる物がお前の頭へ、

お前の胸へと迫って来て、

永遠な秘密になつて、見えないように

見えるようにお前の傍に漂っているではないか。

3450

それをお前の胸へ、胸はどれ程広くても一ぱいに

なる程入れて、その感じで全き祝福を得た時、

それを幸福だとも、情だとも、愛だとも、神だとも、

お前の勝手に名づけるが好い。

己はそれに附ける名を知らない。

3455

感じが総てだ。

名は天の火を罩<sup>こ</sup>む

霞と声とに過ぎない。

## マルガレエテ

あなたの仰やる事は皆美しい、結構な事で、  
牧師様の仰やるのも大抵同じようですが、  
お詞<sup>こしは</sup>だけが少し違いますのね。

3460

## ファウスト

それはあらゆる場所で  
あらゆる心の人が天の日の光を享けて、  
それぞれの持前の詞で言うのだ。  
己だつて己の詞で言つて悪いというはずがない。

3465

## マルガレエテ

それはただ伺っていますと、かなり御<sup>ごもつとも</sup>尤なようですが、  
やっぱりどこか間違っていますのね。  
あなたクリスト教ではいらつしやらないのですもの。

## ファウスト

そんな事を。



マルガレエテ

あんなお友達のあるのが、

わたくし疾<sup>と</sup>うから気になつていましたわ。

ファウスト

どうして。

マルガレエテ

あのいつも御一しよにいらつしやる方<sup>かた</sup>ね、

あの方がわたくし心<sup>しん</sup>から厭<sup>いや</sup>でございますの。

あの方の厭らしい顔を見た時ほど、

胸を刺されるように思いましたことは、

わたくし生れてからありませんでしたの。

ファウスト

好い子だから、そんなにあいつをこわがるなよ。

マルガレエテ

なんだかあの方がいらつしやると血が落ち着きませんの。

一体わたくしどなたをだつて悪くは思わないのですが、  
あなたの事をおなつかしく思いますと一しよに、  
あの方がなんだか不気味でなりませんの。

3480

それに横著な方かとも存じますの。  
もし間違つたら、済まないのですけれど。

ファウスト

やはり世間にはあんな変物もいなくてはならないて。

マルガレエテ

わたくしあんな方<sup>かた</sup>と一しよにはいたくないのよ。

いつも戸口から這入つていらつしやつて、

3485

なんだか人を馬鹿にしたような顔をなすつて、

それに少しおこつていらつしやるようね。

まあ、人なんぞはどうなつても好いと云う風ね。

誰をも可哀がりたくなんざないと云うことが

お顔に書いてありますようね。

3490

わたくしあなたにお継<sup>すがり</sup>申していると、気楽な、  
体をお任せ<sup>まか</sup>申しているような温い心持なのに、  
あの方がいらつしやると吭<sup>のど</sup>を締められるようですの。

ファウスト

ふん。不思議に察<sup>さつ</sup>しの好<sup>い</sup>い子だなあ。

マルガレエテ

そしてそう云う感じに負けてしまいますと、

あなたと二人でいる所へ、あの方が来たばかりで、

もうあなたとの中が元のように思われますの。

それにあの方のいらつしやる所では、お祈<sup>いのり</sup>が丸で出来ないので、

わたくし気になつてなりませんの。

あなただつてそんなお心持がなさるでしょう。

ファウスト

詰まり性<sup>しょう</sup>が合わないのだなあ。

マルガレエテ

もうわたくし行かなくちや。

ファウスト

ああ。ただの一時間も

落ち著いてお前と一しよになつていて、

胸と胸、心と心の通うようには出来ないのかなあ。

マルガレエテ

ええ。それはわたくし一人で休むのですと、

今晚錠を掛けないで置くのですが、

母<sup>か</sup>様がすぐ目を醒ますのですもの。

ひよつと母<sup>か</sup>様に見附かろうもんなら、

わたくしその場で死んでしまつてよ。

ファウスト

それか。それは造<sup>ぞう</sup>倣<sup>さ</sup>もない事だ。

ここに瓶<sup>びん</sup>があるがな、この薬を三滴

不断飲みなさる物の中に入れば、

好い心持に寐て、何も分からなくなるのだ。

マルガレエテ

それはあなたのためですもの、なんでもしてよ。

毒になりやしませんでしょうね。

ファウスト

毒になるようなものなら、己がしろと云うものか。

マルガレエテ

わたくしなぜだかあなたのお顔を見ていると、

なんでも仰やる通とおにとしなくてはならなくなつてよ。

わたくしもうあなたのためにいろんな事をしてしまつて、

此上してお上げ申すことはないかと思うわ。（退場。）

メフィストフェレス登場。

メフィストフェレス

餓鬼奴。行つてしまいましたね。

ファウスト

また立聞をしていたのか。

メフィストフェレス

ええ。すっかり聞いていましたよ。

先生箇条立<sup>だて</sup>をした試験をお受<sup>うけ</sup>になりましたね。

どうです、跡のお心持は。

一体女と云う奴は、相手が昔流に信心深くて

素直だかどうかと、氣にして穿<sup>せん</sup>鑿<sup>さく</sup>しますよ。

宗教にへこむ奴なら、自分の言いなりにもなると思つて。

ファウスト

ふん。君には分からないのだ。

これではなくては祝福を受けられないと云う、

自分だけの信仰をたっぷり持つている、

あの可哀らしい、誠実な女心に、

自分の一番大切だと思ふ男が失われた子になつて

いはせぬかと、ひどく苦勞をしているのじゃないか。

3525

3530

メフィストフェレス

いやはや。出世間で、しかも世間で、色気のある  
増様には困る。娘っ子が手の平で円めますよ。

3535

ファウスト

糞と火とから生れたかたわもの畸形物のくせに。

メフィストフェレス

それに、あいつ奴、いやに人相に精しいと来ている。  
己がいると、なんだか変な氣持がする。

己のこの面つらがあいつにはある秘密の意味を語る。

3540

あいつ奴、己が少くとも天才で、

事によつたら悪魔だと、感附いていやがる。

いよいよ今晚ですね。

ファウスト

大きにお世話だ。

メフィストフェレス

いいえ。こつちにもそれが嬉しいのですからね。

### 井の端

水瓶を持ちたるグレエトヘン（マルガレエテ）とリースヘンと。

リースヘン

あなたバルバラさんの事を聞いて。

グレエトヘン

知らなくてよ。人の出る所へ行かないのですもの。

リースヘン

本当なの。ジビルレさんがきようそう云つてよ。

とうとう騙されちまったのだってねえ。

上品振った挙句だわ。

グレエトヘン



どうしたと云うの。

リースヘン

評判だわ。

飲食<sup>のみくい</sup>をするにも二人養うようになったのだとき。

グレエトヘン

まあ。

リースヘン

好い気味だわ。

随分長くあの男に食<sup>く</sup>つ附いていたわねえ。

やれ散歩に連れて行く、

そりや村の踊場へ連れて行くと云う風で、

どこでも一番の女だと見せ附けて、

葡萄酒やパテを御馳走してねえ。

だもんだから自惚<sup>うぬぼ</sup>れて好い女の気になっていたわ。

男に物なんか貰うのを

恥かしいとは思わない程、根性が腐っていたのだわ。  
舐め<sup>な</sup>附いたり吸い附いたりしてさ。

3560

いつの間にか生娘ではなくなっていたのね。

グレエトヘン

可哀そうねえ。

リースヘン

あなたなんかそう思つて。

わたしなんか糸<sup>いと</sup>取<sup>とり</sup>が忙しくつて、

おつ母<sup>か</sup>さんが夜外へ出さないのに、

好<sup>い</sup>い人の所へ降りて行つて、立話をしていたのね。

3565

暗い廊下に立つたり、戸口のベンチに

掛けたりしていて、時が立つても平氣だったわ。

その代<sup>かわ</sup>り今へこたれて、罪の襦<sup>じゆ</sup>袢<sup>ばん</sup>を著て、

お寺へ行つてあやまるが好いわ。

グレエトヘン

でもきつとあの人がお上さんに持つでしょう。

リスヘン

そんな事をすれば馬鹿よ。気の利いた

男だもの。余所でも楽らくに遊べるわ。

もう行つてしまつたつて。

グレエトヘン

まあ、ひどい事ね。

リスヘン

もしお上さんになつたら、ひどい目に逢うわ。

若い衆達は髪きりの青葉わらを引つ手繰るし、

わたし達は門口きりへ切藁まを蒔まいて遣るわ。（退場。）

グレエトヘン（家に帰りつゝ。）

今までは余所の娘が間違でもすると、

わたしもどんなにか元氣とが好くけなしただろう。

余所の人のしたと云う罪咎とがを責めるには、

わたしもどんなにか 詞<sup>ことば</sup>数<sup>かず</sup>が多かつただろう。

3580

人のした事が黒く見える。その黒さが  
足りないの、一層黒く塗ろうとする。

そして自分を祝福して、えらい人のように思う。

今は自分も犯しているのに。

だけれど、だけれど、それまでになる道筋は、

3585

まあ、あんなに好かつたのに、あんなに美しかつたのに。

### 外廓の内側に沿える巷

石垣の中に作り込めたる龕<sup>がん</sup>に、受苦聖母の祈願像あり。その前に花瓶。グレ

エトヘンそれに新なる花を挿す。

グレエトヘン

いたみ  
痛おおきマリア様

どうぞお惠深く、お顔をこちらへお向遊むけばして、  
わたくしの悩なやみを御覧なされて下さいまし。

お胸を刃に貫かれておいでなされ、

ちぢの悲かなしみをお覚おぼえあそばしながら、

御愛子おんまなごの死を見そなわしていらつしやいます。

3590

天にいます父をお見上みあげなされて、

御子おんこと御身との悩なげきのために、

歎なげきのみ声を空へお送おくなさいます。

3595

わたくしの骨々に痛いたみ

いかに徹とおるかを、

誰が覚えてくれましょう。

哀あわれな胸が何を案じ、何のためにわななき、

何をほしがっておりますか、

3600

それを御承知なさるのはあなたばかりでございます。

どこへまいりまして、

胸のここがどんなにか

せつなく、せつなく、せつのうございましょう。

3605

人目がないと思う度に、

胸が裂けるかと思う程、

泣いて、泣いて、泣き通します。

さし上げますこの花を

けさわたくしが折った時、

窓の前の植木鉢が

3610

わたくしの涙で濡れました。

わたくしの部屋の内へ

朝日が明るくさし込みます時、

わたくしはもう床の上で

悩に沈んでおります。

3615

どうぞわたくしが恥と死とを逃れますように。

痛おおきマリア様、

どうぞお恵深く、お顔をこちらへお向遊ばして、

わたくしの悩を御覧なされて下さいまし。

## 夜

グレエトヘンが家の門前の街。

グレエトヘンの同胞兵卒ワレンチン登場。

## ワレンチン

誰でも兎角自慢をしたがる

酒の座鋪ざしきに己おれがいるとき、

友達ともどもが声高に

町の娘の噂をして、

その褒詞ほしを肴さかにして飲んでいると、

己は気楽に据たかわつていて、

頬杖ほぢを衝ついて、

笑わらつて鬚ひげを撫なででながら、

みんなの詞ことばを聞きいていて、

先さきず杯はになみなみと注つがせて、

それからこう云いつたものだ。「それはそんな娘むすめもあろう。

だがな、國中くに搜さがして歩あるいたつて、

内の可い哀ないグレエテルのような奴やつが、

あの妹いもうとのお給仕おきでも出来る奴やつがいるかい。」

3620

3625

3630



声が掛かる。コップが鳴る。一座がざわつく。

「そうだ。あれは女性の飾だ」と、

声を揃えて身方がどなる。

褒めた奴等が皆黙ったものだ。

それがどうだ。頭の髪を掻きむしっても、

壁に這い登っても追つ附かない。

どの恥知らずでも、鼻に皺を寄せたり、

当<sup>あて</sup>擦<sup>すり</sup>を言ったりして、己を馬鹿にしやがるのだ。

己は筋の悪い借金でもある奴のように、小さくなつて

据わつていて、人の詞の端々に冷たい汗を掻かせられる。

片っ端からそいつらをなぐつても遣りたいが、

どうも諷<sup>うそつき</sup>衝<sup>つ</sup>だだけは云われない。

や。遣つて来るのは、這い寄つて来やがるのはなんだ。

この目がどうかしていなけりやあ、あいつ等は二人連だな。

あいつがそなら、引つ攫<sup>つか</sup>んで、

3635

3640

3645

この場を生かしては逃さないぞ。

ファウストとメフィストフェレスと登場。

ファウスト

丁度あの寺の坊主の休息所の窓から、

常燈明の火がさしていて、

それが窓を離れるに連れて段々微かになつて、

闇が四方から迫つて来るように、

丁度あんな工合に、己の胸は闇に鎖されている。

メフィストフェレス

所がわたしの心持は、あの火見<sup>ひのみ</sup>の梯<sup>はし</sup>の下から、

そつと家の壁に附いて忍んで行く、

あの瘦猫のような心持ですね。

盗坊根<sup>どろぼう</sup>性がちよつぴりと、助平根性がちよつぴりと

あるにはあるが、先ず大体頗<sup>すこぶ</sup>る道德的ですね。

なんだかこう節々に、結構な

3650

3655

3660

ワルブルギスの夜の樂たのしみが染み渡るようだ。

もうあさつての晩がそれなのだ。

兎に角寐ねずにいる甲斐のある晩ですからね。

ファウスト

あの遠い所に火が燃えているなあ。あの下で

例の宝がそろそろ地の底から迫り上げて来るのかい。

メフィストフェレス

ええ。もう遠からず壺をお取とりあげ上なさる

お喜よろこびの日はまいります。

こないだちよつと覗いて見たら、ボヘミアの紋の

獅子の附いた、立派な金貨が這入っていました。

ファウスト

可哀い奴の支度にいる

指環とか髪飾とか云う物はないのかい。

メフィストフェレス

そうですね。なんだかこう真珠を繋いだ  
紐のような物が見えましたつけ。

ファウスト

何かそんな物がなくては困るよ。

手ぶらで行くのは苦になるからなあ。

メフィストフェレス

そうでしょう。ただもんめ只文目で面白い目を見て、

あなたが厭いやな心持になつては氣の毒だ。

空に星の一ぱい照っている、今夜のような晩だから、

わたしが一つ真の芸術らしい処を聞せて上げましょう。

わたしは女に道徳的な文句を歌つて聞せて、

あべこべに迷わせて遣るのですよ。

(キタラの伴奏にて歌ふ。)

夜の明け掛かる今時分

可哀お方かたの門口で、

カタリナ、お前は

何してやる。

そりや廃<sup>よ</sup>すが好<sup>よ</sup>い。

門<sup>かど</sup>に入る時や

娘で這入る。

娘では出て来ないぞえ。

気をお附<sup>つけ</sup>。

済んでしまえば

おさらばよ。

気の毒な、気の毒な娘達。

自分の体が大事なら、

花盗人に

油断すな、

指環を嵌<sup>は</sup>めて貰うまで。

3685

3690

3695

ワレンチン（進み出づ。）

こら。誰をおびき出すのだ。怪しからん。  
咀のろわれた、ハメルンもどきの鼠ねずみとり捕奴。

その鳴物を先へこわして、

跡ひきてから弾手にお見まい申すぞ。

メフィストフェレス

しまった。キタラは二つになった。

ワレンチン

こん度は頭を割って遣る。

メフィストフェレス（ファウストに。）

先生。尻籠しりごみは御無用だ。しつかりなさい。

わたしが遣って見せるから、ぴつたり附いておいでなさい。

その塵ちりはらい払ちを引っこ抜いた。

それお突つきだ。受けることはわたしが受ける。

ワレンチン

これでも受けるか。

メフィストフェレス

受けないでどうする。

ワレンチン

これもか。

メフィストフェレス

こうだ。

ワレンチン

や。相手は悪魔かしら。

こりやどうだ。もう手が痺<sup>しび</sup>れた。

メフィストフェレス（ファウストに。）

お突だ。

ワレンチン

参った。（倒る。）

メフィストフェレス

これで野郎おとなしくなりました。

ところでもう行かなくては。早速消えてしまわないと、  
今におそろしく騒ぎ立てますからね。

わたしは警察をごまかすことは上手だが、  
命を取られる裁判に引き出されるのは嫌きらいです。

マルテ（窓より。）

大変です。皆さん。

グレエトヘン

どなたか明あかりを。

マルテ（同上。）

大声で喧嘩けんかをして打ぶったり切きったりしています。

民

そこに一人は死んでいらあ。

マルテ（門より出でつゝ。）

殺した人は逃げましたの。



グレエトヘン（出でつゝ。）

殺されたのはどんな人。

民

お前のおつ母<sup>か</sup>あの息子よ。

グレエトヘン

まあ。わたしどうしよう。

ワレンチン

おい。己は死ぬるのだ。口に言うのは一口で、

實際遣るのは猶<sup>なほ</sup>早い。

おい。女子達。そこに立っていて泣いたりわめいたりするな。

こつちへ来て、己の言うことを聞いてくれ。

（一同ワレンチンを取り巻く。）

おい。グレエトヘン。お前はまだねんねいで、

好く物事が分らない。

それでまずい事をするのだ。

己はほんの内証ないしよでお前に言うのだがな、  
兎に角お前はばいただよ。  
それでまた丁度好いのだ。

3730

グレエトヘン

まあ、兄にいさんが。なんでわたくしにそんな事を。

ワレンチン

よまい言を言うのは廃よせよ。

出来た事は為方しかたがない。

これから先さきもなるようになるだろうよ。

3735

最初は一人ひとりとこつそりする。

間もなく相手の数が殖える。

もう一ダアスとなつて見ると、

お前は町中まちじゅうの慰物だ。

それから恥の種子たねを宿す。

人に隠してこつそり産んで、

3740

頭の上からすつぽりと  
闇の衣を被<sup>ころも</sup>せてしまふ。

悪くすると殺して遣りたいとさえ思うのだ。

それが育つて大きくなると、

昼日中にも外へ出るが、

格別立派にはなっていない。

そのうち顔も醜くなるが、なればなる程

厚かましく、人中出现<sup>よ</sup>るようになる。

それ、ばいたが来たから避<sup>よ</sup>けるよと、

時疫<sup>じえき</sup>で死んだ死骸のように、

真面目な人が皆避けるのが、

もう己の目には見えるようだ。

人が顔をじつと見ると

お前の胸がびくびくする。

金<sup>きん</sup>の鎖は掛けられない。お寺へ行つても、

贅卓<sup>にえつくえ</sup>の前に立つことは出来ない。

美しいレエスの領飾をして、

踊場で楽しむことも出来ない。

乞食や片羽と一しよになつて、

暗い<sup>なげき</sup>歎の蔭に隠れて、

よしや神様はお免<sup>ゆるし</sup>なさるとしても、

この世界では咀<sup>のろ</sup>われているのだ。

マルテ

お前さん。自分の霊をお救<sup>すくい</sup>下さるように願いなさい。

そんな悪口などを跡に遺さずに。

ワレンチン

へん。恥知らずの口入婆々あ奴。

己はその萎びた体に攫み附いて遣りたいのだぞ。

そうすりゃあ、己の罪滅しが

たっぷり出来るわけだがなあ。

グレエトヘン

まあ、兄<sup>に</sup>いさん。お前はさぞせつない事で。

ワレンチン

好<sup>い</sup>いよ。泣いてなんかくなくても好<sup>い</sup>い。

お前が名誉を棄てた時、己のこの胸は

一番痛手を負ったのだ。

己はこれでも軍人で、立派に死んで

天へ行くのだ。(死す。)

3775

寺院

勤行、オルガン、唱歌。

多勢の中にグレエトヘン。その背後に悪霊。

悪霊

3770

どうだ。グレエトヘン。

お前がまだ極無邪気で、

あの 贊<sup>にえつくえ</sup> 卓の前に出て、

半分は子供の戯、

半分は心の信仰から、

古びた本を繰り開けて、<sup>あ</sup> 縫<sup>もつ</sup>れる舌で

讚美歌を歌った時はどうだった。

グレエトヘン。

お前の頭はどうなっている。

お前の胸に隠しているのは

なんと云う 悪業<sup>あくごう</sup>だ。

お前の咎<sup>とが</sup>で、長い、長い苦艱を受けに、

死んで行かれた母親の霊のために祈るのか。

お前の家の門の闕は誰の血に<sup>けがさ</sup> れたか。

それからお前の胸の下で

3780

3785

3790

蠢<sup>うごめ</sup>き出して、ここにいるぞと

未来を思い遣り顔に自ら悩み、

お前をも悩ませる物があるではないか。

グレエトヘン

ああ、せつない。ああ、せつない。

心の中を往ったり来たりして

わたしを責める、

この物思は忘れられぬか。

合唱者

ジエス・イレエ・ジエス・イルラ・

(怒之日。彼)

ソルウェット・セエクルム・イン・ファウイルラ。

(渙散世界作灰燼之日。)

(オルガンの響。)

悪霊

おそれ  
畏がお前を襲う。

きんてき  
金笛が鳴る。

おくつき  
奥津城が皆震う。

そしてお前の心の臓は

灰の眠から

ほのおなやみ  
の悩へ

再び造り成されて、

ふるい  
慄に起つことであろう。

グレエトヘン

わたしはここにいたくない。

あのオルガンの音がわたしの息を

詰まらせるようで、

あの歌の声がわたしの心を

底まで解かしてしまうような。

合唱者

3800

3805

3810



ユウデックス・エルゴ・クム・セデビット、

(判官既坐。則)

クウィットクウィット・ラテット・アドパアレビット、

(一切隠匿。悉<sup>しっかい</sup>皆審明。)

ニル・イヌルツム・レマネビット。

(無事不報復。而遺存者。)

グレエトヘン

ああ。身が締め附けられるような。

石<sup>いしかべ</sup>壁の柱が

四方から寄つて来て、

天井が

上から圧さえ附けるような。ああ。息が。

悪霊

身を隠せ。罪や辱は

隠し果<sup>おほ</sup>せられるものではない。

息が詰まるか。目が昏<sup>くら</sup>むか。

気の毒なやつめ。

合唱者

クワイト・ズム・ミゼエル・ツンク・ジクツルス。

(爾時陋者我。欲何言。)

クウエム・パトロオヌム・ロガツルス。

(爾時我尋求何庇保者。)

クム・ウィツクス・ユスツス・シット・セクルス。

(何則正者猶且不自安也。)

悪霊

聖者達はお前に

お顔をお背<sup>そむけ</sup>なさるぞ。

淨い人はお前の手を握ろうとして

身<sup>みぶるい</sup>慄<sup>おそ</sup>をするぞ。

気の毒な。

## 合唱者

クム・ウィックス・ユスツス・シット・セクルス。

## グレエトヘン

お隣の方<sup>かた</sup>。あなたの香水の瓶をどうぞ。（昏倒す。）

## ワルプルギスの夜

ハルツ山中。シイルケ、エエレンド附近。

ファウスト、メフィストフェレス登場。

## メフィストフェレス

どうです。箒の柄どもが欲しくなりはしませんか。

わたしも極丈夫な山羊<sup>やぎ</sup>の牡<sup>おす</sup>が一匹欲しくなりました。

この道をまだよほど歩かなくてはなりませんからな。

## ファウスト

己は足の草臥<sup>くたび</sup>れぬ間は、

この節<sup>ふしくれだ</sup>樽立<sup>だ</sup>った杖一本で沢山だ。

道を縮めたって、なんになるものか。

谷合の曲りくねった道を辿って来て、

不断の泉<sup>ほとばし</sup>の迸<sup>とばし</sup>り出る

この岩に攀<sup>よ</sup>じ登るなんぞが、

こう云う道を歩く人には、薬味のように利くのだ。

もう春が白樺の梢に色糸を縊<sup>よ</sup>り掛けている。

縦でさえ春の来たのに気が附いたらしい。

己達のこの手足にも利目が見えて来そうなものだが。

メフィストフェレス

わたしなんぞはちつとも感じませんなあ。

この体はまだ冬らしい心持がしています。

わたしの歩く所には雪や氷があれば好いと思うのです。

どうです。あの光の薄い、欠けた、

3840

3845

3850

赤い月が升<sup>のぼ</sup>つて来て、怪しげな道の  
照しようにするので、一足毎に

木や石に躓<sup>まち</sup>きそうでなりません。

お待なさいよ。ちよつと鬼火を一つ傭いますから。  
旨く燃えている奴が、あそこに一ついます。

こら。友達。己の方へ来て貰おうか。

何も無駄に燃えていなかったって好いじゃないか。  
どうだい。頼むから、あっちへ登る案内をしないか。

### 鬼火

檀那が仰やるのですから、ひよこひよこする性分を  
なるだけ直して遣つて見ましょう。

でも稲妻形<sup>がた</sup>に歩く癖は直されますまい。

### メフィストフェレス

いやはや。それは人間の真似<sup>つもり</sup>の積でしているのだな。  
一つ奮発して真つ直に行つて貰おう。

そうしないと、その命の火を吹き消して遣るぞ。

鬼火

大ぶ檀那風をお吹かせなさいますな。

それは仰やるとおりにいたして見ますが、

一寸お断申して置かなくては。何分きようは山中が

気の違つたようになってゐるのに、鬼火の御案内では、

少しの事は大目に見て戴かなくてはなりますまい。

ファウスト、メフィストフェレス、鬼火（交互に歌ふ歌。）

夢の中、禁厭の境に

われ等入りぬと覚ゆ。

善く導きて、名をな墜しそ。

さらばこの広き荒野を、

われ等疾く行き過ぎなん。

森の木々の列なせるが

3865

3870

3875

うしろざまに走り過ぐ。

うなずいわおさき  
頷く巖の尖も

いびき  
軒し、息噓く、長き石鼻も

おなじさまに走り過ぐ。

3880

めぐ  
石を繞り、草を穿ちて、

広き川、狭き川流れ落つ。

そよぎ  
聞ゆるは戦か。歌か。

あめ  
天にある心地せし日の

なげき  
優しき恋の歎の声か。

あはれわれ等、何をか願ひ、何をか恋ふる。

さて過ぎぬる世の物語と

こたま  
飴響の声と響き来ぬ。

わしみづくの声近づきぬ。

3885

ふくろふ、たげり、かけす等も、  
皆いまだ眠らでありや。

3890

おどろが下<sup>した</sup>を這ふは山椒魚にもや。  
脚<sup>あし</sup>長く腹は肥えたり。

石間<sup>いわま</sup>より、沙の中より

出づる木の根は、蛇<sup>へび</sup>の如<sup>ごと</sup>、

3895

怪しげなる帯を引きて、

われ等を怖れしめ、捉へんとす。

こは生きて動ける大いなる木瘤<sup>きこぶ</sup>の、

道行く人を遮らんと、さし伸ぶる

章魚<sup>たこ</sup>の足めく小枝なり。鼠あり。

3900

毛の色ちゞに変わるが、群なして

苔の上、小草の上を馳す。

群毎にひたと寄りこぞりて

飛び行く蛸は、



人迷はせの導きせんとす。

3905

汝<sup>なれ</sup>に問ふ。われ等留<sup>とど</sup>まれりや、

はた猶<sup>なほ</sup>歩みてありや。

物皆<sup>めぐ</sup>旋る如く見ゆ。

怪<sup>け</sup>しき顔する木も石も、

みるく殖え、みるくふくらむ

3910

あまたの鬼火も。

メフィストフェレス

わたしの上著の裾を攫<sup>つか</sup>まえて、しっかりしておいでなさい。

ここが中の峠と云うような所で、

山の中で地の底の金<sup>かね</sup>が光るのが、

驚くほど好く見えますよ。

3915

ファウスト

あの谷底が、朝日の升る前のような、

濁った光に照っているのが不思議だなあ。

しかもその光が底の、底の

深い穴までさし込んでいる。

蒸気のすぐに立つ所も、棚引いている所もある。

靄<sup>もや</sup>や霧の中から火の燃えている所もある。

その火が糸のように細く這って行くかと思うと、

忽ち<sup>たちま</sup>また泉の涌くように<sup>ほとぼし</sup>迸り出る。

幾百条の脈の網のように、あの谷の

広い間を<sup>おお</sup>掩っているかと思うと、

この<sup>せび</sup>蹙まった隅の所では、

忽ち離れて一つになっている。

そこにはまた近い所に、<sup>きん</sup>金の砂を

振り<sup>ま</sup>蒔いたように、火花が散っている。

だがあれを見給え。あの岩壁は一面に、

下から上まで燃えているじゃないか。

3920

3925

3930

## メフィストフェレス

埋もれている金の主<sup>かねぬし</sup>が、きょうの祭に

御殿の中へ立派に明を附けたのでしよう。

お目にとまったのは、あなたのお為<sup>しあわせ</sup>合<sup>あ</sup>だ。

這入りたがる客の多いのが、わたしには分かるようだ。

## ファウスト

どうだ、この気の狂ったように空を吹いて通る風は。

己<sup>うなじ</sup>の項に吹き当てる力といたらないなあ。

## メフィストフェレス

その爺<sup>じ</sup>いさん岩の肋骨を攫<sup>さら</sup>まえていないと、

あなた谷底へ吹き落されてしまえますぜ。

霧が立って夜闇の色を濃くして来た。

あの森の木<sup>ふくろう</sup>のめきめき云うのをお聞<sup>きき</sup>なさい。

梟<sup>ふくろう</sup>奴<sup>め</sup>がびっくりして飛び出しやあがる。

お聞<sup>きき</sup>なさい。とわの緑の宮殿の

柱が砕けているのです。

枝がきいきい云って折れる。

幹はどうどうと大きい音をさせる。

根はぎゆうぎゆうごうごう云う。

上を下へとこんがらかつて、<sup>かさ</sup>畳なり合つて、

みんな折れて倒れるのです。

そしてその屍で掩われている谷の上を

風はひゆうひゆうと吹いて通っています。

あなた、あの高い所と、

遠い所と、近い所とにする声が聞えますか。

この山を揺り撼<sup>うご</sup>かして、

おそろしい魔法の歌が響いていますね。

#### 合唱する魔女等

ブロッケンの山へ魔女が行く。

苗は緑に、刈株黄いろ。

3945

3950

3955

おお勢そこに寄つて来る。

ウリアン様が辻にいる。

木の根、岩角越えて行く。

魔女は□をこく。山羊<sup>やぎ</sup>は汗掻く。

声

バウボ婆あさんがひとりで来ましたね。

牝<sup>めふた</sup>豚に乗つて来ましたね。

合唱者

人柄次第で崇めにやなるまい。

バウボのおば御に先<sup>せん</sup>達<sup>だち</sup>を頼もう。

大きな豚だよ。お負に身持だ。

ぞろぞろ跡から附いて行<sup>い</sup>け。

声

お前、どの道に来たのだえ。

声

イルゼンスタインを越して来た。

通り掛かりに梟の巣の中を覗いて見たら、

大きな目玉をしていたよ。

声

人を馬鹿におしでない。

3970

なんだってそんなに急ぐの。

声

わたし爪で引つ搔かれてよ。

それこの創<sup>きず</sup>を御覧なさい。

合唱する魔女等

道は遠いが広さも広い。

おし合いへし合いせいでも好<sup>よ</sup>かろう。

熊手が衝<sup>つ</sup>つ衝<sup>つ</sup>く。帚<sup>ほうき</sup>が引つ搔く。

赤子は噎<sup>む</sup>せるし、お袋<sup>ふく</sup>らはじける。

男の魔。半数合唱

3975

こつちは蝸牛<sup>でむし</sup>。殻<sup>しよ</sup>を背負<sup>しよ</sup>つて歩く。

女はお先へ御免と出掛ける。

悪魔の所へ見まいに行く時<sup>とき</sup>や、

いつでも女が極<sup>き</sup>まつて追い越す。

### 他の半数

それにはこつちは格別構わぬ。

女が小股に千足<sup>せんあし</sup>踏むのを、

勝手に急げと、はたから見えていて、

一跳跳<sup>はねは</sup>ねれば勝つのが男だ。

### 声（上にて。）

おいでよう。岩淵からもおいでよう。

### 声々（下より。）

わたし達も上がって行<sup>い</sup>きたいのだがねえ。

水を浴び通<sup>ほ</sup>しで、体はこんなに綺麗なの。

だが赤ん坊<sup>ほ</sup>は生涯出来ないわ。

## 双方の合唱者

風は吹き息む。星奴は逃げ出す。

兎角曇った月奴は隠れる。

魔法の歌<sup>うたい</sup>手声張り上げれば、

虚空に数千の火花が飛び散る。

声（下より。）

おうい。待ってくれ。

声（上より。）

岩の割目から呼ぶのは誰だい。

声（下より。）

己を連れて行ってくれ。連れて行ってくれ。

己はもう三百年掛かって登っているのだが、

どうしても峠に行<sup>い</sup>かれないのだ。

仲間と一しょになりたいがなあ。

双方の合唱者

3990

3995



杖も載せるし、帚も載せる。

山羊も載せるし、熊手も載せる。

今夜上がられないのなら、

浮む瀬のない男だぞ。

半成魔女（下より。）

わたしちよこちよこ追っ掛けるのが、もう久しい事なの。

皆さんもうあんな遠い所を行くのにねえ。

内にいては気が済まないし、

来ても仲間には這入られないのなもの。

合唱する魔女等

<sup>あぶらぐすり</sup>膏薬で元気を附ければ、

どんな<sup>ぼろ</sup>檻樓でも帆に掛けられる。

あり合う<sup>たらい</sup>盥が立派な舟だよ。

きよう飛ばないなら、飛ぶ日はないぞよ。

双方の合唱者

4000

4005

4010

こつちが峠を廻つて飛ぶ時、  
勝手に地びたをいぎつてまごつけ。

見渡す限の草原に

今来てひろがる魔女の群。

(皆々降りて息<sup>いこ</sup>ふ。)

メフィストフェレス

押し合つたりへし合つたり、すべつたり、がたついたり、  
しゅつしゅと云つたり、廻つたり、引つ張つたり、しゃべつたり、  
光つたり、火を吹いたり、燃えたり、臭い物を出したり、  
これがほんとの魔女の世界だ。  
ぴつたり附いておいでなさい。すぐはぐれますよ。  
どこです。

ファウスト

ここだ。

メフィストフェレス(遠方にて。)

もうそこまで押されたのですか。

ちつと檀那面づらをせずばなるまい。

おい。通せ。ウオオランド様だぞ。通せ。好い子だ。通せ。

さあ先生、お攫まりなさい。そこで一飛に

この人籠ひとこみから飛び出してしましましょう。

わたしなぞでさえ辟易しますよ。

あそこになんだか妙な色に光っていますね。

あの小さい木の茂った所へ行つて見たいのです。

さあ、おいでなさい。ここを抜けて行きましょう。

ファウスト

あまのじやく天探女あまのじやくだなあ。好いわ。どこへでも連れて行け。

だが随分気の利いた遣方だと思うよ。

ワルプルギスの晩にブロッケン山へ来て、

勝手にこんな方角へ避けてしまふと云うのは。

メフィストフェレス

まあ、御覧なさい。いろいろな色の火が燃えています。

面白そうな集会を遣っています。

人数は少くても、一人ぼっちになるものではありません。

ファウスト

しかし己はあの上の方へ行きたいのだ。

もう火や渦巻く烟が見えている。

今おお勢が悪魔の所へ寄る時なのだ。

あそこへ行ったら、いろんな疑問が解けそうだ。

メフィストフェレス

ところがまた新しい疑問も結ばれて来るのです。

まあ、おお勢はあっちでがやがや云わせて置いて、

御一しよにこっちの静かな所にいるとしましょう。

大世界の中に、幾つも小世界を拵えるのが、

昔からの習わしですからね。

そこに若い魔女が真っ裸になっいて、

4035

4040

4045

年を取ったのが巧者に体を包んでいるでしょう。

まあ、<sup>つきあい</sup>附合だと思つて優しくして遣つて御覧なさい。

労少くして功多しと云う奴です。

おや。何か弾<sup>ひ</sup>いているようだな。

咀<sup>のろ</sup>われた音楽だ。慣れるまでは我慢が出来ない。

さあ、おいでなさい、おいでなさい。外に<sup>しかた</sup>為方はないのです。

わたしが連れて行つて、仲間入をさせて、

新しい縁を結ばせて上げます。

どうです。なかなか狭い間<sup>あいだ</sup>ではございませんね。

あつちを御覧なさい。どこまで続いているか知れません。

百箇所も火が並んで燃えています。

踊を踊る、しゃべる、物を煮る、酒を飲む、色をする、

考えて御覧なさい、どこにもこれより好<sup>い</sup>い事はありませんぜ。

フアウスト

そこで己を引き合せるには、

4050

4055

4060

君は魔法使とか悪魔とかになって見せるのかい。

メフィストフェレス

それはわたしは不断微行が好<sup>すき</sup>ですが、

晴<sup>はれ</sup>の日になると、勲章を光らせるのが世間並です。

勲章のと違って、沓<sup>くつ</sup>足袋<sup>たび</sup>の紐は飾にはなりません、

蹄のある馬の足はここでもてます。

あの蛞<sup>なめくじ</sup>蝸<sup>し</sup>を御覧なさい。こちへ這つて来やがる。

わたしが只の奴でないのを、あの触角の尖の目で

もう嗅ぎ附けやがったのですね。

どうもここでは隠れていようと思つても駄目です。

さあ、おいでなさい。簪<sup>かがり</sup>から簪<sup>つた</sup>へ伝つて行きましょう。

わたしが媒で、あなたが婿さんだ。

(消え掛かる炭火を囲める数人に。)

どうです、御老人方<sup>がた</sup>。こんな所に何をしていますか。

ちつときばって真ん中の方へ出て、若い奴等の

飲んで騒ぐ仲間にお這入なされば好いに。ぼんやり  
寂しくしていることは内でも出来ますからね。

### 將軍

まあ、どこの国でどれだけの功があつても、  
国民に依頼していることは出来ないな。  
民心と云うものも女の心と同じ事で、  
兎角年の若い奴をひいきを贖するて。

### 宰相

此頃は輿論が大ぶ保守から遠ざかっているが、  
己なんぞはやっぱり老成者の身方だ。  
己達が無条件に信任せられていた時代が、  
兎に角真の黄金時代だったて。

### 暴富家

わたしどももぼんやりしてはいないから、  
随分して悪い事をしたこともありまさらあ。

ところが丁度我々が逆に取つて順に守ろうと思ふ頃になつて、世間が丸でわやになりました。

### 著作家

もう昨今かなり氣の利いた事の書いてある

本が出て、誰も読むものではありません。

青年どもが此頃のように生利なまぎきになつたことは、

先ず古来無かつただろうと思ひますね。

### メフィストフェレス

たちま  
(忽ち老いさらぼひたる姿に見ゆ。)

さようさ。わたくしもブロッケンへお暇乞に登りましたが、

もう世は季すえになつて、最後の審判が近づいていますね。

なんでも内の酒が樽底になつて来ると、

世の中も澆ぎやうき季になつたように思われますて。

### 古道具を売る魔女

どなたもそうさつさとお通とおりすぎ過なさいますな。



買物は好い折になさなくてははいけません。  
品物を好く御覧なさいまし。

ここにいろんな物がございます。

そのくせ世間に類のある品や、

人間のため、天下のために、

一度も大した禍をしたことのない品は、

一つだつてありませんよ。

血を流したことのないようなあいくち首もなければ、

大丈夫でいた体へ、命を取る、熱い毒を

注ぎ込んだことのないような杯もございません。

好い女をたらししたことのない飾や、裏切をして

身方を殺すとか、敵を暗打にするとか云う時、

用に立たなかつた刀は、かたなここにはございません。

メフィストフェレス

おい。おばさん。お前さんは時代が分からないのだ。

出来たことは出来たのだ。した事はしたのだ。

なんでも新物しんものをあきなうことにしなさい。

新ものでなくては、こつちとらは買わない。

ファウスト

どうも自分で自分が分からなくならねば好いが。

己達は市にでも来ているのかなあ。

メフィストフェレス

この渦巻つものにいる群集が皆升りたがって押すのだから、  
あなた人を押す積つもりでも、人に押されてしまいますぜ。

ファウスト

そいつは誰だい。

メフィストフェレス

好く御覧なさい。

リリットです。

ファウスト

誰だと。

メフィストフェレス

アダムの先妻です。

あの綺麗な髪と、自慢そうに附けている、

あの、たった一つの飾とに、気をお著けなさいよ。

あれを餌にして若い男を攫まえようものなら、

めつたに放しつこはありませんからね。

ファウスト

あれ、あそこに婆あさんと娘とが据わっているが、

あいつらはもう大ぶ踊り草臥れたものらしいな。

メフィストフェレス

なに。きようは草臥れなんかしませんよ。

また踊る気でいますあ。おいでなさい。踊らせましょう。

ファウスト（娘と踊りつゝ。）

いつか己<sup>おり</sup>や見た、好<sup>よ</sup>い夢を。

一本林檎の木があつた。

むっちり光つた実が二つ。

ほしさに登って行つて見た。

美人

そりや天国の昔から

こなさん<sup>がた</sup>方の<sup>すき</sup>好きな物。

女子<sup>おなご</sup>に生れて来た甲斐に

わたしの庭にもなっている。

メフィストフェレス（老婆と。）

いつだかこわい夢を見た。

そこには割れた木があつた。

その木に□□□□□□があつた。

□□□□□けれども気に入つた。

老婆

足に蹄のある方<sup>かた</sup>と

踊るは冥加になりまする。

□□がおいやでないならば

□□の用意をなさりませ。

臀いさらいのおにみびと見鬼人

咀われたやつ等め。好くもそんな事が出来るな。

幽霊には決して立派な脚があつてはならんと、

学者が疾とつくに考証しているじゃないか。

我々あたりまえ当前の人間のように踊るなんて怪けしからん

美人（踊りつゝ。）

あの方はわたし達の踊場へ何しに來たのでしょうか。

ファウスト（踊りつゝ。）

あれかい。あれはどこへでも來る奴だ。

人が踊れば、それに端はたから位くらいづけ附つけをする。

あれが積つもりでは、自分が文句を言わない足取あしどりは、

踏んでも踏まなかつたと同じ事なのだ、

前の方へ踊って出るのは大嫌さ。

あいつの内の水車で粉をひくように、

一つ所を踊って廻っていると、

まあ、かなり気に入るのだ。

なんとか言われた礼を云って遣れば猶更だが。

瞥見鬼人

おや。まだ平気で遣っているな、怪しからん。

消えてしまえ。人智開発を疾くに遣ったのに。

悪魔の同類奴。物に法則があるの知らんか。

こんなに世が開けたのに、テエゲルにはお化が出る。

己の帚で迷信の塵をいつまで払き出せば好いのだ。

綺麗になる時はないのか。怪しからん。

美人

そんな事を言ってわたし達をうるさがらせちゃいや。

瞥見鬼人

なに。己は貴様達化物共に面と向かつて言うぞ。

4165

化物の圧制を受けて溜まるものか。

はてな。己の力で取締まることは出来んかしらん。

（踊る人に押し除けらる。）

この様子ではきよう己は成功しないな。

兎に角 ひとりよごう 旅行だけは持ち廻つて見て、

己が最後の一步をするまでには、悪魔も

4170

詩人も退治して遣るようにしたいものだ。

メフィストフェレス

今に、あいつ、水たまりに尻餅を擣きます。

そうして気持を直すのが、あいつの流義です。

蛭が尻つぺたに吮すい附いて楽しんでるうちに、

あいつは悪魔の祟も智恵の病も直るのです。

4175

（踊の群と離れたるファウストに。）

踊りながらあんな可哀い声で歌っていた、

あの娘をなぜ放してしまったのですか。

ファウスト

でも踊っている最中に、あいつの口から

赤い鼠が飛び出したものだから。

メフィストフェレス

そう云う奴でしたか。そんな事を気にはいけません。

鼠色の鼠でなけりやあ結構じやありませんか。

二人で楽しんでいながら、そんな咎とがめだて立たてをするなんて。

ファウスト

それにちよいと目に附いたものが。

メフィストフェレス

なんです。

ファウスト

あれ、あそこに

美しい、色の蒼い娘が一人離れているだろう。



歩くにひどく手間の取れるのを見ると、

両<sup>りようあし</sup>足を繋がれているのじやないかと思うのだ。

本当の事を言えば、どうもあれが

可哀いグレエトヘンに似ているようだがな。

メフィストフェレス

打ち遣つてお置<sup>おき</sup>なさい。あれに手を出すと災難です。

あれはまやかしです。影です。生きていやしません。

あいつに出くわしては溜まりません。

それ。メズザの話を<sup>きこ</sup>お聞でしよう。それと同じで、

あのじつと見ている目で見られると、人の血が

凝り固まってしまつて、人が石になるのです。

ファウスト

そうさな。なるほどあの目は、死んだ時親類が

瞑<sup>つぶ</sup>らせてくれなかつた屍<sup>しかばね</sup>の目だなあ。だが

あの胸は己に押し附けたグレエトヘンの胸で、

4185

4190

4195

あの体は己を楽ませてくれたあれが体だ。

メフィストフェレス

それがまやかしです。そんなにすぐ騙されては困ります。誰の目にもその人の色のように見えるのです。

ファウスト

でも己は嬉しいようなせつないような気がして、

あの目を見ずにいることは出来ないのだ。

それに妙なのはあの美しい頸の頸飾だな。

小刀のみねより広くないような、

赤い紐が一本巻いてあるなあ。

メフィストフェレス

そうです。わたしにも見えています。

ペルセウスに切られた首ですから、

肩から卸して手に持つことも出来ます。

そういつも物に迷わされたくては困ります。まあ、

この岡の方へおいでなさい。まるでプラアテル同様な賑にぎわいです。  
ちゃんと芝居まで出来ている。

4210

おい。何を遣っている。

口上いい

へえ。すぐ跡の蓋ふたが開きます。

新作です。七つ出す内の七つ目です。

4215

その位の数を出すのが、この土地の風でしてね。

これは作者もしろうとで、

役々もしろうとがせられます。

失礼ですが、ちよいと御免を蒙ります。

幕を開けなくちやなりませんから。

4220

メフィストフェレス

お前がたにこのブロッケンで出くわしたのは  
至極好い。ここがお前方がたにあいに似合の土地だ。

## ワルプルギスの夜の夢

一名

オベロンとチタニアとの金婚式

(間の曲)

座長

道具方<sup>かた</sup>のマイジングさんの手の人達。きようはあなた方はお休<sup>やすみ</sup>です。

古い山に湿った谷が

そのまま舞台になりますから。

先触

金婚式をいたすには

五十年立たなくてはなりません。

それよりはお二人の夫婦喧嘩の息<sup>や</sup>んだのが、

わたしには金きんのように貴いのですよ。

オベロン

こら。眷属ども。己のいる所にいるのなら、

今が見せる時だ。

お前達の王が改めて

妃きさいきと元の夫婦になるのだ。

パック

そこへパックが飛んで出て、くるりと廻つて、

持前の踊の足を踏みます。

そのわたくしの跡からは、一しよにここで楽もうと、

百人ばかり附いて来ます。

アリエル

さて天楽のような声で

このアリエルが歌い出します。

歌の声音こわねにさそわれて、いろんな面めんも出て来るが、

4230

4235

4240

中には綺麗な首もあります。

オベロン

夫婦中好く暮らしたければ、

己達の真似をするが好い。

互に恋しがらせるには、

二人を別けて置くに限る。

チタニア

夫がすねたり、女房がおこつたりすると見たら、

手ばしこく攫<sup>つか</sup>まえて、

男は南、女は北の

空の果<sup>はて</sup>へ連れて行く<sup>ゆ</sup>が好<sup>よ</sup>い。

ツツチイの演奏団

(最も強く。)

蠅<sup>くちばし</sup>の嘴<sup>くちばし</sup>、蚊<sup>はなばしら</sup>の鼻<sup>はなばしら</sup>、梁<sup>はり</sup>、

それからそいつの眷属<sup>らんしやく</sup>等、

木の葉におけるは雨蛙、草の蔭のは<sup>こおろぎ</sup>よ。  
これがわし等の楽人だ。

独吟

見ろ。あそこから木笛が来る。

石<sup>シャボン</sup>鹼のあぶくのようなぎまだ。

低い鼻から出る声は

シュネツケ・シュニツケ・シュナツクだ。

修養中の霊

蜘蛛<sup>くも</sup>の脚<sup>あし</sup>に蝦蟇<sup>ひき</sup>の腹、

小さい奴だが羽はある。

子は生まないが、

詩なら生む。

めおとづれ

蜜の露踏み、香<sup>か</sup>を嗅いで、

小股大股、並んで歩く。

ちよこちよこあるきは精出すが、  
飛んで空へは上そらがられぬ。

4265

### 物好の旅人

こりやあ仮装舞踏じやないか。  
オベロン様と云うのは美しい神様のはずだが、  
きょうこんな処へおいでになつたかなあ。  
己の目がどうかしているのじやあるまいか。

4270

### 正信徒

爪もなけりやあ、尻尾もないが、  
やっぱりグレシアの神どもと同じ事で、  
疑もなく  
あいつも悪魔だ。

### 北国の芸術家

己が今手を著けるのは  
無論習作に過ぎんのだが、

4275



いずれそのうちイタリア旅行の  
支度に掛かるよ。

浄むる人

己は飛んだ所へ来たものだ。

ここでは皆餌<sup>えさ</sup>で人を釣ることばかり考えている。

このおお勢の魔女の中で二人しか  
ちやんと化粧をしてはいない。

若き魔女

おつくりをして著物を著るのは、

白髪頭の婆あさんの事よ。

わたし裸で山羊<sup>やぎ</sup>の背に乗って、

この好<sup>い</sup>い体を見せて遣るわ。

子持女

へん。ここでお前達と喧嘩をする程、

不行儀なわたしどもじゃないがね、

その若い、すらりとした、自慢の姿のままで、  
お前達は腐ってしまいなさるが好い。

楽長

蠅の嘴、蚊の鼻梁。

裸の女を取り巻く。

木の葉に止まる雨蛙も、草むらにいるも、

間拍子をまちがえるな。

風信旗（一方に向きて。）

願ってもない寄合よりあいです。

よめ入盛の方ばかりだ。

男の方かたも一人々々

末頼もしい婿さんばかりだ。

（他方に向きて。）

もしこれでこの土地が口を開あいて、

こいつらをみんな呑み込んでしまわなけりやあ、

己は自分が駆足で

すぐ地獄へ飛び込んでも好い位だ。

クセニエン

わたし共は小さい剪刀はさみを持った

虫になって来ています。

身分相應に悪魔のお父とさんの

お氣に入るような事をいたす積つもりで。

記者ヘンニングス

どうだ、あの一つかたまりに引つ附き合つて、

無邪氣そうにふざけている様子は。

あれで随分情知だとも

云い兼ねないのだからな。

年報ムサゲツト

実は己もこの魔女どもの中へ

一しよに交つてしまいたいのだて。

こいつ等を詩の女神にして持ち出すことなら、  
己にも随分出来そうだからな。

さきの  
前「時代精神」

驥尾<sup>きび</sup>に附すと云うことが出来れば、

なんにでもなれる。己の裾に攫まれ。

ブロッケンでもドイツのパルナツスでも

山の上はなかなか広いからな。

物好の旅人

おい。あのぎごちない風をしている男は誰だい。

高慢ちきな歩附をして、なんでも

嗅ぎ出されるだけの事を嗅ぎ出そうとしている。

イエズイートの搜索でもするのだろうか。

くろづる

わたくしは澄んだ川で釣るのが好<sup>すき</sup>ですが、

濁った川でも釣らないことはありません。

ですから堅固な男が悪魔に交つていても、何も不思議がりなさるには及びませんよ。

世慣れたる人

嘘じやありません。正しい信者には凡ての物が方便了。

ですからこのブロッケンの山でも方々にこつそり寄り合つていまさあ。

踊の群

おや。あつちから新しい連中が来ますね。

遠くに太鼓が聞えています。

まあ、じつとしておいでなさい。あれは葦の中で声を揃えて鳴いている「さんかのごい」です。

踊の師匠

みんな負けず劣らず足を挙げて、出来るだけの様子をして見せているから面白い。

佝僂<sup>せむし</sup>や太つちよも、どんなに見えても構わずに  
飛んだり跳ねたりしているなあ。

### 胡弓ひき

やくざ仲間奴。お互に憎み<sup>くら</sup>つ競<sup>くら</sup>をして、  
出来るなら、息の根を留めたいと思っていながら、  
ここではオルフォイスの琴に寄つて来る獣のように、  
あの木笛の取持で一しよになっているのだな。

4340

### 信仰箇条ある哲学者

批評家や懷疑家がどなったつて、  
己は騙されはしないのだ。  
悪魔も何かでなくてはならぬ。そうでないなら、  
悪魔と云うものがあるはずがないではないか。

4345

### 理想主義者

どうもこん度は己の心の中で  
空想が余り専横になっている。

これがみんな「我」であるとする、  
己はきようはどうかしているぞ。

### 実相主義者

どうもこいつらの「本体」と云う奴が始末におえなくって、  
己にひどい苦勞を掛けやがる。  
ここに来て始めて己の立脚地が  
ぐらついて来たぞ。

### 極端自然論者

己は嬉しがってここに來ていて、  
こいつらと一しよに樂むのだ。  
なぜと云うに惡魔から善<sup>ぜん</sup>靈<sup>だま</sup>に  
推論して行くことが出来るからな。

### 懷疑家

こいつらは火の燃える跡を追つ掛けて行つて、  
もう宝のありが近いと思つているのだ。

「悪」と「惑」とは声も近いようで、

己がここにいるのは所を得ているのだて。

楽長

草叢くさむらにいるに、木葉このはに止まった雨蛙。

お前達は咀のろわれたしろうとだぞ。

蠅の嘴、蚊の鼻梁。

お前達は兎に角楽人だ。

敏捷なる人等

快活な我輩どもの組は

「莫愁会」と云つてね、

もう腰が立たなくなつたから、

頭で歩いて行くのです。

てづつなる人等

今まではお世辞を言つて大ぶお余あまりを貰っていたが、

こうなればもう上がったります。



踊っているうちに沓の底が抜けたから、  
素足で歩いているのです。

鬼火等

わたし共は沼で生れて、  
沼から遣つて来たのだが、  
すぐに踊の仲間に這入つて、  
どうです、立派な色男でしょうが。

隕<sup>いんせい</sup>星

星の光、火の光を  
放つて天から墜ちて来たが、  
今は草の中に転んでいます。  
誰か手を借して起してくれませんか。

肥えたる人等

避<sup>よ</sup>けろ。避<sup>よ</sup>けろ。ぐるりと避<sup>よ</sup>けろ。  
踏みしだかれて草は偃<sup>ふ</sup>す。

そら鬼が往くぞ。手足の太った  
鬼が往くぞ。

パツク

そんな、象の子のような  
太った体をして来るなよ。

どしりどしりときょうなんぞ足踏をして好いのは、  
まあ、この体のがつしりしたパツクさん位のものだ。

アリエル

恵深い自然に羽を貰ったお前達、  
性霊に羽を貰ったお前達は、  
軽く拳がって翔る己の跡に附いて、  
薔薇の岡のすみかへ帰れ。

奏楽団

(極めて微かに。)

雲の段、霧の帷よ。

上<sup>かみ</sup>の方<sup>かた</sup>より今し晴れ行く。

高き梢、低き葦間に、風吹き立ちて、

忽<sup>たちま</sup>ち物皆散<sup>あち</sup>け失せぬ。

## 曇れる日

野原。

ファウスト。メフィストフェレス。

ファウスト

みじめな目に逢っているのだな。途方に暮れているのだな。苦み悩みながら、長い間この世にうろついていて、とうとう牢屋に繋がれたのだ。悪事を働いた女だと云って、あの可哀<sup>ふしあわせ</sup>い、不<sup>ふ</sup>為<sup>あ</sup>合<sup>あ</sup>な女を、牢屋にひどい目に逢わせて、押し籠めてあるのだ。こうなるまで。○人を騙してばかりいる、なんの役にも立たぬ悪<sup>あく</sup>霊<sup>り</sup>奴<sup>ようめ</sup>。○こう云う事を君は己に包み隠していたのだな。そうしてあきれたようにして、立つなら立っているが好<sup>い</sup>いとも。その悪

魔染みた目の玉を、腹立たしげに、頭のうろの中で、勝手にぐるぐる廻しているが好い。己にはもう君のそこにいるのが、我慢の出来ない苦痛だが、勝手にそうして立っていて、反抗的に己にその苦痛を味わせてくれるが好い。牢屋に入れられている。取返の附かない、みじめな目に逢わせられている。悪霊どもと、裁判と云うことを敢てする、無情な人間とに身を委ねている。その間君は面白くもない慰なぐさみを己にさせて、己をぼかしていた。あの娘の苦艱が次第に加わって来るのを隠していた。なんの助をも与えずに、あの娘を墮落の淵に沈ませて、黙っていた。

### メフィストフェレス

何も、ああ云う運命に、あの女だけが始て逢ったのではありませんよ。

### ファウスト

狗奴いぬ。胸の悪い、獣にも劣った獣奴。○ああ。無辺際なる精霊。この蛆虫うじむしを再び本の狗の形に戻してくれぬか。こないだまで夜になると、自分の好きで狗になって、己のように、なんにも思わずに歩いている人間の傍へ駆けて来て、足の前をころがり廻って、人間が倒れたら、肩に前足を掛けようとしていたものだ。あの好きすこの好んでなった狗の形に、再び戻して遣ってくれぬか。そうしたら己は、沙の上を腹這って、己の前に来た時、この廃れも

のを、この脚で踏み附けて遣ることが出来よう。○あの女だけが始めて逢ったのではない。○まあ、なんと云うみじめな事だろう。人間の心に会得することの出来ない程の、みじめな事ではないか。ああ云う艱難困苦の底に陥いるものが一人で足りなくて、外にもあると云うのは。何事をも永遠に免すもの<sup>ゆる</sup>の目の前で、のた打ち廻るような必死の苦痛を、最初たった一人が受けたなら、その外の一切の人間の罪は、もうそれで贖<sup>あがな</sup>つて余<sup>あまり</sup>あろうではないか。○己にはこの一人の難儀が骨身に応え、命を搔きむしるのだ。それに君は何千人かのそう云う人間の運命を、その嘲るような顔附をして見ていて、恬<sup>てん</sup>として顧みないのだ。

### メフィストフェレス

そこでお互様に、早速またお互の智慧の届く限界線に到着したと云うものです。そこまで来ると、あなた方、人間と云う奴は、気が変になつてしまうのです。わたし共と一しよの共同生活が末まで遂げられんのなら、あなた、なぜその共同生活に這入ったのです。あなたなんぞは空が飛びたくはあるが、なんだか眩暈<sup>めまい</sup>がしそうだと云う性<sup>たち</sup>でしょう。一体わたしがあなたに御交際を願ったのですか。それともあなたがわたしに付き合うようにしたのですか。

### ファウスト

まあ、その物を食い厭あきると云うことのなさそうな齒を剥き出して、己に向いてしゃべるなよ。そうせられると、己は胸が悪くなる。○ああ。大いなる、美しき精霊。お前は己に姿を顕して見せることを厭いとわなかったではないか。己の靈智をも情緒をも知っているのではないか。それがどうして己の同どうぎよう行に、こんな、人の危害に遭うのを見て目を樂ませ、人の墮落するのを見て口なめずりをするような、こんな恥知らずをよこして、そいつを己に離れられないように繋ぎ合せてくれたのだ。

メフィストフェレス

もうそれでおしまいですか。

ファウスト

あいつを助けて遣しゆつてくれ。それが出来ると云うなら、容赦はない。何世紀立っても消えない、一番ひどい呪咀のろで、君を咀のろうまでだ。

メフィストフェレス

どうもわたしには、人間の裁判官の掛けた縄を解くことも出来ず、卸した錠前をはずすことも出来ませんね。○あなた助けてお遣やりなさい。○一体あいつをこんな難儀におとし入れたのは誰です。わたしですか。あなたですか。

（ファウスト眼球を回転せしめ、四辺を見廻はす。）

あなたは雷火を天から借りて来て、わたしを焼こうとでも思うのですか。死ぬることのある人間に、そんな力が授けてなくて為合しあわせだ。無邪気に受答うけこたえをしている相手を、粉微塵にでもしようと云うのは、チランノスの流義だ。自分がどうして好いか分からなくなつた時に、そんな事を氣霽きばらしにするのだ。

ファウスト

そんなら己をそこへ連れて行け。どうしてもあの娘は助けて遣らなくてはならんだ。

メフィストフェレス

そこであなたの自ら好んでお冒おかしになる危険は宜しいのですか。あなたはあの土地で、その手で人殺しの罪を犯して、その罪がまだ贖われずにいるのですよ。殺された奴の墓の上には、復讐の悪霊どもがさまよつていて、下手人の帰つて来るのを覗つていますよ。

ファウスト

そんな事まで君の口から聞せるのかい。世界一つにあるだけの、常の死をも、非業の死をも、君に被かぶせて遣つても好い。言おうような無い奴だ。好いから己の云う通とおりに連れて行き給え。そしてあの娘を助けて遣つてくれ給え。

## メフィストフェレス

宜しい。それはあなたを連れて行くし、またわたしに出来るだけの事をしますから、まあ、お聞<sup>きき</sup>なさい。一体わたしに天地万物を自由にする、一切の威力が備わっているとしても、あなたは思っているのですか。それは門番の頭がぼうつとなる位の事は、わたしが遣<sup>やり</sup>つて上げますから、あなた鍵を手に入れて、人間の手で女を引き出してお遣<sup>やり</sup>なさい。わたしは外に張番をしています。魔法の馬の支度をして置きます。それに乗って、連れてお逃<sup>にげ</sup>なさい。それならわたしに出来ます。

## ファウスト

さあ、行こう。

## 夜

豁<sup>かつ</sup>開<sup>かい</sup>せる野。

ファウストとメフィストフェレスと黒き馬に乗り、疾駆しつゝ登場。



ファウスト

あいつらはあの処刑場の円壘しおきば まるづかで何をするのだ。

メフィストフェレス

何を烹にるやら、りようるやら、わたしも知らない。

ファウスト

空を飛んだり、降りて来たり、屈かがんだり、しゃがんだり。

メフィストフェレス

魔女のわざくれですね。

ファウスト

灰を蒔まいて祈まっているな。

メフィストフェレス

もう通り過ぎました。

牢屋

ファウスト手に一束の鍵とランプとを持ちて鉄の扉の前に立ちゐる。

ファウスト

もう久しく忘れていた震<sup>ふる</sup>が己<sup>い</sup>を襲<sup>襲</sup>つて来る。

人間の一切の苦痛を己は身に覚える。

この湿った壁の奥にあれが住まっているのだ。

なんの悪気もない迷で犯した罪だのに。

貴様、這入って行くのをたゆたっているな。

あの娘にまた逢うのをこわがっているな。

遣れ。貴様の躊躇は女の死を促す躊躇だ。

(ファウスト鎖<sup>さ</sup>鑰<sup>やく</sup>に手を下す。)

声 (内にて歌ふ。)

あはれ、我身を殺しゝは

うかれ女<sup>め</sup>、我母。

あはれ、我身を食<sup>く</sup>ひつるは

をそ人、我父。

冷やかなる奥津城に、

小さき妹

我骨を埋めつ。

羽美しき森の小鳥とわれなりぬ。

われは飛ぶ、われは飛ぶ。

ファウスト（鎖鑰を開きつゝ。）

歌うのを、鎖の鳴るのを、敷藁のさわつくのを、

恋人が聞いているとは、夢にも知らんのだ。

（進み入る。）

マルガレエテ（床の中に隠れむとしつゝ。）

どうしよう。どうしよう。来るわ。いじめ殺しに。

ファウスト（小声にて。）

黙っておいで。黙っておいで。来たのは己だ。お前を助けに。

マルガレエテ

(ファウストの前にまろがり寄る。)

お前さんも人間なら、どうぞ難儀を察して下さい。

ファウスト

そんなに大声をしては、番人が目を醒ますじやないか。

(女の鎖鑰を開かんとす。)

マルガレエテひざまず(跪く。)

まあ、首斬役のあなたが、わたくしを

自由になさるようには、誰がいたしましたか。

まだ夜なかなかのに、もう連れにおいでなさる。

どうぞ堪忍して、生かして置いて下さいまし。

あすの朝だつて遅くはないではございませんか。

(立ち上がる。)

わたくしはまだこんなに、こんなに若いじゃありませんか。

それにもう死ななくてはならないのですか。

これで美しゆうもございました。それが悪うございました。

頼たのんだお方が傍においでになったのが、遠くへいらつしやいました。

青葉の飾は破られて、花はむしられてしまいました。

そんなに荒々しくお攫つかまえますな。

御免なさい。あなたに何もいたした覚おぼえはありません。

これまで一度もお目に掛かったことがないじゃありませんか。

どうぞこのお願をお聞きこ流ながしなさいで下さいまし。

ファウスト

ああ。この悲惨な有様を見てこられようか。

マルガレエテ

もうわたくしはあなたの思召次第になっています。

どうぞ赤さんにお乳を飲ませる間お待まち下さいまし。

わたくしは夜どおし可哀がつて遣っていましたの。

それを人が取ってわたくしをせつながらせようと思って、

わたくしが殺したのなんのと申します。

わたくしはもう面白い心持になることは出来ません。

4435

4440

4445

わたくしの事を歌に歌うのですもの。意地の悪いこと。  
あるお伽話のしまいがこうなつたのでございます。  
誰たがそれをあの人達に解とけと申しましょう。

ファウスト（身を倒す。）

おい。お前をこのみじめな囚とらわれの境から  
救おうと思つて、恋人がここに伏ふしているのだぞ。

マルガレエテ（共に身を倒す。）

どうぞ一しよに聖者様方を拜たたんで下さいまし。

御覧なさい。この踏段の下には、

この敷居の下には

地獄の火が燃えています。

悪魔が

おそろしくおこつて、

ひどい音をさせています。

ファウスト（声高く。）

グレエトヘン。グレエトヘン。

マルガレエテ（注意して聞く。）

おや。あれはあの方かたのお声だわ。

（跳り上がる。鎖落つ。）

どこにいらつしやるだろう。お呼よびになつたわ。

わたしは免ゆるされた。もう誰にも邪魔はさせない。

あの方のお頸に飛び附いて、

あの方のお胸に抱かれない。

お呼よびになつたわ。あの敷居の上にお立たちになつて。

どうがたがたと地獄の音がしている中から、

腹立たしげな悪魔の嘲あざわらい笑の中から、

あのいとおしい、お優しいお声が聞えたわ。

ファウスト

己だよ。

マルガレエテ

あなたなの。どうぞもう一遍仰やつて。

4470

あなただわ。あなただわ。苦勞はみんなどこへ行つただろ。  
牢屋の苦難は。あの鎖は。

あなただわ。助けに来て下すつたのだわ。

わたしはもう助かった。

あれ。あなたに始てお目に掛かった、

4475

あの町がもうそこに見えます。

マルテさんとわたしとでお待ち申した

晴やかな庭もそこに見えます。

ファウスト（伴ひ去らんとして。）

さあ、一しよに来い、来い。

マルガレエテ

まあ、お待ちさいましよ。

わたくしあなたのいらつしやる所にいたいのですもの。

4480

（あまえゐる。）



ファウスト

早くしなくては。

手間取ると、どんなに悔やんでも

及ばないことになるのだ。

マルガレエテ

まあ。もうキスをすることもお忘<sup>わすれ</sup>なすつたの。

あなたほんのちよつとの間別れていらつしやつて、

もうキスをすることもお忘<sup>わすれ</sup>なすつたの。

こうしてあなたに縋<sup>すが</sup>つているのに、なぜせつないのでしょうか。

何か仰やつて、わたくしを御覧なすつて、

息の詰まる程キスをして下さると、

天<sup>てん</sup>がそつくり落ちて体に被<sup>かぶ</sup>さつて来ましたのに。

キスをして下さいよう。

なさらないけりや、わたくしがいたしますわ。

(抱き附く。)

あら。あなたのお口のつめたいこと。

それに黙っていらつしやるのね。

お情は<sup>なさけ</sup>どこへ行つて

しまいましたの。

わたし誰に取られてしまったのだろ。

(背を向く。)

ファウスト

おいで。おれに附いておいで。しつかりしてくれなくちや。

跡でどんなにでも可哀がつて遣る。

どうぞ附いて来てくれ。これだけがお願だ。

マルガレエテ<sup>おもて</sup>(面を向く。)

本当にあなたなの。きつとでしようか。

ファウスト

己だよ。おいで。

マルガレエテ

あなた鎖を解いて下すつて、

またわたくしをお抱<sup>かかえ</sup>なすつて下さるのね。

なぜ氣味が悪くは思召さないのでしょ。

一体どんな女を助けて下さるのだから、あなた、御存じ。

ファウスト

おいで。おいで。もう夜が明け掛かつて来る。

マルガレエテ

わたくし母<sup>か</sup>あ様を殺してしまつて、

赤さんを水の中へ投げ込みましたの。

あれはわたくしとあなたとの赤さんじゃありませんか。

あなたも親だわ。本当にあなたなの。本当かしら。

お手に攫<sup>ふ</sup>まらせて頂戴な。夢じゃないわ。

可哀らしいお手。でもつめたいこと。

お拭<sup>ふ</sup>なさいよ。なんだか

血が附<sup>つ</sup>いているようだわ。

4505

4510

まあ、飛んだ事をなすったのね。

どうぞその拔身を

おしまいなすって。

ファウスト

もう昔の事は置いてくれ。

己は死んででもしまいそうだ。

マルガレエテ

いいえ。あなたは生きていて下さらなくちや困るわ。

わたくしお墓を立てる所をそう申して置きましょうね。

あしたすぐ

行つて見て下さいましな。

母<sup>か</sup>あ様のを一番好<sup>い</sup>所<sup>ところ</sup>へ立てて、

兄いさんのを傍へ引つ附けて立てて、

それからわたくしのを少し離して。

あんまり遠くになすつてはいやよ。

4515

4520

4525

それからわたくしの右の胸の方<sup>ほう</sup>へ赤さんを埋めて、  
その外の人は傍へ寄せないで下さいまし。

わたくしあなたのお傍に寄るのが、

本当に嬉しい、楽しい事でございましたの。

それが、なぜだか、もう出来ませんわ。

なんだか無理にお傍へ寄ろうとするようで、

なんだかあなたがお衝<sup>つきもと</sup>戻しなさるようで。

でもやっぱりあなたなのね。好い、優しい目をなすつて。

ファウスト

4535

己だと云うことが分かったなら、さあ、おいで。

マルガレエテ

あちらへ。

ファウスト

外へ出るのだ。

マルガレエテ

4530

外にお墓がございまして、

死が待っていますのなら、参りましょう。

わたくしここからすぐお墓へまいりますの。

それから先へは一足も参りません。おや。もうお帰かえり

なさいますの。わたくし御一しよに参りたくて。

ファウスト

来られるのだ。来れば好い。戸はあいている。

マルガレエテ

わたくし参られませんの。どうせ駄目でございますから。

逃げてどうなりましょう。待まちぶせ伏ふせをしていますわ。

乞食になります程みじめな事はございません。

それに良心の呵責を受けていますのですもの。

知らない国をさまよい歩くのはいやでございますし。

それにすぐ攫さらまってしまうすわ。

ファウスト

己が附いていて遣るのだ。

マルガレエテ

あ。お早くなすつて。お早くなすつて。

あなたの赤さんですから、お助<sup>たすけ</sup>なすつて。

あちらです。この道を

どこまでも川に附いて上手へ、

あの狭い道をおぬけになって、

森の中へお這<sup>はいり</sup>入なさると、

あの左側の柵<sup>さく</sup>の結<sup>い</sup>つてある所の

池の中でございます。

どうぞすぐお攫<sup>つか</sup>まえなすつて。

浮き上がろうといたして

まだ手や足を動かしています。

お助<sup>たすけ</sup>なすつて。お助<sup>たすけ</sup>なすつて。

ファウスト

4550

4555

4560

おい。気分をはつきりさせてくれないか。  
つい一足出れば助かるのだ。

マルガレエテ

ほんにこの山を早く越してしましましょうね。

母あ様があそこに石に腰を掛けていらつしやるわ。

わたくし髪の根元を締め附けられるようです。

母あ様があそこに石に腰を掛けていらつしやって、

頭をぶらぶら振っていらつしやるわ。

手真似も、合点合点もなさらないわ。お頭<sup>つむり</sup>が

お重いのだわ。長くお休<sup>やすみ</sup>になつて、もうお起なさないの。

わたくし共が楽しむようにお休になつたのだつたわ。

あの頃の面白かつたこと。

ファウスト

いくら言つて聞せて、頼んでも駄目なら、

己はお前を抱えて出よう。



マルガレエテ

お廃<sup>よし</sup>なさいまし。力ずくはいやですわ。

そんなにひどくお攫<sup>つかみ</sup>なすつちやあ、いや。

外の事はなんだって仰やる通にしたじやありませんか。

ファウスト

夜が明けて来た。おい。おい。

マルガレエテ

夜が明けましたって。そうですね。わたくしの

最期の日ですわ。婚礼をいたす日ですわ。

泊ったことがあるなんぞと、誰にも言わないで下さいまし。

青葉の飾が破れましたわ。

もう出来たことはいたしかたがございません。

またどこかでお目に掛かりましょうね。

踊場でないところでね。

今人が寄って来ますが、聞えないのですわ。

四角<sup>よっかど</sup>にも往来にも

這入り切りませんのね。

鐘を撞いてしまった。杖を折ってしまった。

わたくしを攫<sup>しおき</sup>まえて縛りましたわ。

もう処刑場<sup>しおきば</sup>へ連れて来られましたわ。

今の刀の刃がどの人<sup>うなじ</sup>の項にも、

わたくしの項にも打ち卸されて来ますわ。

そこいら中が墓の中のように静かになりましたこと。

ファウスト

ああ。己は生れて来なければ好かった。

メフィストフェレス戸の外に現る。

メフィストフェレス

おいでなさい。おいでなさらないと駄目です。

ぐずぐずしていたってなんにもなりません。余計な

話なんかしていて、馬が身慄をしています。

もう夜が明けそうだから。

マルガレエテ

あのそこへ地の底から出て来たのはなんでもございましょう。

あれだ。あれだ。どうぞあれをいなせて下さいまし。

この難<sup>ありがた</sup>有い所へあんな人が何しに来ますでしょう。

わたくしを連れに。

ファウスト

お前の命を助けに。

マルガレエテ

いいえ。いいえ。わたくしは神様の御裁判に任せます。

メフィストフェレス（ファウストに。）

おいでなさい。おいでなさい。女と一しよに置いて行きますぜ。

マルガレエテ

天<sup>てん</sup>にいます父<sup>ちち</sup>よ。わたくしはあなたにお任せ申します。

お助<sup>たすけ</sup>下さい。天使の、神聖な群が、

どうぞわたしを取り巻いて、護っていますように。  
ハインリヒさん。わたくしあなたがこわくてよ。

メフィストフェレス

あれが処刑だ。  
しおき

声 うえ（上の方より。）

すくい  
救だ。

メフィストフェレス（ファウストに。）

早くこつちへ。

（ファウストと共に退場。）

声

（内より、遠く消え去らんとする如く聞ゆ。）

ハインリヒさん。ハインリヒさん。



悲壯戯曲の第二部

## 第一幕

### 風致ある土地

ファウスト草花咲ける野に横りて、疲れ果て、不安らしく、眠を求めゐる。  
黄昏時たそがれどき

精霊の一群、空に漂ひて動けり。優しき、小さき形のものどもなり。

アリエル

（歌。アイオルスの箏の伴奏にて。）

「雨のごと散る春の花

人皆の頭こゝろの上に閃き落ち、

田畑の緑なる恵青人草めぐみに

かゞやきて見ゆる時、

身は細<sup>ほそ</sup>けれど胸広きエルフの群は

救はれむ人ある方<sup>かた</sup>へ急ぐなり。

聖<sup>ひじり</sup>にもせよ、悪しき人にもせよ、

幸なき人をば哀とぞ見る。」

この人の頭の上で、空に圈<sup>わ</sup>をかいてゐるお前達。

いつもの優しいエルフの流義でこの場でも働いてくれ。

あれが胸のおそろしい闘を鎮めて遣れ。

身を焼くやうに痛い、非難の矢を抜いて遣れ。

これまでに受けた怖<sup>おそれ</sup>を除けて胸を淨めて遣れ。

夜<sup>よる</sup>の暇<sup>ひま</sup>には四つの句切<sup>くぎり</sup>がある。

今すぐにその句切々々を優しく填めて遣れ。

先づあの頭にそつと冷たい枕をさせて、

それから物を忘れさせるレエテの水の雫<sup>ゆあみ</sup>に浴させて遣れ。

そこで疲が戻つて静かに夜明を待つうちに、

引き弔<sup>つ</sup>つてゐた手足のあがきが好くなるだらう。



さうしてあれを神聖な光の中へ返して遣つて、  
エルフの義務の中の一 番美しい義務を尽せ。

合唱する群

(或は一人々々、或は二人づつもしくは数人づつ、或は交互に入り変り、或は寄り  
集ひて。)

あたゝけき風の戦そよぎ

緑に囲はれたる野に満てるとき、

黄昏たそがれは甘き香を

霧の衣ころもを降り来させ、

楽しき平和を低く囁き、穉子おさなごを

寐ねさするごとく心を揺りて眠らしむ。

かくて疲れたる人の目の前に

昼の門の扉はさゝる。

4640

夜よははや沈み来ぬ。

4635

星は星と淨く群れ寄る。

大いなる火も、小さき光も

近くかゞやき、遠く照る。

湖に映りてこゝにはかゞやけり。  
みづうみ

澄みたる夜の空にかしこには照れり。  
よ

いと深き甘寐の幸を護りて、  
うまい さち

月のまたき光華は上にいませり。

4645

幾ばくの時かは知らねど、その時はや消え失せぬ。

痛も幸も跡なくなりぬ。  
いたみ

先だちて知れ。汝は痊えなむ。  
なれ

たゞ新なる朝日の光を頼め。

谷々は緑芽ぐみ、岡は高まりて、

茂りて物蔭の沈黙をなす。  
しじま

さて穀物の穂はゆらげる  
たなつもの

4655

波の形して収穫<sup>とりいれ</sup>の日を待てり。

汝<sup>なれ</sup>が願をつぎ／＼に成さんとせば

たゞかしこなる光を望め。

汝は軽らかに閉ぢ籠められたり。

眠<sup>から</sup>は殻なり。剥<sup>は</sup>ぎ棄てよ。

庸<sup>つねびと</sup>人の群たゆたひ避けむとき、

自ら励ましてなすことをな忘れそ。

心得<sup>と</sup>て疾く手を著くる

心高き人のえなさぬことあらめや。

アリエル

聞け。遷り行く時の神ホライの駆ける風を聞け。

霊の耳には音が聞えて、

もう新しい日が生れた。

岩の扉はからからと鳴つて開<sup>あ</sup>く。

日の神フォイボスの車はどうとうと響いてめぐ転る。

まあ、光の立てる音のすさまじいこと。

金笛、喇叭らっぱの音がする。

目はまじろいて、耳はおどろく。

耳も及ばない響は聞えない。

潜もぐり入れ、花の萼うてなに、

深く、深く、岩の迫間はざま、

木の葉の蔭こに閑はかに住むために。

あの音に出合ったら、お前達は聾つんぼになる。

### ファウスト

天の瀬氣こうきの薄うす明あかりに優しく会釈をしようとして、

命の脈がまた新しく活潑に打っている。

こら。下界。お前はゆうべも職むなしを曠むなゆうしなかった。

そしてけさ疲つかれが直って、己の足の下で息をしている。

もう快樂を以て己を取り巻きはじめる。

断えず最高の存在へと志ざして、

力強い決心を働かせているなあ。

もう世界が薄<sup>うす</sup>明<sup>あかり</sup>の中に開かれている。

森は千万の生物<sup>いきもの</sup>の声にとよみわたっている。

谷を出たり谷に入ったり、霧の帯<sup>なび</sup>が靡<sup>なび</sup>いている。

それでも天の明<sup>あかり</sup>は深い所へ穿<sup>うが</sup>って行くので、

木々の大枝小枝は、夜潜んで寝た、

薫る谷底から、元気好く芽を吹き出す。

また花も葉もゆらぐ珠を一ぱい持っている深みが、

一皮一皮と剥がれるように色取を見せて来る。

己の身のまわりはまるで天国になるなあ。

上<sup>うえ</sup>を見ればどうだ。巨人のような山の巔<sup>いただき</sup>が

もう晴がましい時を告げている。

あの巔は、後になって己達の方へ

4685

4690

4695

向いて降りる、とわの光を先ず浴びるのだ。

今アルピの緑に窪んだ牧場に、

新しい光やあざやかさが贈られる。

そしてそれが一段一段と行き渡る。

日が出た。惜しい事には己はすぐ羞明まぶしがって

背を向ける。沁み渡る目の痛いたみを覚えて。

あこがれる志が、信頼して、努力して、

最高の願の所へ到着したとき、成就の扉の

開あいているのを見た時は、こんなものだな。

その時その永遠なる底の深みから、強過ぎる、

ほのぼのほのぼとばし  
が迸り出るので、己達は驚いて立ち止まる。

己達は命の松明たいまつに火を点そうと思つたのだが、

身は火の海に吞まれた。なんと云う火だ。

この燃え立つて取り巻くのは、愛あいか、憎にくみか。

4700

4705

4710

よろこびやみ  
喜と悩におそろしく交る／＼襲われて、  
穉かつた昔の羅ものに身を包もうとして、  
また目を下界に向けるようになるのだ。

好いから日は己の背後の方におれ。

己はあの岩の裂目から落ちて来る滝を、  
次第に面白がって見ている。

一段また一段と落ちて来て、千の流になり

万の流れになり、飛沫を

高く空中に上げている。

しかしこの荒々しい水のすさびに根ざして、七色の虹の  
常なき姿が、まあ、美しく空に横わっていること。

はつきりしているかと思えば、すぐまた空に散って、  
勻ある涼しい戦をあたりに漲らせている。

この虹が人間の努力の影だ。

あれを見て考えたら、前よりは好く分かるだろう。  
人生は彩られた影の上にある。

## ファルツの帝都

玉座の間。<sup>ま</sup>閣臣帝の出御を待ちゐる。  
喇叭の音。<sup>うつぱ</sup>華美なる服装をなせる宮中  
の雑役等登場。帝出でて玉座に就く。  
天文博士帝の右に侍立す。

## 帝

遠くからも近くからも寄つて来た、  
忠実な皆のものに己は挨拶をいたす。  
そこで賢者は己の傍に来ているが、  
阿房はどういたしたのだ。

## 貴公子

只今お附<sup>つき</sup>申して参る途中で、  
殿様の袍<sup>ほう</sup>の裾<sup>すそ</sup>の



すぐ背後で、階段の上に倒れました。あのでぶでぶ太った、重い体は、誰やらがかついで行きました。酒に酔ったのか、死んだのか、分かりません。

4735

## 第二の貴公子

そういったすと珍らしいすばやい奴があるもので、替の男がすぐにその場へ割り込んで参りました。実に面白い、目に立つなりをいたしています。しかしどうも異様ですから、誰も一寸見て驚きます。それで御守衛が矛を十文字にいたして敷居際で留めていました。

4740

や。でもあそこへまいりました、大胆な馬鹿が。

## メフィストフェレス

(玉座の前に跪きつゝ。)

来ねば好いがと云われていても、来て歓迎せられるのは何か。いつも待たれていて、来ると逐い出されるのは何か。

どこまでも保護を加えられるのは何か。

4745

ひどく叱られたり苦情を言われたりするのとは何か。  
殿様のお呼<sup>よび</sup>寄<sup>よせ</sup>になつてならないのは誰か。

名を聞くことを皆が喜ぶのは誰か。

玉座の下へ這い寄つて来るのは何か。

土地をお構<sup>かま</sup>になるように自分でしたのは何か。

4750

帝

まあ、差<sup>さ</sup>当<sup>あた</sup>りそんなに饒<sup>しやべ</sup>舌<sup>ぜ</sup>らんでも好<sup>い</sup>い。

この場ではそんな謎のような物は不用だ。

謎を掛けるのは、そこらにいる人達の為<sup>しごと</sup>事<sup>こと</sup>だ。

掛けられたら、お前解<sup>と</sup>け。己<sup>おれ</sup>が聞いて遣<sup>は</sup>る。

前いた阿房<sup>あへ</sup>はどうやら遠くへ立つたらしい。

お前<sup>おれ</sup>そいつの替<sup>かわ</sup>りになつて、己<sup>おれ</sup>の傍<sup>はた</sup>にいてくれい。

4755

(メフィストフェレス階段を登りて左に侍立す。)

衆人の耳語

新参の阿房か。○新規な難儀だな。○

どこから来たのだろう。○どうして這入ったのだろう。○

先<sup>せん</sup>のは倒れたのだ。○お暇乞<sup>けん</sup>だった。○

あいつは酒樽だった。○こいつは<sup>こけら</sup>だ。

帝

さて、遠くからも近くからも寄つて来た

忠実な皆のものに、己は挨拶をいたす。

丁度お前達は好<sup>よ</sup>い星の下<sup>もと</sup>へ寄つた。

空<sup>そら</sup>には好運や祝福が書いてある。

然るに、この、いらぬ憂を棄てて、

舞踏の日のように面<sup>めん</sup>を被つて、

面白い事ばかり見聞<sup>みきき</sup>して楽もうとしている、

この日に、一体なぜ評議なんぞをして

面倒な目を見んではならんのか。

まあ、兎に角お前達がせねばならんと云うから、

そんならそうとして、する事にした。

尚書

人間最高の徳が、聖者の毫ごうこう光のように、

殿様のおつむりを囲んでいて、それを有功に

御実行なさることは、殿様でなくては出来ません。

それは公平と申す事でございます。人が皆

愛し、求め、願い、無いのに困るこの徳を、

民に施しなさるのは殿様でございます。

しかしこんな風俗が時疫のように国に行われて、

悪事の上に悪事が醸し出されては、

心には智慧、胸には慈愛、手には

敏活があつたと云つて、なんになりましょう。

どなたでもこの高殿の上から、広い国くにじゅう中を

お見卸みおろしなされたら、苦しい夢のお氣がいたしましょう。

異形のものばかりが押し合つて、

不法が法らしく行われて、  
間違が世間一ぱいになっていますから。

4785

家畜を盗む。女を盗む。

寺から杯や、十字架や、燭台を盗む。

そして長い間、<sup>はだえ</sup>膚をも傷られず、

体をも損われずにいるのを自慢話にする。

4790

そこで原告が押し合つて裁判所に出て見ると、

判事はただ厚い布団の上に息張<sup>いば</sup>っている。

<sup>そと</sup>外には次第に殖える一揆の群集が

怒濤のように寄せては返しているのに。

身方の連累者の 申<sup>もうしたて</sup>立を土台にして、

4795

相手の罪を責めることは出来、

孤立している無辜<sup>むこ</sup>の民は、

却つて「有罪」と宣告せられる。

そう云う風に世は離れ離れになつて、  
当然の事は烏有に歸してしまします。

4800

民を正道に導くただ一つの誠が

どうしてここに發展して参りましょう。

しまいには正直な人が

佞人<sup>ねいじん</sup>に、贈賄者になつて、

賞罰を明にすることの出来ない

4805

裁判官は犯罪者の群に入ります。

これでは余り黒くかいた画のようでござりますが、

実はもつと厚い幕で隠したかったのでござります。

(間。<sup>ま</sup>)

いずれ断然たる御処置がなくてはなりませんまい。

民<sup>やぶそこな</sup>が皆傷<sup>いた</sup>り害<sup>やぶ</sup>い、皆痛<sup>いた</sup>み悩<sup>なや</sup>んでいましたら、

4810

恐れながら帝位の尊厳も 賊<sup>ぬすまれもの</sup>物<sup>もの</sup>になつてしましますう。

兵部卿

まあ、此頃の乱世の騒はどうでござりましょう。

一人々々が殺しもし、殺されもして、

号令をしても皆聾のようでござります。

市民は壁の背後に、騎士は

岩山の巢に立て籠って、

公に背いて、踏みこたえようとして、

私の戦鬪力の維持に力めている。

傭兵は気短に、

給料の下渡をぎようぎようしく催促して、

それを払ってしまつたら、

皆逃げてしまひそうにしている。

皆の望んでいる事を、誰でも禁じたら、

それは蜂の巢をつついたようであろう。

その傭兵が守るはずの、国はどうかと云うと、

掠められ、荒されている。

暴れる<sup>あば</sup>ままに暴れさせて置くうちに、

国は半分もう駄目になつています。

まだ外藩の王達はおられますが、

どなたもそれを我事とはなさりませぬ。

### 大府卿

もう誰が聯邦の盟<sup>ちかいあて</sup>を当にしましょう。

約束の貢は、水道の水が切れたように、

少しも来なくなりました。

それにこの広いお国の中でも、占有権が

どんな人の手に落ちたと思召します。

どこへ行つて見ても、新しい人間が主人になつて、

独立して生計<sup>せいけい</sup>を営むと云つています。

どんな事をしていたつて、見ている外はありません。

あらゆる権利を譲つて遣つて、もう公<sup>おおやけ</sup>の手に

残っている権利は一つもありません。



あの党派と云っているものなぞも、

今日になつてはもう信賴することは出来ません。

賛成しても、非難しても、愛憎どちらでも

構わぬと云う冷澹な心持になっています。

身方のギベルリイネンも、相手のゲルフエンも、

手を引いて、いっらく佚<sup>いっらく</sup>樂<sup>らく</sup>を貪<sup>いっらく</sup>っています。

誰が隣国なんぞを援けようといたしましょう。

てんでにしないで はならぬ事がありますから。

金<sup>きん</sup>穴<sup>けつ</sup>の戸口には柵が結つてあつて、

一人<sup>ひとり</sup>々々が掘り出して、搔き集めているだけで、

内<sup>ない</sup>帑<sup>と</sup>はいつも明<sup>あき</sup>虚<sup>がら</sup>になっています。

### 中務卿

わたくしの方も随分不幸に逢っています。

毎日々々節儉をいたそうとしていて、

毎日々々費用が嵩<sup>かさ</sup>むばかりでございます。

それにわたくしの難儀は次第に殖えて参ります。

まあ、お料理人の手元だけはまだ不足がありません。

鹿に麝<sup>かもしか</sup>、鹿、兎に野猪<sup>いのしし</sup>、

鶏にしゃも、鰯<sup>あひる</sup>に鴨、

そう云う生物の貢は本<sup>しやうぶつ</sup>が確<sup>もとたしか</sup>で、

まだかなりに這入つてまいります。

それでも酒がそろそろ足りなくなつてまいります。

これまでは出所<sup>でどころ</sup>の好<sup>よ</sup>い、時代のあるのが、

樽を並べて積み上げて、穴蔵にありましたのに、

皆様が引切<sup>ひきぎり</sup>もなくお飲<sup>のみ</sup>になるので、

もうそろそろ残<sup>のこり</sup>少<sup>すくな</sup>になつて来ました。

此頃は町役所<sup>たくわえ</sup>の貯<sup>たくわえ</sup>までを取り寄せて、

それ大杯に注げ、鉢に注げと、

皿小鉢<sup>つくえ</sup>を卓の下に落すまで、お飲<sup>のみ</sup>になる。

その跡始末と勘定はわたくしがいたします。

4855

4860

4865

猶太商人は容赦なく、

4870

歳入を引当にいたして、いつも翌年のを

繰り上げて納めています。

飼つてある豕は肥えませぬ。

お褥の鳥の羽も質に這入っております。

借越のパンを差し上げるのも致方がございません。

帝

4875

(暫く考へて、メフィストフェレスに。)

どうだ。まだその外に難儀のあるを知っているか。

メフィストフェレス

わたくしですか。存じません。こうして殿様はじめ

皆様の御盛んな様子を拝しています。帝位の尊厳で

いやおうなしにお命じなさるに、

なんで信用が足りますまい。

智慧と働とで強くなっている、多方面な善意が

4880

お手廻てまわりにあるに、なんの威力が方々に仇をしまししょう。  
こう云う星の数々が照っている所で、  
何が寄つて災難や暗黒になることが出来ましよう。

## 耳語

あいつ横着者だね。○巧者な奴だね。○  
胡麻を磨り込みおる。○遣れる間遣るでしよう。○  
分かつていまさあ。○内々何を思っているか。○  
これからどうすると云うのです。○建白でもするのでしよう。

## メフィストフェレス

一体この世では何かしら足りない物のない所はありません。  
あそこで何、ここでは何が足りぬ。お国では金が足りぬ。  
それだと云つて床ゆかの下を掘つて出すことは出来ません。  
そこは智慧で、どんな深い所からでも取つて来ます。  
山の礦脈の中や、人家の地ちの底に、  
金塊もあれば金貨もあります。

そんならそれを誰が取って来るかとお尋ねなさるなら、  
力量のある男の天賦と智慧だと申す外ありません。

尚書

天賦と智慧だの、自然と霊だのとは信徒は云わない。

そんな話はひどく危険だから、

無神論者を焚き殺すのだ。

自然と云う罪障と、霊と云う悪魔とが、

夫婦になつて片羽な子を生んで育てる。

その子が懷疑だ。

ここにはそんな事はない。殿様の古いお国には、

ふたとおり  
一一 通の門閥が出来て、

それが玉座を支えている。

それは聖者と騎士なのだ。

この方々かたがたがどんな暴風雨をも相手に闘つて、

その報むくいに寺院と国家とを取りまかなう。

4895

4900

4905

ところが腹の極きまらない下賤な奴の心から  
反抗が起つて来る。

4910

それが背教者だ。魔法使だ。

そう云う奴が都をも国をも滅すのだ。

そう云う奴を今お前は、臆面のない笑談で、

この尊い朝廷へ口入をしようとしている。

お前達は腐った根性を守もり育てている。

4915

そう云う奴は皆阿房の同類だ。

メフィストフェレス

お詞こしで学者でいらつしやることが知れますな。

なんでも手で障つて見ない物は、何里さきも先にある、

握つて見ない物は、まるで無い、

十露盤そろばんで当つて見ない物は謠はかりだ、

秤で掛けて見ない物は目方がない、

自分で鑄たのでない銭は通用しないと思召す。

4920

## 帝

そんな話で物の足りぬのが事済にはならぬ。

断食の時の説教のような講釈でどうしようと云うのか。

こうしたらとか、どうしたらとか、際限なく云うのには厭あいたぞ。

金が足りぬ。好よいわ。金をこしらえい。

## メフィストフェレス

おいり用の物は拵そろえますとも、それより多分に拵そろえます。

造ぞう倣さもない。しかしその造倣ぞうさもない事がむずかしいのです。

現げんにそこにある。しかしそれを手に入れるのが

術で、誰がその術に手を著きけましょう。

一寸考えて御覧なさい。疆さかいを侵した外寇つなみの海嘯つなみに、

土地も人民も溺れた、あの驚怖時代に、

どんなにか不本意には思っても、誰彼が

一番大事な物をあそこここに隠したのです。

ロオマ人が暴威を振った時から、そうでした。

それからずつときとうまでもきようまでも、そうです。  
それが土の中にじつとして埋もれている。

土地は殿様のだ。殿様がそれをお取<sup>とり</sup>になるが宜しい。

### 大府卿

阿房にしてはなかなか旨く述べ立てるな。

勿論それはお家柄の殿様の権利だ。

### 尚書

悪魔がお前方に金糸を編み入れた罫を掛けるのだ。

どうも只事ではないようだぞ。

### 中務卿

少しは筋道が違っていても好<sup>い</sup>いから、

御殿の御用に立つ金を拵えて貰いたいものだ。

### 兵部卿

阿房奴賢いわい。誰にも都合の好い事を約束しおる。

兵隊なんぞは、どこから来た金かと問いはしない。



メフィストフェレス

もしわたくしに騙おもいされるところなら、

それ、そこにいます、あの天文博士にお尋なさい。

やれ躑てんじ次だの十二宮だのと、隅から隅まで知ってござる。

一つ言つて貰いましょう。きょうの天文はどうですな。

耳語

横著者が二人だ。○以心伝心できあ。○

阿房に法螺吹が。○御前近くにいます。○

聞き陳ふした。○昔の小歌だ。○

阿房が吹き込む。○博士がしゃべるのですな。

天文博士

(メフィストフェレスせりふ白を附く。博士語る。)

一体日そのものは純金でございます。

水星は使わしめで、給料を戴いて目を掛けて貰う。

金星と云う女奴は皆様を迷わせて、

朝から晩まで色目で見ている。

色気のない月奴は機嫌買ですねている。

火星はお前様方を焼かぬまでも、威勢で嚇おどしている。

木星は兎に角一番美しい照様をする。

土星は大きい、目には遠くて小さく見える。

あいつが金かねになると鉛だが、余り難ありがた有くありません。

値段は安くて目方が重い。

そうですね。ただ日に月が優しく出合うと、

金銀が寄つて、面白い世界になる。

その上には得られないと云うものはありません。

御殿でも、庭でも、小さい乳房でも、赤い頬ほおでも、

そんな物を得させるのは、我々の中で誰一人

出来ない事の出来る学者の腕でございます。

帝

あれが云う詞には己には二重に聞えるが、

4960

4965

4970

そのくせどうもなるほどとは合点が出来ぬ。

耳語

あれがなんの用に立つだろう。○連枷からさおで打った

跡のような洒落だ。○暦いじりだ。○鍊金の真似だ。○

あんな事は度々聞きました。○そしていつも騙されました。○

よしや出て来たところで。○謔っぱちですよ。

メフィストフェレス

皆さんはそこに立って呆れていなさるばかりで、

大した見附物を御信用なさらない。

草の根で刻んだ人形をたよりにするとか、

黒犬を使うとか云うような、夢を見ていなさる。

あなたの方の中には時たま足の蹠うらが痒かったり、

足元が慥たしかでなくなったりすると、

洒落でちやかしてしまったり、魔法だと云って

告発したりなさるが、分らない話です。

あれはあなた方がみんな、永遠に主宰している

4985

「自然」の奇<sup>く</sup>しき作用をお感じになるのです。

その生動している痕跡が、一番下の方から

上へ向いて縫って登って行くのです。

いつでも手足をつねられるような気がしたり、

いる場所が居心が悪くなったりしたら、

4990

すぐに思い立って鋏で掘って御覧なさい。

そこには楽人の死骸がある。そこには宝がある。

### 耳語

わたくしなんぞは足に鉛が這入っているようだ。○

わたくしは腕が引き弔<sup>つ</sup>る。○それは痛風です。○

わたくしは足の親指がむずむずする。○

4995

わたくしは背中じゅうが痛い。○

こんな塩梅だと、ここなんぞは

宝が沢山埋まっている土地でしょうか。

帝

そんなら早くせい。もうお前は逃がさぬから、その口から沫を出してしゃべった謠を  
 験<sup>ため</sup>すために、すぐその尊い場所を見せてくれ。

お前が謠を衝いたのでないなら、己は冠や

指揮の杖を棄てて、尊い、自分の

この手で、その為事<sup>しごと</sup>を果そうと思う。

もし謠なら、お前を地獄へ遣つて遣る。

メフィストフェレス

それはそこへ行く道はわたくしが知っていますが、そこにもここにも持主がなくて埋まっている物の、その数々は申し上げ切れない位でございます。どうかいたすと、畝を切っている百姓が、土塊<sup>つちくれ</sup>と一しよに金<sup>きん</sup>の這入った壺を掘り出す。

5000

5005

5010

また外の奴は土壁の中から硝石を取ろうとして、  
貧に瘦せた手に、驚喜しながら、

立派な金貨の繋がったのを取り上げる。

まあ、どんな穹窿きゆうりゆうを爆破したり、

どんな深い穴や、どんな長い坑道の奥を、

奈落の底の近所まで、宝のありかを

知った人は這入ったりしなくてはならないでしょうか。

さて広い、年久しく隠してある穴倉に這入ると、

金きんの大杯や皿や鉢が

ずらりと並べてあるのを見るでしょう。

紅宝玉で造った杯もあつて、

それを使おうと思つて見れば、

傍に古代の酒があります。

そこで、そんな事に明るいわたくしの申す事を

信じて下さらなくては駄目ですが、もう疾とつくに

桶の木は朽ちていて、酒石が凝って桶になって、中に酒を湛えています。そう云う尊い酒の精も、金銀宝石ばかりではなく、闇黒と

恐怖とで自分を護って蔵かくれています。

そう云う所を賢者は油断なく探っています。

昼間物を見知るのは笑談ですが、

深秘は闇黒を家にしていますからね。

帝

そんな闇黒なんぞがなんになるものか。それはお前に

任せて置く。役に立つものなら、日向へ

出んではならぬ。誰が闇やみの中で横著者を

見分けよう。牝牛は黒く、猫は灰色だ。

その黄金がどつしり這入って、地の下に

埋まっている壺を、お前の犁すきで日向へ掘り出せ。

メフィストフェレス

5030

5035

いえ。御自身に鋤鋤を取つてお掘ほりなさいませ。

百姓ひやくしやの業を自らなさる程大きい事はありませんね。  
そうなさつたら、黄金こうしんの犢うしが群をなして、

地の下から躍り出しましょう。

そうになると、御猶予なさることなしに、喜んで  
御自分きさきと后がた方との身をお飾かざりなさいましょう。

色つやと沢いづみとにかがやく石は、

厳いしさをかめも美しさを増しまする。

帝

早くせんか。早くせんか。いつまで掛かるのだ。

天文博士（上に同じ。）

いえ。そのおはやりになるお心を少しお鎮めなさつて、

華やかなお慰を先へお済ませなさいませ。

気が散つていては目的は達せられませぬ。

先ず心を落ち著けると云う償つぐないをして、

5040

5045

5050



前なるものに由つて後なるものを得なくては  
なりませぬ。善を欲せば、先ず善なれ。

喜を欲せば、己が血を和平にせよ。

酒を得んと欲せば、熟したる葡萄を絞れ。

奇蹟を見んと欲せば、信仰を牢<sup>か</sup>うせよでございます。

帝

そんなら面白い事で暇を潰すも好かろう。

幸な事には丁度灰の水曜日<sup>あいだ</sup>が来る。

その間<sup>あいだ</sup>いつもよりも盛んに

四句節の前の踊でもさせるとしよう。

(喇叭、退場。)

メフィストフェレス

労と功とは連鎖をなしていると云うことが、  
馬鹿ものにはいつまでも分らない。

よしや聖賢の石を手にしたところで、

5055

5060

石はあつても聖賢はなくなるだろうて。

隣接せる間多<sup>ま</sup>き、広々としたる座敷、仮  
装舞踏を催さんがために装飾を尽せり。

先触

皆様。ドイツの境の内にいると思つてはいけません。  
悪魔踊に阿房踊、また髑髏踊なんぞのある、  
面白いお慰<sup>なぐさ</sup>が始まります。

殿様はロオマ征伐に御いでになつて、  
国のため、またあなた方のお慰<sup>なぐさ</sup>のために、  
高いアルピの山をお越<sup>こえ</sup>になつて、

晴やかな土地をお手に入れなさいました。

殿様は先ず難<sup>ありがた</sup>有<sup>かた</sup>い上沓の裏に御接吻なさつて、

御威勢の本になる権利をお受<sup>うけ</sup>になつて、

それからお冠を貰いにおいでになつたとき、

一しよに坊様の帽子をも持つてお帰<sup>かえり</sup>になつた。

そこでみんなが生れ変つたようになつた。

誰でも世渡上手なものは、その帽子を

頭から頸<sup>みかけ</sup>まですつぽり被る。

すると見掛<sup>みかけ</sup>は気の違つた阿房のようで、

その帽子の蔭では、どんなにえらくでも

なつていられる。あれ、もうそこらに寄つて、

浮足をして分れたり、睦まじげに組んだり、

群の跡に群が続いて来るのが見えます。

機嫌を悪くしないで、出たり這入つたりなさい。

何をしたところで、せぬ前もした後も同じ事、

百千の馬鹿げた事を包んでいるこの世界は  
ひとり  
一人の大きな馬鹿ものに相違ありません。

庭作の女等

(マンドラの伴奏にて歌ふ。)

われ等若きフィレンチエの女等<sup>おみなら</sup>は、

君達に愛ではやされむと、

今宵皆粧ひて、ドイツの宮居の

御栄を追ひて来ぬ。

5090

この<sup>かちいろ</sup>褐色の渦卷ける髪を

くさ／＼の晴やかなる花もて飾れり。

さて絹の糸、絹の絮<sup>わた</sup>、おのがじし

美しさを助くる料となれり。

5095

なぞとや仰する。われ等はそを功<sup>いさお</sup>ありとし、

褒めます値ありと思へり。

わら等が造りなせる、このかゞやく花は  
四つの時絶間なく咲きにお勻へり。

いろ／＼に染めたる紙のこぎれ小切に

向き合ひて所を得させたれば、

一つ／＼をば笑止とも見たまはむ。

すべてには心引かれ給ふべし。

われ等庭作の女おみなら等も

愛でたく、人懐かしげには見えずや。

なぞとや仰する。おみなこ女子の生れながらの

さま見れば、手わざに似たれば。

先触

その頭の上に載せている籠や、手から

五色を食み出させて提げている籠に  
盛り上げてある豊かな品物を見せるが好い。

5110

そして皆さんが気に入ったのを取りなさが好い。

皆が取つて、急いでこの仮屋の道を

花園に紛れるようになさが好い。

売手も品物も、賑やかに

取り巻いてお遣<sup>やり</sup>なさるだけの値打はあります。

5115

### 庭作の女等

さあ、お値段をお附<sup>つけ</sup>なさいまし。

ですけれど、市場の商ではございませんよ。

お取<sup>とり</sup>になる花一つごとに、それがなんの

花だと云う、面白い詞<sup>ことば</sup>を添えて上げます。

### 実れる月桂の枝

わたくしはどんな花でも妬みませぬ。

なんの喧嘩も避けまする。

5120

それは性に合わないからでございます。

その性と申すのは、もと野山の魂で、

間違のどうしても出来ないように、

その土地々々の睦<sup>むつみ</sup>の印になっています。

どうぞきょうのお祭には、似つかわしい、美しい

髪に載せてお貰<sup>もらい</sup>申しとうございます。

穂の飾（黄金色。）

あなた方をお飾<sup>かざり</sup>申す、このケレスの賜は

さぞ優しげに、愛らしくお似合なさいましょう。

用に立つので、一番願わしいこれが、

あなた方のお飾としては美しゅうございましょう。

意匠の輪飾

苔の中から咲かせてある、葵<sup>あおい</sup>のような、

はでな花は不思議な輪<sup>わ</sup>ではありませんか。

自然には常に無い物をも、

流行は生み出します。

5135

意匠の花束

わたくしに名を附けることは、植物にお精しい  
テオフラストさんも御遠慮なさいましょう。

ですけど、皆さんのお氣に入らないまでも、  
どなたかには好かれようかと存じます。

そうした方のお目に留まりとうございます。

5140

どうぞ髪にお編み込み下さいまし。

どうぞわたくしがお胸の中に

所を得ますようにお極下さいまし。

勧誘の詞

その日その日の流行に

意匠の花は咲くが好い。

5145

自然にかつて無いような、

不思議な姿をするが好い。



茎は緑に、つりがねがた 吊鐘形の花こがねいろ 黄金色。

それが豊かな髪の中から見えるがよ 好い。

ですけれど、わたくしども

薔薇の荅

は隠れています。

それをちよつとお見みつけ 附なさる方はおしあわせ 為合です。

5150

夏のおとないが知れて、

薔薇の荅つぼみに火が附く時、この為しあわせ 合が

なくて好よ いとは、どなたも仰やりますまい。

誓いますこと、またそれを果しますことが、

花の国では一様に

目をも胸をも魂をも支配するのでございます。

(仮屋の屋根の下なる緑の道にて、庭作の女等美しく品物を飾り立つ。)

庭作等

5155

(テオルベの伴奏にて歌ふ。)

見給え。花は静かに生い出でて、

美しく君達の髪を飾るを。

木実このみは誘うものならず。

ただ味いて楽み給え。

5160

桜の実、山桃さんとうの実、大いなる李すももの実、

皆褐かちいろ色の顔を見せたり。

ただ召せ。あざとと舌とにあらぬ目は

え堪えじ、よしあし定むる官つかさたるに。

5165

来ませ。楽みて、味いて、もとも好く

熟うみたる木実このみ食うべに。

薔薇そうびをこそ詩にも作れ

林檎をば噬かまでやわ。

おん身等のその豊かなる若き群に、

5170

われ等の伴うを許せ。

隣にて、この熟<sup>う</sup>みたる木実の

さわなるを、われ等も積み飾らん。

飾りたる仮屋の隅に、

面白き編物の下に、

5175

あらゆる物皆備れり。

芽あり、葉あり、花あり、実あり。

（ギターラとテオルベの伴奏にて、かたみがはりに歌ひかはす歌と共に、二つの群は貨物を段々に高く積み飾り、客を待つ。）

母

母と娘と。

嬢や。お前が生れた時ね、  
帽子を被せて遣りましたが、  
顔はほんとに可哀くて

5180

体はほんとにきやしゃでしたよ。

その時もうお嬢さんが極<sup>き</sup>まったように、  
大したお金のある内へ行くことになったように、  
もうおよめさんになったように思いましたよ。

それにもう何年か

5185

無駄に過ぎましたね。

お貰<sup>もら</sup>になりそうな、いろいろな方々が  
ずんずん通り過ぎておしまいなさった。  
あるお方とはすばしこくお踊<sup>おどり</sup>だったし、  
あるお方には目立たない相図を

5190

肘でおしだったね。

いろいろな催<sup>もよおし</sup>もあつたけれど

これまで駄目であつたのだよ。

質<sup>あそび</sup>の遊も鬼ごつこも、

皆役には立たなかつたのだよ。

きようは皆さんが阿房になつておいでになるから、

お前襟<sup>あ</sup>を開けていて御覧。どなたか

お取<sup>とりとめ</sup>止申すことが出来るかも知れぬからね。

(若き、美しき女友達来てこれに加はり、親しげなる会話聞えはじむ。漁者と鳥さしと数人、網、釣竿、鰯<sup>もちざお</sup>竿、その他の道具を持ちて登場し、少女等の間に交る。

此等互に相挑み、相捉へ、逃れんとし、留めんとし、その動作極めて快き会話の機会を生ず。)

樵者

(粗笨<sup>そはん</sup>に、躁急に登場。)

避<sup>よ</sup>けた。避けた。

場所があるのだ。

わたしどもは木を伐るのだ。

その木はめりめり云って倒れる。

それをついで行くときは、

そこらじゅうへ衝き当たる。

自分の手柄を言うようだが、

これだけは御合点を願いたい。

荒っぼい奴も

土地で働かんでは、

どんなに智慧を出したって、

上品な人ばかりが

どうして立ち行きますようにぞ。

御合点の願いたいのはここだ。

こつちとらが汗を掻かなんたら、

5200

5205

5210

あなた方は凍えましょう。

道化方

(手づつに、ほとんどをさなく。)

あなた方は馬鹿だ。

腰を屈めて生れなすった。

わたしどもは利口だ。

重荷を背負<sup>しよ</sup>ったことはない。

鳥打帽子も

ジャケツも檻<sup>ぼろぎ</sup>褌<sup>ろぎ</sup>著<sup>ぎ</sup>も

身軽な支度だ。

わたしどもは気持好く、

いつもなまけて、

上沓<sup>か</sup>ばきで、

市場へも人込へも

駆け込んで、

5215

5220

5225

物見高く立ち止まって、  
お互にどなり合います。

さてその声が聞えると、

どんなに人が籠んだ中でも、

鰻のように摩り脱けて、

一しよになつて跳ね廻り、

一しよになつてあばれます。

お褒<sup>ほめ</sup>なさつても、

悪口を仰やつても、

御<sup>ご</sup>尤<sup>う</sup>だと申します。

寄生虫

(諛<sup>へつら</sup>ふ如く、物欲しげに。)

お前方、元気な、真<sup>ま</sup>木<sup>き</sup>を背<sup>し</sup>負<sup>よ</sup>つた男や、

御親類の

炭焼の男は

5230

5235



こっちの用に立つ人達だ。

5240

全体腰を曲げたり、

豎にかぶりを振ったり、

紆余曲折の文句を言ったり、

人の感じよう次第で

暖めも冷ましもする

5245

二重の息を嘘<sup>ふ</sup>き掛けたりする

こんな面倒がなんになると思う。

それは天からだって

大した火が

来ることもあるだろうが、

5250

へ  
竈<sup>い</sup>の広さだけ

かつかと燃え立たせる

真木や炭の荷が

なくては済まぬ。

そこで燂<sup>や</sup>けている。沸いている。

5255

烹<sup>に</sup>えている。渦巻いている。

ほんとに味の分かる男は、

皿までも舐<sup>な</sup>める男は

燂ける肉を嗅ぎ附ける。

肴のあるのを見ずに知る。

5260

そこでお出入先の食卓で

手柄をする気が出て来るのだ。

### 酔人

(正気を失ひゐる。)

どうぞきよう己達にあらがつてくれるな。

なんだか自由自在な心持がしているのだ。

涼しい風や気の晴れる歌も

5265

己達が持つて来て遣つたのだ。

そこで己は飲むよ。飲むよ。飲むよ。

杯を一つ打<sup>ぶ</sup>つ附けよう。ちりん。ちりん。  
おい。その背後<sup>うしろ</sup>にいる先生。出<sup>で</sup>ておいで。  
ちりと遣<sup>い</sup>るのだ。それで好<sup>い</sup>い。

5270

かかあ奴がおこつてどなつて、  
立派な上衣を皺にしおつた。

どんなにこつちで息張<sup>いば</sup>つても、仮装の衣裳を  
掛けて置く台だと云つて冷かしおつた。

それでも己は飲<sup>い</sup>むよ。飲<sup>い</sup>むよ。飲<sup>い</sup>むよ。

5275

打<sup>ぶ</sup>つ附けて鳴らして見よう。ちりん。ちりん。

衣裳の台の仲間同士で杯を打<sup>ぶ</sup>つ附けよう。

音がしたなら、それで好<sup>い</sup>い。

己<sup>まいご</sup>が迷子になつてゐるのだなんぞと云うなよ。  
己は己の氣持の好<sup>い</sup>い所にゐるのだ。

5280

亭主が貸さないと云やあ、上さんが貸さあ。

どっちもいけなくなつたつて、女中だつて貸さあ。

いつだつて己は飲むよ。飲むよ。飲むよ。

一しよに飲め、飲め。ちりん。ちりん。

順じゅんおくり送ぶに打ぶつ附けよう。ずっと先まで。

皆遣つてくれるぞ。それで好いようだ。

5285

どうして、どこで己が楽しんだつて、

そうさせてくれて好いじゃないか。

どうぞ己の寝た所に寝させて置いてくれ。

もうそろそろ立つているのがいやになつて来る。

### 合唱する群

誰も彼も飲め、飲め。さあ、頼むよ、

ちりん、ちりんの演説を。

腰掛きの木の切きに、しつかり腰を据きえていろ。

5290

机の下へころがった男はそれでおしまいだ。

先触種々の詩人等を紹介す。自然詩人、宮廷詩人、騎士詩人、溫柔詩人、感奮詩人あり。皆自ら薦むるに急にして押し合ひ、一人も朗読の機会を得ずして已む<sup>や</sup>。一人ありて短き句を唱へて、拔足しつゝ過ぎ去る。

### 諷刺

心<sup>こころ</sup>より詩人わが

喜ばむことを君知るや。

一人だに聞くことを

願はぬ詞を歌はしめよ。

(夜の詩人と冢<sup>つか</sup>穴<sup>あな</sup>の詩人とはことわりの使をおこせたり。そは屍の血を吸ふワムピールの纒<sup>わすか</sup>に墓中より出でたるに会ひて、興ある對話をなす最中なるが故なり。この對話に本<sup>もと</sup>づきて、あるいは詩の一新体の発展し来らむも知るべからずとなり。先触已むことを得ず、このことわりを認容して、さて希臘<sup>ギリシア</sup>神話を呼び出せり。今様の仮面を被りたれど、希臘神話はその特性をも興味をも損ふことなし。)

なさけの三女神グラチエ。

映<sup>はえ</sup>の神アグライア

人の世に優しさをわれはもたらす。

優しさを物贈る手に籠め給へ。

引率る神ヘゲモネ

優しさを物受くる手に籠め給へ。

願ふこと<sup>かな</sup>愜<sup>な</sup>へるはめでたからずや。

樂<sup>たのしみ</sup>の神エウフロシネ

平<sup>たい</sup>にあらん日の限<sup>い</sup>、

礼<sup>いや</sup>申すにも優しかれ。

運命の三女神パルチエエ

避<sup>よ</sup>くべからざる神アトロポス

最<sup>もと</sup>も老いたるわれ、こたび

糸引く人に傭はれぬ。

細き命の糸引けば、

物思ふこと多きかな。

しなやかなるが得まほしく、  
いと善き麻をわれ縊<sup>よ</sup>りぬ。

筋筋善く揃<sup>すべ</sup>ひ、滑<sup>すべ</sup>り好かれと、  
賢<sup>さか</sup>しき指<sup>および</sup>もて、われ縊<sup>よ</sup>りぬ。

5310

宴<sup>うたげ</sup>にまれ、踊にまれ、

その矩を越えむとき、

糸の限を思へかし。

心せよ、切れやせむ。

5315

糸縊る神クロト

汝<sup>なれたち</sup>達知れりや。きのふけふ  
剪<sup>はさみ</sup>刀は我手にわたされぬ。  
そは老<sup>おいびと</sup>人の振舞に

飽かぬ節々あればなり。

5320

何の甲斐あらじと思ふ幾筋を、

風のむた、照る日のもとに、曳き延<sup>は</sup>へぬ。

得ることのさはあるべき望の糸を、

断ち切りて奥津城<sup>おくづき</sup>の底深く墜しつ。

されどわが若きすさびもしどけなく、

あやまちで断ちし糸百筋ありき。

いちはやきこの手をけふは控へんと、

剪刀をば囊に入れてわれ持<sup>も</sup>てり。

5325

かくてわれいましめに安んじをりて、

この場<sup>にわ</sup>をあはれみの目もて見わたす。

ゆるされたる日汝達は

5330



戯れ遊べ、いつまでも。

糸分くる女ラヘシス

心得て過たぬわれひとり

筋々の序する業を守れり。

つねに醒めたるわれならば、

慌ただしさの咎はなし。

5335

来る糸を簍に巻き

それ／＼の道に遣る。

一筋も逸れさせじ。

輪のなりに寄りて来よ。

5340

われ一日心ゆるさば、いかにかは

なりぬべき、心もとなき世の中は。

われ日を計り、年を計りて、

服部手<sup>はとり</sup>に取る糸一束<sup>つかね</sup>

先触

皆さん、どんなに古い書物にお精しくても、  
こん度来るものはお分かりになりますまい。  
随分悪い事をしでかす女共ではありますが、  
御覧になるには、好いお客様でございましょう。

5345

怒の女神<sup>めがみ</sup>でございます。謹だと思<sup>おも</sup>なさるでしょう。  
愛らしくて恰好が好くて優しくて年が若い。  
附き合つて御覧になると分かりますが、  
どんなにかあの鳩が蛇のように噬<sup>か</sup>むでしょう。

5350

一体陰險な奴ですが、きようは誰でも  
阿房になつて、あらを手柄にする日なので、  
あいつ等も天使としての名聞を思わずに、

5355

都や鄙の厄介ものと名告<sup>なの</sup>つて出ています。

怒の三女神フリエユ。

かつて休まぬ神アレクトオ

どうせ諦めてわたし共におたよりなさらなくては。

こんなに綺麗で、若くて、小猫のようにあまえますもの。

あなた方男<sup>がた</sup>の方<sup>かた</sup>の中で好<sup>す</sup>いた女のおありなさる方には、

わたしがじゃれ附いて、耳の後<sup>うしろ</sup>をくすぐって上げます。

5360

そしてお心安くなつて、目と目を見合せてこう云います。

「あの女はあなたの外に誰さんにも愛敬を

振り蒔<sup>ま</sup>きますよ。頭<sup>あたま</sup>は馬鹿で、背中は曲つて、その上

跛<sup>びっこ</sup>で、奥さんになさるお積<sup>つもり</sup>なら駄目」と云います。

そんな風に女の方へも水を指します。

「二三週間前でしたが、あの方はあの女に

5365

あなたの事を下げすんで話していてよ」などと云うのです。仲直りしても、何かしら残ります。

不親切の神メガイラ

そんな事は笑談です。婚礼をしてしまうと、わたしが引き受けて、どんな場合にも極美<sup>ごく</sup>しい幸福を氣紛<sup>きまぐれ</sup>でまずくします。

一人は変わるもので、時によって変わります。

5370

それで誰一人願って得たものを手にしつかり持っていないで、慣れてしまった一番大きい幸福を忘れて、おろかにもそれより願わしいものにあこがれます。凍えて煖まろうとして、日を跡に逃げるのです。

5375

そう云う人の扱をわたしは一切心得ていて、  
いい折に禍の種を蒔かせるように、夫婦中の

悪魔と云う、お馴染のアスモジを連れて来て、  
二人ずつになつてゐる人間を腐らせませす。

復讐の神チシフォネ

二心のある人を害するかげごと陰言の代に、わたしは  
毒を調合したり、あいくち匕首を研いだりします。

余所の女に氣を移した方は、早かれ遅かれ  
お体に毒が廻るようになっています。

そういたすと、ちよいとしたま間の甘いお樂が、

泡立つ毒、にがき苦胆の汁になります。

そこには掛値もなければ、負けることもありません。

お犯しなすつた罪だけは、つぐのいお償なさらなくてはなりません。

免除ゆるしのなんのと云うことを仰やいますな。

わたしの訴は岩に向むいていたします。

5380

5385

5390

お聞きこなさい。すぐに訝こたま響きが報の答をします。  
女をお取換なすった方のお命はありません。

先触

どうぞ、皆さん、少し脇へお寄なすつて下さい。

今ここへ来るのは並なみの物ではありません。

御覽とおりの通、山が一つ押し寄せて来ます。

彩いろどった毛氈じゅうたんが、誇らしげに腋に掛けてある。

頭から長い齒や蛇のような鼻が出ている。

なんだか秘密らしい物ですが、お分かりになるように、

鍵を見せて上げましょう。項うなじには優しい女が

乗っていて、小さい鞭で巧者に使っています。

今一人上に立っている、立派な、上品な女は、

毫ごうごう光がさしているので、羞明まばゆくてなりません。

傍そばをやはり上品な女達が縛られて歩いて来ます。

一人はせつなげな、一人は嬉しげな目をしている。

5405

一人は自由を求めていて、一人はそれを得ている。  
さあ、一人々々自分の身の上を明<sup>あか</sup>して貰おう。

おそれ  
恐

薫<sup>くゆ</sup>る続<sup>ついで</sup>松、油の火、蠟の火微かに

入り乱れたる祭の群を照せり。

この幻の姿の中に、あはれ、

鎖は我を繋げり。

5410

退<sup>の</sup>け。見苦しき、笑ふ人々。

その崩れたる顔のさまこそ怪しけれ。

我を謀らんとする人等皆

今宵我に迫<sup>く</sup>り来とおぼし。

5415

見よ。あれは仇となれる身方の一人なり。  
あの仮面<sup>かめん</sup>をばわれ知れり。

またあの男は我を殺さんとしつるなり。  
われに見知られて、今逃げ去らむとす。

あはれ、いづ方へまれ逃れて、

世の中に隠れ避けばや。

されどかなたよりは死の我を嚇<sup>おど</sup>すあり。

我は猶<sup>なほ</sup>烟<sup>おそれ</sup>と恐<sup>おそれ</sup>との中に捕はれてあり。

望<sup>のぞみ</sup>

わが礼<sup>いや</sup>申すを受け給へ。女<sup>おんな</sup>の友等。

きのふけふこそ、おん身等皆

姿を変へて樂み給はめ。

あすは必ず仮<sup>よそい</sup>の装を

解き給はん。

松の火の照らす下は、

わきて樂しとおもはねど、

5420

5425



晴やかなる日の昼に、

おのがじし心のまにま、

あるはひとり、あるは打ち群れて、

美しき野をそゞろありきし、

せまほしき事して、疲れて憩ひ、

憂を知らで日をくらし、

よろづ事足り、つねにいそしみ、

いづくへも、まらうごと

迎へられて行かばや。さらば

いづくにてか、最も善きものを

見出ださでやはあるべき。

智

人の世の大いなる仇二つあり。

そは望<sup>のぞみおそれ</sup>と恐となり。われそを繋ぎて、

御身等の群に近づかしめず。

5430

5435

5440

道を開け給へ。御身等は救はれたり。

塔負へる、活ける大いなる獣を、

見給へ、われは牽きて行けり。

獣は険しき道をば厭はで、

一足づつ進み行けり。

塔の上にはしなやかに羽搏つ、

広き翼ある女神いまして、

いづ方へも向きて、

幸を授け給へり。

女神の身のめぐりには光ありて、

遠く四方を照せり。

人の世のあらゆる業の女神として、

5445

5450

5455

勝利の神と名告らせ給へり。

テルシテス、ツオイロスの合体

いやはや。己は丁度<sup>いい</sup>所へ来たぞ。

お前さんは皆悪いから、小言を言わねばならん。  
だが、その中で己の目星を附けているのは、

あの上にいなさる勝利の神さまだ。

あんな真つ白な羽<sup>しよ</sup>を背負<sup>しよ</sup>つて、

驚かなんかのような積<sup>つもり</sup>でいて、四方八方、

自分が顔を向けさえすりやあ、土地も人間も、

我物になると思つていなさるのだろう。

ところで、どこで誰が誉められて幅が利くのも、

己はすぐに癪に障つてならないのだ。

なんでも低い奴を持ち上げて、高い奴を

押し落して、曲つたのを直<sup>すぐ</sup>な、直なのを曲つたと

云うことにしなくては、己の虫が承知しない。

己は世の中の事をそうあらせたいのだ。

先触

こら。やくざ<sup>いぬ</sup>狗奴。正義の杖の

誉ある一打を<sup>くら</sup>食べ。打たれてすぐに

背中を曲げて、のた打ち廻るが<sup>い</sup>好い。

はあ。一寸坊の二人寄って出来た片羽者奴が、

見る見る胸の悪い<sup>かたまり</sup>塊になりおるな。

や。不思議だ。塊が卵になる。

そいつが<sup>ふく</sup>膨れ上がって、二つにはじける。

中から飛び出す二匹の獣は、

<sup>かわうそ</sup>獺と<sup>こうちもり</sup>蝙蝠じやないか。

獺は<sup>ちりあくた</sup>塵芥の中を這い廻って、

蝙蝠の黒い奴は天井へ飛び上がりおる。

はあ。一しよになって外へ逃げ出しおる。

あの三匹目の仲間には、己はなりたくないなあ。

5470

5475

5480

耳語

さあ。奥ではもう踊っていますぜ。○いや。わたしはもう帰ってしまっていたらと思っっています。○

5485

そろそろ怪しい物共がはびこつて来て、

我々の周囲<sup>まわり</sup>を取り巻くのが分かりませんか。○

髪の毛の上をしゅうと云つて通りますぜ。○

なんだか足にちよつと障ったようです。○

誰も怪我はしやしません。○

5490

でもみんな気味を悪がっています。○

もう慰<sup>なぐさ</sup>はすっかり駄目になりました。○

畜生奴等がこうしようと思つてしたのです。

先触

わたしは仮装の会で

先触の役を仰せ附けられてから、

御門で真面目に見張つていて、

5495

この慰の場所へ、あなた方に禍を及ぼすものが  
忍び込む事のないようにしています。

わたしはぐら附きもせねば、怪しい物を

避けて通しもしません。しかし窓から空を飛ぶ

化物が這入るかも知れません。あなた方の

魔法にお掛かりになるのを、

防いでお上申<sup>あげ</sup>すことは出来ません。

なるほどあの一寸坊も少し怪しゅうございましたが、あれ、

あの奥の方からもまたどやどや遣つて来ますね。

あいつらがなんだと云うことは、

役目ですから、説明をしてお上申<sup>あげ</sup>しましょう。

しかし理解の出来ない事は、

説明も出来兼ねます。

皆さんに教えて戴きたいものです。

御覧なさい。あの人の中を遣つて来るものを。

5500

5505

5510

四頭立の立派な竜の車が

どこでも構わずに通つて来ます。

そのくせ人を押し分ける様子はなくて、

どこにもひどい混雑は起りませんね。

丁度幻燈でもしているように、

遠い所でぴかぴかしている。色々の星が

迷い歩いて光っている。や。竜の車の竜が

鼻を鳴らして駆けて来る。道をお開<sup>あけ</sup>なさい。

わたしも気味が悪い。

童<sup>どうぎよう</sup>形の馭者

止<sup>と</sup>まれ。

竜ども。少し羽を休めい。

己の馴<sup>たづな</sup>れたが応えぬか。己がお前達を

制するから、お前達も自分の体を制するが好<sup>い</sup>い。

そして己が励ますとき、また走つて行け。

5515

5520

この場所で粗忽があつてはならないのだ。

5525

それ、そこらを見廻せ。お前達を感心して

御覧になる方々が、幾重にも圈をかいていなさる。

さあ。先触の先生。あなたのお流義で、

わたしどもの奔り<sup>はし</sup>抜けてしまわないうちに、

わたしどもの名を指して、講釈をなすつて下さい。

5530

御如才はありますまいが、

わたしどもはアレゴリアです。象形です。

先触

お前さん方の名を言うことは出来ないが、

見た所を説明することなら出来るでしょう。

童形の馭者

さあ。遣つて御覧なさい。

先触

さよう。どう云おうか。

5535



先ず、お前さんは美少年だ。

だが、まだ一人前にはなっていない。御婦人方はお前さんが立派な男になった所が見たいでしょう。どうも見受ける所が、お前さんは数奇者になって、女を迷わすには持つて来いと云う様子だ。

童形の馭者

その辺は可なり受け取れますね。跡はどうです。面白い謎の詞ことばどもは見附かりませんか。

先触

目から黒い稲妻が出ている。髪の毛の闇夜に、宝石で飾った紐が、晴やかな趣を添えている。そしてその肩から踵かかとまで垂れている、濃い紫の縁を取った、宝石の飾のある上衣は、なんと云う美しい著物だろう。

意地悪く出れば、女のようにだとも云いたくなるが、

なんのかのとは云うものの、今でもお前さんはもう娘子達には好かれていますね。  
恋のいろはを教えてくれたでしょうね。

童形の馭者

そこでこの車の上に座を占めておいでになる、お立派な方をどなただと思うのですか。

先触

どうしてもお国が富んでいる、仁徳をお敷<sup>しき</sup>になる王様と見えますね。御寵遇を受けるものは為<sup>しあわせ</sup>合でしょう。王様には此上のお望<sup>のぞみ</sup>はなく、どこかで何かが足りなくなはないかと、捜<sup>たのしみ</sup>すように見渡して、人に物を遣る淨い<sup>さいわい</sup>樂を、我富<sup>さいわい</sup>よりも幸よりも尊んでいられるでしょう。

童形の馭者

まだその辺で止めては行けません。

5550

5555

5560

もつと精しく説明なさらなくては。

先触

どうも威厳は説明がせられませんか。

しかし月のようなお顔はお丈夫そうで、

唇はふつくりとして、血色の好い頬は

冠の飾の下にかがやいている。襷のある

お召物を召した所が、お氣持が好さそうだ。

行儀作法はなんと申して好いか。王者のお身で

あつて見れば、申すまでもありますまい。

童形の馭者

これは富の神と名に呼ばれておいでになる、

ブルツス様が莊嚴を尽してお現になつたのだ。

この国の帝が切にお願なされたので。

先触

そしてお前は誰で何をしなさるのか。

## 童形の馭者

わたしですか。わたしは物を散ずる力だ。詩だ。

自分の一番大事な占有物を蒔<sup>ま</sup>き散らして、

そして自分の器を成す詩人だ。

わたしも無限の富を有している。

自分で値踏をして、プルツス様に負けぬ積<sup>つも</sup>りだ。

富の神の饗応や舞踏を飾って賑やかにして、

神の持つておられぬ物を、わたしが蒔き散らします。

## 先触

なるほど。その自慢話はお前さんの柄にある。

しかし腕前が見せて貰いたいものですね。

## 童形の馭者

さあ、御覧なさい。ここでわたしが指をこう弾く。

するともう車の周囲<sup>まわり</sup>でぴかぴか光って来る。

それ、そこから真珠を繋いだ緒が出て来た。

5575

5580

(指を弾くことを停めず。)

さあ、お取なさい。金の耳飾に頸飾だ。

瑕きずのない櫛に冠だ。

指環に嵌はめたすばらしい宝石だ。

どうかすると、ちよつとした火も出します。

どこかへ燃え附かせて遣る積で。

先触

はあ。あのおお勢が争って拾っていること。

これでは蒔く人が押し潰されそうだ。

夢を勝手に見させるように、指で宝を

弾き出すのを、みんなはこの広場一ぱいになって、

拾い廻っている。や。新しい手を出したな。

誰かが急いで手に取ると、

取った物が飛んで行く。

これはほんの無駄骨折だ。

5585

5590

5595

真珠を繋いだ緒は解けて、

手にはかなぶんぶんがむずむずしている。

や。可哀そうに。棄ておった。棄てた虫が

頭のまわりを飛び廻っている。

外の奴は実のある物を拾う積で、

軽はずみな蝶々を攫まえる。

横著小僧奴、前触だけが大きくて、

ただ金いろに光る物を蒔きおったな。

### 童形の馭者

見受ける所、お前さんは仮装だけの事は

披露してくれなさるが、殻を割って実を見せるのは、

宮仕をする先触の為事ではないと見えますね。

それにはもつと鋭い目がいる。

だが、喧嘩にはわたしはしない。

さて、王様、わたくしはあなたに伺います。

5600

5605

5610

(プルツスに向きて。)

あなたはわたくしにこの四頭曳の竜の車を

お任まかせになつたではありませんか。

思召どおりに旨く馭しましたでしょう。

お望の場所に来ていますでしょう。

大胆な翼を振つて、あなたのために

成功の棕櫚しゅろを取りましたでしょう。

あなたのために働いた度ごとに、

これまで成功しなかつたことはありません。

そこであなたの額を月桂冠が飾るなら、

それを編んだのはわたくしの心と手ででしょう。

富の神プルツス

うん。己に証明をして貰いたいと云うなら、

己は喜んでこう云つて遣る。「己の心を獲た奴だ。」

お前は己の意図のとおり働く。

お前は己より富んでいる。

5625

功を賞してお前に遣る緑の枝は、  
あらゆる己の冠よりも尊いのだ。

己は皆に聞えるように、本当の事を言う。

「愛する我子よ。お前は己の氣に入っている。」

童形の馭者（群集に。）

皆さん御覧。わたしの手で蒔かれるだけの

5630

最大の宝をわたしは蒔いた。

そこここの皆さんの頭の上に、

わたしの附けた火が燃えています。

一人の頭から余所の頭へ飛ぶのもある。

あの人には止ま<sup>と</sup>っても、この人からは飛んで退<sup>の</sup>く。

5635

稀にはぱつと燃え立って、

短<sup>さ</sup>い盛<sup>かり</sup>の光を見せる。

だが大抵はその人の知らぬ間に、



悲しく燃えて消えるのです。

女等の耳語

あの四頭立の竜の車に乗っているのは、

あれはきつと山師よ。

あの背後<sup>うしろ</sup>にしゃがんでいる道化役を御覧。

ついぞ見た事のない程、

糧<sup>かつえ</sup>饑て痩せていますでしょう。

きつとつねっても覚えない位よ。

痩せたる人

胸の悪い女ども。寄るな、寄るな。

己はいつ来てもお前達の気には入らないのだ。

まだ女と云うものが竈<sup>へっつい</sup>の前<sup>い</sup>にいた頃には、

己の名はアワリチアだった。儉約だった。

その頃は家の工面が好かったよ。

なるだけ多く取り込んで、外へはちつとも出さない。

5640

5645

5650

己は箆<sup>たんす</sup>笥長持の中実<sup>なかみ</sup>を気にした。

それが悪い道楽だったとでも云うのかい。

ところが近年になつて見ると、

女は儉約なんぞはしなくなつて、

悪い買手<sup>かいて</sup>と同じように、

欲しい物が金<sup>かね</sup>より多い。

そこで亭主の難儀は一通でない。

どっちへ向いても借財だらけだ。

女は引つ手繰られるだけ引つ手繰つて、

著物にする。好いた男に遣る。

前より旨い物を食う。世辞たらたら

男連中と、食うより一層余計飲む。

そこで己は金<sup>かね</sup>が前より好<sup>すき</sup>になつた。

己はもう儉約ではなくなつて、吝嗇だ。

女の頭<sup>かしら</sup>

5655

5660

5665

お前のような毒竜は、毒竜仲間で

けちにしていなさるが好い。詰まりまやかしだ。

そうでなくても、男は扱いにくくなっているのに、

こいつは男をおだてに来たのだよ。

群をなせる女等

あの藁わらのような男に上沓やりをお遣やり。

はりつけばしら  
礎いし柱はしらがなんの威おどしになるものか。

あいつの面つらをこわがれと云うのでしょうか。

竜は竜でも、木に紙を貼った竜だわ。

さあ、行つて退治で遣りましょう。

先触

東西々々。己はこの杖に掛けて取り鎮める。

や。己が手を出すまでもないな。

皆さん御覧なさい。あの恐ろしい獣が

瞬まわりく隙に周囲の人を撥ね飛ばして、

前後二対の羽を拡げました。

鱗で囲んだ、火を噴く口を、

竜奴、おこつてぱくつかせおる。

人は皆逃げてしまつて、場は開き<sup>あ</sup>ました。

（プルツス車を下る。）

おや車をお降<sup>おり</sup>になる。なんと云う御様子でしょう。

相図をなさると竜が動く。

櫃を車から卸して

金と吝嗇と一しよに舁<sup>か</sup>いて来る。

あのお方の足の下に据えて置く。

どうして置いたか、不思議ですな。

富の神（馭者に。）

これでお前はうるさい重荷を卸した。

お前は自由自在の身だ。さあ、自分の世界へ往け。

ここはお前の世界ではない。乱れて、交つて、

5680

5685

5690

荒々しく、醜い物共が己達を取り巻いている。

あのお前が澄み渡った空を見渡す所、

自分を自由にして、自分だけを信用している所、

善と美だけが気に入る所、

あの寂しい所へ往け。あそこで自分の世界を作れ。

### 童形の馭者

そんならわたくしは難<sup>ありがた</sup>いお使いの積<sup>つも</sup>で参ります。

そしてあなたを近い親類のように敬つていきましょう。

あなたのいらつしやる所には富有がある。

わたくしのいる所の人は大した利益を得た氣でいる。

中にはむずかしい境界に迷うものもあります。

あなたに附こうか、わたしに附こうかと云うのですね。

あなたに附けば、勿論遊<sup>しごと</sup>んでいられる。

わたくしに附けば、いつも為<sup>しごと</sup>事をしなくてはならん。

わたくしはどこでも隠れて働きなんぞはしません。

ちよつと息をすると、人がすぐに勘付きます。

どれ、お暇をいたしましょう。樂をさせて戴きますが、  
小声で一寸お呼よびになると、すぐ歸つて参ります。

### 富の神

さあ、これで宝の縛いましめを解く時が来た。

錠前は先触殿の杖を借りて開あけよう。

それ、開あいた。皆見るが好よい。黒金くろがねの縛は

解けて、黄金こがねの血が湧き立つ。

真つ先に出るのは、冠、鎖、指環の飾だ。

しかし次第に盛り上がって、自分をとろかして埋めようとする。

### 交互に叫ぶ群集

あれ見ろ。そこにもここにも沢山に涌いて出て、

櫃の縁まで盛り上がって来るじゃないか。○

金きんの瓶かめがとろける。

繋がった貨幣がのた打ち廻る。○鑄型から

飛び出すようにズウカスの金貨の跳るのを見ると、  
己の胸はわくわくする。○

5720

己の欲しい程の物が皆目に見えている。

あれ、地の上をころころ転がって来おる。○

己達にくれるのだ。すぐに利用するが好い。

皆しやがんで取って、金持になろうじやないか。○

5725

己達の方ではいっその事、電光石火の早業で、  
あの櫃をそっくり取るとしよう。

### 先触

それはなんたる事だ。馬鹿な人達だ。どうするのだ。

仮装会の洒落ではないか。

今晚はもう方外の慾を出して貰いますまい。

お前さん方に金や宝かねを上げるのだと思うのですか。

5730

この遊山でお前さん方に上げるには、

小錢にしろ、好過ぎるのだ。

馬鹿な人達だ。巧者な洒落がそのまま

野暮な真実でなくてはなんのですか。

真実が分かりますか。お前さん方はぼやけた

迷<sup>まよ</sup>の衣<sup>いぎぬ</sup>の、方々の隅を攫<sup>さら</sup>んで引いているのだ。

仮装会の大立物の面<sup>めん</sup>被<sup>かぶり</sup>の富の神様。

この連中をこの場から追い出して下さらぬか。

### 富の神

お前さんのその杖はこう云う時の用意だろう。

ちよつとの間それを己に貸して貰おう。

どれ、ちよいとそれを熾<sup>さか</sup>んな火に入れよう。

さあ。仮装の連中御用心だぞ。

びかびかぱちぱち火の子が飛ぶぞ。

杖はもうすっかり焼けているのだ。

誰でも傍へ寄るものは、

容赦なしに焼かれるのだ。

5735

5740

5745



どれ、これを持って一廻しよう。

叫喚ぎゃつとん雑

やあ、溜まらん。己達は往生だ。○

逃げられるものは皆逃げろ。○

背後うしろから押す先生。跡へ、跡へ。○

己の顔はもう熱くなつて来た。○

己はあの焼けている杖の目方で圧されている。○

己達はもう皆助からないぜ。○

仮装連中、退いた、退いた。お先真つ暗で

うようよしている人達。退いた、退いた。○

羽があると、己は飛んで逃げるがなあ。

富の神

もうかこみ罫は押し戻された。己の考では、

火傷やけどをしたものは一人もない積つもりだ。

群集は跡へ引く。

もう追っ払われた。

だがまた秩序の紊れぬ用心に、  
目に見えぬ鎖を引いて置こう。

先触

これは大した御成功でした。

旨く庄を利かせて下さって難有うございます。

富の神

いや。あなたはもう少しこらえて見ていて下さい。

まだいろいろな混雑が出来て来そうです。

吝嗇

こうなればもう、好きな程、

気楽にこの場のお客達を見ていられる。

やはり何か見るものや食うものがあると、

真っ先に出るのは、いつまでも女だな。

己もまだ心まで錆びてしまっていない。

5760

5765

5770

別品はやっぱり別品だ。

きようは別に物のいるわけでもないから、  
己達も安心してからかいに行かれそうだ。  
だがこんな人籠の場所では、言うことが  
皆誰の耳にも聞えると云うものでないから、  
一つ旨い事を験<sup>ため</sup>して見よう。多分旨く  
行くだろう。為<sup>しかたばなし</sup>方話で分からせるのだ。  
それも顔や手足だけでは間に合わない。

一狂言書かずばなるまい。

一体金<sup>きん</sup>と云う金<sup>かね</sup>は何にでも化けるから、

こいつを湿ったへな土のようにして見せよう。

先触

あの痩せた阿房は何を始めるのだろう。

あんな腹<sup>へ</sup>の耗<sup>へ</sup>った男に洒落気があるだろうか。

あいつは金<sup>きん</sup>を皆団子<sup>こ</sup>に捏<sup>こ</sup>ねている。

5775

5780

5785

それでも手が障ると軟になるのが妙だな。

しかしどんなに潰しても、円めても、

やっぱりいかがわしい恰好をしているなあ。

やあ。女の方へ見せに行くぞ。

みんなきやつきやと云って、逃げようとして、

随分見苦しい風をしおる。

横著者奴、一とおりの奴ではないと見える。

どうもあれは風俗壊乱になる事をして、

面白がっているのではあるまいか。

そうだと、己が黙って見てはいられない。

追っ払って遣りますから、その杖を下さい。

### 富の神

今どんな事が外から起つて来掛かっているか、

あいつは知らずにいるのだ。馬鹿をさせて

お置<sup>おき</sup>なさい。今に悪<sup>いたずら</sup>劇をする場所がなくなる。

法律の力は大きい。しかし困厄の力は一層大きい。

唱歌雜

山の高きより、森の低きより

暴<sup>あ</sup>るゝ群は今来たり。

防ぎ難き勢もて進めり。

パンの大神を祭れるなり。

誰一人知らぬ事を、彼人々は知れり。

かくて空しき境に進み入るなり。

富の神

己はお前達を知っている。パンの神も知っている。

お前達は団結して大胆な企を始めたのだな。

誰にでも分からぬ事をも、己は知っていて、

謙遜してこの狭い場所を明けて遣る。

己はお前達の好運を祈る。

これからはどんな不思議が現れるかも知れぬ。

5800

5805

5810

あいつ等はどこへ歩いて這入るか知らないのだ。  
用心なんぞはしていないのだ。

あらあらしき歌

やよ。粧へる群。<sup>うわびかり</sup>上光する見せ物共。

こなたは疾く馳せ、高く跳り、

<sup>ちたたら</sup>地<sup>ちたたら</sup>鞆踏みとゞろかし、

あららかに、はららかに来たり。

森の神等ファウニ

ファウニの群

面白く踊りて出づ。

<sup>ちぢ</sup>面白く踊りて出づ。  
<sup>ちぢ</sup>れたる髪に

櫛の葉の冠せり。<sup>かがふり</sup>

細き、尖れる耳

波立つ髪を抜け出でたり。

鼻低く、<sup>おもて</sup>面広し。

5815

5820

5825

されどそは皆女には忌まれじ。

手をさし伸ぶるファウヌスには

美しき限の女、舞を辞むことあらじ。

### 森の神サチロス

サチロスもまた跡に附きて跳り出づ。

瘦せたる脛に山羊の足首附きたり。

その脛は腱あらはに瘦せたるが好し。

そはシャンミイと云ふ獣のごと、

山々の巔を興がりて見巡らんためなり。

さて自由の風に心霽して、

かの烟罩め霽鎖せる谷間深く棲み、

「我も生けり」とのどかに思へる

男、女、穉子等を嘲み笑はんとす。

そはさながらに、物に礙げられずして、

かしこなる高き境の我物にのみなればなり。

## 土の神等グノオメン

5840

こゝに小走に馳せ出づる小さき群あり。  
対<sup>ついで</sup>をなし、連れ立ちて行くことを忌めり。  
苔<sup>こころもき</sup>の衣著、明<sup>あか</sup>き火を持ち、  
疾<sup>と</sup>く馳せ違ひ、

一人々々離<sup>いと</sup>れて営<sup>なみ</sup>せり。

赫<sup>かがや</sup>く蟻<sup>うごめ</sup>の蠢く如し。

5845

縦に横に忙はしげに、  
かなたこなたといそしみまどへり。

人の家に出<sup>いで</sup>入<sup>いり</sup>する、まめやかなる侏儒<sup>しゅじゆ</sup>の  
近<sup>う</sup>き族<sup>から</sup>にて、山の医師<sup>くすし</sup>として知られたり。

高き山に吸<sup>すい</sup>球<sup>だま</sup>掛け、

5850

満ちたる脈より汲み出せり。

「幸<sup>さち</sup>あれ、幸あれ」と、勇ましく呼びて、



金堆く転がし出だせり。  
なみずたかまろ

こは素より世のためを思ひてなり。

われ等は善き人の友なり。

さはれ惑はし盗ませんためにも、

人多く殺すこと思ひ立てる、

心驕れる人に鋼持たせんためにも、  
おごい はがね

かの金をば世に出だすなり。  
かね

三つの戒を破らん程の人は、  
いましめ

その外の戒をもないがしろにせざらむや。

そは皆われ等の咎にはあらじ。されば  
とが

われ等の忍べるごと、おん身等も忍べかし。

# 巨人

荒男と名に呼ばれて、  
あらお

ハルツの山にては知られたる物共なり。

もとより裸にて、力強し。

5855

5860

5865

皆巨人の様して来れり。

右手に櫂めての木の杖持ち、

木の葉こはと小枝とを編める

粗き前垂まえだれ掛け、太き紐を腰まへに纏まとへり。

法王の許もとにはあらぬ衛まもりの士つわものなり。

群なせる水の女

(パンの神を囀いにようす。)

君も今来ませるよ。

大いなるパンの神は

世界の万有に

象かたどれる御姿みすがたなり。

厳かなれど、情なさけある神にませば、

人の遊び楽しむを好み給ふ。

されば最も晴やかなる汝達なんたち取り巻きまつり、

奇くすしき舞を軽らかに舞ひめぐれかし。

5870

5875

青き穹窿きゆうりゆうの下にます時も、

5880

神は常に醒めておはす。

されど小川おがわは君が方へ流れ寄り、

軽き風は優しく君を休ませまつらんと吹けり。

真午時にまどろみ給へば、

木末こずえの一葉ひとはだに動くことなし。

5885

すこやかなる草木の芳しき香は

声もなく静かなる空に満ちたり。

その時は水の女もまめやかにあるべきならねば、

たま／＼立てりし所にぞ寝るぬ。

さてゆくりなく、君が御声みこえ

5890

鳴神なるかみの鳴るごと、渡津海のとよむごと、

力強く鳴り響けば、

人皆い奈何かにせましと思ひ惑ひ、

戦の場にわにある猛き軍人の群も散けあら、

入り乱れたる人等の中に立てる 英雄すぐれびとも慄ふ。

5895

されば敬ひまつらばや、敬ふべきこの神を、  
われ等をこゝへ牽ひて来ませるこの神を。

土の神等の代表者

(パンの神の許へ遣されたるもの。)

かの輝かがやける豊かなる宝は、

糸引けるごと岩間に流れひろがりて、

たゞ宝を起す奇しき杖にのみ

おのが迷路を示せり。

5900

その時われ等、土蜘蛛つちぐもの巢なす家を、

暗き岩間に営み起せり。

おん身は恵深くも宝の数々を

清き日影のさす所に分ち給ふ。

5905

さてわれ等近きわたりに

驚くべき泉を見出でつ。

その泉かつて掛けても思はざりし宝を、  
たはやすく湧き出でしめむとす。

この事はおん身能く為し遂げ給はむ。

おん身の護まもりもとの下に置かせ給へ。

「いづれの宝もおん身の手にあれば、  
あまねく世の中に用ゐられむ。」

富の神（先触に。）

これはお互に腹を大きくして考えんではならん。  
そして出来て来る事は、出来て来させるが好よい。  
一体あなたはえらい度胸のある人ではないか。

この場で今恐ろしい事が出来て来るのだ。

現在の人も後の人も、謠だと言ひ消すだろうから、

あなたの記録にしっかり留めて置いて下さい。

先触

（富の神の猶手に持ちたる杖を握りて。）

一寸坊どもがパンの神様をそろそろと

火を噴く穴の傍へ連れて行きますね。

深い底から高く湧き上がるかと見ると

またその底まですつと沈んでしまつて、

穴の口が暗く開いて<sup>ひら</sup>いる。

そうかと思うと、また真つ赤に<sup>に</sup>煮え上がる。

パンの神様は平気で立つて、

この不思議な有様を見て喜んでおられる。

真珠のような泡が左右へ飛ぶ。

どうして疑わずにこんな事をさせておられるだろう。

穴の中を見ようとして、低く身を屈められる。

や。お髯が穴に落ち込んだ。

5920

5925

5930

あの綺麗に剃った腮あごはどなただろう。  
お手で我々にお顔を隠しておられる。  
や。大変な事になった。

髯に火が移って舞い上がって来る。

被っておられる輪飾に、髪に、お胸に火が移る。

歓楽去って憂愁来るとというのがこれだ。

群集が消しに駆け附ける。

しかし誰一人ほのおを免れるものはない。

手に手に打つても叩いても、

新しい が燃え立つばかりだ。

火の中に入り乱れて、

仮装の一群は焼けてしまう。

や。口から耳へ囁き交して、

己に聞えて来るのは何事だ。

まあ、なんと云う不幸な夜だろう。

こんな歎<sup>なげき</sup>を己達の上に齎<sup>もたら</sup>すとは。

誰も聞きたく思わぬ事を、

あすの日は触れ散らすだろう。

兎に角所々で叫ぶ声が聞える。

あの御難儀なさるのは「帝」だと。

どうぞ本当でないと好<sup>い</sup>いが。

帝とお側の方々が焼けておいでになる。

樹脂<sup>やに</sup>のある小枝で身をよろうて、

吠えるような歌いざまをして、

一しよに滅びにおいでになるように、

惑わし奉った奴は咀<sup>のろ</sup>われておれ。

ああ。歓楽も度を踰<sup>こ</sup>えてはならぬと云う

戒を、若いもの共は所詮守ることは出来ないのか。

ああ、全能でおいでなさる通<sup>とお</sup>に、君主が

全智でおいでなさることは所詮出来ないのか。

5950

5955

5960



もう火が木立に燃え移った。

尖った　の舌で舐めるように

木を結び合せた屋根へ燃え上がる。

飯屋全体の火事になりそうだ。

不運はもう十二分だ。

誰が己達を助けてくれるだろう。

さしも一時の盛を極めた、帝王の栄華は

一夜の灰燼になるだろうか。

### 富の神

もう恐怖も広がって好いだけは広がった。

そろそろ救助に掛からせなくてはなるまい。

大地が震い動き、鳴り響くように、

その神聖な杖を衝き立てて貰おう。

おい。その広々とした「空」に言うのだが、

一面に冷たい<sup>においみなぎ</sup>匀を漲らせい。

5975

水を含んで棚引いている霧を

呼び寄せて、そこらへ漂わせて、

燃えている群集を覆って遣れ。

<sup>くもきり</sup>雲霧は流れて、ざわついて、渦巻いて、

漂いながら滑って、<sup>しず</sup>徐かに籠めて、

そこでも、ここでも火を消しながら闘ってくれ。

5980

苦艱を緩める力のある、湿ったお前達は、

あの虚妄の 戯を、

熱くない稲妻に変ぜさせてくれ。

悪霊どもがわれ等を侵そうとする時には、

魔法が<sup>しるし</sup>驗を見せなくてはならんだ。

5985

朝日。

帝と殿上人等とあり。ファウスト、メフィストフェレス上品にして目立たざる時様じようの粧じようをなし、二人皆ひざまず跪けり。

ファウスト

そんならあの率爾そつじな火の戯を御勘弁下さいますか。

帝

(二人を揮さしまねいて起立せしむ。)

ああ云う笑談は己は大好だいすきだ。

突然火かえんの真ん中にあるようになったから、

己は地獄の神のプルトンにでもなったかと思った。

見れば暗黒と煤炭との中に、岩で出来た底が

現れていて、そこに火が燃えていた。数千の

猛火はかしこ、ここの裂目から渦巻き上がって、

上の方で円天井のような形に出合っていた。

閃く火の舌で作られている、その絶頂は

合つて閉じるかと思えば、また離れて開いていた。

よじれた柱の並んで立っている広間の中を、

人民が長い列を作つて歩くのが見えた。

それが大きい圈わをかいて、己に近づいて来て、

いつもの様に己を敬つてくれた。

中には己の宮中のものも幾人か交つていた。

己は数千の「火の霊」の君主のようであつた。

### メフィストフェレス

畏れながらあなたが実際そうでいらつしやいます。

なぜと云うに四大悉くことごとく御威厳を認めていますから。

それで服従している火だけはお験になりましたが、

今荒れられるだけ荒れている海に飛び込んで

御覧なさい。真珠の多い水底をお踏ふみになるや否や、

忽ちたちま水が涌き立って、御身を中心にして、美しい

5995

6000

6005

境さかいが開ける。上のぼつては下くだる、紫の縁ふちを取った、  
明るい緑の波が、自然にふくらんで、立派な  
御殿になる。どちらへ向いてお歩あるきになつても  
その御殿は一足毎に附いて行く。

6010

壁は皆活動している。矢を射るように早く、  
入り乱れて動く。寄せたり返したりする。

6015

新しい、優しい光を慕つて、驚くべき海の化物が  
寄つて来て、打ぶつ附かるが、這入ることは出来ない。

金きんの鱗の竜が波を彩つて遊んでいる。

鯨あの開いたあぎとを覗いてあなたはわらいお笑なさる。

今でもお側にいる御殿のものは楽しく暮らして  
いましようが、海の底の人氣は未曾有すきです。

6020

それでいて、一番お好きなものに離れては  
おいでなさらない。とわに爽かな、立派な御殿を、  
物数奇なネレウスの娘どもが覗きに来る。

若いのはこわごわそつと来る。年上のは

横着に出掛ける。大姉おおあねえのテチスが嗅ぎ附ける。

あなたを二代目のペレウスにして抱き着いて

キスをする。それからオリンポス領の御座に。

帝

そんな虚空な領分はお前に任せて置く。

その玉座には厭いやでも早く即つかれるのだ。

メフィストフェレス

それから土つちはもう占めておいでになります。

帝

千一夜の物語から、すぐに抜け出したような

お前がここに來たのは、実に為合しあわせだ。

あの宰相の娘のシェヘラツアデのように

お前も才に富んでいるなら、最上の褒美を遣ろう。

随分この現実世界は己の氣に入らぬことが

6025

6030

6035

度々あるから、お前は己の召すのを待っている。

中務卿（急ぎで登場。）

わたくしの心から嬉しく思いまする、

このお知らせのような、最上の幸福と申すべき  
お知らせを、御前で喜んで奏聞いたすことが

わたくしの生涯にあらうとは存じませんでした。

借財は皆片附けました。

爪の鋭い高利貸どもも黙らせました。

わたくしは地獄の苦を免れました。天に上つても  
のぼ

こんな好い気持の事がありますまい。

兵部卿（続きて急ぎ登場。）

給料を割払にいたして遣しまして、

全軍に新規に契約をいたさせました。

槍兵どもは新しい血が循るような氣になつて、  
めく

酒保や女子どもまで福々でございます。  
おなご

帝

お前方、<sup>らく</sup>樂に胸を開けて息をしているな。

皺の寄った顔まではればれしているな。

それにひどく忙し<sup>いそが</sup>そうに出て来おる。

大府卿（<sup>あたか</sup>恰もこの時登場しつゝ。）

どうぞこの為事<sup>しごと</sup>をした、そこの二人にお尋<sup>たずね</sup>下さい。

ファウスト

いや。それは尚書様から奏聞なさるが好<sup>よ</sup>い。

尚書（緩かに歩み近づく。）

長生をいたした甲斐に、嬉しい目に逢いました。

そんなら、あらゆる苦艱<sup>きげん</sup>を歓樂に変えた、

この大切な文書<sup>もんじょ</sup>をお聞<sup>きこ</sup>下さい、御覽下さい。

（朗読。）

「凡そ知らむことを願うものには、悉く知らしめよ。

この一枚の紙幣は千クロオネンに通用す。

6050

6055



帝 国領内に埋もれたる無量の宝を

これが担保となす。その宝は

直ちに発掘して、兌換の用に供すべき

準備整えり。」

帝

不届な、怪<sup>け</sup>しからん詐欺をしたものがあるらしい。

ここにある己の親署は誰が贋<sup>が</sup>せた。

こんな罪を犯したものが刑罰を免れたのか。

大府卿

それはあなたのお筆でございます。お覚<sup>おぼえ</sup>が

あるはずです。つい昨晩でした。パンの神になつて

いらつしやる所へ、尚書がわたくし共と

一しよに参つて、「この祭のお祝に、万民の

幸福になる件に、一筆お染下さるように」と

申すと、お書<sup>かき</sup>なされたので、その夜の中に

6060

6065

6070

奇術を心得たものに申し附けて、  
御慈愛が国中に行き渡るように、

わたくしどもが千万枚紙幣を刷らせました。

十、三十、五十、百クロオネンが別々に出来ました。

人民の喜はどんなだか、御想像が出来ますまい。

あの半死半生で、黴の生えたようであつた

都を御覧なさい。皆生き上がつて、楽しんで

上を下へといたしています。これまでも世に

幸福をお与<sup>あたえ</sup>になつたお名ですが、人がこん程度

喜んでお名を見たことはありません。人が皆

助かる、このお名の外の文字<sup>もし</sup>は不用になりました。

帝

そして人民は金貨の代<sup>かわり</sup>に受け取るのか。

宮中や軍隊の給料の全額払が出来るのか。

そうだと、奇怪だと思うが、認めずばなるまい。

6075

6080

6085

## 大府卿

受け取って走って行つたものを、支えることは  
所詮出来ません。稲妻のように駆け散りました。  
銀行の門口は為切<sup>しきり</sup>がして開<sup>あ</sup>けてある。

無論手数料は取るが、一枚一枚  
金銀貨と引き換えて遣っている。

それを受け取って肉屋、パン屋、酒屋へ行く。

なんでも世間の人間が半分は食奢、半分は  
着奢<sup>やっ</sup>に浮身を窶<sup>やつ</sup>しているらしい。

商人は反物を切っている。為立<sup>したて</sup>屋は縫っている。

「帝王万歳」を唱えては、どこの穴蔵も景気好く、  
烹<sup>に</sup>たり、焼いたり、皿をちやらちやら云わせています。

## メフィストフェレス

誰でも公園の階段あたりを散歩すると、  
別品が立派にめかして、人を馬鹿にしたような

孔雀の羽で、片々の目が隠れるようにして

通るのを見るでしょう。それがわたくし共に笑顔

を見せて、札に横目を使います。才智や弁説で

口説くより、早く好い目が見られます。

もう誰も財布や蝦蟇口がまぐちを邪魔がるには

及ばない。札一枚なら楽に懷中に入れられる。

色文と一しよに持つにも便利だ。

坊主は難有ありがたそうに偈げの本に挟んで持つ。

兵隊は「廻れ右」が早く出来るように、

胴巻を軽くする。あなたのなすつた

大事業が、下々の小さい所へどう響くかと

云う話が、下卑て来まして済みません。

#### ファウスト

お国中で地の底深く動かずに、待っている

宝の有り余る数々は、用に立たずに

6100

6105

6110

寝ています。どんな大きい計画も、  
そう云う宝のためには、吝けちな埒らちになる。

6115

空想を馳せられるだけ馳せさせて、  
努力を尽しても、至らぬ勝である。

しかし深く物を察することの出来る達人は、  
無際限なるものに無限に信を置きます。

### メフィストフェレス

金銀珠玉の代かわりになる、こう云う紙幣は

6120

便利です。値を附けたり、両換したりせずに、  
持っているだけの物が分かる。酒と色とに  
浮かれないだけ浮かれられる。そして硬貨が  
欲しくなれば、両換屋が待っている。

そこになくなれば、ちよいとの間掘まる。

出て来た杯や鎖を競売にして、

すぐに紙幣を償却する。そして厚かましく

6125

悪口を言う、疑深い奴に恥を搔かせて遣る。

馴れてしまえば人は外の物を欲しがりはしない。

そうなれば、御領分の国々に

宝も、金銀も、札も有り余つて来ます。

帝

いや。己の国はお蔭で大した福利を得た。

出来る事なら、功に譲らぬ賞が遣りたい。

領内の地の底はお前方に任せて置く。

お前方は宝の立派な番人だ。宝の蔵<sup>かく</sup>してある

広い場所を知っていることだから、

掘る時はお前方の指図で掘らせる。

宝の頭<sup>かしら</sup>になつてゐる二人が協力して、

下の世界が上の世界と、相呼応して

福利を致すような位置に立っている

この場合の役目を、楽しんで勤めてくれい。

6130

6135

6140

## 大府卿

この人達とわたくしは少しも喧嘩はしますまい。  
魔法使を同役にするのは大好<sup>だいすき</sup>でございます。

(ファウストと共に退場。)

## 帝

そこで御殿にいるものに、一人々々札を遣るが、  
それをなんに使うか言つて見い。

舎人(金を受く。)

面白く、可笑<sup>おか</sup>しく、のん気になつて暮らします。

他の舎人(同上。)

すぐに女に鎖と指環を買つて遣ります。

侍従(金を受く。)

これまでもよりも倍旨い酒を買つて飲みましょう。

他の侍従(同上。)

もうかくしの中の采<sup>さい</sup>の目がわたくしの手をむずむずさせます。

旗手（沈重に。）

質に入れた邸や田畑を受け出します。

他の旗手（同上。）

これまでの貯蓄の中へ、これもやはり入れて置きます。

帝

己は愉快に、大胆に新しい事でもするかと思つた。  
しかしお前達の人柄を知つていれば、大抵分かる。  
それで己も分かつたが、幾ら宝が悖<sup>さか</sup>つて入つても、  
お前達は本の杢<sup>もく</sup>阿弥<sup>あみ</sup>だな。

阿房（進み出づ。）

下され物があるのなら、わたくしにも下さいまし。

帝

また生き戻つた所で、飲んでしまふのかい。

阿房

この魔法の紙切はどうも好く分かりません。

6150

6155



帝

そうだろう。どうせろくな使いようはすまい。

阿房

また一枚落つこちました。これはどういたしましょう。

帝

お前の手に落ちたなら、お前が取つて置くが好い。

(退場。)

阿房

やあ。五千クロオネン手に入つた。

メフィストフェレス

二本足の酒袋奴。生き戻つたか。

阿房

これまで度々遣りましたが、今度が一番上出来です。

メフィストフェレス

額に汗を掻いて喜んでゐるな。

阿房

ちよつと見て下さい。これが金かねに通用しますか。

6165

メフィストフェレス

うん。お前の咽や腹の欲しがる物は皆買える。

阿房

では田地や家や牛馬も買えますか。

メフィストフェレス

知れた事だ。出しさえすれば、不自由はない。

阿房

では山林や猟場や生洲いけすのある城もですか。

メフィストフェレス

無論だ。

お前がその城の殿様になつた顔が見たいな。

6170

阿房

はあ。今度は一つ大地主の夢でも見るか。（退場。）

メフィストフェレス（一人。）

これでも阿房に智慧がないと、誰か云うだろうか。

### 暗き廊下

ファウスト。メフィストフェレス。

メフィストフェレス

なぜこんな暗い廊下へ連れて来るのですか。

あの中で面白い事が足りないのですか。

いろんな人の押し合っている御殿の中で、

洒落や目くらがしの種子がないのですか。

ファウスト

そんな事を言ってくれるな。君は昔あんな事は  
厭<sup>あ</sup>き厭きする程しているのだ。

それに今、あそこで往ったり来たりしているのは、己の言うことに返事をすまいと云うのだ。

6180

己はしかし厭<sup>いや</sup>な事でもしなくてはならない。

大府卿と主殿とで己をせつくのだ。

なんでもお上が、ヘレネとパリスとを目の前に出して見せろ、すぐでなくてはならない、

男と女との模範をはつきり

6185

見たいのだと仰やるそうだ。

すぐに掛かってくれ。己は違約は出来ないから。

メフィストフェレス

そんな約束を軽はずみにしたのがむちやです。

ファウスト

それは君の術がどんな成行になると云うことを、君が前以て考えなかったのが悪い。

6190

お上を金持にして上げたからには、

慰<sup>なぐさ</sup>がしたくなられるに極<sup>き</sup>まっている。

メフィストフェレス

そんな事がすぐばつが合せられると、あなたは  
思っていますね。クロオネンの紙の化物を

出すように、ヘレネが出されると思っっていますね。

所がわたし共は今嶮しい阪の下に立っています。

非常な、縁遠い境界へ、あなたは手を出すのだ。

事に依ると、また新しい借金をしなくてはならない。

魔女や、化物や、変<sup>かわりだね</sup>種の一寸坊なら、

なん時でも御用を仰せ附けられますが、

棄てた物ではないとしても、悪魔の色女を

グレシアの女だと云って連れ出しては通りません。

ファウスト

またいつものだらだら拍子のお講釈を聞くのか。

君を相手にすると、万事きつと曖昧な所へ落ちて行く。

君はあらゆる故障の親元だ。

6205

そして一帳場毎に褒美がいる。己は知っている。

君がちよつと呪文を唱えようと、出来るのだ。

背後を向いている隙に、すぐ連れて来られるのだ。

メフィストフェレス

いいえ。あんな異端の民にはわたしは関係しない。

あいつ等は別の地獄にすんでいるのだ。

6210

尤も手段はあります<sup>もつと</sup>。

ファウスト

それを聞こう、すぐに。

メフィストフェレス

実は極の深秘は言いたくないのです。寂しい所に

こうこうしく住んでいる女神達がある。

その境には空間もなければ時間もない。

その事を話すのは一体不可能なのだ。

6215

それは「母」達だ。

ファウスト（驚く。）

母達か。

メフィストフェレス

身の毛が弥立ちますか。

ファウスト

母達、母達。なんと云う異様な名だろう。

メフィストフェレス

実際異様な連中ですよ。無常の人間に知られずに隠れていて、わたし共も名を言いたくない神です。

その家へ往くには、あなたよほど深く摩<sup>ず</sup>り込むのです。そんな物に用が出来たのは、あなたのせいだ。

ファウスト

そこへ往く道は。

メフィストフェレス

道はありません。歩いたものがない、

歩かれぬ道です。頼まれたことのない、頼みようのない所へ  
往く道です。思い切つて往きますか。

貫<sup>かんのき</sup>木や錠前を開けるのではない。

あなたは寂しさに付き纏<sup>まと</sup>われます。

一体寂しいと云うことが分かっていますか。

ファウスト

まあ、そんな言草は儉約したが好<sup>い</sup>いかと思う。

ずっと前に出合<sup>い</sup>つた、

あの魔女の台所の匂<sup>にお</sup>がするようだ。

これまでも己は世間に付き合<sup>い</sup>つて、空虚な事を

習いもし、教えもしたではないか。

たまに己の目に映じたままを言<sup>い</sup>うと、

人は却<sup>かえ</sup>つていつもの倍やかましく反対したものだ。

己は厭<sup>いと</sup>な目に逢<sup>あ</sup>うのを避<sup>よ</sup>けて、

6225

6230

6235



寂しい山の中へ逃げさえた。

それから丸で棄てられて、一人でいたくなさに、  
悪魔に体を任せたじやないか。

### メフィストフェレス

しかし大洋に泳ぎ出して、その沖で

際限のない処を御覧になるとした所で、

溺れて死ぬる懼おそれを抱きながらも、

波の立居たちいは見られますね。兎に角何か

見られますね。風いだ海の緑を穿うがつ

鯨のようなデルフィンも見えましょう。

雲のたたずまい、月日や星の光も見えましょう。

それと違って、とわに空虚な遠い境には

なんにも見えません。自分の蹻あしおと音も聞えませんが、

体を靠もたせて休むだけの固い物ありません。

### ファウスト

昔から新参を騙し騙しした、魔法の師の中の一番の先生のような話振をするね。

6250

ただあべこべだ。伎倆や力量を進めさせに、君は己を空虚の中へ遣る。

火の中に埋めてある栗を取りに遣られた、

あの猫のように、君は己を扱うのだ。

宜しい。一つその奥を窮めて見よう。

6255

君の謂う空虚の中に、己は万有を見出す積<sup>つもり</sup>だ。

メフィストフェレス

いや。お別<sup>わかれ</sup>をする前に褒めて上げます。

兎に角あなたは悪魔の腹を知っていますね。

さあこの鍵<sup>もち</sup>をお持ちなさい。

ファウスト

こんな小さな物をか。

メフィストフェレス

まあ、馬鹿にしないで、手にお取<sup>とり</sup>なさい。

ファウスト

や。手に取れば大きくなる。光つて来る。

メフィストフェレス

どんな貴重品が手に入ったか、分かりますかい。  
その鍵が道を嗅ぎ附けて、あなたを連れて  
母達の所へ行くのです。

ファウスト（戦慄す。）

母達の所へ。ああ、聞く度に身に応える。  
こんなに厭に聞えるのは、どうした詞<sup>ことば</sup>だろう。

メフィストフェレス

聞き慣れない詞を嫌う程、料簡が狭いのですか。  
聞いた事のある詞ばかり聞いていたのですか。  
あなた位疾<sup>と</sup>うから不思議に慣れていなさる以上、  
これからどんな詞が聞えたって、平気でなくつては。

## ファウスト

いや。己だつて凝り固まっている所に福を  
求めはしない。戦慄は人生の最上の徳だ。  
世間がどんなにあの感じをおつくうにしても、  
人間はあれで非常な事を深く感ずるのだ。

## メフィストフェレス

そんなら降りておいでなさい。升<sup>のぼ</sup>つておいでなさいと  
云つても好い。同じ事だ。既に生じているものに  
背<sup>せ</sup>を向けて、解き放されたものの世へおいでなさい。

もう疾<sup>たのしみ</sup>つくに無くなつているものを見て  
お楽<sup>ゆきき</sup>なさい。雲の往來のように入り乱れた  
事にお逢<sup>あい</sup>でしよう。そしたら鍵を揮つてお避<sup>よけ</sup>なさい。

## ファウスト（感奮す。）

宜しい。こう鍵を握ると、力が増して、  
胸が拡がるように感じる。どりや、為<sup>しごと</sup>事に掛かろうか。

## メフィストフェレス

一番深い、深い底に届いたと云うことは、  
焼けている五徳を御覧になると分かります。

その火の光で母達が見えるでしょう。その折々で  
据わっているのも、立ったり、歩いたりして

いるのもあります。所有あらゆる造られた物の象かたが  
まわり  
周囲に漂っている、創造、改造の神達で、

永遠なる意義を永遠に語っておられるのです。

神達には象かたしか見えないから、あなたは見えない。

随分あぶない事ですが、腹を据えてずっと

五徳の所へ往って、その鍵で五徳に障って

御覧なさい。

(ファウスト鍵を持ちて厳かに命ずる如き科しぐさをなす。メフィストフェレスそれを見  
て。)

それで好いのです。そうすると、

五徳があなたの従者のように附いて来ます。

そして平氣でお升<sup>のほり</sup>なされると、機運が助けて、

神達の心附かぬ間に、五徳を持つて歸られます。

旨く持つてお歸<sup>かえり</sup>なされると、そんな為事を

大胆に始めてなされたあなたの手で、例の

男と女とを夜の国からお呼になる事が出来ます。

出来た為事はあなたの功です。

それからは五徳から立つ烟が、魔法の業<sup>わざ</sup>で

扱えば、神々に化けるのです。

ファウスト

そこで先ずどうするのか。

メフィストフェレス

下へ降<sup>お</sup>りようとなさい。

力足を踏んで、段々降りて行くのです。

（ファウスト足踏して降り行く。）

6295

6300

鍵が旨く先生の用に立ってくれば好いが。  
この世へ戻って来られるか知らんて。

6305

### 燈明き数々の広間

帝、諸侯、殿上人等動揺せり。

侍従（メフィストフェレスに。）

まだ幽霊を出して見せるお約束があるのですぜ。  
早くお始<sup>はじめ</sup>なさい。殿様がお待兼だ。

中務卿

今もお上がお尋があつた。殿様のお顔にも  
掛かる事だから、延び延びにしないで下さい。

メフィストフェレス

そのために仲間が行っているのですよ。

6310

あの男がどうすれば好いか知っていて、  
どこかへ籠ってこっそり働いているのです。  
なかなか一通の骨折ではありません。

なぜと云うに、「美」と云う宝を持ち上げるには、  
最高の技術、哲人の秘法がいります。

中務卿

それはどんな術をなさるとも勝手です。  
お上はただ早く遣って貰いたいと仰やるのです。

明色の女（メフィストフェレスに。）

あなた、ちよいと。わたくしの顔はこんなに  
綺麗ですが、夏になるとこんなでなくなりますの。  
この白い肌一ぱいに、茶色なぼつぼつが出来て、  
厭いやになってしまいますの。何か好いお薬を  
下さいな。

メフィストフェレス



お気の毒ですね。あなたのような

別品さんが、五月にはお内の猫のように斑ふちに

なるのですか。青蛙の卵と蝦蟇ひきがえるの舌とを

水に漬けて、汁を澄ませて、満月の夜に丁寧じょうりゆうに

蒸じょうりゆう 餹じょうりゆう して、下弦の月の夜に旨くお塗ぬりなさい。

春になってから、斑は出なくなりますよ。

### 暗色の女

まあ、あなた一人をみんなで取り巻きますこと。

わたくしにもお薬を下さいな。歩いたり、

踊ったりする時もそうですが、ちよつとお辞儀を

いたすにも、足の凍傷しもやけで難儀しますの。

### メフィストフェレス

わたしのこの足で踏んで上げましょう。

### 暗色の女

それは恋人同士でいたす事でしょう。

## メフィストフェレス

わたしが踏むのは、もつと意味が深いのです。

どこの病氣でも、同じ所で直します。

足で足を直す。外の所で外の所を直す。

いらつしやい。好いのですか。御返報には及びません。

## 暗色の女（叫ぶ。）

あ、痛。<sup>いた</sup>あ、痛。ぴりぴりしますわ。馬の蹄で

踏まれたように。

## メフィストフェレス

もうそれで直っています。

踊りたい程お踊<sup>おどり</sup>なさい。それから御馳走を

食べながら、好い人と踏みっこをなさい。

## 貴夫人（摩り寄る。）

ちよつとお通しなすつて。本当にせつないので

ございます。胸が煮<sup>に</sup>え返りますの。きのうまで

わたくしを大事にしていた方が、あの女に  
気が移って、わたくしに背中をお向なさいます。

メフィストフェレス

ちつと難症だが、まあ、お聞なさい。

そつとその男の傍へ寄つて、

上衣うわぎの袖でも肩でも、出来好い所へ、

この炭で筋を附けてお遣なさい。

すると男が後悔して、ぎくりとします。

炭はすぐにあなたが丸呑にするんです。

水や酒で飲むのではありませんよ。今夜のうちに

お寝間の前へ来て溜息を衝きます。

貴夫人

毒にはなりませんの。

メフィストフェレス（怒る振をなす。）

なんですと。失敬な。

6345

6350

6355

その炭はめつたに手に入らない炭です。  
随分わたし共が骨を折って焚かせる、  
あの罪人を焼き殺す火の炭です。

舎人

好きな女がわたくしを子供だと云いますが。

メフィストフェレス（傍白。）

もうどいつの言う事を聞いて好いか分からない。

（舎人に。）

それは余り年の行かないのに掛かつては駄目だ。  
年増だと、君のようなのを珍重がるね。

（他の人々寄り集る。）

また新手が来る。なんと云う御難だろう。

とうとう本当でも言つて切り抜けずばなるまい。

極の劣策だ。こんな困った事はない。

ああ。母達、母達。ファウストを返して貰いたいなあ。

(見廻す。)

もう広間の明がぼんやりして来た。

御殿中のものが一度に動き出す。

皆おとなしく行列を作って、ここの長い

廊下をも、あそこの遠い渡殿をも歩いて行く。

はあ。あれは古い騎士の広間の大きい処に

集るのだ。ほとんど這入り切らない位だ。

大きい壁に垂布たれぬのが取り附けてある。

隅や龕がんに甲冑が飾つてある。

ここでは呪文じゅもんなんぞはいらぬらしい。

化物どもがひとりでに出て来そうだ。

6370

6375

## 騎士の広間

燈の薄明。

帝と殿上人等と入り籠みあり。

先触

化物どもの秘密の働が、狂言の先触をすると云う、  
わたしの昔からの役目を、兎角妨げて困ります。

この入り組んだ運<sup>はこび</sup>を当前の道理で

説き明そうとするのは、なかなか難儀だ。

椅子や腰掛はもう出ている。

殿様を丁度壁を前にしてお据わらせ申した。

暫くの間は壁紙にかいてある昔の戦争の

絵でもゆつくり御覧になるが好い。

殿様もお側の方々も、皆さんぐると集<sup>あつま</sup>つて

おいでになる。背後はベンチで一ぱいになる。

化物の出る、気味の悪い場でも、好いた同士は  
それぞれに隣になるように都合して据わった。

さてこう一同程好く陣取つて見ますれば、  
支度は宜しい。化物はいつでも出られます。

(金笛。)

天文博士

さあ、狂言を始めた始めた。殿様の  
仰だ。壁になつてゐる所はひとりでに開<sup>あ</sup>け。  
何の邪魔もない。ここでは魔法がお手の物だ。  
垂布は火事に燃えてまくれ上がるように消える。  
石壁も割れて、ひっくり返る。

6395

奥行の深い舞台が出来らしい。どこからか  
不思議な明<sup>あかり</sup>がさして来るようだ。  
そこでわたしは舞台脇へ行つてゐる。

メフィストフェレス

(黒ん坊のある穴より現る。)  
ここで己は御鼯<sup>ごひいき</sup>尻にあずかる積<sup>つも</sup>りだ。

6390

吹き込んで物を言わせるのが悪魔の談話術だ。

（天文博士に。）

あなたは星の歩く拍子が分かるのだから、わたしの内証話も旨く分かるでしょう。

天文博士

不思議な力で、ここになががつしりとした、古代の宮殿が目の前に見えて来る。

昔天を擎<sup>かか</sup>げていたアトラスの神のように、柱が沢山列をなして、ここに立っている。

二本位で大きい屋根を持つことの出来る

柱だから、これならあの石の重みに堪えよう。

建築家

これが古代式ですか。褒めようがありませんね。

野暮でうるさいとでも云うべきだ。どうも

荒っぽいのを高尚、不細工なのを偉大としている。

6400

6405

6410



わたしどもはどこまでも上へ上へと昇る狭い柱が好だ。  
 剣形迫持の天井は思想を遠大にする。  
 わたしどもにはそう云う建物が一番難有い。

天文博士

好い星の下で出来る楽を難有くお受なさい。  
 呪咀の詞で理性を縛して置いて、その代に  
 美しい、大胆な空想を

広く自在に働かせるのです。

思い切った、大きい望が目で見られる。

不可能な所が信ずる価値のある所です。

(反対側の舞台脇よりファウスト登場。)

天文博士

や。術士が司祭の服を着て、青葉の飾を戴いて出た。  
 大胆に遣り掛けた事を、これから遣るのですね。  
 うつろな穴から五徳が一しよに上がって来た。

もうあの鼎かなえから烟にの匂におが漲みなぎつて来そうだ。  
この難有しごとい為事の祝福の支度をしますね。  
これから先さきは好運な事しかないでしょう。

ファウスト（莊重に。）

無辺際に座を構えて、永遠に寂しく住んでいて、  
しかも集むれいる母達よ。御身等の名を以て己は行う。  
生きてはいずに、動いている性命かたの象が、

おん身等の頭こゝろを繞めぐつて漂つてゐる。かつて一度ひとたび  
光明こうみょうと仮現けげんとの中に存在したものは、悉ことごとく  
ここに動いている。永遠を期しているからである。

万能の権威たる御身等は、それを日の天幕の下、  
夜よの穹隆きゅうりゅうの下に分けて遣られる。あるものは  
生せいの晴やかな道が受け取る。あるものは大胆な  
術士が貰せいに行く。そしてその術士は

人の望むがままに、赤心を人の腹中に置いて、

おおように、吝おしまずに不思議を見せるのである。

天文博士

あの焼けている鍵が鼎に触れるや否や、  
暗い霧がすぐに広間を罩つつむ。その霧は

6440

這い込んで、舒のびたり、固まったり、入り乱れたり、  
並び合ったりして、雲のように棚引く。さあ、

鬼を役する巧妙な術を御覧なさい。物の

動くに連れて、楽の声が聞える。浮動する

6445

音響から、何とも言えぬ物が涌く。その音響は  
延びて旋律になる。柱はもとより、その上の

三裂さんれつの飾までが音を立てる。わたしは

宮殿全体が歌っているかと思えます。霧は沈む。

その軽い羅うすもののような中から、調子の好い歩あるきごま様で

6450

美しい若者が出て来る。わたしは役目の上で  
もう何も申しますまい。若者の名は斥さして言うまでも

ないでしょう。誰もパリスを知らぬ人はいはずです。

(パリス登場。)

貴夫人

まあ、あの男盛の力のかがやきを御覧なさいまし。

第二の貴夫人

摘んだばかりの桃のようで、露も沢山ありましょう。

第三の貴夫人

恰好の好い唇が旨そうに※<sup>ふくら</sup>んでいますこと。

第四の貴夫人

あなたあんな杯にお口をお附<sup>つけ</sup>なさりたくつて。

第五の貴夫人

上品だとは申されなくても、好い男ですわね。

第六の貴夫人

も少し取<sup>とりまわし</sup>廻<sup>まわ</sup>が功者<sup>なま</sup>だったら、猶<sup>なほ</sup>好いでしょうね。

騎士

なんだか身分は羊飼の若い者かと見えますな。  
貴公子らしくはなく、行儀驍もなさそうです。

他の騎士

さようさ。半裸では好く見えるが、  
鎧を着せて見たら、どうか知らん。

貴夫人

あれ。しなやかな、好い様子をして据わりましたね。

騎士

あの膝に抱かれたら好いだろうと云うのでしょうか。

他の貴夫人

あの肱を枕にした恰好の好うございますこと。

侍従

不作法な。わたしは差し止めたいと思いますね。

貴夫人

殿方は何につけても故障を仰やるのですわ。

侍従

殿様の御前でじだらくな風をして。

貴夫人

あれは芸ですわ。<sup>ひとり</sup>一人でいる積<sup>つもり</sup>ですわ。

侍従

いや。その芸がここでは行儀好くなくては。

貴夫人

あれ。好<sup>い</sup>い心持に寝てしまいましたのね。

侍従

今に軒でもかくでしょう。自然そつくりでしょうよ。

若き貴夫人（感歎す。）

あの香の烟に交って来る薫はなんでしょう。

わたし胸の底までせいせいしますわ。

やや年長けたる貴夫人

本当ね。胸に沁み込むようね。あの人の

勻ですわ。

最も年長けたる貴夫人

あれは体の盛になつてゐる勻で、  
それが醸されて不老不死の名香になつて、  
まわりへ一面に広がるのですよ。

(ヘレネ登場)

メフィストフェレス

こいつだな。己なんぞは見たつて平気だ。  
別品には相違ないが、己には氣に食わない。

天文博士

わたしは正直に白状しますが、  
これにはなんとも申しようがありませんな。  
美人が出た。火焰の舌があつても駄目だ。  
昔から女の美はいろいろに歌われている。  
あれを見せられては、誰でも心が空そらになる。

あれを我物にした人は、余り<sup>しあわせ</sup>為合過ぎたのだ。

## ファウスト

己の目はまだあるだろうか。美の泉が豊かに  
湧いて、心に深く沁むように見えると云おうか。  
恐ろしい下界の旅に嬉しい限の土産があつた。

世界がこれまでどんなにか無価値で、錠前<sup>あ</sup>が開かずに  
いただろう。それがこん度司祭になつてから

どうなつたか。始て望ましいものになり、基礎<sup>が</sup>  
出来、永存する。お前を棄てる氣になつたら、

己の生息の力が消えても好<sup>い</sup>い。昔己を  
悦ばせた、美しい形、不思議な鏡像に  
見えて幸福を感じさせた、美しい形は  
今見る美の泡沫の影に過ぎない。

己があるだけの力の発動、感情の精髓、  
傾倒、愛惜、崇拜、悩乱を捧げるのは、



お前だ。

メフィストフェレス（棚の内より。）

しつかりなさい。役を忘れてはいけません。

やや年長けたる貴夫人

丈もあつて、恰好も好いが頭が少し小さいようね。

やや年若き貴夫人

足を御覧遊ばせ。下品に大きいうございますこと。

外交官

上つ方にあんな恰好のを拝したことがありますよ。

頭から足まで、わたしは美しいと思います。

殿上人

寝ている男の傍へ横著げに優しく近寄りますね。

貴夫人

あの上品な若者に比べては醜いじゃありませんか。

詩人

若者は女子おなごの美しさに照されています。

貴夫人

エンジミオンとルナですね。画のようですね。

詩人

そうです。はあ。女神が身を屈めて、上うへに伏さつて、  
男の息を飲もうとするらしく見えます。  
羨ましい。や。接吻する。器うつわは盈みちた。

女監

まあ、人の前も憚きようじんらずに。狂人染おきみた真似を。

ファウスト

若者奴に過めぐみ分な恵を。

メフィストフェレス

しつ。静かに。

化物のするように、構わずに、させてお置おきなさい。

殿上人

おなご  
女子は足元軽く退いて、男は目を醒ましますね。

貴夫人

女が振り返ります。大方そうだろうと思いました。

殿上人

男は驚いています。奇蹟に逢ったのですから。

貴夫人

女のためには目前の事になんの不思議もないのですね。

殿上人

様子の好い風をして男の所へ帰って行きます。

貴夫人

分かりましたわ。女が男に教えるのでございます。

男はあんな時には馬鹿なものです。

大方自分が始ての相手だなぞと思うのでしょうか。

騎士

わたしの目利は違います。気高く上品ですね。

貴夫人

浮気女が。わたしはどうしても陋いやしいと思います。

舎人

わたくしはあの男になりとうございます。

殿上人

あんな網になら、誰も罹かからずにはいられませんね。

貴夫人

あれでいろんな人の手に渡った宝ですよ。

金箔も大ぶ剥けています。

他の貴夫人

まあ、十とおばかりの時からいたずらをした女ですね。

騎士

人はその場合に獲られる最上の物を取るのです。

わたしなんではあの残のこりもの物でも貰うことにします。

学者

6525

6530

わたしにもはつきり見えているが、正直を申せば、  
本物<sup>ほんもの</sup>だか、どうだか疑わしいのです。

現在しているものは、人を誇張に誘い易い。

わたしは兎に角書いたものに<sup>すが</sup>縋る。読んで見ると、

こうあります。実際あの女は殊にトロヤの髯の

白い翁に気に入ったと云うのです。ところが

それが、わたしの考では、この場合に符合する。

わたしは若くはない。それに気に入りますな。

#### 天文博士

もう童ではない。大胆な男になって、女の

抵抗することも出来ないのを、掴まえます。

腕には力が加わって、女子を抱き上げる。

連れて逃げるのでしょうか。

#### ファウスト

向う見ずの白痴<sup>たわけ</sup>が。

敢てする気か。聴かぬか。待て。余り甚だしい。

メフィストフェレス

あなたが自分でしているのではありませんか。化物の狂言を。

天文博士

ただ二言附け加えます。これまで見た所では、この狂言をヘレネの掠奪と名づけたいのです。

ファウスト

なに。掠奪だと。己がここに手を束ねていると云うのか。この鍵はまだ手にあるではないか。

寂寞の中の恐怖と波瀾とを経過して、

これが己を堅固な岸に連れて来たのだ。

己はここに立脚する。ここには実物ばかりある。

ここからなら、<sup>れい</sup>霊が<sup>きぶつ</sup>鬼物と闘うことが出来るのだ。

いっからなら、幽明合一の境界が立てられるのだ。

遠かった、あの女を、これより近づけようはない。

今己が救つて遣れば、二重に我物になるわけだ。  
遣ろう。母達、々々。御身等も許してくれ。

あれを識つたからは、あれと別れることは出来ぬ。

天文博士

あなた何をします。ファウストさん。力ずくで

女子を攫<sup>つか</sup>まえる。もう女の姿が濁<sup>く</sup>つて来た。

鍵を男の方へ向ける。鍵が男に

障る。や。大変だ。やや。

(爆発。ファウスト地に倒る。男女の鬼物霧になりて滅<sup>き</sup>ゆ。)

メフィストフェレス

(ファウストを肩に掛く。)

お前方の自業自得だ。馬鹿者共を背負<sup>しよ</sup>い込むと、

悪魔でも損をせずにはいられない。

(闇黒。雑<sup>ざつとつ</sup>。)

## 第二幕

高き円天井ある、ゴチック式の狭き室。か  
つてファウストの住みし所。総て旧に依る。

メフィストフェレス

（帷とばりの背後より立ち出づ。メフィストフェレスが手に帷かかを擧げて顧みるとき、古風なる臥床に横はれるファウストの姿、見物に見ゆ。）

そこに寝ておれ、結んでは解けにくい

恋の絆きずなに誘きずわれた不運者奴。

へレネに現うつを抜かしたものは、



容易に正気には帰らぬのだ。

（四辺を見廻す。）

上を見ても、右左を見廻しても、

なんにも変つてはいない。そっくりしてある。

ただあの窓の色硝子が前より曇つているようだ。

それから蜘蛛くものいが殖はえたようだ。

インクは固まつて、紙は黄ばんでいる。

何もかも元の場所に置いてある。

先生が己に身を委ねる契約を書いた、

あの筆までがまだここにある。

そればかりではない。己がおびき出して取つた

血の一滴が、驚ペンの軸の奥深く詰まっている。

またと類のないこの珍品を

大骨董家に獲とせたいものだ。

そこにはあの古い裘けごろもまでが古い鉤に懸かけてある。

あれを見るとあの時のいたずらを思い出す。

子供の時に己の教えた事を、青年になつて

今でも吝おしみながら使い耗へらしているかも知れぬ。

もじやもじや温ぬくいこの外套を、今一度身に著けて、

世間では当然の事に思っている

大学教授の高慢がる真似事を、

なんだかして見たいような氣にもなる。

ああしたえらがる心持に学者はなれようが、

悪魔いやくはとうから厭いや氣がさしているて。

(取り卸したる裘を振へば、蟋蟀こおろぎ、イタリアこほろぎ、甲翅虫など飛び立つ。)

合唱する昆虫等

好くぞ来ませる。好くぞ来ませる。

古き恩人、おん身よ。

飛びつゝ、鳴きつゝ、

われ等早くおん身を知れり。

6585

6590

6595

一つ一つひそやかに

おん身われ等を造りましぬ。

父よ。百千の群ももちむれなして、

われ等舞ひつゝ来ぬ。

胸に住む小賢きものは

飽くまで隠かくろひをらんとす。

それには似しずて、蝨等しらみは

たはやすくぞ蛻もぬけ出づる。

メフィストフェレス

この若い、造られた物を見るのが、意外に嬉しい。

ただ種をさえ蒔まいて置けば、いつか取入とりいれが出来る。

もう一遍この古い毛衣を振って見よう。

そこ、ここからまた一つ二つ飛んで出る。

可哀い奴等。飛び上がり、這い廻り、

千百箇所の隅々へ、隠れに急いで行きおる。

古い箱の置いてあるあそこへも、

6610

茶いろになつた古文書や、

古壺の五味の溜まつた欠<sup>かけ</sup>らのこの中へも、

あの髑髏のうつろな目の穴へも。

こんながらくたや、腐<sup>くされもの</sup>物の中には、

永久に虫がいなくてはならぬのだ。

6615

（裘を著る。）

さあ、来て己の肩をもう一遍包んでくれ。

きようは己がまた先生だ。

さてこう名告<sup>なの</sup>つた所で、詰まらないな。

己を認めてくれる人間どもはどこにいるのだ。

（メフィストフェレス鈴索を引く。鈴は耳に徹する、叫ぶ如き音を発し、その響に

堂震ひ、扉開く。）

門生

（蹣跚<sup>まんさん</sup>として、暗き長廊下を歩み近づく。）

なんと云う音だ。それに響くこと。

6620

梯子段がぐらついて、壁がぶるぶるする。その上

あの色硝子の震えている窓から、稲妻の

ぴかぴかするのが見えている。塗天井に

ひび亀裂が入って、ほぐれた石灰や土が

上の方から降って来る。戸なんぞは

6625

堅く錠を卸して置いたのに、不思議な力で

錠が開いてしまった。や。あれはどうだ。

気味の悪い。ファウスト先生の古毛皮を著て

おおひと巨人のような男が立っている。あの目で

視られたり、あの手で招かれたりしたら、

6630

こっちはそこへたばつてしまいそうだ。

逃げようか。こうしていようか。

ああ。己はどうなる事だろう。

メフィストフェレス（招く。）

こつちへおいで。君の名はニコデムスだね。

門生

さようでございます。ああ。祈祷でもしようか。

メフィストフェレス

そんな事は<sup>よ</sup>廃し給え。

門生

好くわたくしの名を御存じで。

メフィストフェレス

知っているとも。年を取つても、学生を

していなさる。老書生だな。学生もやつぱり

好<sup>すき</sup>でそう云う風に修行し続けるのだ。そして

天分相応な、吹けば飛ぶような家を建てる。

大学者だつて、家が落成するとまでは行かぬ。

所で君の先生だが、あれは修養のある人だ。

目下学術界の第一流に推されている

ワグネル先生を識らないものは世にあるまい。

毎日のように創見を出して開拓して行く先生が、

實際今の学術界を維持していられるのだ。

先生一人の周囲に、いやく苟も学<sup>くんしゅう</sup>に志ある

聴衆は くんしゅう 集<sup>あ</sup>して来る。講壇の上から

光明を放っているのは、先生一人だ。

先生が聖ペトルスのように鍵を預かつていて、

した下もお開<sup>あ</sup>けになる、上もお開<sup>うえ</sup>けになる。

先生が群を抜いて光り耀<sup>かがや</sup>いておられるので、

誰の名声も榮譽も共に争うことが出来ない。

ファウスト先生の名さえ、もう陰<sup>かげ</sup>になっている。

ワグネル先生は独創の発明家だから。

#### 門生

いえ。ちよつと御免下さい。お詞<sup>ことば</sup>を反<sup>かえ</sup>すようですが、

ちよつと申し上げとうございます。こちらの

6645

6650

6655

先生は万事そう云う風ではございません。

謙遜があの方のお生うまれつき附つきです。ファウスト大先生が

不思議に跡をお隠しなすつたのが、

諦められぬと仰やっておられます。

大先生さえお帰かえりになったら、慰藉なぐさみも幸福も

得られようと申されます。大先生がお立退たちのかに

なつてから、当時のままにしてあるお部屋が

お帰かえりを待っています。わたくしなぞは

あのお部屋へ這入るのもこおうございます。一体

もう何時頃でございましょう。なんだか家の

壁までが物をこわがっているようです。さつきは

戸くどの枢くわが震えて、錠前あが開きました。そうでないと、

あなたもお這入が出来なかつたでしょう。

メフィストフェレス

先生はどこにいなさるのだ。己を連れて

6670

6675

6670



行くとも、先生を連れて来るともし給え。

門生

実は非常に厳しいお誠いましめがあるのです。そんな事をいたして宜しいか、どうか、分かりません。お企くわだてになつた大事業のために、もう幾箇月も、非常に

静せいじやく寂じやくを守つてお暮らしになつています。学者中で

一番お優しい、あの方がお鼻かたの辺からお耳みみの

辺まで煤けておいでになつて、火をお吹ふきになるので、

お目は赤くなりまして、まるで炭すみ焼やきのように

お見えなさいます。そして絶間なしに喘いで

おいでなさる、そのお声に、火箸のちやらちやら云う

物音が伴奏をいたしているのでございます。

メフィストフェレス

しかしまさか己を這入らせんとは云われまい。

己はその成功を早めて上げる人間だ。

（門生退場。メフィストフェレス重々しげに坐す。）

己がここに陣取るや否や、あそこの奥の所に、お馴染のお客様が見える。こん度は最新派の奴と来ているから、際限もなく増長していることだろう。

得業士（廊下を駆け来る。）

門<sup>かど</sup>の戸も部屋<sup>あ</sup>の戸も開いているな。

この按<sup>あんばい</sup>排なら今までのように、

生きた人間が死人同様に

黴<sup>せい</sup>の中にいじけて、腐って、

生<sup>せい</sup>その物のために死ぬるような、

愚な事はしていぬだろう。

この家は外壁も内壁も

傾いて、崩れそうになっている。

6685

6690

6695

己達も早く逃げないと、

押し潰されてしまふだろう。

己は誰よりも大胆だが、誰がなんと

云つても、これより奥へは這入らない。

6700

所で、きょうは妙な目に逢うぞ。

ここが、何年か前に、己がおめでたい、

なり立ての学生で、動悸をさせて

びくびくしながら遣つて来て、

あの髯親爺共を信用して、

寐言を難<sup>ありがた</sup>有<sup>が</sup>がった所だな。

6705

親爺共は自分達の知った事、知っていて

信じていない事を、古臭い

破<sup>やぶれぼん</sup>本の中から言つて聞かせて、騙しおつて、

自分達の性命をも己の性命をも奪いおつた。

6710

おや。あの奥の龕がんのような所の  
薄うす明あかりに、まだ一人据わっているな。

近寄つて見ると、驚いたわけだ、

まだあの茶いろの毛皮を著ている。

實際あの別れた時のままで、

6715

お粗末な皮にくるまっている。

あの時は己に分からなかつたので、

あいつが巧者そうに見えた。

きようはその手は食わないぞ。

どれ。一つ打ぶつ附かつて遣ろう。

6720

いや。老先生。レエテの川の、人に物もの忘わすれをさせる  
濁水が、その俯向けておられる 禿はげ頭あたまを底から

漬<sup>ひた</sup>していないなら、ここへ昔の学生が、学校の鞭の下を疾<sup>と</sup>つくに抜けて来たのを、歓迎して下さい。あなたはいつかお目に掛った時のままでおられる。わたしは別な人間になって来ました。

メフィストフェレス

ふん。わしの鳴らしたベルで君の来られたのは喜ばしい。あの時も君を軽視してはいなかった。追って綺麗な蝶になると云うことは、

毛虫や蛹<sup>さなぎ</sup>の時から分かる。若々しいちぢ

れた髪をして、レエスの著いた襟を掛けて、

君は子供らしい愉快を覚えていた。

辮<sup>べんぱつ</sup>髪には、君、一度もならなかったのかい。

きようは君のスウェデン風の斬髪を拝見するね。

快活で、敏捷らしい御様子だ。絶待的無過失の

思想家なぞになって、故郷へ帰らないようになさい。

6725

6730

6735

## 得業士

老先生。また元の所でお目に掛かりますが、どうぞ革新せられた時代の推移をお考かんがえなさつて、

一語両意の下手な講釈は御遠慮下さい。

わたしどもは物の聴取ききとり方かたが變つていきますからね。

あなたは馬鹿正直な子供をお擲揄からかいになつた。

それがなんの手段も煩わさずにお出来になつた。

今はもうそんな事を敢てするものはありません。

## メフィストフェレス

ふん。若いものに本当の事を説いて聞かせると、  
嘴くちばしの黄いろい時の耳には兎角逆うのだ。

所が跡で何年も立つてから、自分の体が

あらあらしく物に打ぶつ附かつて、それが分かると、

自分の脳天から出た智慧のように思うのだ。

そこで「あの先生は馬鹿だった」などと云うのだて。

## 得業士

いや。「横著者だった」となら云うかも知れませんか。

覲<sup>てきめん</sup>面に本当の事を言う先生はないのですから。

どれも皆、おめでたい子供を相手に、匙加減をして真面目くさったり、機嫌を取ったりするのです。

## メフィストフェレス

無論人間は学ばなくてはならぬ時がある。

こう見た所、君はもう人に教えても好い積<sup>つも</sup>らしい。

大ぶ月日が立つうちに、君もたつぷり

経験を積んで来ただろうね。

## 得業士

経験ですか。泡のような、烟のような物です。

人の靈<sup>れい</sup>と比<sup>くらべ</sup>物にはなりませんね。あなただって

正直に白状なさったら、今まで人の知っていた事に知っていて役に立つことはないでしょう。

メフィストフェレス（間を置きて。）

もう疾うからそう思っていたが、わしは馬鹿だ。  
今思えばいいよ遅鈍で、興味索然としている。

得業士

そう承れば嬉しいです。兎に角自知の明がある。

今まで逢った老人の中で話せるのはあなた一人だ。

メフィストフェレス

わしは埋もれている黄金こがねの穴を捜して、

気味の悪い炭を得て帰ったのだ。

得業士

失敬ですが、あなたのその頭脳、その禿頭はげあたまには、

そこにある髑髏以上の価値はないでしょう。

メフィストフェレス（恬然てんぜんとして。）

君はどの位乱暴だか、自分でも分かるまいね。

得業士



ドイツでは世事を言う人は諛衝としてあります。

メフィストフェレス

(脚に車の附きたる椅子を、次第に舞台脇へずらせ来て、平土間に向ふ。)

この上では空気も光線もなくされそうですか、  
あなた方の所へ降りさせて下さるんでしょうか。

得業士

一体もう自分がなんでもなくなつて、時候遅に  
まだ何かである積でいるのは、僭上の沙汰です。

6775

人間の性命は血にある。青年の体のように  
血の好くめぐつてゐるものが外にありますか。

既に有る性命から、新しい性命を造るのは、  
新鮮な力を持つてゐる、この生きた血です。

6780

そこで万事活動してゐる。何事かを為してゐる。  
弱者が倒れて、優者が進む。そして我々が  
世界を半分占領する間、あなた方は何をして

いました。舟を漕いでいた。物を案じていた。夢を

見ていた。あの案、この案と、工夫ばかり凝らしていた。

慥<sup>たし</sup>かに老<sup>おい</sup>は冷たい熱病です。気まぐれに

悩まされての戦<sup>わななき</sup>慄<sup>おそ</sup>をしているのです。

人間は三十を越してしまえば、もう

死んだも同じ事です。あなたのような

老人は早く敲<sup>たた</sup>き殺すが一番です。

メフィストフェレス

こうなると、悪魔も一語を賛することが出来ない。

得業士

わたしが有らせようとしなければ、悪魔も無い。

メフィストフェレス（傍に向きて。）

今にその悪魔に小股をすくわれるくせに。

得業士

これが青年最高の責務だ。

己が造るまでは、世界も無かったのだ。

日は己が海から引き出して来た。

月の盈虧は己が始めた。

己の行く道を季節が粧って、

大地は己を迎えて緑に萌え、花を開く。

ある夜己が揮いたので、あらゆる星が

一時に耀きはじめた。一体あなた方に、

世俗の狭隘な思想の一切の束縛を

脱せさせて上げたのも、わたしでなくて誰です。

所でわたしは、心の中で霊が告げる通に、

自由に、楽しんで、内なる光明を趁つて、

光明の前に、暗黒を後に、

希有の歓喜を以て、さつさと進むのだ。  
(退場。)

メフィストフェレス

かわりものめ  
変物奴。息張って行つて見るが好い。

6795

6800

6805

賢い事も、愚な事も、昔誰かがもう考えた  
事しか考えられぬと云うことが

分かつたら、さぞ悔やしがるだろう。しかし

あんな奴がいたって、世間は迷惑しない。

少し年が立つと、別な気になる。

もとでいるうち、どんな泡が立っても、

しまいには兎に角酒になる。

（平土間にて喝采せざる少壮者に。）

あなた方は大ぶ冷澹に聞いていますね。

好い子のあなた方の事だから、構いません。

まあ、考えて御覧なさい。悪魔は年寄だ。

年が寄ったら、わたしの言うことが分かるでしょう。

中古風の試験室、奇怪なる用途を  
有する、繁雜にして痴重なる器械

ワグネル（竈<sup>かまど</sup>の傍にて。）

恐ろしいベルの響が

この煤けた壁を震わせる。

熱心に期待している事の成不成が、

もうこれより長く決せられずにはまい。

もう暗く濁っている所が澄んで来る。

もう一番<sup>しん</sup>心になつてゐる瓶<sup>びん</sup>の中に、

燃え立つ炭火のように、いや、赫<sup>かがや</sup>く

紅宝石のように照っている物が出来て、

電光のように闇を射はじめる。

明るい、白い光が現れる。

こん度こそ取り留めんではならん。

や。なんだ。戸をがたがた云わせるのは。

メフィストフェレス（入る。）

推参ですが、お為<sup>ため</sup>になる客です。

ワグネル（懸念らしく。）

おいでなさい。好い星の下<sup>もと</sup>に来られました。

（小声にて。）

しかし物を言わないで下さい。それにしつかり  
息を殺してして下さい。大事業が今成就します。

メフィストフェレス

（一層小声にて。）

なんですか。

ワグネル

（一層小声にて。）

人間を搾えるのです。

## メフィストフェレス

人間ですと。そしてそのけむたい穴に、どんな、色気のある男女おとめんなを閉じ籠めたのですか。

## ワグネル

おおちがい大違はです。今まで流行はやつていた、人間の拵方は、わたし共は下らぬ戯だと云つてしまうのです。

今まで性命を生んだ、優しい契合点ですね、

あの、親の体の内から迫り出て、遣取やりとりをして、

我と我が影像を写すようになって、先ず近いものを、

次に遠いものを取り込むことになつていた、

恵ある力ですね、あれはもう貶黜へんちゆうせられるのです。

よしや今後こんごも動物はあんな事を樂むとしても、

大いなる天分を享けた人間だけは将来これまでより

廻はるかに高い出所でどころを有せなくてはならんのです。

(竈に向ふ。)

光っている。御覧なさい。こうなればただ数百の物質を

調合して、調合の為方しかたが大事ですよ、楽々らくらくと

人間と云うものの原質を組み立てるですね。

それを硝子瓶びんに入れて封じる、それを十分に

蒸餾じょうりゅうするですね。そして例の為事しごとを、こつそりと

我手で成就すると云うことになるのです。それが

今そろそろ出来掛かっているのです。

（また竈に向ふ。）

出来ますね。調合した物が動いて澄んで来る。

確信の基礎が刹那々々に堅くなつて来る。

古来造化の秘密だと称えた事を、

我々は敢て悟性で遣つて見ようとする。

自然が機関的に構成していた事を、

我々は結晶させて造るのです。

メフィストフェレス

6850

6855

6860



人間は長く生きていると、種々の経験をするもので、その目で見ると、この世界には新しい事は一つもない。わたしなんぞは所々を流浪しているうちに結晶して出来た人間の群も見ましたよ。

### ワグネル

(これまで始終瓶に注目してゐる。)

はあ。昇って行く。光る。凝り固まって来る。

もうすぐに成功する。大きい企は最初

馬鹿げて見えるものだ。しかし未来ではこんな事を

偶然に委ねていたのを笑って遣ろう。

旨く物を考えることの出来る脳髓をも、

未来では思索家が造り得るはずだ。

(感歎して瓶を見る。)

優しい力が瓶に音を立てさせる。濁つてはまた澄んで来る。もう出来るのだ。小さい、

可哀らしい人間が、優しい姿をして  
動いている。此上我々も何を望もう。

此上世界にもなんの望があろう。秘密は

白日の下に曝露せられてしまった。

あの声に耳を傾けて御覧なさい。

あれが人の声になります。言語になります。

小人

（瓶の中にてワグネルに。）

さて、お父っさん。いかがです。笑談では

ありませんでしたね。さあ、いらつしやい。優しく

わたくしを胸に抱いて下さい。しかし硝子の

破れるようにひどくしてはいけません。物事は

こうしたものです。「自然の物には宇宙も狭い。

人工の物には為切<sup>しき</sup>った空間がいる。」

（メフィストフェレスに。）

所で、横著者のおじさん、あなたもここにいますね。

丁度好い時にいらつしやつて難有う。ありがとあなたを

ここへ来させたのは、好い廻合まわりあわせです。わたしも

こうして出来て見れば、働かなくてはなりません。

為事しごとに掛かられる様に、すぐに身支度をしましょう。

あなたはお巧者です。無駄をさせないで下さい。

### ワグネル

一寸一言言わせてくれ。これまで老人も若いものも、

己に種々な事を問うて困らせおった。

例えばこうだ。「一体霊と肉とは旨く適合していて、

決して分離しないように、食つ附いているのに、

その二つが断えず人間の生活を難渋にしている。それを

これまで誰一人会得したものがない。

それから。」

### メフィストフェレス

6885

6890

6895

お待ちなさい。それを問う程なら、

「一体男と女とはなぜ中が悪いか」とでも問いたい。  
お前さんなんぞには所詮これは分からない。

ここに為事しごとがある。それをこの小さいのが遣ります。

小人

何をするのですか。

メフィストフェレス

（側の戸を指さす。）

ここでお前の腕を見せてくれ。

ワグネル

（旧に依りて瓶を凝視す。）

実にお前は可哀らしい子だなあ。

（側の戸開く。ファウストの床の上に臥したるが、見物に見ゆ。）

小人（驚く。）

大した物だ。

(瓶ワグネルの手を脱して、ファウストの上の空中に懸かり、ファウストを照す。)

美しい所だ。茂った森に清い水が

流れている。女子達が著物を脱いでいる。

可哀らしい。はあ、段々面白くなって来る。

中に一人立派に別物になって見えるのがある。

第一流の英雄の種か。それとも神々の種か。

今透き通る水の中へ足を漬ける。

気高い体の、恵ある生せいの火が、物に触れて

形を変える、波の結晶の中で冷される。

しかしなんと云う、急な羽搏はばたきの音だろう、ざわざわ

ぴちやぴちやと鏡のような水面が掻き乱される。

女子達はこわがって逃げる。それに女王だけは

平気な様子で、鵜くぐいの王があつかましく、

馴々しく、自分の膝に摩り寄るのを、

驕おごった、女らしい楽しさで、見ていられる。

6905

6910

6915

鵠の王は馴れるようだ。や。突然

霧<sup>もや</sup>が立ち籠めて来て、あらゆる

看物<sup>みもの</sup>の中の一つ可哀らしい看物を、

細かに編<sup>うす</sup>んだ羅の奥に隠してしまった。

メフィストフェレス

好くそんなに沢山饒舌<sup>しゃべ</sup>る事があるなあ。

お前は小さいが、空想家としては大きいぞ。己には  
なんにも見えん。

小人

そうでしょう。あなたのように

北の国に生れて、蒙昧時代に、騎士や坊主の

ごたごたの中に人となつては、目が善く

開<sup>あ</sup>いていないでしょう。あなたの領分は

暗黒の境です。

(四辺を見廻す。)

茶いろになつた石壁が剣形迫持の形をして、  
 曲りくねつて、低く、朽ちて、厭らしくなっている。  
 ここでこの人が目を醒ますと、厄介な事になります。  
 即坐に死んでしましますから。

6930

森の中の泉、鵠、裸体の美人、こんな物を  
 未来を予想して夢に見ていました。

それがどうしてこの境界に馴れられましょう。

一番のん気なわたくしですが、見ていられません。

どこかへ連れて行きましょうね。

6935

メフィストフェレス

その始末には賛成だ。

小人

軍人を軍に遣るなら、あなた

娘は踊にお遣なさい。そうなされば

万事かたが附きます。ちよつと

わたくしが考えて見たのですが、今は丁度

古代のワルプルギスの晩に当ります。

一番都合の好いのは、この人を性しょうに合つた

境界へ連れて行つて上げる事です。

メフィストフェレス

そんな催もよおしの事はこれまで聞いたことがない。

小人

それはあなたの耳には這入るはずがありません。

あなたのお馴染はロオマンチックの化物だけです。

化物でも本当のはクラシックですよ。

メフィストフェレス

それにしてもどこへ向いて出掛けるのだ。

聞いただけで大時代おおじだいの先生方の胸悪さを感じるて。

小人

あなたの遊山の領分は西北方です。



所がこん度は東南方へ飛んで行きます。

広い平原をペネイオスの川が楽に流れて、木立や

藪に囲まれて、静かな、空気の湿った入江をなしている。

平原は山の谷合まで延びていて、

上には新古二つのファルサロスがある。

### メフィストフェレス

厭だな。御免を蒙りたい。暴君と奴隸との、

あの争は見たくもない。やつと済んだかと

思うと、また新規に前から始めるのだから、

己は退屈してしまう。そして実は背後に<sup>うしろ</sup>

アスモジがいて、<sup>からか</sup>揶揄っているのだとは、

誰も気が附かない。自由の権利のために

闘っているのだと云うが、好く見れば、

奴隸が奴隸と勝負をしているのだ。

### 小人

人間の喧嘩<sup>ずき</sup>好きな事だけは、認めて遣<sup>や</sup>らなくては  
いけません。子供の時から一人々々、力<sup>ちから</sup>限<sup>かぎり</sup>に  
防禦をしていて、それでどうとう人となるのです。  
ここでの問題はこの人をどうして直そうかと  
云うのです。あなた方<sup>ほう</sup>があるなら、お駈<sup>た</sup>め<sup>めし</sup>なさい。  
出来ないなら、わたくしにお任<sup>まかせ</sup>なさい。

#### メフィストフェレス

それはブロッケンの趣向に、随分駈<sup>た</sup>め<sup>め</sup>して好<sup>い</sup>いのも  
あるが、この際異端の方角には錠<sup>じやう</sup>が卸<sup>おろ</sup>してあるらしい。  
一体グレシア人は慥<sup>しか</sup>と役に立つたことのない民族だ。  
それでも皆を放縦な官能の発動で迷わせて、  
人間の胸を晴やかな罪惡に誘うことは出来る。  
己達の罪惡はどうせ陰気に思われるだろう。  
そこでどうする。

#### 小人

6965

6970

6975

あなたも不断は野暮ではない。

わたくしがテッサリアの魔女と云つたら、幾らか  
なるほどとお思おもひあたり、当なさらないことはありますまい。

メフィストフェレス

(欲望あるらしく。)

テッサリアの魔女だと。好し。己が永ながねん年聞きいていて  
見たく思おもつた女共だ。そいつ等と

毎晩一しよにいるとなると、己の考では、

好い心持ではなさそうだ。だが験たまに

お見まい申すだけなら好い。

小人

その外套を下さい。

この騎士さんに被かぶせて遣りましょう。

これまで通とおにその切きが、あなた方を

二人共一しよに載せて飛ぶでしょう。わたくしが

明<sup>あかり</sup>を見せます。

ワグネル（氣遣はしげに。）

そして己は。

小人

さればですね。

あなたは内で大切な事をなさっていらつしやい。

古い巻物を開<sup>あ</sup>けて見て、方<sup>ほう</sup>に抛<sup>よ</sup>つて

生活の元素を集めて、あれと此とを綿密に

抱合させて御覧なさい。「何を」と云うことも

大切ですが、「奈<sup>いか</sup>に」と云うことが一層大切です。

わたくしはその間に世界の一部をさまよつて、

画竜<sup>ひとみ</sup>の睛の一点を見出しましょう。そうすれば、

大目的が達せられたと云うものです。こう云う

努力には相応<sup>むくい</sup>の酬<sup>い</sup>があります。黄金、地位、

名聞、それに健康な、長い生活、それから

学問、事によったら、道德も得られましょうか。  
さようなら。

ワグネル（悲しげに。）

さようなら。実に己はがっかりする。  
もうお前にまた逢うことは出来そうにないなあ。

メフィストフェレス

さあ、すぐにペネイオスの川辺へ行こう。

小僧さん、なかなか話せるぜ。

（見物に向きて。）

とうとう我々は、自分の拵えた人間に  
まきぞえ  
巻添せられるものかも知れませんか。

古代のワルプルギスの夜

ファルサロスの野。闇黒。

魔女エリヒトオ

わたしはエリヒトオと云つて、陰気な女だが、

これまでも度々出たように、今夜の気味の悪い

祭に出掛ける。やくざ詩人共が度はずれに

悪く云う程、わたしは悪い女ではない。一体詩人は

褒めるにも毀るにも止所がない。谷を遙に

見渡せば、鼠色の天幕の波で白ちやらけて見える。

一番氣遣わしく、恐ろしかった、その夜の記念だ。

もう何遍同じ事が繰り返されたか知れぬ。これが

永遠に繰り返されるのだろうか。兎角誰も国を他人に

渡したくはない。自分の力で取つて、治めているものが

国を他人に渡したくはない。なぜかと云うに、我内心を

支配することの出来ぬ人に限つて、わが驕慢の

心のままに、隣の人の意志をも支配したがるからだ。

7005

7010

7015

ここではそう云う大きな争の実例があつたのだ。

暴力がそれより強い暴力に抗して、千の花を

編み込んだ、自由の美しい飾の輪が破れ、

こわい月桂樹の枝が王者の頭ことうべに巻き附いた。

こちらで大ポンペイユスが早い盛の夢を見れば、

あちらでケザルが揺ぐ金舌に耳を傾けて

夜を徹する。勝負は今だ、成行なりゆきは世間が知っている。

赤いほのおの立つ篝火かがりびが燃える。地は

流された血の反てりかえし映を吐く。そして夜の

珍らしい、不思議な赫かがやきに引かれて、

グレシアの昔物語の軍兵が集まる。どの篝火の

周囲まわりにも、昔の怪しい姿があぶなげに

よろめいたり、楽らくげに据わったりしている。

闕けてはいても、明るく照る月が、一面に

7020

7025

7030

優しい光を放ちながら、さし<sup>のぼ</sup>る。天幕の  
幻影は消え失せて、火は青いろに燃えている。

はて、思いも掛けぬに、頭<sup>あたま</sup>の上を飛んで来るのは  
なんの隕<sup>いんせい</sup>星<sup>せい</sup>だろう。光って、体<sup>たい</sup>をなした球を  
照している。生物<sup>いきもの</sup>らしい。わたしに害を受ける  
生物に近づくのは、身にとって不<sup>ふ</sup>似<sup>に</sup>合<sup>あ</sup>な業<sup>わざ</sup>だ。  
そんな事で悪い噂を立てられるのは厭<sup>いや</sup>だ。  
もう降りて来るらしい。思案して避けていよう。

(退場。)

(飛行のものども上にて。)

小人

ここの地<sup>じ</sup>の上、谷合は  
余り化物臭いから、  
この気味の悪い篝火の上で、

7035

7040



もう一度輪をかいていきましょう。

メフィストフェレス

古い窓から北の国の

気味の悪いごたごたを見るように、

厭な化物どもが見える。

ここもやつぱり内同様だ。

小人

御覧なさい。背の高い女が

大股に歩いて行きます。

メフィストフェレス

こつちとらが虚空を飛んでいるので、

気味を悪がつて逃げるのじゃないか。

小人

あれは構わずに行かせておしまいなさい。

そして騎士さんを卸してお遣やりなさい。

7045

7050

そうしたらすぐに蘇よみがえりましょう。騎士さんは

昔話の国に生を求めているのですから。

ファウスト（地に触れて。）

女は何処へ行つた。

小人

わたくし共は知りませんが、

この辺で聞いて見ることが出来るでしょう。

急いで夜の明けないうちに、篝火から篝火へと、

聞いて廻つて御覧なさい。母達の所へさえ

おいでになつた方ですから、何も別にこわい目に

お逢あなさることはありますまい。

メフィストフェレス

己は己でこの土地でどうかしなくてはならないが、

どうもてんでに自分だけの運うんだめし験つもりの積で、

あの篝火の中を通つて行くより外には、

我々に都合の好い名案もなさそうだ。

それから跡で一しよになる時の相図には、

お前の明<sup>あかり</sup>が音をさせながら照らすようにしてくれ。

小人

ええ。こんな風に音をさせて光らせましょう。

(硝子鳴りて強く光る。)

どれ、新しい不思議を見に出掛けましょうか。

(退場。)

ファウスト (一人にて。)

あれはどこにいるだろう。差<sup>さしあたり</sup> 当 此上問わずに

置こうか。この土<sup>つち</sup>があれを載せた土、

この波があれが方へ打ち寄せた波でなくとも、

この空気はあれが詞<sup>ことば</sup>を伝えた空気だろう。

ここへ、このグレシアへ、己は奇蹟で来た。己の足の

踏んでいるのが、その土地だと云うことは

7065

7070

7075

すぐ分かる。眠っていた己の心に、新しく思想が燃え立った時、アンテウスが土に触れて力を得るように、心強くなつて己は立っている。どんな奇怪に逢おうとも、この迷路を己は真面目に探る積だ。

(退場。)

メフィストフェレス(四辺を見廻す。)

どうもこの簞々を見渡すと、

己は馴れない土地に来たのが分かる。

みんな裸で、襦袢じゆばんだけ著たのがそこにいる。

スフィックスは恥知らずでグリップスは

臆面なしだ。毛の生えたのや、羽の生えたのが、

前からも後うしろからも目にうつる。

それは己達だつて腹の底からじだらくだが、

古代の奴と来ては余り烈し過ぎる。

なんでもこんなのは新しい見方で見て、

いろいろに上塗をしなくてはいけない。

厭な人種だ。だがこっちは新参として、

挨拶だけは丁寧に、我慢してするでしょう。

別品さん。くろうとのお年寄。御機嫌好う。

鷺<sup>しちよう</sup>鳥<sup>う</sup>グリッパス（濁れる声にて。）

グリッパスだ。くろうとではない。それに誰も

年寄扱は好かない。一体どの詞にも語原があつて、

その響が残っている。グリッパスも、栗色、苦み、

苦勞、繰言、くら闇、ぐらつきなどと、

語原学上に声が通っているが、

己達は聞くのが厭だ。

メフィストフェレス

しかし御尊号グリッパスの

「グリ」は繰<sup>くりいれ</sup>入の「くり」で、お氣に入るでしょう。

鷺鳥（同上。以下倣<sup>これにならう</sup>之。）

それはそうだ。来歴は調べてある。古来  
悪くも言われたが、褒められた方が多い。  
女でも、冠でも、金<sup>かね</sup>でも、繰り入れれば、  
繰り入れた奴に福の神は笑顔を見せるのだ。

蟻（大いなる形のもの。）

お金の話が出ましたね。わたし共は随分集めて、  
洞穴や岩の間にそつと埋めて置きました。  
それを一目<sup>ひとめ</sup>アリマスポイ共が嗅ぎ出して  
あんな遠くへ持つて行つて、笑つています。

鷺鳥

己達<sup>つか</sup>が攫<sup>つか</sup>まえて白状させて遣る。

一目アリマスポイ等

我儘御免のお祭の晩だけは免<sup>ゆる</sup>して下さい。  
あしたまでには皆使つてしまいます。

大抵こん度は旨く行く積<sup>つも</sup>です。

7100

7105

7110

メフィストフェレス

(これより先、<sup>さき</sup>スフィinks等の間に坐を占む。)

この土地に慣れるのは、大ぶやさしそうだぞ。

どの男の言う事も、己には好く分かる。

スフィinks

わたし達が霊の声を出すと、それを

あなたが体を具えたものになさるのです。

追々お心安くなりましょうが、先ずお名を仰やい。

メフィストフェレス

己には人がいろいろに名を附けているよ。

ここにイギリスの人がいるかい。あの連中は<sup>たびずき</sup>旅好で、

古戦場やら、滝の水やら、崩れた石垣やら、

時代の附いた、陰気な場所やらを捜し廻るのだ。

ここなんぞはあいつ等の<sup>ねら</sup>覗つて来そうな所だ。

あいつ等がいたら、証人になるだろう。昔の狂言で

あいつ等は己をオールド・インイクウィチイと云った。

スフィンクス

なぜそう云いましたの。

メフィストフェレス

己もなぜか知らない。

スフィンクス

それは御存じないかも知れませんか。天文は少しは知っていらつしやう。只今はどんな時でしょう。

メフィストフェレス（仰ぎ見る。）

星が飛びつ競くわをしている。闕けた月が明るく

照っている。己は旨い所で、お前方の獅子の皮で

ぬくもって、好い心持になつてゐる。しかし

高い所の事なんぞ言うのは損だ。謎でも

掛けてくれ。フランス流の地口でも好い。

スフィンクス



自分の事を言つて御覧なさい。それが謎になつていますわ。細かに分析して御覧なさい。

「善人にも悪人にも用に立つ。

欲を制して奮闘する人の鎧にもなれば、

方外な事をしでかす人の仲間にもなる。

そしてどちらもチエウスの神の慰なぐさみになる。」

第一の鷺鳥（濁れる小声にて。）

あいつは好かな。

第二の鷺鳥（一層濁れる声にて。）

我々になんの用に立つのだ。

右の二人

あんな見苦しい奴はここにいさせたくないな。

メフィストフェレス（粗暴に。）

ふん。お客様の爪は、お前のその尖った爪程、引つ搔くことが出来ないとも思ふのかい。

験<sup>ため</sup>して見ろ。

スフィンクス（優しく。）

なに、いらつしやるが好<sup>い</sup>いわ。

どうせ御自分でこの中をお逃<sup>にげ</sup>なさるのだから。

お国では好い気になっておいででしょうが、ここでは、

お見受申す所が、余り御愉快ではないのね。

メフィストフェレス

お前も体<sup>からだ</sup>の上の半分は旨<sup>うま</sup>そうだが、

下の方の獣<sup>けだもの</sup>は不気味だな。

スフィンクス

あなた謹<sup>つぎ</sup>つ衝<sup>つき</sup>で、罪滅ぼしに來たのだわ。

わたしのこの爪は達者ですからね。

どうせ不恰好になつた蹄のあるあなただから、  
わたし達の仲間について、好い氣持はしないわ。

（セイレエン虚空にて声を試みる。）

メフィストフェレス

あの川の傍の白楊の枝で、体をゆすつて  
歌っている鳥はなんだい。

スフィンクス

御用心なさいよ。随分立派な方でも、  
あの歌に負かされておしまいなすつたから。

歌う鳥セイレエン等

あはれ、いかなれば醜みにくき、怪あやしき

物等の中に、身を落ち著け給ふ。

聴き給へ。われ等こゝに群むれなして、  
調整しやんごのへる声して来たり。

セイレエンはかくあるべきもので。

スフィンクス

(同じ調にて嘲る。)

降りて来させて姿を見給へ。

耳を傾け給ひなば、

襲<sup>そこな</sup>ひ害<sup>そこな</sup>ひまつらんと、

彼<sup>か</sup>女<sup>のおみなら</sup>等は醜<sup>くまたか</sup>き角<sup>くまたか</sup>鷹<sup>くまたか</sup>の爪を

梢に隠<sup>と</sup>して止まりをれり。

歌う鳥等

な憎みそ。な妬みそ。

大空の下にちりぼへる

浄き限の喜を集めばや。

まらうどに見せまつらんため、

土の上にも、水の上にも、

晴やかなる限の振舞あらせばや。

メフィストフェレス

これはまた迷惑<sup>しんて</sup>千万な新手<sup>しんて</sup>だ。

吭<sup>のど</sup>からと絃<sup>いと</sup>からと出る

声<sup>ないませ</sup>と声<sup>ないませ</sup>とが絢<sup>ないませ</sup>交<sup>ないませ</sup>になると来ている。

吭を鳴らしてくれるなんと云うことは己には駄目だ。

7175

耳をくすぐってはくれるが、

胸までは徹こたえない。

スフィックス等

胸なんと云うことはお廃よしなさい。 自惚うぬぼれだわ。

皺かわぶくろになった革 囊位なら、

お顔に似合いますでしょう。

7180

ファウスト（歩み寄る。）

実に驚歎に価する。観照だけで満足だ。

醜怪の中に偉大な、力のある趣が見える。

なんだか前途の幸運が予想せられる。

この真率な一目は己に何を想い出させるだろう。

（スフィックスにつきて云ふ。）

昔オイジポスはこんなのの前に立ったのだ。

（セイレエンにつきて云ふ。）

7185

こんなのに騙されまいと、ウリツセスは麻縄で身を縛らせたのだ。

（蟻につきて云ふ。）

これが珍宝を蓄えたのだ。

（グリツプスにつきて云ふ。）

そしてこれが忠実に、間違なく守つたのだ。

己は新しい思想が胸に徹して来た。

物が偉大なだけ、記念も偉大だ。

メフィストフェレス

いつもなら、こんなものは排斥なさるのだが、

今はお気に入るようですね。

おお方<sup>すき</sup>好きな人を捜す土地では、

化物にでも逢いたいのでしょう。

ファウスト（スフィinks等<sup>おなご</sup>に。）

おい。女子<sup>おなご</sup>達。己に言つて聞せてくれ。

お前達の中で誰かヘレネを見はしないか。

スフィンクス等

わたし達はその時代にはいませんでした。

一番<sup>すえ</sup>季のをヘラクレスさんが殺しましたの。

ヒロンさんにお聞<sup>きこ</sup>なさると好<sup>い</sup>いわ。あの方は

お祭の晩には駆<sup>か</sup>け廻<sup>まわ</sup>っています。あの方が

お相手になれば、大<sup>たい</sup>した手がかりが出来てよ。

歌う鳥等

おん身のためにも徒<sup>あだ</sup>ならじ。

嘲<sup>あざわら</sup>りて行き過<sup>あ</sup>ぐることなく、

ウリツセスが留<sup>とど</sup>まりし時、

くさ／＼の事を我等に語<sup>かた</sup>りぬ。

青海原のほとりへ、

われ等の住む野へ来<sup>き</sup>まさば、

それを皆おん身に語<sup>かた</sup>るべきに。

## スフィンクス

あなた、騙されてはいけませんよ。

ウリッセスさんはからだほばしら体を檣に縛らせましたが、

あなたはわたし達の詞に縛られておいでなさい。

わたしが申した通ヒロンさんにさえ

お逢あいになれば、分かりますからね。

(ファウスト去る。)

メフィストフェレス(不機嫌に。)

あの羽をばたばた云わせて鳴いて通るのは

なんだ。見えない程早く通ってしまふ。

それにきつと一羽ずつあとさき後先になつて通る。

かりうど獵人もあれでは草臥くたびれてしまふだろう。

## スフィンクス

木枯の吹いて通るように、アルカイオスの孫、

ヘラクレスの矢も届かぬように、早く飛ぶのは、



あれはスチュムファアリデスです。角鷹くまたかくちばしの嘴、

7220

鴨の足をしている、あの鳥は挨拶をして

通るのです。わたし共の中へ来て、

親類附合がしたいのです。

メフィストフェレス（怯れたる如く。）

まだその間々に音をさせて通っているね。

スフィンクス

あれはこわがらなくても好いのですよ。

7225

レルナの蛇の首ですが、胴から切り離されて

いるくせに、一廉ひとかどのものの積つもりでいます。

それはそうと、あなたどうしようと云うの。

そんな落著かない様子をして。どこへ

いらつしやるの。もうここをお逃にげなさるの。

7230

あそこの合唱の連中の方ばかり向いて

御覧なさるのでしよう。御遠慮には及びませんわ。

おいでなさいな。顔の好いのもいますから、何か  
言ってお遣なさい。ラミエエです。色気のある  
女共ですわ。臆面なしの笑顔をしていて、

サチロス仲間に気に入りますの。

山羊の足の男は、あの中に這入って、

どんな事でも出来ますの。

メフィストフェレス

またお目に掛りたいが、このままいてくれるでしょうね。

スフィンクス

ええ。行つてあの浮気仲間に這入つて御覧なさい。

わたし達はエジプト時代から、千年も同じ所に

居据わっていることに慣れていますの。

わたし達の居所に気を附けて御覧なさい。

陰暦も陽暦も、わたし達が極めるのです。

「国と国との裁判せんと、

7235

7240

7245

塔の前にぞ我等はをる。

乱れ、治まり、河溢るれど、

我等は変へず気色だに。」

## ペネイオス河

(池沼、ニユムフェエ等にいによう  
繞うせられたり。)

## ペネイオス河

戦そよぎ囁ささけ、蒲かばの葉よ。

しばし破れし夢に、

葦よしの妹いも達たち、そと息嘘ふき掛けよ。

柳の木立軽くさやぎおとなへ。

顫ふるふ楊よう樹じゆの梢しほみそかに物言へ。

凄まじき物のけはひ、

微かに物皆動かす震、

7255

波の中、静けさの中より我を醒ましつ。

ファウスト（川に立ち寄る。）

己の僻<sup>ひがみ</sup>耳でないなら、この木立、

この梢の入り違った茂<sup>しげり</sup>の中から、

人の声に似た物音が

聞えるように思われる。

7260

波もくどくどと何やら云つて、

風も何やら喜び戯れているらしい。

少女ニユムフエエ等

（ファウストに。）

御身をこゝに横へ、

疲れたる手足を

涼しき所にて息<sup>やす</sup>め、

常に御身の得難き眠を

7265

味ひ給はんこそ

もとも宜しからめ。

われ等さやぎ、そよめきつゝ、

<sup>ささやき</sup>囁を聞せまつらん。

ファウスト

己はこれでも覚めている。己の目の

見遣るあそこに、<sup>たと</sup>譬えようのない

あの姿を、あのままおらせて貰いたい。

不思議な程身にしみじみと応える。

夢だろうか。昔の記念<sup>かたみ</sup>だろうか。

これまでこんな幸に逢ったことが一度ある。

軽く戦いでいる、茂った灌木の群の

爽かな中を、水が這つて通る。

荒い音は立てぬ。やつとそよめくだけだ。

<sup>もも</sup>百の泉が八方から集まつて

7270

7275

7280

浴<sup>ゆあみ</sup>の出来るように、浅く窪んだ、

清く澄み切った池になっている。

健<sup>すこや</sup>かな、若い女等の手足が

水鏡に映つて、二重に、

目を悦ばせてくれる。

そして女等の中善く、樂しげに浴<sup>あ</sup>びたり、

大胆に泳いだり、こわごわ渉<sup>わた</sup>つたりしている。

そのうち、とうとう叫び交わして水合戦をする。

己はこれだけの事を見て満足して、

目を悦ばせていなくてはならぬのに、

己の心はそれに安んぜずに、先へ先へと進む。

そして目はあちらの物蔭を鋭く穿<sup>うが</sup>とうとする。

緑に茂ったあの木の葉が

后<sup>きさき</sup>の姿を隠している。

や。珍しい。入江の方から、

7295

威厳のある、清げなけはいで、

鵠くぐいも泳いで来る。静かに漂つて、

優しく群れて遊んではいるが、

また世に傲り、自ら喜ぶ気色もある。

あの頭や嘴くちばしを動かす工合を見るが好い。

7300

中に一羽が群を凌いで大胆に、

どの鳥をも跡に残して走つて行つて、

誇りかに振舞うのが見える。

体中の羽根をふくよかに起して、

足掻あがきに波を立てて、

7305

神聖な所へ入り込んで行く。

外の鳥共は穩かに羽根を赫かがやかして、

あちこちを泳ぎ廻つて、

折々は臆病な少女等を賺すかして、

后を守護する勤<sup>つとめ</sup>を忘れさせ、

7310

自分々々の安危を思わせようとして、  
騒<sup>さわ</sup>がしい、晴がましい争をして見せる。

ニユムフエエ

皆さん。この青い岸の段々に、

耳を押し附けて聞いて御覧なさい。

わたしの聞<sup>きき</sup>違<sup>ちが</sup>いでないなら、なんだか

7315

馬の蹄の音がするようですね。

今宵の祭に急<sup>いそぎ</sup>の使になつて来るのは、

まあ、誰でしようかねえ。

ファウスト

駆けて来る馬の蹄に

大地が鳴り響くようだ。

7320

向うを見れば、

幸運が



もう己に向いて来たらしい。

無類の奇蹟だ。

騎者が一人駆けて来る。

智もあり勇もありそんな人だ。

眩い程の白馬に乗っている。

己の僻目でないなら、もうその人も知れている。

フィリラが生んだ名高い倅だ。お待なさい。

ヒロンさん。あなたに言いたい事があります。

人首馬身のヒロン

なんです。何事です。

ファウスト

ちよつと留<sup>と</sup>まって下さい。

ヒロン

いや。己は留<sup>と</sup>まらぬ。

ファウスト

そんなら連れて行つて下さい。

ヒロン

そんなら乗れ。そうしたら、己の問う事も問われよう。どこへ行くのだ。お前は岸に立っているが、川を越させて遣つても好い。

ファウスト（乗る。）

7335

どこへでも連れておいでなさい。御恩は長く忘れません。あなたは大人物だ。高尚な教育家だ。英雄の一種族を名の揚がるように育てたのだ。あのアルゴオの舟に乗った立派な人達や、その外詩人の材料になった人達を育てたのだ。

ヒロン

7340

そんな事はそつとして置いて下さい。パルラスでさえ師匠としては誉められない。どうかすると、門弟は教えたも教えなかったも

同じ事で、勝手に遣って行きますからね。

ファウスト

それにあなたは草木を一々知っていて、

その根<sup>き</sup>ざしを底の底まで窮めて、

創<sup>きず</sup>を<sup>い</sup>やし、病人を救って遣られる。その心身共に

健かなあなたに、わたしは載せられているのだ。

ヒロン

それは傍で英雄が創を負えば、

救って遣ることもわたしには出来る。

しかし先々の手当は

巫女や僧侶に任せて置く。

ファウスト

なるほどあなたは、人の称讃に耳を借さない

真の大人物だ。自分のようなものは、

外にいくらかもあると云う風に、

7345

7350

7355

話をそらしてしまうのですね。

ヒロン

お前さんなかなか辞令に巧だ。王者にも人民にも程の好い事を言う性<sup>たち</sup>だね。

ファウスト

でもこれだけは承認なさるでしょう。

あなたは同時代の大英雄を目撃して、事業はその最上の人の風を慕って、半神として誠実に暮らされたのです。

そこで御承知の英雄達の中で、あなたは誰が一番えらいと思いますか。

ヒロン

先ずアルゴオの舟に乗った立派な人達は、それぞれ変った、えらい所があつて、自分の授かった力量次第で、

7360

7365

外の人に出来ない事をしたのだ。

少壮で風采の好い事では、

ジオスコロイの兄弟が勝を占めていた。

敢為邁往の氣象で身方の利を謀ったのは、

ボレアスが伴兄弟の手柄だ。

沈著で、剛毅で、聡慧で、物の相談が好く出来、

女共に悦ばれて、勢力のあつたのはイアソンだ。

それから優しく、物静かに、ゆったりして、

オルフェウスは善くリラの琴を弾じた。

千里眼のリンケウスは、夜<sup>よる</sup>昼<sup>ひる</sup>油断なく

暗礁を避<sup>よ</sup>けて神聖な舟を進めた。

同心協力しなくては危険を凌ぐことは出来ぬ。

一人の働が皆の誉になるのだね。

ファウスト

なぜヘラクレスの事を少しも言わないのです。

7370

7375

7380

## ヒロン

そんな名を言つて、己に懐旧の情を起させては  
困るなあ。フォイボスや、またアレス、ヘルメス  
などと云う神達は、己は見なかった。

己の目の前に見たのは、世の人が皆

神と称える、あの人だけだ。

あれは実に生れながらの王者で、

若い時は類のない立派さであつた。

それでいて兄には善く仕えて、

美しい女子達には優しくしていた。

ゲアの胎<sup>たい</sup>からも、あんなのは二人と生れまい。

ヘエベエもあんなのを二人と天へ連れては行かぬ。

歌に歌おうとしても及ばぬ。

石に彫ろうとしても似せることは出来ぬ。

## ファウスト

7385

7390

なる程塑造家が随分骨を折りますが、

どうも本物ほんもののように立派には出来ませんね。

そこで一番立派な男のお話を承ったから、

こん度は一番美しい女のお話を伺いましょう。

ヒロン

なんですと。女の美なんと云うものは詰まらない。

兎角凝り固まったような形になり勝がちだ。

己は喜ばしげに生せいを楽しみながら発現する

姿でなくては、褒めない。

美の尊さは独立している。己がいつか

載せて遣った時のヘレネなんぞは、

誰も反抗することの出来ぬ嬌態を持っていた。

ファウスト

あなたが戴せましたか。

ヒロン

7395

7400

7405

うん。この背中に載せた。

ファウスト

そうでなくても心苦しいのですが、そんな難<sup>ありがた</sup>有<sup>い</sup>い  
背中にわたしは載せられているのですか。

ヒロン

お前さんが今しているように、あれもその鬣<sup>たてがみ</sup>を  
握<sup>にぎ</sup>んでいたのだ。

ファウスト

わたしは全く気が遠くなる。

どうしてそんな事があつたか、話して下さい。  
あれはわたしの慕っているただ一人の女です。  
どこからどこへ載せて行つたのですか。

ヒロン

その御返事をするのは造作はない。あの時は  
ジオスコロイの兄弟があれを



賊の手から救つて遣つた。

しかしあれは負けていたくない性分なので、  
元氣を出して跡から駆けて来た。

所で兄弟の急ぐ足をエレウシスの

沼が遮り留めた。兄弟はぼちやぼちや渉る。

己はあれを載せてごぼごぼ這入つて泳ぎ越した。

あれは飛び降りて、濡れた鬘をさすつて、

愛らしく賢しげに、しかも氣高く、

世辞のある礼を言つた。実に

老人の目をも悦ばせる、若い、美しさだつた。

ファウスト

でもその時はまだ十<sup>とお</sup>ばかりで。

ヒロン

ははあ。博言学の

先生達が自ら欺いて、お前さんをも騙したのだな。

神話の女は別な物だ。あれは詩人が都合の好いように書いて見せるのだ。

いつ丁年になるでもなく、年が寄るでもなく、いつも旨そうな肉附をしていて、子供半分で奪<sup>ふ</sup>われたり、更<sup>ふ</sup>けてから大勢に慕<sup>ほ</sup>われたりする。

詰まり詩人は時間に縛<sup>は</sup>せられないのだ。

#### ファウスト

ですからあの女も時間に縛<sup>は</sup>せられないが、  
好<sup>い</sup>いのです。アヒルレウスがフェレエであれを  
見附けたのも時間の外でした。不思議な幸ですね。  
運命に逆<sup>さ</sup>って恋を遂げたのですから。

わたしだってこれ程の係<sup>あこがれ</sup>恋の力で、またとない  
あの姿を現<sup>うつ</sup>に返<sup>かえ</sup>すことが出来そうなものです。

あの偉大で、しかも優しく、尊厳で、しかも可哀い、  
神々と同等な、永遠な姿をですね。

7430

7435

7440

あなたは昔見られた。わたしは今見たのです。

動されずには、慕わずにはいられない美しさです。

もうわたしの心も魂も緊しく捉われて、

あれを手に入れずには、生きていられません。

ヒロン

おい。他所物。人間としてはそんなに感動して

いるも好かろうが、霊どもの仲間から見ると

気違染みている。しかし丁度好い事がある。

己は毎年ちよいとの間、アスクレピオスの娘の

マントオを尋ねて遣ることになっている。

あれはいつも静かな祈を父に捧げている。

どうぞお父様の御威徳で、

医者共の夢を醒ましてお遣になつて、

大胆に人を殺すことをお廃させなされて

下さいと云うのだ。巫女共の中で一番好きな女だ。

7445

7450

7455

情深く優しく、目まぐるしくこせつかない。

お前さんを少しあれが所に滞留させたら、薬草の根の力で、病気を根治して上げることが出来よう。

ファウスト

直してなんぞ貰いたくはありません。魂は

丈夫です。直されて俗人同様にはなりたくない。

ヒロン

神の泉の靈験をむなし曠くせぬようになさい。

さあ、お降おりなさい。もうそこへ来たのだ。

ファウスト

どうぞ言つて下さい。気味の悪い夜中に、川床の小石を踏んで、どこの岸へ連れて来たのですか。

ヒロン

ここがロオマとグレシアとの争った所だ。右はペネイオスの流、左腋はオリムポスの山だ。最大の

版図が、水の砂に吸われるように滅びた。

王は奔る。<sup>はし</sup>公民は凱歌を奏する。<sup>あたま</sup>頭を挙げて

御覽。直傍<sup>じきそば</sup>に月の光を浴びて

永遠の祠<sup>ほろこ</sup>が立っている。

巫女マントオ（内にて夢見心地に。）

馬の蹄に

神の階段<sup>きざはし</sup>が鳴る。

半神が来ると見える。

ヒロン

違<sup>ちが</sup>ない。

目を開<sup>あ</sup>けて御覽。

マントオ（醒む。）

好くおいでなさいました。闕<sup>か</sup>かしはなさいませんね。

ヒロン

お前さんの祠もちやんと立っていますからな。

マントオ

今でも草臥くだびれずに駆けてお歩あるきなさいますか。

ヒロン

あなたがいつも神垣の中にじつとしていてと  
同じ事で、わたしは駆け歩くのが面白いのです。

マントオ

動かずにいるわたしの周囲まわりが廻るのです。

そしてこの方かたは。

ヒロン

評判の悪い祭の夜が

渦巻に巻き入れてこの人を連れて来ました。

物狂おしいような心持になって、

ヘレネを手に入れようとしていますが、どこで

どう手を著けて好いか、知れないのです。

アスクレピオスの療治を受けるに誰よりも適当でしょう。

7480

7485

マントオ

出来ない事を望む人はわたしは好<sup>すき</sup>です。

(ヒロンは去ること既に遠し。)

大胆なお方<sup>かた</sup>。お這入なさい。そしてお喜<sup>よろこび</sup>なさい。

ペルセフォネイアさんの所へ暗い廊下から

行かれます。オリムポス山の空洞<sup>うつつ</sup>な底で、幽界の

后<sup>きさき</sup>は禁ぜられた挨拶を内証で聴かれます。

いづぞやオルフェウスさんをそつと通したのも

ここです。さあ、大胆にあれより旨くお遣<sup>やり</sup>なさい。

(共に降り行く。)

ペネイオス河上流

(同上。)

## セイレエン等

いぎ、ペネイオスの流に跳り入りてむ。

7495

かしこにて、音立て、波を凌ぎ、

滅びし国民<sup>くにたみ</sup>のために、歌あまた

歌はむは、われ等に似附かはしかるべし。

水なくば幸あらじ。

晴やかなる群なして急ぎ

7500

諸共にアイゲウスの海に入りなむ。

さらばわれ等楽しき事の限を見む。

(地震。)

川床低く流れずなりて、

波は泡立ちて帰り、

地<sup>じ</sup>は震ひ、水はとゞまり、

7505

砂原と岸とは裂けて烟を吐けり。



いぎ、逃れむ。皆共に来よ。  
怪<sup>け</sup>しき事、誰がためにか願はしからむ。

いぎ行かむ。樂める貴きまらうど等。

ゆらぐ波<sup>かがや</sup>赫きて、岸を潤し、

ゆるやかに立てる海の

晴やかなる祭の場<sup>にわ</sup>に行かむ。

二重<sup>ふたえ</sup>に月照りて奇<sup>く</sup>しき露もて

われ等を濡らす所に行かむ。

かしこには賑はしき自由なる生活あり。

こゝには忌まはしきなるのふるあり。

さかしき人は疾<sup>と</sup>く行け。

こゝはゆゝしき所なり。

地震の神セイスモス

(地の底深くうめきひしめく。)

もう一遍力を入れて押して、  
肩でしっかり持ち上げて遣れば、  
地の上に出られるだろう。そしたら  
なんでも避けずにはいられまい。

スフィンクス等

まあ、なんと云う、厭いやな震いようだろう。

こわい、気味の悪い音のしようだろう。

ぐらついたり、ぶるぶるしたり、

鞦ぶらんこ鞦このように往ったり戻ったりすること。

我慢の出来ない程、厭だこと。

だけれど、地獄がそっくりはじけて出ても、  
わたし達はこの場は去らない。

おや。不思議な、円天井の宮殿が  
迫り上げられて来ますね。あの人です。

7520

7525

7530

あの年の寄った、疾<sup>と</sup>つくに白髪になった人です。

いつかお産をし掛かっているレトさんを

住わせようと、波の中からデロス島を

湧き出させた、あの人です。

あの人を押したり、衝いたり、骨を折って、

アトラスの神のような風をして、

背中を屈めて、臂<sup>ひじ</sup>に力を入れて、

草の生えた所でも、泥や砂や小石のある所でも、

この川岸の静かな所でも、一体に

地面を押し上げているのです。

とうとうこの谷間の静かな地面の帯<sup>おび</sup>を

横に裂いてしまいましたね。

大きいカリアチデスのような風をして、

草臥<sup>くたび</sup>れっこなしに働いて、

まだ地の下で、胸の所まで、恐ろしい

7535

7540

7545

石の一山を持ち上げています。

しかしもうあれから上へは上がらせません。  
わたし達が据わっていますからね。

### 地震の神

何もかも己が一人で手伝ったと云うことは、  
もう大抵世間が認めてくれそうなものだ。

己がゆさぶって遣らなかつたら、

世界がこんなに美しく出来てはいまい。

画を欺く美しさに見えるように、

己が押し上げて遣らなかつたら、

美しく澄んだ蒼空に

あそこの山々が聳えてはいまい。

夜の先祖の、あの混沌、あのハオスの前で、

己が<sup>ほねおしみ</sup>骨惜をせずに、チタアン共と

一しよになって、<sup>まり</sup>毬を投げるように、

7550

7555

7560

ペリオンやオツサの山を投げた時の事だ。

己達は若い勢で暴れた挙句に、

厭あきて来て、とうとうしまいに

あの山二つを、二山ふたやま帽子ぼうしの恰好に、

徒いた半分ずら、あのパルナツソス山の上に載せた。

今ではムウサ達の尊い群と一しよに、

アポロンさんがあそこに楽しく住んでおいでだ。

チエウスさんの椅子だって、あの雷かみなりの道具ぐも籠かごに、

己があの高みへ押し上げたのだ。

そこで今夜も精一せいぱい

地の底から己は迫せり上がって来て、

面白そうな人間共を、大声で、

新しい生活に呼び覚ますのだ。

スフィンクス等

あの、ここにそば立っているものが、

地の下から、もがいて出て来たのを、この目で  
見ていなかったら、太古からあのままに  
あったと思わせられてしまうでしょう。

木の茂った森が半腹まで広がって、

今でも次第に岩々が<sup>たなわ</sup>畳<sup>たなわ</sup>つて行きます。

しかしスフィンクスはそれには頓著しません。

この神聖な場所に、澄ましています。

### グリツプス

紙のような、雲母<sup>きりら</sup>のような黄金<sup>こがね</sup>の

ひらひらするのが、己には隙間から見える。

あんな宝を取られるようにするのだぞ。

さあ、蟻共。掘り出しに掛かれ掛かれ。

### 歌う蟻の群

巨<sup>おお</sup>人<sup>ひと</sup>達のこの山を

押し上げしごと、

7575

7580

7585

足まめやかなる友等、

いざ疾く<sup>と</sup>升<sup>のぼ</sup>れ。

疾く出<sup>いで</sup>入<sup>いり</sup>せよ。

この隙間なるは

粒<sup>つぶ</sup>ごとに皆

蔵<sup>おさ</sup>め置く甲斐あり。

到らぬ限なく、

塵ばかりなるをも、

いちはやく

みいだ  
見出せ。

うごめ  
蠢く群よ。

皆いそしめ。

たゞ黄金<sup>こがね</sup>を取り入れよ。

山はさてあらせよ。

グリップス

7590

7595

7600

持つて来い。持つて来い。金<sup>かね</sup>を積み上げい。

己が爪で押さええている。

これが一番好<sup>い</sup>い錠前だ。

どんな宝でも慥<sup>たし</sup>かにしまつて置かれる。

侏儒ピグマイオス等

どうしてこうなつたか、知りませんが、

わたし共もここへ陣取りました。どこから

来たなぞと、お尋下さいますな。

兎に角ここにいますから。

生きながらえて楽しく住むには、

場所はどこでも結構です。

岩にちよいと割目が出来ると、

もう一寸坊がそこに来ています。

一寸坊の夫婦は、皆共稼で、

似合のものばかりです。

7605

7610

7615



樂園以來こうでしたか、

その所は存じません。

わたし共にはここが結構で、

好<sup>よ</sup>い星の廻<sup>まわり</sup>合<sup>あ</sup>だと存じています。

なぜと申すと、東でも西でも、土地と云う

おつ母<sup>か</sup>さんは喜んで子を生み附けますから。

極小侏儒ダクチレ

あのおつ母さんは一晩に

小さいものを生んだとおりに、

一番小さいものをもお生<sup>うみ</sup>でしよう。

それにも似合<sup>つれ</sup>の連が出来ましょう。

侏儒の長老

程好き所に

急ぎて座を占めよ。

さて急ぎて業<sup>わざ</sup>を始めよ。

早さを強さに代へよ。

世はなほ治れり。

甲よろいを、戈ほこを、

軍いくさの群に授けむため、

鍛冶にわの場を営め。

蟻等皆

群なしていそしみ

粗あらがね金も持て来よ。

さて数多き

最もとも小こさき侏儒しゆじゆ等には

木樵こることを

課おわせてむ。

真木まき積かさみ重ねて、

親しき火あらせよ。

7630

7635

7640

炭を造れよ。

將軍

弓を取り、矢を負ひて、

疾く出で立て。

かの池の畔に

あまた巢作りて、

傲りて住める鷺を

ひととき  
一時に

あま  
剩さず

射て墜せ。

さらば<sup>かぶと</sup>冑に羽の

飾して出でなん。

蟻等と極小侏儒と

誰がこつちとらを助けてくれるだろう。

こつちとらが鉄を持って来て遣れば、

7645

7650

7655

あいつ等は鎖を拵えおる。

だが逃げ出すには

まだ早過ぎる。

まめに働いているが好い。

イビコスの黒鶴等

殺す叫<sup>さけび</sup>や死ぬる歎<sup>なげき</sup>や

物に恐れる羽ばたきが聞える。

己達のいる、この高い所まで聞える。

あのうめき苦しむ声はどうだろう。

もう皆殺されてしまつて、

海が血で赤く染まつた。

鷺の品の好い飾を醜い形の

慾が奪つてしまう。

あの腹の太つた、脚の曲つた横著者の

胄の上に、もう取られた羽が閃いている。

7660

7665

おい。仲間の鳥達。列をなして

海を越して行く鳥達。

唇齒したしみの親のある中の、この仇討に

己達はお前方を呼ぶのだ。

力を惜まずに、血を惜まずに、あの醜類に

永遠な敵対をして遣ろうじやないか。

(叫びつゝ空中に散ず。)

メフィストフェレス(平地にて。)

北の国の魔共なら兎に角己の手に合うが、

どうもこの異国の化物共は扱い憎くて困る。

やっぱりブロッケンブロッケンの山は好い所だ。

どこに飛び込んでも方角の知れぬことはない。

イルゼの姨おばさんは石に据よわって番をしてくれる。

ハインリヒも我名の辻は居心が好いはずだ。

巖いびきいわが貧乏山にけんつくを食せても、

7670

7675

7680

万事千年の後までも極<sup>き</sup>まっているのだ。

所がここに来ては、誰だつてどこに立つて、どこを歩いて  
いるか知らない。足の下の土がいつ持ち上がるか知らない。

己がのん気に平<sup>たいら</sup>な谷間を歩いていると、

出し抜に背中に山が出来ている。

山と云うのも大袈裟だろうが、あの高まりでも、今まで  
話していたスフィンクスと己との間を隔てるには十分だ。

ここから谷の下の方を見れば、まだ篝<sup>かがりび</sup>火が大ぶ

燃えていて、それぞれの不思議を照している。

まだ己をおびくように、避<sup>よ</sup>けるように、狡猾に

騙すように、女の群が空を踏んで踊っている。

そつと行つて見よう。どこでも撮<sup>つまみぐい</sup>食をする癖の

附いている己に、何かしら攫<sup>つか</sup>まりそうなものだ。

妖女ラミエ等

(メフィストフェレスを誘ひつゝ。)

7685

7690

7695

急がばや

いづくまでも。

またしばしたもとほり

物言ひ交さばや。

老いたるすきものを

誘ひ寄せて

報<sup>むくい</sup>受けさせむは、

面白からずや。

竦<sup>すく</sup>める脚して、

よろめき、

躓きつゝぞ来る。

われ等逃ぐれば、

足引きて

跡よりぞ来る。

メフェイストフェレス（立ち留まる。）

ひどい目に逢う事だぞ。男は本<sup>もと</sup>から騙されるものだ。

7710

アダム以来三太郎は馬鹿にせられ通した。

誰も年を取るが、さて賢くはならないな。

随分これまで沢山馬鹿にせられたのだが。

一体腰を細くして、面<sup>つら</sup>に白い物を塗る人種は、

根から腐っているのが分かつている。

7715

どこを掴まえても丈夫な所はない。

節々が朽ちてぼろぼろになっている。

それが見えていて、手に取るように知れていて、

そのくせあいつらが笛を吹くと、つい踊るのだ。

ラミエ等（立ち留まる。）

お待ち。何か考え込んで、まごまごして立ち止まってよ。

7720

逃がさないように、からかつてお遣<sup>やり</sup>。

メフィストフェレス（歩む。）

遣っ附けろ。何もおめでたく疑惑の



網に引つ掛かるには及ばない。

魔女と云うものもいなくては、

男の悪魔がなんにもなるまい。

ラミエ等（飽くまで嬌態を弄す。）

この方かたの周囲まわりに圈わをかきましようね。

わたし達の中で、どれかがきつと

可哀ちがひくおなりなさるに違ちがひないわ。

メフィストフェレス

薄うす明あかりの中で見ていれば、

お前達も別品のようだ。

そこで悪口は言いたくない。

一脚の女エムプウザ（群に入る。）

わたしも悪くは仰つやらないでしょう。その積つもり

あなた方のお仲間に入れて頂戴な。

ラミエ等

わたし達の仲間では、あの女は余計ものだわ。  
いつでも打ちこわし<sup>ぶ</sup>をするのだもの。

7735

エムプウザ（メフィストフェレスに。）

驢馬の足を持っている、お馴染の

御親類のわたしが御挨拶をしますわ。

あなたのは馬の蹄ですけれど、

兎に角お心安くなすってね。

メフィストフェレス

ここには知ったものなんぞはいない積<sup>つも</sup>りだった。

7740

それに生憎そんな親類がいたのかい。

なんにしろ、古い書類でも調べなくてはなるまい。

ハルツからヘラスまで親類だらけでは。

エムプウザ

わたしはこれでなかなか早いの。

いろんな物に化けてよ。

7745

先ずあなたへの御馳走に

ちよつと頭を驢馬にしましたの。

メフィストフェレス

はてな。この連中ではなかなか

血筋ということを大事にしているようだ。

しかしどんな事が しゅったい 出来 しゅったい するにしても

驢馬の頭を身内にはしたくないな。

ラミエ等

あの厭な女にお構かまでない。美しい、可哀らしいような物は、

あいつが皆追つ払いますの。

美しい、可哀らしい物がいても、あいつが来ると、

すぐいなくなつてしまいますの。

メフィストフェレス

だがそこにいる、すりりとした

姨さん達も、わたしは皆怪しいと思う。

その薔薇色の頬つぺたの奥に、  
化物のこわい顔がありそうだから。

## ラミエ等

おお勢いますから、験して御覧なさいな。  
一人お掴まえなさいな。御運が好ければ、  
好い籤にお当なさるわ。物欲しげに  
くどくど仰やるのは可笑しいわ。

のろのろ遣つて来て、大きな顔をしてさ。

ほんとに厭な色男だわ。わたし達の

仲間にいらつしやったからには、

そろそろ面を脱いで、

正体をお見せなさいな。

## メフィストフェレス

それ。一番の別品を掴まえるぞ。

(一人を抱く。)

しまった。箒のように瘦せてけつかる。

(他の一人を抱く。)

こいつはどうだ。ひどい御面相だな。

ラミエ等

あなたのお相手には好過ぎるわ。

メフィストフレス

小さい奴を書入かきいれにしようと思うと、

ラチエルタ奴、手を摩り抜けて行きやあがる。

編下あみさげが蛇のようにぬめぬめする。

そんなら一つ背の高いのを使うと、

そいつはチルンスの杖のようで、

尖さきに松毬まつぐりが附いてやがる。

どうしよう。もう一つ太った奴を掴まえようか。

こんなのは気持が好きそうだ。

これが勝負だ。遣つ附けろ。

7770

7775

7780

むくむくぼてぼてしていやあがる。東洋人の  
値を好く買いそうな貨物だ。しろもの

おや。しまった。隠子菌だ。はじけやがる。

ラミエ等

さあ、分れましょうね。ふわふわゆらゆら、

黒い群になつて飛んで、稲妻のように、

飛入とびいりの悪魔を取り巻いて遣りましょう。

覚束なげに、気味の悪い圈わをかきましょう。

蝙蝠のような、音のしない羽搏はたつきをしましょう。まあ、

あの人、割にひどい物に逢わずに済んだわね。

メフィストフェレス（身慄す。）

己もまだ余り智慧は附いていないな。

北の方も馬鹿らしいが、これも馬鹿らしい。

化物はあそこもここもねじくれてけつかる。

土地のものも詩人も殺風景だ。

どこでも助兵衛なぐさみの慰なぐさが流行はやりるように、

ここにも仮装舞踏があるのだ。

優やさしげな面めんを被かつた奴を押さえて見れば、

身の毛の弥立やつ五体を見せられる。

せめてもつと長く持つてくれたら、

己は目を瞑ねむつて楽しんで好いいのだが。

(石の間を彷徨す。)

己はどこにいるだろう。どこへ出られるのだろう。

道みちと思つているうちに気味の悪い所へ出た。

平たいな道ちを踏ふんで来たが、これから先さきは

ごろごろした石ばかりになっている。

登のぼつたり降りたりして見ても無駄だ。

あのスフィンクス共はどこにいるだろう。

一晚のうちにこんな山が出来る程の、

馬鹿げた事があるうとは思わなかった。

7795

7800

7805

魔女共が元氣好く物に乗って来るついでに、ここへ  
ブロッケンの山を持って来たとも云おうか。

7810

山の少女オレアス（天然岩の上より。）  
ここへ登っていらつしやいな。これは古い山で、  
そつくり昔の形のままでいます。

ピンドスの神山の延びて来た一番の端です。

この嶮しい岩の道を難<sup>ありがた</sup>有<sup>おもひ</sup>くと思なさい。

ポンペイユスが越して逃げた時も、

7815

わたしは動かずにこうして立っていました。

傍にあるまやかしの山なんぞは、

鶏<sup>とり</sup>が鳴けば消えてしまします。

あれと同じで、<sup>つくりものがたり</sup>作<sup>もの</sup>物<sup>がたり</sup>語は出来たと思うと、

すぐにまた亡くなることが、度々あります。

7820

メフィストフェレス

なるほど難有そうな頭をしている。



丈夫な櫛の木の茂みを被<sup>かぶ</sup>つていて、  
此上もなく明るい月の光でさえ、

あの木下闇には照り込むことが出来ない。

所があの森の傍を控目に光る

小さい火が通っているな。

どうしたと云うのだろう。

そうだ。小<sup>しょうじん</sup>人だ。ホムンクルスだ。

おい。小さい先生。どこから来たい。

小人

わたくしはどうぞ本当の意味で成り出<sup>い</sup>でたい、

少しも早くこの硝子を割ってしまいたいと思つて、

そこからここへと飛んで歩いていきます。

所が今まで見ただけでは、思い切つて

這入り込んで行こうと思う場所がありません。

そこであなたに内証でお聞せするのですが、

7825

7830

7835

哲学者を二人見附けましたよ。立聴たちぎきをすると、

「自然、自然」と云うことを、口癖に言っています。

あの人達は下界の事に通じているはずだから、

見失わないようにしようと思っています。

あの人達に聞いたら、一番旨く遣るには、

どこへ話すが好いいか、分かるかも知れません。

#### メフィストフェレス

それはやっぱりお前が自分でする方が好いい。全体

化物共のいる場所では、

哲学者は歓迎せられる。世間の奴が

お腕前を拝見して、お蔭を蒙るように、

先生達は早速化物の一ダズン位は製造するのだ。

やっぱりお前も迷って見なくては、智慧は附かないよ。

成いり出いでようと思うなら、所詮自力で遣るに限る。

#### 小人

しかし好<sup>い</sup>い助言も棄てた物ではありません。

メフィストフェレス

そんなら行くが好い。どうなるか、見ていよう。

(二人別る。)

火山論者アナクサゴラス(タレスに。)

君は強情で、人の説に服せまいとしているのだ。

君に得心させるには、これ以上に何がいるのかい。

原水論者タレス

波と云うものはどの風にも靡<sup>なび</sup>くが、

頑固な岩は避<sup>よ</sup>けて通るのだ。

アナクサゴラス

火の気<sup>け</sup>でこの岩は出来ているのだ。

タレス

生<sup>いき</sup>物<sup>もの</sup>は湿<sup>しめり</sup>で出来たのだよ。

小人(二人の間にありて。)

どうぞわたくしを附いて行かせて下さい、  
わたくしはこれから成り出でたいのです。

アナクサゴラス

そこで、君、一晩にこんな山を

泥から拵えたことがあるかい。

タレス

所が、自然と云うものと、その生々<sup>いきいき</sup>した変化とは、

昔から昼夜や時間で限られてはいないよ。

一々の物の形を正しく拵えて行くのが極<sup>きまり</sup>で、

大体から見ても、威力を以て遣つてはいない。

アナクサゴラス

所がここでは遣つたのだ。プルトン流の恐ろしい怒<sup>おこ</sup>つた火、

アイオルス流の蒸気の爆発力が

平地の古い上<sup>うわ</sup>皮<sup>かわ</sup>を衝き抜いて、すぐに山が

出来なくてはならぬようにしたのだ。

## タレス

そこでそれ以来どうなつたと云うのだい。

山が出来ている。詰まりそれで宜しい。

こんな喧嘩で暇を潰して、辛抱強い世間の奴を  
引き摩り廻しているばかりでは駄目だ。

## アナクサゴラス

そこで岩の割目を賑わすように、

その山がミルミドン族や、ピグマイオスや  
ダクチレや、蟻、その外の小さい、まめな  
連中を、うようよ湧いて来させるのだ。

## (ホムンクルスに。)

そこでお前方だが、始終世棄人のように引つ込んで  
生きていて、大きな事を企てたことがない。  
もし人の上に立つて見る気になられるなら、  
一つ王冠を被<sup>かぶ</sup>らせて貰つてはどうだ。

7870

7875

7880

小人

タレス先生はどう思召します。

タレス

わたしは

勧めたくないね。小さいものに交つていれば、小さい事が出来る。大きいものと一しよになれば、小さいものも大きくなる。あの黒鶴の群を見い。

7885

あれは今騒ぎ立った人民を威しているのだが、帝王をでもやっぱりあの通とおに威すのだ。  
尖とがつた嘴くちばしや爪を揮つて、

今小さい奴等の上へ卸して来る。

もう否運の影が閃おこいている。事の起おこは

7890

小さい奴等が平和な池を取り巻いて、  
猥みだりに鷺を殺したからだ。ところが、  
雨と降った、殺生の矢が、今は残酷な、

血ちなまぐさ 腥むくい い復讐の報を受けることになった。今はあの

虐殺を敢てした一寸坊の血が見たいと云う、  
鳥仲間の怒を招くことになった。

盾も冑も槍も、もう用には立たぬ。

一寸坊共がもう鷺の羽の飾をなんにしよう。  
あのダクチレや蟻なんぞの隠れるのを見い。  
もう全軍が色めく。逃げる。瓦解する。

アナクサゴラス

(間まを置きて、莊重に。)

今まで己は地じの下の威力を称えていたが、

この場合では上の方へ向いて祈らねばならぬ。

御身よ。上にいて、永遠に古びずに、

三つの称号、三つの形ぎようそう相さうを持っている、

ジアナ、ルナ、ヘカテの三一の神よ。我民草の

惨害を見て、おん身に祈る。

7895

7900

7905

御身よ。胸を披く神、情深き神、静かに

見えている神、力強く優しい神よ。

御身の陰翳の物凄いを開いてくれられい。

昔ながらの威力が不思議を待たずに見たい。

(間。)

祈が余り早く聞かれたのか。

天を仰いでした

己の祈が、

自然の秩序を紊したのか。

目に恐ろしく、常ならず見える、

女神の円く限られた玉座が、次第に、次第に

大きくなって、近づいて来る。

その火が気味悪く赤くなつて来る。もうそれより

近くなつてくれるな。脅かすような、力強い巡歴。

御身は己達をも陸をも海をも滅ぼすだろう。



7920

それではテッサリアの女共が、無遠慮な幻術の  
心安立から、歌で、御身が軌道を離れて降りて  
来られるようにしたと云うのは、本当か。おん身に  
迫って一番ひどい禍を招いたと云うのは本当か。  
明るい盤が周囲から昏くなつて来る。

や。突然裂ける。光る。赫く。あのぱちぱち

7925

しゅっしゅつと云う音はどうだ。それに交つて

雷が鳴る。暴風が吹く。

己は玉座の段に身を委ねて罪を謝する。

これは己が招いた禍だ。

(地に俯伏になる。)

タレス

7930

好くいろんな物が見えたり、聞えたりする男だな。  
何事があったか、己にはさっぱり分からない。それに

己にはそんな事を一しよに感じることも出来なかった。  
お互に白状するが好い。今は氣違染みた時刻だ。  
ルナは前々通<sup>どおり</sup>、自分の場所に、  
氣樂に浮いていなさるのだ。

7935

## 小人

でもあつちのピグマイオス共の居<sup>いどころ</sup>所を御覽なさい。  
今まで円かった山が尖つて来ました。  
わたくしには恐ろしい衝突が感ぜられました。

岩が月から墜ちて、すぐに

なんの遠慮会釈もなく、

7940

敵も身方も押し潰して殺したのです。

しかし兎に角わたくしは、

一夜のうちに、下からと上からと同時に、

創造的にこんな山を拵えた

技術を称えずにはいられません。

7945

## タレス

まあ、落ち着いている。あれはただ思想上の出来事だ。  
一寸坊の醜類共は滅びてしまふが好い。

お前は王にならいで、為<sup>しあわせ</sup>合<sup>あ</sup>だつた。さあ、これから  
晴やかな海の祭へ行こう。あつちの流義では、  
不思議な客を待っていて、敬ってくれるのだ。

(共に退場。)

## メフィストフェレス

(反対の側を攀<sup>よ</sup>ぢ登りゐる。)

この通<sup>とお</sup>己は嶮しい岩の阪道や、櫛の古木の  
ごつごつした根の上を、難儀しながら登っている。

国のハルツの山では、一体に<sup>チャン</sup>児に似た

樹脂<sup>やに</sup>の勻<sup>い</sup>がしている。それに硫黄が手近だが、  
あれも好<sup>すき</sup>だ。グレシア人共のいるこの辺では  
そんな勻はちつともしない。

一体地獄の責苦の火を、こっちでは  
なんで焚き附けるか、聞いて見たいものだ。

櫛の木の少女ドリアス

お国ではお前さん気の利いた方かたでしょうが、  
余所へおいでなすつては駄目ですね。

そんなにお国の事なんぞを思い出さないで、  
この難有い櫛おがみの木をお拝おがみなさいな。

メフィストフェレス

いや。誰でも棄てて来た事を恋しく思うものだよ。  
居慣れた所は、いつまでも天国だ。  
それはそうと、あそこの洞穴の中の  
薄昏がりに三人しやがんでいるのはなんだ。

ドリアス

あれは闇の女フォルキアデスです。気味が悪いと  
お思おもいなさいなら、往つてお話をなさいまし。

## メフィストフェレス

行かない事はないよ。や。見て驚くなあ。

7970

己は負けない気だが、こんな物はまだ見たことが  
ないと云つて退けるより外ないぞ。これはまた  
マンドラゴラのの根のお化よりひどい。

この三人の化物を見たからは、

一番古く嫌われている罪惡だつて、

7975

ちつとも醜いとは云われまい。

国の地獄では一番ひどい所の入口にも、

こんな物は我慢して置いて遣らない。

ここでは美の国だと云うにこんな物が生える。

それを古代と云つて褒めるのだ。

7980

や。動き出した。己を嗅ぎ附けたらしい。

何やらぴいぴい云いおる。血を吸いそうな蝙蝠こうもり奴が。

## 闇の女フォルキアデス

きようだい達。ちよいと目をお貸<sup>かし</sup>。祠<sup>ほこら</sup>のこんな  
近所まで、誰が来たか、聞いて見るから。

メフィストフェレス

姉<sup>がた</sup>えさん方。御免なさい。お傍へ参つて

お三人の祝福を戴きたいのです。

お馴染もなく出掛けたのですが、わたくしのおも<sup>おも</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>が</sup>い<sup>い</sup>  
思<sup>おも</sup>違<sup>ちが</sup>いでなけりやあ、遠い御親類のはずです。

随分古い難有い神達にもお目に掛かりました。

オプスやレアさんには、しっかり頭を下げました。

きのうでしたか、おとついででしたか、混沌の子の、

御きようだいのパルチエ達にも逢いました。

しかしあなたのような方を拝むのは始てです。

もう饒舌<sup>しゃべ</sup>らずに、ただ難有がつていましょう。

フォルキアデス

この幽霊は物の分かる男らしいね。

## メフィストフェレス

ただどの詩人もあなた方を歌わぬのが妙ですね。

7995

どうしたのでしょうか、どうしてそんな事が出来たでしょう。

こんなお立派な方々の肖像を、ついぞ拝したことがない。

ユノやパルラスやウエヌスばかり彫らないで、

彫刻家の鑿<sup>のみ</sup>もあなた方を写して見れば好いに。

## フォルキアデス

寂しい暗い所に引つ込んでいるものですから、

8000

ついそこに気が付きませんでしたよ。

## メフィストフェレス

無理もないですね。あなた方が世に遠ざかって

誰にも逢いなさらず、誰もあなた方を拝まないのだから。

一体豪奢と芸術とが座を分けて据わつていて、

毎日大理石の塊<sup>かたまり</sup>が英雄の姿になって、

8005

さつさと股を広げて歩いて出るような

土地に住んでいなされば好<sup>い</sup>いに。

そう云う。

フォルキアデス

お黙<sup>だまり</sup>。人をおだてないで下さい。

望<sup>ぞ</sup>があつたつて、なんになるものかね。

夜生れて、夜のものに親<sup>お</sup>んで、人には丸で

知られず、自分にさえ知られずにいるのだもの。

メフィストフェレス

そうだとして見れば、わけもない事です。

人に委任して御覧になると好<sup>い</sup>いのです。

お三人で目を一つと齒を一本と使つておいでになる。

そこでお三人の御本体を、一時お二人<sup>ふたり</sup>でお撰<sup>えら</sup>し

なさるとして、三人目のお姿をわたくしに

お貸<sup>か</sup>なさることも、神話学上お差支<sup>さし</sup>は

ないでしょう。



フォルキアデスの一人

どうだろうね。好かろうか。

他の二人

いたして見ましょう。でも目と歯とは貸されません。

メフィストフェレス

それでは一番好い物をお除のけになるのです。

どうしてお姿がそっくり似せられましょう。

一人

わけはありません。片々の目を瞑ねむつて、

鬼歯を一本お見せなされば好いのです。

そうなされば、横顔がすぐにそっくり

わたくしどもに似ておいでなさいます。

メフィストフェレス

難有い事です。好いですか。

フォルキアデス

好うござんす。

メフィストフェレス

(横顔をフォルキアデスにする。)

これでもう混沌の秘蔵息子になりました。

フォルキアデス

それはわたし達が混沌の娘だと云うことは確かです。

メフィストフェレス

これでは半男半女だと冷かされても為<sup>しかた</sup>方がない。

フォルキアデス

改めてのきようだい三人の中で誰が美しかろう。

こちらは二人で目も齒もあります。

メフィストフェレス

己はもう誰にも見られぬようにせんではならぬ。

地獄の水<sup>ぬかるみ</sup>潦で悪魔を威す姿だからな。

(退場。)

## アイゲウス海の石湾

(月天の頂点に懸かる。)

セイレエン等

(岸の岩の上あちこちにゐて、笛を吹き、歌ふ。)

夜の恐ろしき紛まざれに、

テツサリアの奇くしき女おみなら等、

君を猥みだりにおろしまつりしこともあれど、

今は君静みずかかに自みずから掌かさどらす夜の空より、

優かがやしく赫かがやく影を流して、

顫ふるふ波を眺めまし、

その波間に浮き出づる

群を照させ給へ。

美しきルナの神よ。いかにもして仕へまつらん。  
ただ御恵を垂れ給へ。

ネエレウス族とトリイトン等と

(海の怪物として。)

汝達<sup>なむたち</sup>広き海原とよもし、

今一際鋭<sup>と</sup>き音<sup>ね</sup>を高く立てよ。

深き底なる民呼<sup>よ</sup>び継ぐべし。

恐ろしき<sup>あぎと</sup>の風<sup>の</sup>を脱<sup>のが</sup>ると、

我等静かなる片蔭に寄り集へり。

優しき歌われ等を誘ふ。

見給<sup>こがね</sup>へ。われ等は喜ばしきの余<sup>あまり</sup>に、

黄金<sup>こがね</sup>の鎖を身に纏<sup>まと</sup>ひ、

玉<sup>たま</sup>を嵌<sup>は</sup>めたる冠<sup>かがふり</sup>に、腕<sup>かいな</sup>の輪をさへ、

帯をさへ添へて飾りぬ。

こは皆君等が賜なり。

君等、この入江の神等。

舟<sup>くだ</sup>擡けて沈みし宝を、われ等がために、  
歌の力もて引き寄せ給ひぬ。

### セイレン等

憂きこと知らぬ<sup>ただよい</sup>漂の世を、

魚は海の涼しき国に、<sup>たいら</sup>平けく

楽しく過すものとは、早く知れり。

さはれ。祭の場<sup>にわ</sup>に賑はしく集へる君等よ。

けふは君等が世の常の魚に優れるを、

われ等は見ばやと思へり。

### ネエレウス族とトリイトン等と

こゝに来るに先だちて、

われ等早く思ふよしありき。

女男<sup>めお</sup>のはらから達。いぎ、今疾<sup>と</sup>く行かむ。

世の常の魚に優ると云ふ、

最も力ある証<sup>あかし</sup>を見せむため、  
けふはいさゝかの旅せば、足りなむ。

(共に退場。)

セイレン等

皆つと去りぬ。

追風のまにまに

サモトラケさして真直<sup>ますぐ</sup>に去りぬ。

尊きカベイロイの国へ行きて、

何をかせんとすらん。

測り知られず、何物にも似ぬ神々なり。

とことほはおのづから生れ出<sup>あ</sup>でて、

常に何ぞともみづから知らずと云ふ。

恵深きルナの神よ。

高き空にさながら、優しくいませ。

夜の長く続きて、

われ等の日に逐はれざらむために。

タレス

(岸にて小人に。)

お前をネエレウスの爺いさんに紹介するのは

造<sup>ぞう</sup>倣<sup>さ</sup>はない。あれが住む洞穴も遠くはない。

しかし厭<sup>いや</sup>な、苦虫を噛み潰したような面<sup>つら</sup>の奴で、

強情で手におえないで。

あの不機嫌な親爺には、人間世界の

全体とする事が、いつも気に食わない。

所があいつには未来の事が分かつている。

だから誰でも遠慮して、いる所にいさせて、

敬って置いて遣<sup>や</sup>るのだ。その上あいつは

いろいろな人の世話もしてくれたのだ。

小人

8080

8085

8090

験に門を<sup>た</sup>たいて遣りましょう。まさかすぐに硝子をこわして、火を消されもしますまい。

### 海の神ネエレウス

己の耳に聞えるのは人間の声か知らん。

どうもすぐに心から<sup>しん</sup>腹が立つてならない。

りきんで神々の境に達しようとする生物だが、そのくせ永遠にどん栗の<sup>せくらべ</sup>背競をする約束に出来ている。昔から己は神らしく休んで

いられるのに、善い物を助けたくてならない。

所で昨今の<sup>しあげ</sup>為上を見ると、まるで己が

智慧を貸したものとは思われないのだ。

### タレス

所が、おじさん、世間ではやはりあなたを<sup>たのみ</sup>頼にしています。あなたは賢者だ。門前払を

食わせないで下さい。この人間らしい火を御覧。



あなたの御意見どおり通にする気でいるのだ。

### 海の神

意見だと、昔から人間が意見を聴いた例ためしがあるか。

気の利いた詞ことばはこつこつした耳には這入らない。

何度遣つて見て、自分で自分に呆れても、

人間はどこまでも我がを通して行くのだ。

他所者の女が、あいつの色気を網でからんで

しまわぬうちに、あのパリスにだつて親同様に

意見をした。グレシアの岸に大胆に立っていたあいつに

己の心の目に写つた事を云つて聞せた。

烟は空に満ち、赤い色みなぎが漲つて、

棟梁むなぎばりは燃え、下には虐殺が行われている。

トロヤの復讐の日だ。千載に伝えて、

活きた画のように、人の知っている恐ろしさだ。

横著者奴、老人の詞を笑談だと思ひおつた。

情欲のままに振舞った。イリオスの都は落ちた。  
長い艱なやみの果はてにしゃっちこばった巨おおひと人の死骸だ。  
ピンドスの山の鷲の待っていた馳走だ。

8120

ウリツソスにだつてそうだ。キルケの手管も、  
キクロオプスの禍も、己が言つて聞せたのだ。  
あいつの躊躇ためらい、あいつの部下の軽はずみ、  
何もかも言つて聞せた。それが役に立ったか。  
よほど遅くなつてから、十分揺られた挙句に、  
波の恵もてなしで待遇の岸へは著いたのだが。

8125

## タレス

そう云う振舞は賢者に苦痛を与えるでしょう。  
しかし善人はまた遣つて見るものです。

8130

一毫の報恩も、善人に大喜をさせて、  
万斛ばんこくの不義理を十分詰め合せるでしょう。  
わたし共のお頼は容易な事ではない。

あの小僧はこれから成り出でたいと云うのです。

### 海の神

己の久し振の上機嫌を損ねさせてくれるな。

きようはまるで違った用のある日だ。

己の娘達、ドオリス族の海少女が

皆来るように言つて置いた。

あんな美しい立居の女は、オリムポスの山にも、  
お前方がたの世界にも、またとあるまい。

しなやかに、竜の背からネプツウヌスの馬に  
乗り換えて来る。泡の上にも

浮き上がることが出来るように

水に親しく馴れている。

一番美しいガラテアは、彩いろいかがや赫きき、

ウエヌスの常の座、貝の車に乗つて来る。

あれはキプリスが己達に叛いてから

パフオスで神に祀られているのだ。

あれがウエヌスの後継あとつぎになって、祠のある土地や、車の玉座を占めてから、もう久しくなる。

帰れ帰れ。親として己が楽しむ、きょうの日に、

心に怒、口に悪口は禁物だ。

形を変えるプロテウスの所へ往け。どうして

成り出でられるか、化けられるか、あの化物に聞け。

（海の方へ退場。）

タレス

これはまるで無駄な手数てすうだった。プロテウスに

逢ったところで、すぐ消えてしまうだろう。

相手になつてくれた所で、呆れるような事、

戸まどいをするような事しか、言つては聞かせまい。

しかし兎に角意見が聞きたいと云うのだから、

験ためしに出掛けて見るとしよう。

(退場。)

セイレエン等

(上の方、岩の上にて。)

遠おちかた方より波の境を滑りて

寄り来くと見ゆるは何ぞ。

風のむた

白帆の進み近づくごと、

姿あざやかにも見ゆるかな。

あはれ、浄められたる海少女等よ。

いざ、諸共に岩を降おりなむ。

声さへ、汝達なむたちにも聞えずや。

ネエレウス族とトリイトン等と

われ等の手に載せ、かしづきて来ぬるもの、

君等の心を悦ばせざらめや。

大亀<sup>おおがめ</sup>へロネの甲<sup>こう</sup>の鏡

厳<sup>いか</sup>めしき姿を写し出せり。

われ等<sup>かしこ</sup>が傳<sup>か</sup>きて来ぬるは神々ぞ。

君等<sup>かしこ</sup>畏<sup>おそ</sup>き歌を歌へ。

セイレエン等

御身<sup>みみ</sup>はさゝやかなれど

御稜<sup>みいつ</sup>威<sup>い</sup>は大いなり。

淪<sup>しず</sup>むものを救ひます神等、

昔<sup>いづ</sup>より齋<sup>い</sup>きまつる神等はこれ。

ネエレウス族とトリイトン等と

治<sup>ち</sup>まれる世の祭せむと、

カベイロイの神等を迎へ来ぬ。

この神等の畏<sup>おそ</sup>く振舞<sup>ふりま</sup>ひ給<sup>たま</sup>ふ境には、

ネプツウヌスの神も平<sup>たい</sup>けくまつりごち給<sup>たま</sup>はむ。

セイレエン等

舟の砕けむとき、

われ等おん身等に及ばず。

逆はむよしなき御稜威<sup>みいつ</sup>もて、

舟人を救ひませば。

ネエレウス族とトリイトン等と

みはしら  
三柱をば迎へまつりぬ。

よはしら  
四柱めの神辞みましぬ。

その神宣<sup>の</sup>らさく。皆に代りて思ひ量<sup>はか</sup>る、

われぞ真<sup>まこと</sup>の神なると。

セイレン等

かくては一人<sup>ひとり</sup>の神、あだし神を

嘲り給ふことゝなりなむ。

君等たゞ福<sup>さいわい</sup>を尊び、

禍を恐れてあれ。

ネエレウス族とトリイトン等と

実は七柱の神おはせり。<sup>まこと</sup>

セイレエン等

さらば残れる三柱はいづくにおはする。

ネエレウス族とトリイトン等と

われ等は知らず。

オリムポスの山にてや問はまし。

かしこにはまだ誰も思ひ掛けぬ

八柱目の神もやいまして。

そもわれ等に憐を垂れ給ふらめど、

皆未だ全<sup>また</sup>くは成り出<sup>い</sup>でまさぬなるべし。

得られぬ物に

あくがれます<sup>うえ</sup> 饑の神等、

譬<sup>たと</sup>へむ物なき神等は

果<sup>はて</sup>なく成り出<sup>い</sup>でむとし給ふなり。

8195

8200

8205



セイレエン等

日のうち、月のうち、

いづくに神等いまさむも、

祈る習をわれ等は棄てじ。

そはその甲斐あればなり。

ネエレウス族とトリイトン等と

この祭執り行ふわれ等の誉

いかに高く挙がるかを見よ。

セイレエン等

いづくにて、いかに赫かむも、

誉はいにしへの

すぐれびと  
英雄のものならじ。

こがね  
黄金なす羊の毛皮は手に落ちぬれど。

君等カベイロイを迎へまつらば。

一同

(合唱として繰り返す。)

黄金なす羊の毛皮は手に落ちぬれど。

我等、君等カベイロイを迎へまつらば。

(ネエレウス族とトリイトン等と過ぎ去る。)

小人

あの不恰好な神様達は、

この目には悪い土器の壺のように見えます。

ところが学者達がそれに頭を

打<sup>ぶ</sup>つ付けて破<sup>わ</sup>ろうとしています。

タレス

こう云うのが人の欲しがる物だ。

鏽<sup>さび</sup>が附いて貨幣の値が出るのだ。

変<sup>へんぎ</sup>形<sup>よう</sup>の神プロテウス

(見えざる所にて。)

己のような年寄の昔話の話手にはこんなのが氣に入る。

異形なだけ難<sup>ありがた</sup>有い。

タレス

プロテウスさん。どこにいるのだ。

変形の神

(応声法にて近く遠く。)

ここだ。ここだ。

タレス

古い洒落だが、己はおこりはしない。

しかし友達に好い加減な事を言うな。

自分のいない所から声を出しているな。

変形の神(遠く。)

さようなら。

タレス

(小声にて小人に。)

ついそこにいるのだ。一つ光らせて

お見せ。あいつは魚いおのように物見高い。

どこに身なりを拵えて、じつとしていても、火にはきつとおびき寄せられて出て来る。

小人

まあ、硝子をこわさないように用心して、光を出して見ましょう。

変形の神

(大亀の形して。)

その優しい、美しい光を出しているのはなんだ。

タレス

(小人を蔽ひ隠す。)

宜しい。見たけりやあ、傍へ寄つて見させよう。

しかしちよつとした手数てすうを面倒がらないで、

人間らしい二本足になつて出てくれ。

己達の隠しているものを見るのは、

己達の好意、己達の意志のお蔭だ。

変形の神

(品好き形を現す。)

世渡<sup>よわたり</sup>上手の掛引をまだ覚えているな。

タレス

まだ色々に化けることを道楽にしているな。

(小人を露呈せしむ。)

変形の神(驚く。)

光る一寸坊だな。まだ見たことがない。

タレス

智慧を借りて成り出<sup>い</sup>でようとしているのだ。

当人の話に聞いたが、

妙なわけで半分世に出て来たのだそうだ。

精神上の能力には不足はないのに、

手に攫<sup>つか</sup>まれるような、確<sup>しか</sup>とした所がない。

今までの所では、目方と云つては硝子だけだから、  
先ず体を拵えて貰いたいと云う志願なのだ。

変形の神

お前が本当の生<sup>きむすめ</sup>娘の倅と云うのだ。

まだ出来るはずでないのに、もう出来ている。

タレス（小声にて。）

それから一つ外な方面から見ても難物だ。

己の考えた所では、こいつは半男半女だ。

変形の神

それは却て旨く行くかも知れない。

打<sup>ぶ</sup>つ附<sup>ま</sup>かり放題、間に合うだろう。

だがここでは余計な思案はいらない。

先ず広い海に往つて始めるのだ。

最初は小さい所から遣り出して、

極小さいものを併呑して恐悦がる。

それから段々大きくなつて、

うわ手の為事しごとが出来るように成り上がるのだ。

小人

ここは好い風の吹いて来る所ですね。

こう青い若木の匂においがする。好い匂ですね。

変形の神

そうだろう。可哀い小僧の云とう通だ。

もつと先ではもつと好い心持になる。

その狭い岬では、

匂がもつとなんとも云えなくなる。

その前へ行くと、今浮いて来る

行列が十分近く見える。

さあ一しよにあっちへおいで。

タレス

己も行こう。

## 小人

珍らしい化物の三人連だ。

ロドス島のテルヒイネス魚尾の馬と竜とに乗り、ネプツウヌスの三尖杖を持ちて登場。

## 合唱の群

いかなる荒波をも鎮むる、ネプツウヌスの

8275

<sup>みつまた</sup>三股の杖を鍛ひしはわれ等なり。

<sup>いかずち</sup>雷の神濃き雲を舒ぶるとき、

その恐ろしきはためきにネプツウヌス<sup>こた</sup>応ふ。

<sup>かみ</sup>上よりは尖れる稲妻射下せば、

<sup>しも</sup>下よりは幾重の波の潮沫<sup>しおなわ ほとばし</sup>を迸り上らしむ。

8280

かゝる時その間にありて憂へつゝ闘ふものは、  
<sup>ゆ</sup>揺られ揺られて、皆遂に底深く沈めらる。

されば彼神けふ我等に指揮の杖を借し給へり。

いで、我等は晴やかに、落ち居て心安く浮びてあらむ。



## セイレエン等

日の神に身を委ねまつれる、

晴れたる日に称へられたる君等に、

切にルナせちの神を敬ひまつるこの時、

われ等いや礼申す。

## 金工テルヒイネス

上かみなる穹窿きゆうりゆうにいます、めでたき女神よ。

御同胞みはらからの日の男神おがみの称へらるゝを喜びきこ聞しめせ。

畏かしこきロドスの島に御耳を借し給へ。

御同胞みはらからを称へまつる、果なき歌はての声かしこより

立ち升のぼらん。彼神日の歩あゆみを始め、業わざを

果しまして、火の如く赫く目してわれ等を見給へり。

山も、市も、岸も、波もめでたく明あかく、

彼神の御心みこころに愜かなへり。われ等の周囲めぐりを

霧立ち籠むることなし。よしや忍びやかに

立つことあらむも、一<sup>ひと</sup>照<sup>て</sup>照<sup>り</sup>、一<sup>ひと</sup>吹<sup>ふ</sup>吹<sup>か</sup>ば、島は  
浄めらるべし。さて彼神は己が姿を百<sup>も</sup>の形に  
写せるを見まさん。若者あり、巨<sup>おお</sup>人<sup>ひと</sup>あり、暴<sup>あら</sup>きあり、  
優しきあり。神々の御稜威を敵めしき人の  
形には、われ等始て造り出だしつ。

## 変形の神

勝手な歌を歌わせて、勝手な自慢をさせて  
置くが好<sup>い</sup>い。日の神聖な、生きた光のためには  
死物は笑談に過ぎない。いつまでも  
厭<sup>あ</sup>きずに物を解かして、物を造っている。

あいつ等はその形を金で鑄て、

一<sup>ひと</sup>廉<sup>かど</sup>の物を拵えた気になっているが好<sup>い</sup>い。

あの高慢な連中が詰まりどうだと云うのだ。  
なるほど神々の形が仰山らしく立っていた。  
ところが地震がこわしてしまった。

8300

8305

8310

もう疾<sup>と</sup>つくにまた解かされている。

下界の為事<sup>しごと</sup>はどんなにしたって、

詰まりどこまでも無駄骨折だ。

生活には波の方が余計役に立つ。

お前<sup>とこ</sup>を常世<sup>とこよ</sup>の水の都へ連れて行くのは

変形の神の鯨だ。

(変形す。)

そりや。化けた。

そこへ行くと、お前、旨く行くのだ。

己<sup>せな</sup>がこの背の上に載せて行つて、

渡津海と縁<sup>えんむすび</sup> 結をさせて遣る。

タレス

造化を新規時<sup>まきなお</sup>直しにして見ようと云う

殊勝な望だから、望通<sup>どおり</sup>に遣つて見るが好い。

手ばしこく働く用意をするのだ。

永遠な法則に随つて働いて、

千万の形を通り抜けて行くのだから、  
人間になるまでは大ぶ暇があるぞ。

（小人変形の神の鯨に乗る。）

### 変形の神

魂を据えて湿つた遠い所へ一しよに来るのだぞ。

そこへ行けば、豎にも横にも生活を広げて、

勝手に活動することが出来るのだ。

ただ余り上の仲間<sup>うえ</sup>に這入ろうとしてもがくな。

人間になつてしまうと、

もうおしまいだから。

### タレス

まあ、その時になつてからの事だ。その時代の  
立派な人間になるのも、随分結構だ。

変形の神（タレスに。）

お前のような性の人間になれと云うのだな。  
 そんなのは暫くは持つ。

もう何百年か、色の蒼い化物の仲間にお前のいるのを見ているから

セイレエン等（岩の上にて。）

月の周囲に濃き暈かきなして、  
 まろがる雲は何の雲にか。

鳩なり。光の如き、真白なる翼して、  
 恋に身を焦す鳩なり。

この恋する鳥の群をば  
 パフォスの市送りおこせつ。

晴やかなる喜、明かに満ちわたりて、  
 われ等の祭は闌たけなわなり。

海の神（タレスに歩み近づく。）

夜道を歩く人間が、あの月の暈を

空気の現象だと云ったそうだが、  
己達のような靈<sup>れい</sup>の仲間では、そうでないことを  
知っている。本当の事を知っている。

8350

あれは昔から覚え込んだ、  
特別な、不思議な飛方をして、  
己の娘の貝の車に乗って来る  
案内をする鳩共だ。

## タレス

静かな、暖い巢に

8355

神聖な物が生きながらえているということは、  
すなおな男に氣に入る通<sup>とお</sup>に、  
己も一番好き事だと思う。

リビアのプシルロイとイタリアのマルシと

(海の牡牛、海の犢<sup>こうし</sup>、牡羊に乘れり。)

キプロスの荒き岩<sup>いわむろ</sup>室に、

8360

海の神にも塞がれず、  
地震なの神にも崩されず、  
常世とこよの風に吹かれつゝ、

上れる代に交らぬ、

静かに覚さとれる、楽しき心を持ちて、  
われ等キプリスの車を蔵おさめ持たり。  
さて優しき波のゆきかひに、

8365

夜の囁くとき、

新に生れたる徒ともがらの目を避よきて、

はしき少女を載せて来きなんとす。

8370

われ等ひそかにいそしむもの等は  
驚をも、翼ある獅子をも、

十字架をも、月をも怖れず。

上かみつ方かたにて国を立て、位に即き、

入り代りて立ち働き、

かたみに逐ひ遣り、打ち殺し、

穀<sup>たなつもの</sup>物をも、青人草をも刈り倒すに

任せてん。今はわれ等

はしき少女を率<sup>い</sup>て来なんとす。

セイレエン等

やゝ賑はしく、程好く急ぎ、

車の周囲<sup>めぐり</sup>に、幾重か圈<sup>わ</sup>をかき、

蛇のうねりせる列<sup>つら</sup>をなし、

列と列と入り乱れ、

近づき来たるよ。汝達。憎からず暴<sup>あ</sup>れたる、

逞<sup>おみなら</sup>しき女等、ネエレウスのたけき族<sup>うから</sup>。

傳<sup>かしず</sup>き来たるよ。優しきドオリスの族、

ガラテア、母の似姿を。

敵めしきは、神々と同じく見ゆる、

尊<sup>しに</sup>き、死せぬ姿ながら、

8375

8380

8385



また優しき人の世の女に似て、  
誘ふたをやかなる形あり。

ドオリス族

(群をなしてネエレウスの前を過ぐ。皆鯨に乘れり。)  
ルナの神よ。われ等に光と陰とを借させ給へ。

若きこの群を明けく照しませ。

われ等は父のみ前に、願ふ心もて、  
夫等を率てまゐりぬ。

(ネエレウスに。)

こは岸囀む波の怒れる牙より

われ等の救ひ出だしし若者等なり。

蒲の上、苔の上にをらせて、

温め、日の光に近づかしめき。

その光はわれ等の賜ぞと、まめやかに

熱き口附してわれ等に報いつ。

優しき人々を恵のみ心もて見ませ。

### 海の神

高き価ある事をいしくも併せ得つるよ。

人に恵を与へ、みづからも樂みて。

### ドオリス族

父君、われ等の業を褒めまし、

われ等の享けし樂をゆるしまさば、

とはに若きこの胸に、夫等を死せず、

堅く寄り添ひてあらせ給へ。

### 海の神

汝達、美しきものを取り得しを喜び、

若者を夫と教へかしづけ。

さはれチエウスならではえ允さぬ事を、

われいかでか授くることを得む。

汝達を揺り弄ぶ波は、

恋をもとはにならしめねば、  
靡く夢の覚めむ日待ちて、  
おだしく陸<sup>くが</sup>へおくり返さむ。

8415

## ドオリス族

めぐしき童<sup>わらわら</sup>等。われ等は惜めど、  
悲しくも今より別れなむ。  
とはに渝<sup>かわ</sup>らぬ盟<sup>ちかい</sup>を願へど、  
神等それをゆるし給はず。

## 少年等

われ等すなほなる舟<sup>ふなびと</sup>人の子を、  
君等今のごと、長く養ひまさばとぞ思ふ。  
かつて知らぬ、めでたき日を送りぬ。  
これに増す願あらめや。

8420

(ガラテア貝の車に乗りて近づく。)  
海の神

好い子。お前だな。

ガラテア

お父う様。嬉しい事。

鯨。少しお待よ。<sup>まち</sup>わたしは目が放したくない。

海の神

もう行つてしまった。はずみのある、

圈<sup>わ</sup>をかくような動<sup>うご</sup>方<sup>きかた</sup>をして、行つてしまった。

あれも胸になんと思つても為<sup>しかた</sup>方<sup>かた</sup>がないのだ。

ああ。己を連れて行つてくれれば好い<sup>いい</sup>に。

それでも一年の間の填<sup>うめ</sup>合<sup>あわせ</sup>になる程、

ただ一目見るのが嬉しい。

タレス

万歳。万歳。何遍繰り返しても好い<sup>いい</sup>。

己は真と美とが骨身<sup>こた</sup>に徹<sup>こた</sup>えて、

盛んに嬉しくなつて来た。

何もかも水から出て来たのだ。

8435

何もかも水で持っているのだ。

大洋。どうぞ己達のために永遠に働いてくれ。

お前が雲を送り出して、

何本かの小川<sup>こがわ</sup>を流れ出させて、

中位な川をあちこちうねらせて、

大川<sup>でか</sup>を出来してくれなかったら、

8440

山や平地や世界がどうなろう。

一番新しい性命を保たせてくれるのはお前だ。

反響（登場者一同に呼ぶ。）

一番新しい性命の出て来る源はお前だ。

海の神

今ゆらつきながら遠くを戻って来るが、

8445

もう目と目を見合せるようには通らない。

儀式めいて伸びた鎖の

圏を造ろうとして、

おお勢の群がうねっている。

それでもガラテアの貝の車だけは、

今ちよいと見える。あ。またちよいと見える。

あの群の中で

星のように光っている。

どんなに遠い所にいても、

やはり近く、真<sup>まこと</sup>らしく、

浄く、明るくきらめいて、

あの可哀い姿は群集の中に照っている。

小人

この恵<sup>めぐみ</sup>ある湿<sup>うるおい</sup>の中では、

何<sup>あかり</sup>に明<sup>あび</sup>を浴せて見ても、

美しくないものはない。

変形の神

8450

8455

8460

この性命の湿の中で、

お前の明<sup>あかり</sup>も始て

好い音<sup>ね</sup>をして照るのだ。

### 海の神

なんの新しい秘密を、あの群の真ん中で、

己達の目に打ち明けて見せようとするのだろう。

ガラテアの足の傍<sup>そば</sup>、貝の車の辺<sup>へん</sup>で光るのはなんだ。

恋の脈の打つのに感動させられているように、

ぱつと燃えるかと思うと、また愛らしく微かに光る。

### タレス

あれはプロテウスがホムンクルスを騙して

連れて来たのだ。<sup>ほしいままあこがれしるし</sup> 肆な係恋の兆だ。

悶えて声を立てるうめきが聞えそうだ。

あの赫く玉座に触れて碎けるだろう。

今燃え立つ。今光る。もう流れ散る。

## セイレエン等

打ち合ひて光りて砕くる彼波を  
照らし浄むるは、いかなる火の怪ぞ。  
あやしみ

8475

赫きて、ゆらめきて、こなたへ照りてぞ来る。  
夜闇の水の面に燃ゆる物等よ。  
おも

めぐりには総て火流る。

この事共を皆始めしエロスの神よ。  
汝に任せむ。  
なれ

8480

畏き火に囲まれたる  
かしこ

海を称へむ。  
たた波を称へむ。

水を称へむ。火を称へむ。

稀なる奇しき蹟を称へむ。  
く

## 皆々

優しく、恵ある風を称へむ。

奇しき事多き岩室を称へむ。  
いわむろ

こゝなるもの皆祀らばや、

8485



地、  
水、  
火、  
風の  
四つ  
を皆。

## 第三幕

スパルタなるメネラスの宮殿の前

ヘレネと捕はれたるトロヤの女等の群と登場。パンタリス合唱の群をひきめる。

ヘレネ

沢山褒められもし、毀<sup>そし</sup>られもしたヘレネが  
わたくしです。今著いた海岸から来ました。  
ポセイドンの波の恵、エウロスの風の力で、  
フリギアの平<sup>たいち</sup>な野から、抗<sup>あらが</sup>う高い背に載せて、  
故郷の入江へ送り込まれた、その間の  
波の止<sup>とめど</sup>所のないゆらめきにまだ酔っています。

メネラス王はあちらの下の方で、軍人の中の  
勇士達と凱旋の祝をしていられます。

8495

お父<sup>と</sup>う様チンダレオスがパルラスの岡から  
帰って建てられて、クリテムネストラとは女同士、  
カストル、ポリデウケスと親しくわたくしが  
遊んで育った頃、スパルタのどの家よりも  
美しく飾られた、この尊い御殿。

8500

お前はどうぞわたくしを迎え入れておくれ。  
お前達、鉄の門の扉にわたくしは会釈します。  
昔お前達がさつと開<sup>ひら</sup>いてくれて、大勢の中から  
選ばれて来たわたくしの前へ、壻君メネラス様  
の姿が赫<sup>かがや</sup>いておあらわれなされたのだ。  
わたくしが夫人に似合わしく、王の急ぎの使<sup>つかい</sup>を、  
相違なく果すように、また聞いて通しておくれ。  
わたくしをここへ入れておくれ。運悪く、ここまで

8505

附き纏まとつて苦めた物は、皆残して這入りましょう。

わたくしがなんの気なしに、尊いお役を承つて、

キテラのお社へお参まいりをしに、この門を出て、

お社でフリギアの賊に捕われてから、ほんに

色々な事があつた。それが世間一ぱいの評判じゃ。

だが、誰でも自分の事を昔話のように

作られると、それを聞きたくはないものだ。

### 合唱の群

どうぞお后様、お持もちになつていらつしやる

一番尊い物をお嫌きらなさいますな。

一番大きい為しあわせ合はあなたお一人で

お受うけになりました。誰よりもお美しいと云う

お誉いでございます。英雄は名を轟かして、

息張いばつて歩いて行きますが、

その強情も、あらゆる物に打ち勝つ

8510

8515

8520

美の前には意を曲げてしまいます。

へレネ

もうお廃。わたくしは夫と舟に乗つて来て、

夫のお指図で、お先へ都へ帰された。

しかしどう云う思召だか、わたくしには分からぬ。

妻として帰るのか。后として帰るのか。

それとも王様の御心痛の生贄、グレシアの民の

久しく忍んだ不運の生贄として帰るのか。

わたくしは取られた。だが、捕われたか、それは

知らぬ。不死の神がわたくしに、一面のある名聞と

運命とを授けたのが、美しく生れた身の怪しい

同行者で、それがどうやらこの門口では、陰気な、

嚇すような風をして、傍に附いているような。

なぜと云うに、空洞な舟にいた時から、夫は

めつたにわたくしの顔も見ず、優しい詞も掛けられぬ。

8525

8530

8535

向き合っていて、何か工<sup>たく</sup>んでいられるらしかった。

そして前の数艘の舟の舳先が、エウロタ川の深い入江に這入って、岸に触れると、神の教でも受けたように云われた。己の兵士は隊の順序に

こゝで上陸するが好<sup>よ</sup>い。海岸に整列させて

検閲する。お前は先へ行くが好<sup>よ</sup>い。

神聖なエウロタ川の、豊饒な岸に

どこまでも沿うて、湿った牧場の敷物の上に

馬を駆って、昔ラケデモンが厳めしい

山に近く囲まれた、豊かな、広い畑を作った、

美しい平野に行く著くまで帰れ。

そして高い塔の聳えている王宮に這入れ。

そこに己が気の利いた、年の寄った、

取締役の女と一しよに、残して置いた

女中共がいる。その人数を調べて見い。

8540

8545

8550

お前の父が残して置いて、それに己が  
戦争の時も平和の時も、添えて貯えた、沢山の  
宝を、お前取締役に出させて見い。

何もかも相違なく整理してあるだろう。

なぜと云うに、置いて出た物が皆、帰った時に  
残っていて、置場所も変っていないのが、  
王侯たるものの特権だ。人臣には何一つ  
変更する権能は授けてないのだと云われた。

#### 合唱の群

さあ、追々にお蓄たくわえになつた、数々の宝を  
御覧になつて、お目をもお胸をもお慰めなさい。

鎖や冠の飾は、皆つんと澄ましていて、  
一ひと廉かどのえらい物の気になっていますが、

あなたがいらつしやつて、さあ、来いと仰やれば、  
皆急いで御用を勤めよういたします。

あなたのお美しいお姿と、金や真珠や  
宝石との戦争が拝見いたしとうございます。

ヘレネ

それから夫は<sup>おつと</sup>こう云われた。そこでお前

品物の整理してあるのを、改めて見た上で、  
神聖な祭の式を行う時、生贄を扱うものの  
手許にいる、数だけの五徳と、

いろいろな<sup>いれもの</sup>入物とを取り揃えろ。

鼎<sup>かなえ</sup>や、鉢や、平たい、円い籠がいる。

尊い泉で汲んだ、清い水を頸の長い瓶に

入れたのと、火の早く移る、乾いた

薪とが用意してなくてはならぬ。

それから<sup>よ</sup>好い、研いだ小刀を忘れるな。

その外の事はお前見計らって置け。

わたくしを追い立てるようにして、こう云われた。



だけれどその指図をなさる夫が、オリムポスの

8580

神達に殺して供える生物を、何とも斥して

云われなかった。不審な事ではあるけれど、

わたくしは別に心配せずにも何もかも神達に

お任せするから、お気に召すようになさるが好い。

死ぬる人間のわたくし共は、福でも禍でも、

8585

こらえてお受申します。これまでも折々は

土に押し附けた獣の項の上に、祈祷と共に

重い斧が振り翳されても、祭の主がその贅を

殺すことの出来なかったことがある。不意に

敵が押し寄せたり、神達がお止なさるからだ。

8590

### 合唱の群

未来に出来ますことは、お分かりになりませぬ。

お后様、御安心遊ばして、

お進なさいまし。

善い事も悪い事も、

不意に人の手から出来てまいります。

前以てお知らせがあつても、信ぜられませぬ。

トロヤの都は焼けて辱<sup>はずかしめ</sup>の死を

目の前に見ましたではございませんか。

それでも御一しよにここへ参つて、

あなたにも、<sup>しあわせもの</sup>為合者のわたくし共に

恵ある、空<sup>そら</sup>の赫く日や、

国の一番美しい所を見て、

楽しく御奉公をいたすではございませんか。

ヘレネ

どうなつても好<sup>よ</sup>い。長い間離れて、恋しがつていて、

どうやら失つてしまつたらしかつたこの御殿が、

どうしたわけともなく、また目の前にあるのだから、

直<sup>すぐ</sup>に這入つて行くのが、未来に何があろうとも

8595

8600

8605

わたくしの務だ。だけれど子供の時に飛び越した  
高い階段を、どうも大胆には踏んで行かれぬ。

合唱の群

哀<sup>あわれ</sup>に捕われて来た皆さん。

あらゆる悲を

遠く投げ棄てておしまいなさい。

お帰<sup>かえり</sup>が遅れはしても、

却てしっかりした足<sup>あしつき</sup>附で、

御先祖の御殿の竈<sup>かまど</sup>の前に、

楽しくお近づきになる

御主人様、ヘレネ様の

お福<sup>ふく</sup>を分けてお戴<sup>いた</sup>なさい。

幸運を元に返し、

出て行った人を呼び戻す、

8610

8615

8620

尊い神様達をお称たたえなさい。

捕いたわれたものは徒たずらに

人屋ひとやの軒ひしから、故郷こきようを慕もつて、

両りやうの臂ひじを開ひらいて歎なげくのに、

放はなたれたものは

羽はが生はえたように、どんな艱難げなんをも

飛とび越こすのではありませんか。

8625

遠くにお出でになった、このお方をば、

ある神様がお掴つかまえなすつて、

お若わかくていらつしやつた昔むかしの、

口くちに言いわれぬ

お喜よろこやお歎なげを、

改あらためてお思出おもひでしになるように、

イリオスの荒あされた都みやこから、

8630

新しく飾られた

古い御先祖の御殿に

お連<sup>つれもどし</sup>戻<sup>もど</sup>になつたのです。

先導の女パンタリス（合唱の群を率ゐて。）

皆さん、歓楽で取り巻かれた唱歌の道を離れて、

あの御門の扉を振り向いて御覧なさい。

どうなすつたのでしょうか。お后様があらあらしい

お歩<sup>あるきぶり</sup>振<sup>ぶり</sup>でこちらへ出ておいでになりますね。

お后様。どうなさいました。お召使達が御挨拶を

申し上げる代に、御殿の中で、どんなお厭<sup>いや</sup>な事が

おありになつたのでしょうか。お隠し遊ばしますな。

お厭な御様子、不意<sup>おどろき</sup>の驚と気高い腹<sup>はら</sup>立<sup>たち</sup>との

闘っている御様子が、お顔に見えておりまする。

ヘレネ

（扉を開きたるままになし置き、感動して。）

チエウスの娘に生れたわたくしは、常の事を

怖れはせぬ。軽く撫でる驚おどろきの手は身には障らぬ。

だけれどもこのお城で、大昔おおむかしの古い闇から出て、

火山の口から湧く、焼けた雲のように、

今でもいろんな形をして升のぼつて来る恐怖には

英雄の胸でもおののかずにはいられまい。

きようはわたくしの帰つて来るのを、地獄の

眷属けんぞくが待ち受けていた。度々通つた、

長く恋しがつていた門口ではあるが、わたくしは

暇乞をして出た客のように、ここを出て帰りたい。

いや、そうはしたくない。日のさす外そとへは脱のがれたが、

縦たとえどんな悪魔が逐おうても、これから先さきへはもう逃げぬ。

どうかしてお祈いのりをして、浄められた竈の火に、

夫を迎えると同じように、わたくしを迎えさせる。

### 先導の女

8650

8655

8660

あなたを敬つて、お附申している女中共に、  
お后様、何事にお逢あひになつたかお聞せ下さいまし。

ヘレネ

わたくしの見た物は、お前方も今目まのあたり  
見るだろう。もし古い夜が、自分の拵えた形を、  
すぐ深い自分の懷に埋めなかつたら、見るだろう。  
しかし知らせるために、話はなしだけはして聞せよう。  
わたくしが差さ当あたりのお務を考えながら、謹んで

8665

御殿の厳めしい、内の間取まじりに這入つて行くと、  
荒れ果てた廊下の沈黙しじまに、わたくしは驚いた。  
耳に急いで歩く人達の足音も聞えず、

8670

目に用ありげに忙せわしく働く様子も見えず、  
いつも余所のものが来てさえ優しく会釈する  
取締役もいず、女中一人も出ては来ない。  
それから竈の据えてある辺に近寄つて見ると、

消えた炭火の微温なまぬるく残っている光で、床ゆかの上にいる人が見える。なんと云う覆面をした大女だろう。

眠っていると云うより、物を案じているらしい。

事によつたら、夫が用心おつとに言い附けて跡に残した

取締役の女でもあろうかと思つて、主人らしい

詞で、起つて働くように指図して見た。しかし

襖のある著物に身を包んで、女は働かずにいる。

とうとう威すように云うと、女はわたくしを

家や竈から逐うように、右の臂を動かした。

わたくしはおこつて女に背せを向けて、階段の方へ

すぐに急いだ。その上には夫婦のいる、飾られた

タラモスの牀が高く据えてあつて、その隣が

宝蔵なのだ。その時怪しい女は急に起つて、

往く先に立ち塞がつて、目をも心をも惑すような

怪しい恰好、痩せた、背の高い体、空洞うつろな、



血走つた、どんよりした目を、わたくしに見せた。

しかし口で言うのは徒事<sup>いたずらごと</sup>だ。詞で物の形を

造るように組み立てることは出来ぬ。

あれをお見。大胆に明るみへさえ出て来た。

だけれどもここでは、王様が帰られるまでは、こつちが

主人だ。日の神フォイボスは美の友で、夜の生んだ

醜い物を洞穴へ入れるか、退治るかしてくれよう。

(フォルキアデス闕の上、戸枢<sup>こすう</sup>の間に現る。)

# 合唱の群

わたくし共は、<sup>ちぢ</sup>れた髪が顛顚<sup>こめかみ</sup>に波を打つては

いますけれど、いろいろな目に逢いました。

戦争の悲惨、イリオスが落ちた夜<sup>よる</sup>、

恐ろしい事も沢山

見えています。

8690

8695

8700

押し合う兵士が埃を蹴立てて、あたりを  
暗くして騒いでいる中に、神様達のお呼よびになる  
声が響き、野原を越えて、城壁の方へ、  
黒くろがね金あらそいなす争の音が響いたのを  
聞いています。

8705

おう。イリオスの城壁はまだ立っていました。  
しかし火かえんはもう隣から  
隣へと這い渡って、  
自分で起した風に煽られつつ、  
ここかしこから夜の町へ  
広がって行きました。

8710

烟と熱と舌のように閃くほのおの燃立もえたちとの  
間から、ひどくおおこりになった

神様達が、巨人<sup>おおひと</sup>のような、不思議な姿をなされて、

8715

周囲<sup>まわり</sup>を火で照された、暗い烟<sup>うが</sup>を穿<sup>うが</sup>つて、

歩み近づいておいでになるのを、逃げながら  
拝みました。

そんな混乱を本当に見ましたやら、それとも

恐怖に縛られたわたくし共の心が

8720

造りましたやら、もうなんとも申すことは

出来ません。しかしここで

この恐ろしい物を目で見えていますことは、

確かに承知いたしております。

もし恐怖がわたくし共を控えて、

8725

そんな危険を冒さぬようにしないものなら、

手で掴まえてでも見られましょう。

闇<sup>やみ</sup>の女フォルキアデスの娘の中で、

お前はどれだえ。

どうしてもあの一族と

比べて見ずにはいられないね。

闇に生れて、一つの目、一本の歯を

かわるがわる使っている。

フォルキアデスの一人のお前が、事に依ったら

来たのだね。

8735

日の神フォイボスさんの見<sup>み</sup>極<sup>きわ</sup>める目の前へ、

美と押し並んで、

お前のような醜い物が

よく思い切って出られたね。

好<sup>い</sup>いよ。構<sup>で</sup>わないから出<sup>で</sup>ておいで。

日の神さんの神聖な目は

8740

ついぞ影と云うものを見たことのない通に、  
醜い物は見ませんからね。

だけれど残念な事には悲しい不運が、  
わたくし共死ぬる人間に迫つて、

永遠に咀<sup>のろ</sup>われた 廃<sup>すたれもの</sup>物が美を愛するものに  
起させる、言うに言われぬ目の苦痛に  
逢わせずには置きませぬ。

8745

そんならお前、恥を知らずにわたくし共に  
向つて出て来たお前、お聴<sup>きき</sup>。  
神様のお造<sup>つく</sup>りになった、為<sup>しあわせもの</sup>合者の  
咀<sup>のろ</sup>う口から出る咀<sup>のろ</sup>や、いろいろの嘲<sup>あざけり</sup>の  
脅<sup>おびやか</sup>をお聴。

闇の女フォルキアデス

8750

美しさと廉恥とが、下界の緑の道を

手を引き合つて一しよに歩かぬと言う諺は

古いけれど、その意味はいつまでも高尚で、真実だ。

二つの物の間には、深く根ざした、古い憎<sup>にくみ</sup>がある。

そこでいつどこで道の上で行き合つても、

敵<sup>かたき</sup>同士は互に背中を向け合う。そしてどいつも

またひどい勢でずんずん歩いて行く。廉恥は

悲しげだが、美しさと来ては平気な顔で歩いて行く。

そこへ老<sup>おい</sup>と云うものが来て、早く縛<sup>お</sup>つて遣らぬと、

とうとう地獄の空洞<sup>うつつろ</sup>な夜に包まれるまで歩いて行くのだ。

そこでお前達、横著者奴は、遠い国から高慢<sup>たかごえ</sup>げに

遣<sup>しわが</sup>つて来おつた。丁度あの咳<sup>たかごえ</sup>枯れた高<sup>たかごえ</sup>声をして

鳴いて通る黒鶴の群のようなものだ。我々の

頭の上を、長い暗い行列をして鳴いて通ると、

声<sup>こゑ</sup>が下へ聞えるので、静かに歩いてゐる旅人が

つい誘<sup>さそ</sup>われて上<sup>うへ</sup>を見る。しかし鳥は鳥、旅人は旅人で、自分々々の道を行く。この場合もそうなるだろう。

8770

お前達は何者だ。国王の尊い御殿を、酒の神を祭るマイナデスのように荒々しく、酔ったように跳ね廻<sup>まわ</sup>つて好いのか。犬の群が月に吠えるように御殿の取締役に向いてほざいて好いのか。どんな種<sup>すじよう</sup>性<sup>せい</sup>のものだか、わたしが知らぬと思<sup>おも</sup>っているか。

8775

兵卒が生<sup>なま</sup>ませて、戦争が育<sup>ま</sup>てた、生<sup>なま</sup>若い女原奴。色気違奴。自分も男に騙<sup>だま</sup>されながら、男を騙<sup>だま</sup>して、公民の力をも、軍<sup>いくさびと</sup>人の力をも萎<sup>しな</sup>えさせおる。

お前達の群にな<sup>い</sup>っているのを見ると、畑の緑の作<sup>さくもつ</sup>物を掩<sup>おほ</sup>いに降<sup>ふ</sup>りて来る蝗<sup>いむなし</sup>を見るようだ。

8780

余所の努力を食<sup>く</sup>い潰<sup>つぶ</sup>す奴等奴。切角芽を出<sup>だ</sup>す国の富<sup>つみ</sup>を撮<sup>み</sup>食<sup>く</sup>で耗<sup>へら</sup>す奴等奴。生捕<sup>なま</sup>られて、市に

売られて、貿易の貨物しろものにせられた奴等奴。

ヘレネ

こりや。主人のいる前で、召使に悪口を言うのは、無礼にも主人の持つている家の掟を破る為業だ。しわざ

褒めて好いものは褒め、叱って好いものは叱る。

それはわたくしの外のものには出来ないはずだ。

その上威力赫くイリオスの都が囲まれ、落され、

滅びた時、あれ等が尽してくれた誠実を、

わたくしは満足に思っている。また流離さすらいの間の

数々の難儀の時、誰も自分の事ばかり考えて

いるはずなのに、あれ等のしてくれた奉公もある。

あの機嫌よの好い皆に、今後こんごも世話がして欲しい。

主は奴婢しゆうぬひがどう仕えるかを見て、何者かとは問わぬ。

だからお前だまりもうお黙。皆に厭な顔をせぬが好い。

これまで王様の御殿を、わたくしに代つて、大切に



守っていたなら、それはお前の手柄にしよう。  
 こうして主人が帰ったからは、お前は手をお引。  
 そうせぬと、褒める代に罪せねばなりませぬぞ。

### 闇の女

なるほど、奉公人を叱るのは、神の恵を受けた王様の  
 奥方が、長の年月御殿を治めた報に得られた

大切な権力で、今後こんごもそうあつて宜しいでしょう。

さて改めてお認められなされた奥方のあなたが、

お后、女主人おんなあるじの昔からの席にまたお就つぎになるからは、

宝物をも我々一同をもお受取うけとりなされて、疾とうから

弛たづなんでいるを緊めて、お指図をなさるが好い。

ですが、何より先に、あなたのような美しい鵠くぐいの

傍そばでは、羽もろくに揃わぬ、べちやべちや云う驚あひるに見える、

この多数を抑えて、年寄を庇かばつて下さい。

### 先導の女

美しい方の傍では、醜女は猶しこめ なみにく醜うございますね。

闇の女

8810

賢い人の傍では、分らずやは猶分からずやだ。

(これより下、合唱の群より一人づつ出でて答ふ。)

第一の女

闇のエレボスが父親で、夜よるが母親だとお云いい。

闇の女

恥知らずのスキルラと従姉妹同士だとも云え。

第二の女

お前さんの系図にはいろんなお化ばけがいますよね。

闇の女

お前は親類を捜し出しに地獄へでも行け。

第三の女

8815

地獄にいるものも若過ぎて、お仲間になりますまい。

闇の女

盲<sup>めくらじじ</sup>爺のチレシアスに色でもしかける。

第四の女

オリオンの乳母<sup>おんば</sup>さんがお前さんの曾孫<sup>ひいまご</sup>でしょう。

闇の女

おお方ハルピアイが糞<sup>ふん</sup>の中で育てた子だろう。

第五の女

そんなに骨と皮になるには、何を食べておいでなの。

闇の女

お前達の吸いたがる血なんぞは食わないよ。

第六の女

御自分が死骸でいて、やはり死骸が食べたいのね。

闇の女

その恥知らずの口に光るのはウアムピイルの齒だ。

先導の女

お前が誰だと、そう云ったら、その口が塞がりますよ。

## 闇の女

自分が先へ名告るが好い。互の身の上だろう。

8825

## ヘレネ

その荒々しい言合を、鎮めに中へ這入るのは、

歎かわしいが、腹は立たぬ。忠実な召使の間に、

密かに醸されている争程、上に立つ主人の

損になる物は外にあるまい。そうなると、言附の

反響が、手早く為遂げた事実になつて、素直には

もう帰つて来ぬ。その反響は、自分も迷つて、徒に

罵っている主人の身の周圍に、我儘な響動を

作つて狂い廻るようになる。そればかりではない。

お前達は行儀を忘れた腹立の余に、不吉な、

恐ろしい異形いぎようのものを呼んで、わたくしの傍へ

近寄せた。わたくしは故郷の園そのにしながら、

地獄へ引き込まれたような気がする。これは昔の

8835

8830

記憶だろうか。我身を襲う物<sup>ものぐるい</sup> 狂<sup>くる</sup>だろうか。都々を荒す、恐ろしい夢の姿が、あれが皆我身であつただろうか。今も我身だろうか。今後<sup>こんご</sup>もそうだろうか。女子達は慄えている。それに年寄のお前一人平気でおいでだ。分かるように言つてお聞せ。

### 闇の女

それは誰でも、長い間、いろいろな幸福を享けて、跡で顧みると、どんな神の恵も夢かと思われます。あなたなんぞは格外な恵を受けておいでになる。生涯お逢になつた男は、どんな大胆な、思い切つた事をでも、すぐするように、恋い焦がれた人ばかりで、最初からあのテセウスの様な、立派な姿の、しかもヘラクレスに負けぬ力の男が、言い寄りましたね。

### ヘレネ

そう。まだ十歳の、韌<sup>しな</sup>やかな鹿を、アツチケの

アフィドノスの城へ連れて行かれたつけね。

闇の女

それから間もなく、カストル、ポリドイケス兄弟に救い出されて、選り抜いた人達の争の的になられた。

ヘレネ

だけれど、打ち明けて云えば、アヒルレウスそのままのパトロクロス様が誰よりも内々好であつたつけ。

闇の女

それを父上の思召で、あの大胆な航海者で、また内をも善く治めるメネラスにお妻せなされた。

ヘレネ

娘をお遣<sup>やり</sup>なされた上、国の政治もお任せなされた。その女<sup>めおとな</sup>中に生れたのが、ヘルミオネだつたつけ。

闇の女

ところが遺されたクレタ島を大胆に争おうとする

遠征の留守に、余り美し過ぎた客が来られた。

ヘレネ

それはあの時後家同様であつた上、そのために  
 どれだけの禍を受けたやら。思い出させて貰うまい。

闇の女

自由に生れた、クレタ人のこの婆々が、囚<sup>めしゅうど</sup>人、奴隸に  
 せられたのも、あの戦役のお蔭であつた。

ヘレネ

それでも直<sup>すぐ</sup>にこの城の取締の女中にせられて、  
 城をも、切角の戦利品をも、お預<sup>あずけ</sup>になつたのね。

闇の女

それはあなたが棄て置いて、塔で囲んだイリオスの  
 都と、その歓楽とに、引かれておいでなされたから。

ヘレネ

歓楽なぞとお云<sup>い</sup>でない。この胸の中一ぱいに

際限のない苦勞が注ぎ込まれたではないか。

闇の女

それでも世間の噂には、あなたは分身の術で、イリオスにも、エジプトにもおられたとか。

ヘレネ

物狂おしい心の迷を入り乱れさせてくれるな。  
今でさえどれが自分か分からずにいるものを。

闇の女

そればかりか、運命のあらゆる定<sup>さだめ</sup>に逆つて、  
早い恋をしたアヒルレウスも、空洞<sup>うつろ</sup>な影の国から  
出て来て、お傍に慕い寄ったとか聞きましたか。

ヘレネ

あの方<sup>かた</sup>も影、わたくしも影で、逢つたと云うまでの事。  
物にも書いてある通<sup>とお</sup>に、あれはほんの夢だった。

ああ。わたくしはもう消えて、このまま影になりそうだ。



(合唱の群の一半に倒れ掛かる。)

合唱の群

お黙<sup>だまり</sup>よ、お黙<sup>だまり</sup>よ。

厭<sup>めつき</sup>な目附をして、厭<sup>めつき</sup>な事を言う人ね。

齒が一本しかない、その口から、

そんな恐ろしい禍<sup>わざ</sup>の門<sup>かど</sup>から、

ろくな事は出はしない。

8885

なきけ

情<sup>なさけ</sup>ありげに見える意地悪<sup>いじわる</sup>、

羊の毛皮を著た狼の怒は、

首の三つある狗<sup>いぬ</sup>の<sup>あご</sup>より

わたしには猶恐ろしい。

そんな悪い工<sup>たくみ</sup>の、根ざし深く

狙っていた勢が、いつ、どこで、

どうはじけて出るのかと、わたくし共は

8890

おずおずして聞いています。

優しい、十分慰藉<sup>なぐさめ</sup>になるような、

憂き事を忘れさせる、軟い、恵ある詞<sup>か</sup>の代<sup>わり</sup>に、

過ぎ去った、総ての事の中から、

善い事よりは悪い事をと、引き出して来て、

今の光を

打ち消すと同時に、

ほのかに赫く未来の明<sup>あかり</sup>さえ、

お前さん、曇らせてしまいますね。

お黙よ、お黙よ。

もうお体から立ち離れそうにしている

お后様の魂を

お取<sup>とりとめ</sup>止申して、昔から

8895

8900

8905

日の照した姿の中で、一番美しい

あのお姿をそのままお置<sup>おき</sup>申したいから。

(ヘレネ恢復してまた群の中央に立つ。)

### 闇の女

うすもの

羅に包まれていた時から目を悦ばせて、今は目映<sup>まばゆ</sup>いように光って君臨している、

きよようの日の太陽も、浮雲の間から出て貫おう。

8910

お前は恵ある目で、世界がお前の前に展開しているのを見ておくれ。

皆はわたしを醜いと云って嘲つても、わたしはこれでも美と云うものを見分けている。

### ヘレネ

眩暈<sup>めまい</sup>のした時わたくしを取り巻いていた寂しい境からよろめきながら出て来たので、

こんなに疲れている体を、暫くはまた休めていたいが、

突然どれ程意外な事に出合うまでも、男らしく心を持って、気を取り直すのが、

8915

後の役目で、また人皆の役目であろう。

### 闇の女

その厳めしさと美しさとを取り帰して、我々の前にお立<sup>たち</sup>になった、

あなたのお目を見ますると、何かお指図がありそうな。何のお指図か。さあ、仰やつて。

ヘレネ

お前達、無益な争に暇を潰した入<sup>いれあわ</sup>合せに、支度をおし。

王様のお申付なされた生贄を、急いで用意させておいで。

闇の女

鉢に五徳に鋭い鉞<sup>まさかり</sup>、洗う水も燻<sup>いぶ</sup>す火も、何もかも

御殿に用意してあります。何を生贄になさいます。

ヘレネ

それは王様が仰やらぬ。

闇の女

仰やいませんか。お笑止な。

ヘレネ

何をそう気の毒がるのか。

闇の女

その生贄はあなた様。

ヘレネ

そんならこの身か。

闇の女

それとこの女子達。  
おなご

合唱の群

まあ、どうしよう。

闇の女

鉞でお切られなさるのです。  
8925

ヘレネ

気味の悪い。もしやそうかと思っていた。

闇の女

どうも致<sup>いたしかた</sup>方がございますまい。

合唱の群

まあ。そしてわたくし共は。

闇の女

御主人は上品なお死しにをなさる。

だがお前方はあの屋根の搏風はふを支えた梁うつはりに、  
鵲もちに著いた鵲つぐみのように、並べて吊るされるのだ。

（ヘレネと合唱の群とは、兼て工夫せられたる、立派なる排列をなし、驚き呆れる  
様にて立ちゐる。）

### 闇の女

幽霊共。もと素わが物でもない 白はくちゆう 昼に、別れると云うに  
驚いて、木偶でくのように凝り固まって立つていおる。

8930

人間もお前方と同じ幽霊だが、美しい日の光に、  
すなおには暇乞をしともながる。それでも誰一人引き受けて  
頼んで最期を緩めて遣り、救つて遣るものはない。

人間は皆それを知っている。そのくせ覚悟の好いのは少い。  
兎に角お前方は助からぬ。どりや、為事しごとに掛かうか。

8935

（フォルキアデス手を打ち鳴らす。それを合図に、戸口に覆面したる侏儒等現れ、  
以下のフォルキアデスの命令を、一々即時に執行す。）

お前達、陰気な、円まるまっちい慌あわて者等奴。こつちへ  
 転ころがつて来い。腹さんあはざ荒あらすことが出来るのだ。  
 金きんの角つの附つきの贅おきづの置くえ卓くえを、場所に据えて置け。  
 銀ぎんの台ふちの縁ふちに、光るように鉄を置け。

8940

気味の悪い黒血けがれの汚けがれを洗うのだから、  
 水すい瓶べいを一ぱいにして置け。どうせ直すくに  
 首と胴とは離れるのだが、兎に角立派くろに括くろんで、  
 葬くわつてだけは貰もらうはずの生贄なま殿だが、  
 お后はお后らしく膝つをお衝つきになるように、  
 この五味の上へ、立派に毛氈けを布ふいて置け。

8945

### 先導の女

お后様は物思に沈んで、片脇に立ったておいでになる。  
 女中達は刈きられた牧の草のように萎しれている。  
 女中仲間の年上の、神聖な義務ですから、  
 大おお婆おあさん、わたくしがお前に物を言いましよう。

8950

この連中は向う見ずに、お前を見損つて逆つたが、お前は賢くて、経験もありだし、好意も持つてお出のようだ。どうにか助かる道があるなら言つて聞せて下さいな。

### 闇の女

それは言うのは優しいよ。御自分がお助かりなされ、  
附物つきもののお前方も助かるのは、お後の思召次第だ。  
御決心が、火急な御決心がなくてはならない。

### 合唱の群

糸を繰るパルチエエの中の一番貴いあなた、一番賢いうらないおんな占女シビルレのあなた。  
金の剪刀はさみの股をすぼめて持つていて下さい。そして救すくいの日を知らせて下さい。  
踊の時になってから跳ねて、その跡で可哀い  
人の傍で休息したい、わたくし共の手足が、  
もう気味悪く、ぶらぶら吊るし上げられて、浮いているように見えますから。

### ヘレネ

あれ等には、まあ、臆病がらせてお置おき。わたくしは悲しくはあるがこわくはない。



それでも助かる道があるとお云<sup>い</sup>なら、それは嬉しく思<sup>い</sup>つてそうしましょう。

賢い、眼界の広い人には、随分度々不可能だと

思われる事も可能になるものだ。さあ、それをお言<sup>い</sup>い。

### 合唱の群

さあ、仰やい。早く仰やい。飛んだ頸飾で、この頸に

巻き付きそうに威している、厭な、気味の悪い弥を、

どうしたら れられましょう。あらゆる神様達の中の

貴い母神様、レア様が、不便<sup>ふびん</sup>がつて下さらぬと、その弥に

掛かる時の事が、もう息が切れ、息が窒<sup>ふさ</sup>がるように、早くから感じられています。

8970

### 闇の女

話の長い筋道を、黙って聞いているだけの我慢が、

お前方、お出来かい。色々なわけがあるからね。

### 合唱の群

我慢が出来ますとも。聞く間は命があります。

### 闇の女

8965

一体誰でも内にいて、宝の番をしたり、御殿の壁の割目を繕ったり、雨の漏らぬように屋根を直したりしているものには、生涯運が向いて来る。それと違って家の閨の神聖な一筋を、軽はずみに馬鹿にして、うかうかとした足あしつき附で、踏み越えて出て行ったものは、帰って来た時、元の場所がなくなつてはいないでも、何もかも変つているか、事に依つたら、こわれているのを見るでしょう。

ヘレネ

なぜお前そんな知れ切つている言いいぐさ草をお言いいだい。話をおしのはずじやないか。喧嘩の種をお蔭まきでない。

闇の女

事実の話をするのです。非難などはしません。メネラス王は海賊の業わざをして、港から港へと、島や岸辺をどこでも戦つて行かれる。そして

8975

8980

8985

持つて歸られた宝は、御殿の中に寝かしてある。

イリオスの攻撃には長の十年も費された。

凱旋の道中は何年掛かったやら、わたしも知らぬ。兎に角

現にチンダレオスのこの御殿の場所は

どうなっていると思われる。それに周囲まわりの御領分は。

ヘレネ

さてもさてもお前は悪口が癖になつて、

小言でなくては口が利けなくなっているのかえ。

闇の女

葦の茂つた岸を洗つて、放飼はなしがいにしてある鵠を

浮ばせて、広々とここの谷合を流れている、あの

オイロタス川が早瀬になつて落ちる

タイゲトスの山を背に負つて、スパルタの背後を

北へ登つて行く、この谷山には久しく住む人も

なかつたのに、キムメリオイの闇から出て来て、

谷の奥深く、こっそり徙うつつて来た、大胆な種族があつて、攀よじ登られぬ、堅固な砦を築き上げ、その界隈の土地をも民をも、勝手に虐しえたげている。

ヘレネ

好くそんな事が出来たものね。不思議なようだが。

闇の女

それには時が掛かったのです。二十年位前からでしょう。

ヘレネ

ひとりひとりの頭かしらを戴かいているかえ。賊の仲間はいいかえ。

闇の女

賊ではありません。しかし頭かしらは一人いる。わたしの所へも遣つては来たが、悪口は言いたくない。何でも取れば取られるのに、自由な贈おくりもの物を受けるので、課税ではないと云つて、少し取つて歸つて行つた。

ヘレネ

どんな男かえ。

闇の女

悪くはありません。わたしには

9010

気に入った。捌<sup>さば</sup>けた臆面なしで、グレシアなどに類のない、教育のある、物分かりの好<sup>い</sup>い男だ。人はあの種族を野蛮だと云うが、中で誰一人残酷な事をしたとは思われぬ。イリオス攻撃の時には、

9015

こっちの英雄達も大ぶ人肉を食ったではないか。わたしはあの男の大人物な処<sup>たのみ</sup>に目を附ける。頼<sup>たのみ</sup>にしても好さそうだ。それに砦<sup>しほ</sup>が立派だ。御自分の目でお見なさるが好<sup>い</sup>い。あなた方の御先祖が

ただ何と云う事もなく、一つ目のキクロオプスの為<sup>しごと</sup>事のように、自然<sup>しぜん</sup>石を直<sup>すぐ</sup>に自然石の上に

9020

倒し掛けて、積み上げた石垣とは違う。あつちでは何もかも鉛直に、水平に、規則正しく遣つてある。

外から見なさるが好い。鋼鉄<sup>はがね</sup>を磨いたように平に、  
接目<sup>つぎめ</sup>が合つて、がっしりと、天に聳えている。

登ろうと云つても、その登ろうと云う考からして

滑り落ちる。中には大きな御殿の間取<sup>まどり</sup>がしてあつて、

あらゆる種類の、あらゆる用に立つ建物が

それを取り巻いている。大小の柱、大小の迫持<sup>せりもち</sup>、出窓や

出入の廊下が見える。それに紋が所々に

附いている。

### 合唱の群

紋とは。

### 闇の女

お前方も見ただが、アイアスの

楯の上にも巻き付き合つた蛇が附いていた。

テエバイを囲んだ七人も、一人々々その楯に

意味の深い形<sup>かた</sup>を附けていた。夜<sup>よる</sup>の空に照る

9025

9030

月や星もあつた。女神もあつた。軍人も、梯はしごや、刀や、  
 松たいまつ明や、その外平和な都を意地悪く侵そうとして、

9035

威しに使う種々の物を、形かたにして附けていた。

わたしの話す勇士の群も、先祖から伝わった、

そう云う紋を、美しく彩つて附けているのだ。

獅子や、鷲や、鳥の爪くちばしだの、嘴くちばしだの、その外花も、

鳥の羽も、孔雀の尾も、種々の獣の角もある。

9040

青、赤、黒や、金、銀の筋を引いたのも見られる。

世界程ある、際限もなく広い座敷々々に、

そう云う紋の附いた楯が沢山並べて懸けてある。

お前方には好い踊場だ。

合唱の群

そして踊る殿方は。

闇の女

この上もないのがある。金きんぱつ髪ぱつの若々しい男の群だ。

9045

皆青春の薫がする。土地の人ではお后に余り近く寄った時、  
あのパリスだけその薫がした。

ヘレネ

お前は柄がらにない事を

言い出したね。そして詰まりどうしようと云うの。

闇の女

それはあなたのお詞次第です。真面目にはつきり  
好いと仰やい。その砦つれにお連申します。

合唱の群

どうぞ

好いと仰やつて、皆を御一しよにお助下たすけさいまし。

ヘレネ

そう。あのメネラス王がわたくしの体に害を

お加くわえなさる程、残忍でおいでなさるとは思われぬが。

闇の女



あの後家ごけのあなたに、強情おもいに思を掛けて、とうとう望を遂げたデIFOボスに、奮闘して死んだ

9055

パリスの同胞はらからに、類のない体刑を加えたのを、もうお忘わすれなされたか。鼻や耳を殺ぎ、その上にも創きずを附けられた。目も当てられぬ残虐をせられた。

ヘレネ

それは男にせられたのだ。わたくしゆえに。

闇の女

その男ゆえ、あなたにも同じ事をなさるでしょう。美人は共有にはならぬ。それを専有していた人は、誰ともあいにせぬように、寧打ち碎いてしまう。

9060

(遠くより喇叭うっぱ聞ゆ。合唱の群震慄す。)

あの喇叭の響が、耳をも臓腑をも、引き裂くと同じように、昔し持っていて、それを無くして、今持っていていぬ物を、永く忘れぬ男の胸には、嫉妬がしつかりと

9065

爪を打ち込んで放さぬものだ。

合唱の群

あれ。あの角かくの声をお聞ききでないか。打物うちものの光をお見でないか。

闇の女

王様いつでもお著なされい。相違なく何事もわたしが好んで申し上げる。

合唱の群

そしてわたし達は。

闇の女

分かり切っている。お後の死は目の前に見えている。

お前方の死もその中に含まれている。いや。どうもお前方の助かりようはない。

(間。)

ヘレネ

あの、思い切つて差当り、わたくしのせねばならぬ

事を考えた。お前は仇なす禍津まがつひ日だ。それは好く

分かっている。さいわい福をも禍に転じまいものではない。

だけれどその砦へだけはお前に附いて行こう。

その外は心得ている。胸の奥に、ひそやかに后が

隠している事は、誰にも分からせずに置く

事としよう。さあ、婆々、案内をおし。

### 合唱の群

まあ、どんなにか喜んで、足早に

わたくし共はまいりましょう。

死をば背後<sup>うしろ</sup>に、

そば立つ砦の

越すこと出来ぬ

牆<sup>かき</sup>をば前に。

末には遂に

恥知らずの詐<sup>いつわり</sup>の謀に落されたが、

一度はお后様をお護<sup>まも</sup>申した、あのイリオスの

城のように、その砦がまたお護申してくれば好<sup>よ</sup>い。

9075

9080

9085

(霧ひろごりて、遠景を罩め、前景をも便宜に掩ふ。)

おや、おや、まあ。

皆さん。振り返つて御覧なさい。

今まで好い天気だったじゃありませんか。

それにオイロタ川の尊い流から、

帯のように霧がゆらめき升つて来ます。

葦の緑で飾られた、

美しい岸がもう見えないのね。

楽しいに睦じく泳いでいた、

優しいように、傲つたように、自由に、

軽げに滑っていた、あの鵠も、

まあ、もうわたしの目に見えなくなつたわ。

でも、おや、

あれの鳴くのが、わたしには聞えてよ。

9090

9095

9100

人が死を知らせるのだと云う、  
咳<sup>しわが</sup>枯れた声で遠くに鳴くのが。  
約束<sup>どおり</sup>通命の助かる福<sup>さいわい</sup>の代に、

滅びるのだと云うことを、とうとう

あれがわたし達に知らせるのだから好いが。

その鵠に似た、長い、美しい、白い頸をした

わたし達と一しよに、あの鵠のお種<sup>たね</sup>の

お后様もお滅びなさるのだと云うことを。

まあ、気になること、気になること。

もう周囲<sup>まわり</sup>の物が

残らず霧に包まれてしまった。

お互に顔も見えないじゃないか。

何をしているのでしょうか。歩いているのでしょうか。

ちよこちよこ歩きに、地の上を

浮いて走っているようですね。

9115

なんにも見えなくって。亡者<sup>もうじゃ</sup>の案内をなさる

ヘルメス様が先に立っておいでなさりはしないの。

厭<sup>よ</sup>な、夜の灰色に明ける、手に障らない物の

一ぱいいる、籠み合っていて、いつまでも空洞<sup>うつろ</sup>な

地獄へ連れ戻そうと、厳<sup>きび</sup>しくお指図なさる

金<sup>きん</sup>のお杖が光ってはいなくって。

9120

おや、急に暗くなったわ。濃い鼠色な、壁のように茶色な

霧が光を見せずに立って逃げて、楽<sup>らく</sup>に前の見える目に、石垣の立っているのが見えるわ。

中庭だろうか。深い濠<sup>ほり</sup>の中だろうか。兎に角

気味の悪い所だわ。皆さん。わたし達は捕虜になつてよ。

9125

これまでにない、ひどい捕虜になつてよ。

（中世式の空想的なる、複雑なる建物に囲<sup>い</sup>繞<sup>りょう</sup>せられたる、砦の中庭。）

先導の女

氣早で痴な、ほんに女子染みた女子達だね。

目先の事に支配せられ、幸不幸や、天氣模様にもてあそ

弄ばれ、幸をも不為合をも、落ち著いてこらえる

事が出来ぬ。仲間同士でお互に、はしたなく

抗<sup>あらが</sup>い合い、邪魔をし合う。やれ嬉しい、やれ

悲しいと、同じ調子に泣いては笑う。まあ、お黙<sup>だまり</sup>。

お后様がこの場合に、氣高いお心から、御自身のため、

お前さん方のために、どうお極<sup>きめ</sup>下さるか、それをお聞<sup>きき</sup>。

ヘレネ

こりや。占<sup>うらない</sup>女<sup>おんな</sup>ピトニツサ。どこにおいでだ。名はなんと

云うか知らぬが、暗いこの砦の穴の中から出ておいで。

もしや、その不思議な首領に、この身の来たのを告げて、

優しく迎える用意をさせに行つたのなら難<sup>ありがた</sup>有い。

そのお方<sup>かた</sup>の所へ、早くわたくしを連れておいで。

わたくしはもう休みたい。流離<sup>さすらい</sup>の果<sup>はて</sup>が見たい。

## 先導の女

お后様。どこを御覧になつても駄目でございます。  
厭<sup>いや</sup>な姿が消えました。別に歩いたとも思わずに、

どうした事か、霧の中からここへ来ました、その霧の  
中にでも留<sup>と</sup>まりましたか。それともあなたを

丁寧<sup>むかえ</sup>にお迎<sup>あるじ</sup>申させようと、主人を尋ねに参つて、

多くの物をただ一つに、不思議に合せたような砦<sup>めいろ</sup>の

迷路に迷つておりますのか。いや。あれを御覧

遊ばせ。あちらの上<sup>うえ</sup>の方に、廊下にも、窓にも門<sup>かど</sup>にも、

大勢の家隸<sup>けらい</sup>共が心得貌にすばしこく、あちこちと

歩き廻つております。鄭重にお客様を

歡迎<sup>むかひ</sup>いたす徴<sup>しるし</sup>ではございますまいか。

## 合唱の群

ああ。胸<sup>むね</sup>が開けたわ。あれ、あちらを御覧。

年の若い、可哀らしい男の群が、行儀好く、



徐<sup>しず</sup>かな歩<sup>あるきつ</sup>附<sup>お</sup>きで、立派な行列を作つて、降りて  
来ますのね。どうしたのでしょうか。あの若者の立派な

9155

群は、誰の指図で、こんなに早くお支度をして、  
行列を作つて出て来ましたのでしょうか。何が一番  
感心だと申しましょうか。可哀らしい足<sup>あしどり</sup>取<sup>と</sup>りか。

白い額を囲んでいる、波を打った髪のか。

丁度桃のように赤くつて、そして柔い毛の

9160

生えている、あの両方の頬つぺたか。あれに

食い附いて遣りたいわ。だが、丁度そんな事をして、

言うのも厭なこと、口が一ぱい灰になったのに

懲<sup>おこ</sup>りているから、気味が悪くて出来ないわ。

だが一番美しいのが

9165

前へ出て来ますね。

持っているのはなんでしょう。

御座の段に、  
おまし  
氈にお茵、  
かも  
しとね

戸張やら、

天蓋のような飾やら。

あれ、もうお后様が迎えられて、美しい

お茵にお就遊つきばしたので、

お頭かしらの上に

雲の飾をお戴いたぎになつたように

天蓋がゆらゆらしている。

さあ、お進すすみ。

一段一段に

真面目に並ぶのですよ。

お立派、お立派、も一つお立派ね。

こんな歓迎なら、祝福しなくては。

（合唱の群の詞ことばにて言ふ事共、次第に施行せらる。）

9170

9175

9180

児童と青年と、長き列をなして降りたる後、ファウスト中世騎士の宮中服を著け、階段の上に現れ、品好く徐に歩み降る。

### 先導の女

（念を入れてファウストを見る。）

あの感心してお上<sup>あげ</sup>申して好い<sup>よ</sup>お姿、氣高い立居<sup>たちい</sup>、

愛想の好い<sup>よ</sup>そぶりを、昔から例<sup>ためし</sup>のあるように、

神様達があのお方<sup>かた</sup>に、仮にちよいとの間お授<sup>ま さづけ</sup>

なされたのでないなら、男同士の戦争も、美しい

女を相手の小迫<sup>こぜりあい</sup>合も、あのお方のなさる事が

何一つ成功しないと云うことはありますまい。

やはり誉められておいでなさる殿方を、この目で沢山

見ましたが、どの方よりもこのお方がお立派です。

徐かな、真面目な、十分敬意をお表しなされた

足取<sup>あしどり</sup>でおいでになる。お后様。あちらへお向遊<sup>むぎ</sup>ばせ。

### ファウスト

(縛めたる男を一人随へて歩み寄る。)

この場合にふさわしい、鄭重な御挨拶、尊敬を尽した  
歓迎の代に、自分の職責を忘れて、主人の義務までを  
果させずにしまいました、この不埒な家隸を

鎖に繋いで、あなたの前へ引いて来ました。

さあ、下<sup>した</sup>にいて、この貴婦人に、犯した罪の 申<sup>もうしたて</sup>立<sup>たて</sup>をしろ。

奥方。これは珍らしい、遠目の利く男ですから、  
高い望楼の上で、方々<sup>ほうぼう</sup>を見廻させて置きました。

そこにいて、高い空<sup>そら</sup>をも、広い土地をも、鋭く

目守<sup>まも</sup>つていて、そこ、ここで何事があるとか、

周囲<sup>まわり</sup>の丘から、この堅固な砦のある谷へ掛けて、

どう云うものが通るとか云うことを、それが

牧畜の群であろうが、また軍隊であろうが、

見逃してはならぬのです。そして人民なら

保護し、敵兵なら打ち散らします。それが

なんと云う懈おこたでしょう。あなたが越こになる。

それをこの男は知らずにいる。これ程の貴い

お客を、義務として鄭重にお迎申むかえすことが、

出来なくなる。横著で一命を失った男ですから、

もう疾とつくに屍しかばねを我血の中に横えていて好い

奴やつです。しかしあなたお一人の思召ひとりで、お罰し

なさるとも、お赦ゆるしなさるともして戴たまきましよう。

へレネ

どうもお察し申す所が、わたくしをお験たまなさる

思召かと存じますが、指図をさせる、裁判を

させると仰やるのは、まあ大した権力をこの身に

お貸なさいますことね。さようなら裁判官の

第一の務つとめゆえ、被告の申立を聞きましょう。さあ、お言いい。

望楼守もりリンケウス

膝を衝かせて下さい。拝ませて下さい。

死なせて下さい。生きさせて下さい。  
神のお授けなされたこの貴婦人に、  
わたくしはもう身を委ねています。

9220

朝たのしみの楽を待つて、日の歩あゆみはどうかと、  
東そらの空を見えていますと、

不思議にも突然

日が南のぼから升のぼつて来ました。

9225

谷を見ず、岡を見ず、  
天地の遠い境を見ず、  
わたくしは無二のお姿を拝もうと、  
その方ばかり見ていました。

リンクスと云う獣が高い木の上にいるような

9230

眼力をわたくしは授かっていたのに、  
今は深い眠の暗い夢を醒まして見ようと  
骨を折るような気がして来ました。

どうにも見当が附かなくなりました。

藁<sup>いらか</sup>か。塔か。鎖した門か。

霧が立つ。霧が消える。

こんな女神<sup>めがみ</sup>がお出<sup>で</sup>になる。

目と胸とをお姿<sup>ほう</sup>の方へ向けて、

優しい光を吸い込みました。

目映<sup>まばゆ</sup>いお美しさで

この目をすっかりおくらましました。

わたくしは番人<sup>つとめ</sup>の務を忘れました。

吹かねばならぬ角の笛をすっかり忘れしました。  
思召通に、わたくしを殺そうとなさいまし。  
お美しさがあらゆる怒をなだめてしまいます。

ヘレネ

わたくしの身から起った罪を、わたくしが罰することは  
出来ません。まあ、どうしよう。あらゆる男の心を  
惑わして、その身をも、どんな大切な物をも護つて  
いられぬようにするとは、なんと云う残酷な運が

わたくしに付き纏まとっていることだろう。神や、半神や、  
英雄や、悪魔までが、今勾引かどわかすかと思えば、また騙かたして  
墮落させ、果し合い、あちこちへ流離さすらわせ、迷まよの衢いちまたを  
どこことなく引き廻して歩かせ、一度ならず、

二度も、三度も、四度までも世を乱し、禍の数々を  
起させるようになるとは。どうぞその善い方かたを  
あちらへ連れて行って、解放してお遣下やりさい。

9245

9250

9255



神に欺かれた人に恥辱は与えられませぬ。

ファウスト

わたくしはこの場で、善くお射中<sup>いあて</sup>になる方<sup>かた</sup>をお見上<sup>みあげ</sup>

申すと同時に、射中てられたものを見て、驚く外

ありませぬ。弦を離れた矢がこの男を傷けた、その弓を

目<sup>ま</sup>のあたりに見ます。続々<sup>つぎつぎ</sup>に放たれる矢は悉く<sup>ことごと</sup>

わたくしに中ります。この砦<sup>まじり</sup>や間取一面に、羽を

著けた矢が風を切つて飛んでいます。これでは

どうなるでしょう。どんな忠義な家隸をも、あなたが

突然叛かせておしまいになる。城は危くなります。

どうやら麾下<sup>きか</sup>の軍隊が、お勝<sup>かち</sup>になつてお負<sup>まけ</sup>に

なることのないあなたに、もう服従しそうです。

これではわたくしは総ての物を捧げて、迷つた

臣下を引き連れて、あなたに降る外ありません。

この砦<sup>は</sup>にお這入<sup>はいり</sup>になるや否や、城主の席も総ての

物もお手にお入<sup>いれ</sup>になったあなたを、任意に、誠実に、おみ足の下に伏<sup>した</sup>して、主君と仰がせて下さいまし。

望楼守（手に箱を持ち、同じく箱を担<sup>ひ</sup>へる男等を随へて登場。）

お后様。また御前に戻つて参りました。一目お見<sup>ひとめ</sup>

下さるようにと、おねだり申した金持も、

あなたにお逢<sup>あい</sup>申すや否や、自分は同時に乞食の

貧<sup>とみ</sup>しさと、王侯の富とを得たと感ずるでしょう。

9275

わたくしは今までなんでしたか、そして今は

なんでしょう。何を思つて好いやら、して好いやら。

目がどれ程鋭くたつて、それがなんになりました。

御前からは、その稲妻も挑ね反されます。

9280

わたくし共は東から遣つて来ました。

それは西の国の災難でした。

その列の首は<sup>れつかしら</sup>その列の尾を知らぬ、  
長い、幅の広い民の<sup>たみ</sup>群でした。

先の一人は倒れても、二人目が踏み止<sup>と</sup>まる。

三人目の槍が役に立つ。

殺された千人は気に留めませむ。

一人々々百倍強くなっています。

押し合つて進んでまいりました。

その場所々々を我物にしてまいりました。

しかしきようわたくしが厳しい指図をする土地で、

あすは他人が盗<sup>ぬすみ</sup>をします。

わたくし共は見廻しました。忙しい見ようです。

一番美しい女を撈うものもある。

足の丈夫な牡牛を盗むものもある。

9295

馬は残らず取って来ました。

わたくしだけは、まだ人の見たことのない、

一番珍しい品物を捜しました。

外で人が持っているような物は、

わたくしは枯草同様に思いました。

9300

どんな囊の中も見え、

どんな箆たんすも透き通らせる鋭い目の

見る方へ附いて行って、

宝をわたくしは捜し当てました。

そして金を堆うずたかく手に入れました。

しかし一番美しいのが寶石です。

9305

あなたのお胸に青く照るには、  
中で緑柱玉が宜しゅうございましょう。

海の底から出た一滴の卵形の真珠を、

お耳とお口との間にゆら附かせましょう。

お頬ほおべにの紅にけおされる紅宝玉は

お気に召さぬかも知れません。

9310

そう云う稀な宝の限を、わたくしは

ここで御前へ持つて出ます。

幾度かの血ちなまぐさ腥い戦争えものの獲を

おみ足の下へ供えるのでございます。

9315

こんなに沢山箱の数を持ち出しましたが、  
鉄の箱はまだこれより多うございます。

あなたにお附<sup>つき</sup>申すことが出来るなら、  
お宝<sup>たからぐら</sup>庫を一ぱいにいたして上げます。

9320

あなたがお座にお就<sup>つき</sup>になったばかりで、  
智<sup>ち</sup>でも、富<sup>ふ</sup>でも、勢<sup>せい</sup>でも、  
類<sup>るい</sup>のないお姿の前へ、  
もう項<sup>うなじ</sup>を屈め、腰を曲げて参りますから。

9325

これは皆わたくしが我物にして、大事に護つていましたが、  
それが離れてお手許へ参ります。  
貴く、珍しく、結構な物だと存じましたのが、  
もうなんでもなくなつて見えまする。

これまで持っていた物が消え失せて、  
刈られて枯れた草のようになりました。

9330

どうぞ晴れやかなお目で一目御覧ひとめになつて、  
元の価のあるものになさつて下さいまし。

## ファウスト

それはお前が大胆に働いて儲けた重荷だが、  
そつちへ退のけろ。お叱しかりはあるまいが、お褒ほめは  
戴かれぬ。もうこの砦の懷にあるだけの物は、皆この  
お方かたの物だから、別に出して上げるには及ばぬ。

9335

あつちへ行つて、宝のあるだけを、順序好く  
積み上げて、ついに見られぬ奢おごりの優れた見物みものを  
拵えろ。蔵の円天井を晴れた空のように赫かがやかせて、  
生きていぬ物の生活の天国を造れ。そして  
お歩あるきだ出しなさる時、急いでお先さきに立つて、

9340

花模様の絨段を敷き続いで行つて、  
柔い床がおみ足に障るように、この神々こうこうしい  
お方かたがまぶしくお思おもなさらぬ程度で、しかも

此上のない耀かがやきがお目に触れるようにしてくれ。

9345

## 望楼守

殿様のお言附いいつけになったのはやさしい為事しごとだ。

家隸がする段になると、遊半分に出来る。

あのお美しい方かたの御威勢で

性命財産が支配せられているのだから。

もう全軍がおとなしくなつて、

9350

刃が皆鈍つて来た。

あのお美しい姿の前では、

日の光も濁つて冷えて来る。

目で拝むものが豊かなので、その外の物は

何もかも虚からになつて、無くなつてしまう。

9355

## (退場。)

ヘレネ (ファウストに。)

わたくしお話申はなししたい事がありますから、この傍へ



おいで下さいまし。あいた場所がお待<sup>まち</sup>申しています。  
そうして下さると、わたくしの地位も固まりましょう。

## ファウスト

先<sup>ひざまず</sup>ず跪<sup>ひざまず</sup>かせて、身をお委<sup>ゆだね</sup>申す心持を述べるのを  
お許<sup>ゆるし</sup>下さい。そしてお傍<sup>ひきあげ</sup>へお引上<sup>ひきあげ</sup>なさる

そのお手に、接吻をおさせ下さい。わたくしを  
境界の知れぬお国の共治者としてお認<sup>みとめ</sup>下さい。

またあなたのために、崇拜者と従者と番人とを  
一人で兼ねているものだと思<sup>おも</sup>下さい。

## ヘレネ

わたくしは色々な不思議を見聞<sup>みきき</sup>いたして、驚いて  
いますのでございます。そして伺<sup>うかが</sup>いたい事が沢山  
ございます。それはそうと、只今の男の詞が

奇妙で、そして優しく聞えるのはなぜでございましょう。  
それを最初にお教<sup>おしえ</sup>なすって下さいまし。

声と声とが譲り合つて、詞が一つ耳に入ると、  
次に外の詞が来て、先のをいたわつていましたか。

ファウスト

臣下の物の言様があなたのお気に入るようでは、  
歌をお聞になつたら、きつとお喜なさるでしょう。  
耳をも心をも底から樂ませる歌ですよ。

しかし直に稽古して御覧なさるが一番確かです。  
掛合の詞があれを誘い出します。呼び出します。

ヘレネ

あんなに美しく話されましょう、どうしたら。

ファウスト

やさしい事です。ただ出れば好い、心から。

そしてもし胸に係恋が溢れると、  
顧みて問います、樂を誰か

ヘレネ

共に享けると。

ファウスト

そこで心の見る所は、過去未来の縁を絶ち、  
現在ばかりがなんでしょう。

ヘレネ

それが世の幸。

ファウスト

さよう。宝です。利益です。財産、手形です。さて  
奥書は誰がしましょう。

ヘレネ

それはこの我手。

合唱の群

皆の主に奥方様がお優しくなさりようとも、  
誰が御無理と存じましょう。

皆さん打ち明けて仰やい。

あのイリオスが恥かしい滅びようをして、  
わたくし共が恐れ歎いて、迷路を

辿りはじめてから、度々なつて

いたように、身は今も捕虜になつています。

9390

男に可哀がられ附けている女と云うものは、

選<sup>えりきらい</sup>嫌はしませんが、

男を味つて見る目がありますわ。

ですから、金色<sup>きんいろ</sup>の髪<sup>ちづれがみ</sup>をした牧童にでも、

どうかして遣つて来た、黒い、剛<sup>こわ</sup>い毛の

ファウヌスにでも、時と場合で、

ふつくりした、こつちの手足を

すっかり自由にさせて遣るものですわ。

9400

9395

お二人が段々摩り寄っていらつしやつて、  
軟かい物を詰めた、お立派な

お椅子の上で、

もうお肩とお肩、お膝とお膝が障るように、

互におもたれ掛かりなすつて、

お手をお絡からみあい合あなすつて、お体をゆすつていらつしやる。

どんな内証たのしみのお樂をも、

お上はお控かみひかえなさらずに、

みんなの目の前で

思い切つてお見せ附け遊ばすのね。

ヘレネ

9410

わたくしは自分がひどく遠くにいるようにも、ひどく近くにいるようにも

思われますが、それでも「ここにいます、ここに」と心しんから申したいのでございますのね。

ファウスト

わたくしは息が出来ない位で、体は慄えて、詞は支つかえます。

9405

時も所も消えてしまつて、夢ではないかと思つています。

ヘレネ

わたくしは色香が<sup>すが</sup>闌れたようにも思われ、また元の<sup>おとめ</sup>処女に戻つたようにも思われて、  
自分が糸で、知らないあなたと、離れぬように織り交ぜられたような気がしますわ。  
9415

ファウスト

またとないこの出逢<sup>であい</sup>を、そう穿<sup>うが</sup>つてお考えでない。

存在は義務だ。それが刹那<sup>あいだ</sup>の間でも。

闇の女

(劇<sup>はげ</sup>しき態度にて登場。)

恋のいろはのお稽古を、たんとなさるが好<sup>よ</sup>い。

ふざけながら、恋の理窟<sup>なま</sup>を御研究なさるが好<sup>よ</sup>い。

理窟<sup>こ</sup>を捏<sup>こ</sup>ねながら、懶<sup>なま</sup>けて恋をお為<sup>しつづ</sup>続けなさるが好<sup>よ</sup>い。

だがもうそんな暇はありませんよ。

天気模様の変つたのに気が附かぬのですか。

せめてあの喇叭<sup>らっぱ</sup>の音だけでも聞くが好<sup>い</sup>い。

災難はもう遠くはない。

9425

メネラス王が大軍を起して、

お前方を責めに來るのだ。

手痛い軍の支度をするが好い。

その女を手に入れた報には、

今に勝ち誇った兵卒共に取巻かれて、

9430

あのデイフォボスのように切りさいなまれる。

廉物やすもののおきやん達が最初に吊るし上げられて、

跡にはすぐにその女を、贅卓にえづくえの前で

研ぎ澄ました鉞まさかりが待ち受けているのだ。

ファウスト

不遠慮な邪魔が、うるさく押し掛けて來おる。

9435

非常な事にでも、無意味な慌しさは嫌だ。

どんな美しい使者をでも、悪い便たよりみにくは醜く見せる。

それにお前は一番醜い女で、悪い便ばかりを好んで

持つて来おる。しかしこん度はお前無駄をした。

お前は空の息で空気をゆするが好い。今なんの危険があろう。あつてもそれは徒な威しだ。

9440

(信号喇叭、塔の上にての爆音、種々の金笛吹奏、軍樂、大軍の行進通過。)

いや。すぐにここへ、好く一致した勇士の群を

呼び集めて、あなたに見せます。

婦人を堅固に保護することの出来る男でなくては、

婦人に愛して貰う権利はない。

9445

お前方、北方の青春の花。

お前方、東方の華やかな武力。

お前方に勝利を得させるに違ない、

久しく抑えた、静かな怒を持つている人々。

これまで国々を破った、

9450



鋼鉄に身を堅めて、鋼鉄の中を抜けて来た人々。

お前方が歩き出すと、大地が震う。

お前方が歩いて行つた跡には轟とどろきが残る。

ピロスから己達は上陸した。

老将ネストルはもういなかった。

拘束するに及ばぬこの軍ぐんが

幾多の小王国を打ち破つて通つた。

さあ、すぐにこの城壁の下から、

メネラス王を海へ押し戻せ。

海上をさまよい歩いて、覗ねらつたり盗んだりするが好い。

それが王の好な業すきわざだ、天職だ。

隊長達。己がお前方に会釈する。

お前方を指揮するのはスパルタの後だ。  
山や谷を略取して后のお前に献じてくれ。  
国内の所得はお前方の所得にする。

9465

ゲルマアネのやりつかい槍使。

お前は堡塁によ拠って、コリントスの湾を守れ。  
百の谷があると云うアハイアは、  
ゴオテの勇士、お前に防がせる。

フランケの自由な軍ぐんはエリスへ進め。

9470

ザツクセの土着の兵にメツセネは任せる。  
ほくほう北方のノルマネは海上を掃蕩して、  
アルゴリスの港を手広に経営しろ。

さて各おのおのそこに土着したら、外へ向けて

力を展べ威を赫かすことが出来よう。

9475

しかしスパルタは後の年来の居城だから、  
お前方の領地の上に据えて置く。

何不足のない国々で、各福<sup>おのおの</sup>を受けるのを、

后は上<sup>かみ</sup>で御覧になる。

許可や権利や光榮を、安じてお前方は

9480

后のお膝下へ受けに出ることが出来るのだ。

(ファウスト座を降る。諸将圍繞して、詳細なる指揮命令を受く。)

### 合唱の群

一番美しいものを手にお入<sup>いれ</sup>なさる方は、

何より武勇<sup>ぶきゆう</sup>を先<sup>さき</sup>になすつて、氣を利かせて

兵器を調<sup>おき</sup>えてお置<sup>おき</sup>なさるが好<sup>い</sup>い。

この世で一番優れたものを、いかにも旨く

取り入<sup>いれ</sup>つて手にお入<sup>いれ</sup>なすつたでしょうが、

9485

落ち著いてそれを持つておいでなさることは出来ません。  
横著者がずるずると諂<sup>へつら</sup>い寄ることもあり、  
盗人が大胆に奪つて行くこともあります。  
その御用心をなさらなくてはなりません。

9490

ちよつと合図をなさると、強い人達が  
寄つて来てお指図を聴くように、

こんなに勇ましく、賢く、人を手懐けて  
お置<sup>おき</sup>になったから、外の方々よりこの殿様は  
優<sup>すぐ</sup>れていらつしやると存じて、お誉<sup>ほめ</sup>申します。  
皆さんはお指図通<sup>どおり</sup>お働<sup>はたら</sup>なさるでしょう。

9495

そうしたら、御自分のお為にもなつて、  
殿様も御満足に思召しましょう。  
御名誉はどちらにもおありになりましょう。

なぜと申しますと、こんなお強い持主の物を  
誰が横取をいたすことが出来ましょう。

お后はあなたの物です。そういたして上げたく存じます。

わたくし共と一しよに、内は堅固な城壁で守り、

外は強い軍隊で護つて下さるから、

猶なおよ更さらいつまでもそうしてお上あげ申したいのです。

ファウスト

誰にも豊かな国を遣るのだから、

この人々に約束した褒美は

立派なものだ。もうそれぞれ立たせよう。

己達は真ん中にいて守っている。

エウロッパの山脈の端に、狭い丘陵の

帯で繋がっている半島よ。あの人々は競つて、

八方から波の打ち寄せる所で、

9500

9505

9510

お前を守っていてくれるのだ。

早くから后を仰ぎ見ていたこの国は、  
あらゆる国を照らす日の下で、

9515

今後の領地になって、どの人種  
のいる所も、永遠に幸福を享けるが好い。

エウロタ川の葦の戦そよぎの中で、

卵の殻を破わつて、光りながら出て来て、  
貴い母や兄弟を目映まばゆがらせた昔の事を、  
后は思われるが好い。

9520

あなたの方にばかり向いて、この国は  
栄の限を見せています。

世界中があなたの物になっても、

取り分けて本国をお愛しなさい。

9525

山々の棘々とげとげしい巔いただきが、まだ日の冷たい矢を

背に受けてこらえていても、

もう岩々がどこやら緑掛かった色を見せて、

山羊が意地きたなく貧しい餌を っている。

泉は涌く。小川は集まって流れ落ちる。

9530

もう谷や半腹や平地が青くなつて来る。

地面が断続して、百の岡をなしている上を、

叢雲が広がって渡るのを御覧なさい。

角のある牛が分かれ分かれに、足取あしどりを用心して

断崖をさして歩いて行く。

しかし岩壁が穹窿きゅうりゅうになつて、百の洞を作っているから、

9535

どの獣の宿をもすることが出来る。

それをあそこでパンの神が護っている。

そして茂った谷の濡れて爽かな所に、

生せいの少女のナペアイが住んでいる。また狭く並んだ木々が  
高みにあこがれて枝を上うえへ伸ばしている。

9540

ここは古い林だ。櫟の木は強く立って、

剛情らしく枝と枝とを交えている。

甘い汁を孕んだ、優しい槭もみじはすらりと立って、

枝葉の重荷を弄んでいる。

9545

静かな木蔭には、母親らしく、

生なまぬる温ちちい乳が湧いて、人や羊の子の飲物になる。

平地の人の食料になる、熟した果も遠くはない。



そして切り込んだ木の幹からは蜜が滴る。

ここでは健康が遺伝する。

頬も脣も晴やかになる。

人が皆その居<sup>いどころ</sup>所々々で不死になる。

皆満足して健かでいる。

そこで優しい子が淨い日に育つて、

人の父たる力を得<sup>え</sup>る。

わたし共は見て驚いて、

いつまでも人か神かの問を決し兼ねる。

それだからアポルロンは牧者の姿でいた。

牧者の美しいのがあれに似ていた。

なぜと云うに、自然が淨い境を領していると、

9550

9555

9560

あらゆる世界と世界とが交感する。

（ヘレネの傍に坐す。）

こんな風にわたしは成功した、あなたも成功した。  
もう過去なんぞは背後へ投げ棄てましょう。  
第一の世界に属しているのは、あなたただだから、  
最高の神の生ませたものだとお感じなさい。

9565

堅固な砦があなたを閉じ籠めもしない。

スパルタに隣るアルカジアが、永遠の若さで、

楽の多い世を久しく送らせようと、  
たのしみ

わたし共二人を引き留めていもしない。

祝福のある土地に住むように誘われて、  
さそ

あなたは一番晴やかな運命の中に逃げ込まれた。

9570

王者の座がそのまま生きた草木くさきの家になる。  
アルカジアめく幸福を二人は享けましよう。

（場所全く一変す。並びたる数箇の岩室に倚よせ掛け、生きたる草木もて数軒の家を編み成せり。家は鎖されたり。周圍に岩石の断崖ありて、その辺まで緑の木立の蔭を成せるを見る。ファウストとヘレネとは見えず。合唱の群分かれくになりて、あたりに眠れり。）

### 闇の女

おなじども  
女子供がもうどの位寝ているか、わたしは知らぬ。

9575

わたしがはつきり目で見た事を、夢にでも見たか、  
それもわたしには分からぬ。どれ起して遣ろう。

小娘共びつくりするだろう。信ずることの出来る奇蹟の解決を、

やつとの事で見ようと思つて、

下したの方に据ほうわつて待つてゐる鬚男のお前方も同様だろう。

さあ、出ろ、出ろ。髪をゆすつて、

9580

目をはつきりさせろ。<sup>まばたき</sup>瞬なんぞしないで聴け。

合唱の群

さあ、<sup>はなし</sup>お話、お話。こんな岩なんぞ見ているのは退屈だから、

どんな不思議があつたか言つてお聞せ。

聞いても本当に出来ないような事を聞くのが一番<sup>すき</sup>好だわ。

闇の女

寐て起きて目をこすりこすり、もう退屈がるのか。

そんなら聴け。この洞、この岩屋、この庵には、田舎に隠れた

恋中の二人のように、殿様と奥様とが

かくまわれていなさるのだ。

合唱の群

あの、この中に。

闇の女

世間の<sup>つきあい</sup>附合を絶つてしまつて、わたし一人にそつと奉公させていなさる。

お傍で大事にしては下さつたのだが、ああした中の腹心に似合わしく、

わたしははずしているようにした。あちこち歩いて、薬の機能を知っているから、木の皮や根の苔などを採つて来る。その留守は差さしむかい向さ。

### 合唱の群

お前さんの話を聞くと、あそこの中に森や野原や川や湖水があつて、別な世界でも出来ているようだわ。飛んだ造つくりばなし話をするのね。

### 闇の女

お前方は分からないから、言つて聞せるが、あそこはまだ窮めたことのない深い所さ。奥には座敷が座敷に続き、庭が庭に続いている。それをある時、物を案じながら見て廻つた。

すると出し抜けに笑声がして、明座敷あきに訝響こたまを起していたのだ。

ふいとそつちを見ると、男の子が一人奥様の膝から殿様の膝へ飛び附いている。

それからまた逆に殿様から奥様へ飛び附く。甘やかす、ふざけさせる、たわいなく可哀がつて擲揄からかう、笑談に声を立てる、喜んで叫ぶ、それが交る交るだから、わたしはぼうつとした。羽のないジェニウスのような裸の子さ。ファウヌスに似ていて、

9600

9595

獣らしくはない。それが堅い床<sup>ゆか</sup>へ飛び降りると、床がそれを弾き返して、虚空に高く飛び上がらせる。二度三度と

弾き返しているうちに、その子の頭が高い円天井に

障るじゃないか。心配げに奥様がそう云うのさ。

「飛び上がるなら、何遍でも、勝手に飛び上がり。

だが、飛んで逃げるのじゃないよ。空を飛んで歩くことは止めて置くよ」と云うのさ。

殿様も傍から意見している。「お前をそんなに飛び上がらせる、その弾く力は地にあるのだ。

地に生れた神アンテウスのように、お前の足の親指の尖が地に障ると、

すぐにお前に力が附くのだ」と云っているのさ。

そんな風で、鞆<sup>まり</sup>が敲<sup>たた</sup>かれて飛ぶように、ここの岩の

並んでいる上を、こっちの岩角からあっちの岩角へと、あちこち飛び廻る。

そのうち出し抜けに荒々しい谷の穴へ落ちて見えなくなった。

もう駄目らしかったのさ。奥様は泣き出す。殿様は機嫌を取る。

わたしは気にしながら、肩をゆすぶっていたのさ。ところがその子がまたどんな様子をし

9605

9610

9615

て

出ただろう。その谷に宝でも埋まっているのか。

花模様の縞のある衣裳を立派に著て出て来た。

臂ひじからは総がぶらぶら垂れている。胸の辺へんには紐がひらひらしている。

手には金きんのリラを持っている。丸で小さいフォイボスの神のように、

9620

元気よく、谷の上に覗いている岩の角へ出ている。こっちは皆あつけに取られる。

奥様と殿様とは、嬉しさの余あまりに、交る交る抱だきつき附競くらをする。

無理はない。その子の頭の上の光りようと云つたらない。

金きんの飾が光るのか。非常に強い霊れいの力ほのおが、おになつて燃え立つのか。容易には分らない。

9625

そんな風で、まだ子供だのに、永遠な旋律が体の節々めづを循めぐっている、あらゆる美なるものの未来の

製作者だと云うことを、もう知らせて、その振を見せて立ち振舞っている。

今にお前方その様子を見たり聞いたりして、何もかも感心してしまうだろう。

### 合唱の群

クレタ生れの小母おばさん。

それをあなた奇蹟だと云うの。

9630

あなたこれまで教おしえになる詩なんぞを  
聞いたことがないのでしよう。

イオニアやヘルラスに、

ずっと昔の先祖の代からある、

神や英雄の沢山の話

9635

聞いたことがないのでしよう。

今頃出来る事は

なんでも皆

美しかった先祖の代の

悲しい名残ですわ。

9640

あのマヤの子の事を歌った、

真実よりも信じたい、

可哀らしい謠に比べると、



あなたの話はなんでもないわ。

9645

その子は可哀らしくて丈夫でも、  
やっと生れたばかりの赤さんなの。

それを蔭言の好な保姆さん達が

智慧のない空頼に、

綺麗な、軟かい毛織の襦袢にくるんで、

結構な上著を巻き付けていました。

9650

ところが、その横著赤さんが、

大事に押さえ付けていた、

紫の蟬脱の殻を、平気でその場に残して置いて、

まだどんな形にもなるような、

しかも弾力のある手足を、

もう横著に、可哀らしく、しつかりと

9655

抜き出しましたの。丁度あの育ち上がった蝶々が、  
窮屈な蛹さなぎの中から、すばやく羽を広げて  
脱け出して、遊半分、大胆に  
日の一ぱいにさしている、瀨氣こうきの中を  
飛び廻るようでしたの。

9660

そんな風に、この横著赤さんは  
ひどくすばやくて、盗坊や詐偽師や、  
その外あらゆる慾張る人間に、  
いつまでも恵めぐみを垂れる、悪い神様になりましたの。  
赤さんは間まもなくそれを、

9665

ひどくすばやい手際で見せ附けましたの。  
海の主の神様の三股みつまたをちよいと取るかと思うと、  
軍の神のアレス様のお剣いくさをさえ、  
旨く鞘から抜き取ります。

9670

日の神のフォイボス様の弓矢も、  
燃える火の神のヘファイストス様のやつとも取る。

あの火に遠慮しなかったら、お父う様チエウスの  
稲妻さえ取り兼ねなかったのです。

でもとうとう恋の神のエロス様とは角力を取って、  
小股をすくって勝ちました。それから

キプリアの女神様がお可哀がりになると、

その隙にお胸の帯を取りました。

淨き旋律の、愛らしき<sup>いと</sup>絃<sup>い</sup>の聲、洞の中より聞ゆ。一同耳を傾け、暫くにして深く感  
動せしものゝ如し。これより下に記せる「間」<sup>ま</sup>の処まで、総て音の揃ひたる奏樂を  
伴はしむ。

#### 闇の女

あの可哀らしい声をお聞<sup>きき</sup>。そして

昔話なんぞはさっさと忘れておしまい。

そんな古い神様の連中は

打ち遣つてお置<sup>おき</sup>。時代遅<sup>おくれ</sup>だ。

誰ももうそんな事が分かつてくれるものはないのだ。

我々ももつと高い税金を払わせられているのだ。

人の胸に徹<sup>こた</sup>えさせるには、自然の胸から

出て来なくてはならぬと云うのが、その税金だ。

(岩の方へ退く。)

#### 合唱の群

こわいおばさん。お前さんもこの媚<sup>め</sup>びるような

物の音<sup>ね</sup>がお好<sup>すき</sup>なの。わたし達は、

今病気が直つたようで、なんだか好<sup>い</sup>い心持で、

そして涙脆<sup>なみだ</sup>くなつて来ましたわ。

9690

心の中が夜が明けたようになって、  
世界中にない事を、わたし達が

9685

自分の胸の中で見附けるのだから、  
日の光などは消えさせて下さい。

ヘレネ。ファウスト。上に記しし衣裳を著けたるエウフオリオン。並に登場。

童子エウフオリオン

わたしの歌う子供の歌をお聞ききになると、

それがすぐにあなた方のお慰なぐさめになりましょう。

わたしが調子に乗つて跳はねるのを御覧になると、

あなた方のお胸も跳おどりましょう。

ヘレネ

人間らしく為しあわせ合あひにしてくれるだけには、

愛は上品な二人を近寄らせるのですが、

神のような喜よろこびをさせるには

結構な三人組を拵もてえますのね。

ファウスト

一切解決がこれで附いたのだ。

9695

9700

己はお前の物で、お前は己の物だ。

こうして縁が繋がれている。

これより外に、どうもなりようはない。

### 合唱の群

年来思い合つておいでになつたお心が、

この坊つちやんの柔かい<sup>かがや</sup>赫きになつて

御夫婦の上に集つています。このお三人の

一組をお見上げ申すと、難<sup>ありがた</sup>有いようですねえ。

### 童子

さあ、わたしを飛ばせて下さい。

さあ、わたしを跳ね<sup>は</sup>させて下さい。

どんな高い所の空気の中へも

升<sup>のぼ</sup>つて行くのが

わたしの望<sup>のぞみ</sup>です。

もうその望に掴まえられています。

9705

9710

9715

## ファウスト

好い加減にしろ。好い加減にしろ。  
おつこちるとか、怪我をするとか  
云うような事に出合つて、

大事な息子が己達を

台なしにしないように、

余り思い切つた事をしないでくれ。

## 童子

もうこれより長く地の上に

止ま<sup>と</sup>つていたくはありません。

わたしの手や、

わたしの髪や、

わたしの著物を放して下さい。

皆わたしの物じゃありませんか。

ヘレネ

自分が誰の物だか、

考えておくれ、考えておくれ。

9730

やつと美しく揃った

わたしの物、お前の物、あの人の物を

お前がこわしたら、わたし共がどんなにか

歎くだろうと云うことを、考えておくれ。

### 合唱の群

なんだか、このお三人の組はもう程なく

9735

ちりぢりにおなりなさりそうですね。

ヘレネとファウストと

どうぞ二ふた親おやに免じて、

余り活澆過ぎる、

劇しい望を

控えてくれ、控えてくれ。

9740

そして静かにおとなしく



この土地を飾っていてくれ。

童子

そんならあなた方の思召ですから

我慢していきましょうね。

(合唱の群を穿ちて過ぎ、舞踏に誘ふ。)

この機嫌の好人達の周囲を

廻って跳ねるのは、よほど楽です。

節はこれで好いの。

足取もこれで好いの。

ヘレネ

ああ、それは好い思附だよ。

その美しい女達に

面白い踊をさせてお遣。

ファウスト

もうこんな事は早く済ませてくれれば好い。

こんな目くらがしのような事は  
どうも己には面白くない。

（エウフォリオンと合唱の群と、歌ひ舞ひつゝ、種々の形に入り組みて働く。）

### 合唱の群

そんなにして両手を

9755

お振<sup>ふり</sup>なさいますと、

その波を打った髪をゆすつて

お光らせなさいますと、

その足でそんなに軽く地を踏んで

お歩<sup>あるき</sup>になりますと、

9760

そして折々手足を

お入れ違わせなさいますと、

可哀らしい坊っちゃん、

それで思召はもう慇<sup>かな</sup>いました。

わたくし達は皆心<sup>しん</sup>から

9765

あなたをお慕<sup>したい</sup>申します。

(間。)

童子

お前達は皆足の軽い

鹿どもだね。

さあ、もつと傍<sup>そば</sup>で

新しい遊<sup>あそび</sup>をしよう。

わたしが獵人だよ。

お前達は獸<sup>けだもの</sup>だよ。

合唱の群

わたくし達を掴まえようと思召すなら、

余り早くお駆<sup>かけ</sup>なさないが好<sup>い</sup>いわ。

可哀らしい坊っちゃん。

どうせわたくし共は皆

しまいにはあなたに抱き附きたいと

思っているのでございますから。

童子

森の中へ往こう。

木や石のある所へ往こう。

造<sup>ぞうき</sup>倣なく手に入るものには

気が向かない。

無理に手に入れたものが

ひどく嬉しいのだ。

ヘレネとファウストと

なんと云う気軽な事だろう。なんと云う

騒ぎようだろう。好<sup>い</sup>い加減にはさせられそうもない。

まるで角の笛でも吹くように、

谷にも森にも響き渡っている。

なんと云うふざけようだろう。叫<sup>い</sup>びようだろう。

合唱の群

9780

9785

(一人々々急ぎ登場。)

9790

わたくし達を馬鹿にして、恥を搔かせて、  
前を通り抜けておしまいなすったのね。  
みんなの中で一番気の荒いのを  
お掴まえなすったのね。

童子

(一少女を抱き登場。)

この強情な小さい奴を連れて行つて、  
無理にでも遊ぶ積だ。

9795

己の<sup>たのしみ</sup>樂に、己の愉快に、  
厭<sup>いや</sup>がる胸を抱き寄せて、  
厭がる口にキスをして、  
力と意地とを見せたいのだ。

娘

お放しよ。こんな体の肌の下にも、

9800

心の力も意地もあつてよ。

わたしの意地だって、あなたと同じ事で、  
そうわけもなく挫かれはしません。

あなたわたしが狭鰐詰せっぱまっていると思つて、  
そのお腕を大層たよりになさることね。

しつかり掴まえていらつしやい。わたし笑談に  
お馬鹿さんに火傷やけどをさせて上げてよ。

（火になりて燃えつゝ天に升る。）

わたしに附いて高い空そらにお上りなさい。  
わたしに附いて窮屈な墓へお這入はいりなさい。  
消えてしまつた的まとをお掴まえなさい。

童子

（身辺に残れる火を払ふ。）

ここは森の木立の間に

岩かさなが畳り合っているばかりだ。

こんな狭い所が己になんになろう。

己は若くて元気じゃないか。

風がざわざわ鳴っている。

波がどうどう響いている。

どちらも遠く聞えている。

あれが近い所ならいい。

(岩を踏みて、次第に高き所へ跳り登る。)

ヘレネ、ファウスト及合唱の群

シャンミイの獣の真似でもするのか。

おつこちはしないかと思つて、ぞつとする。

童子

次第に高い所へ登らなくては。

次第に遠い所を見なくては。

これで自分のいる所が分かつた。

地にも親しく、海にも親しい、

これは島の真ん中だ。

9825

ペロップスの国の真ん中だ。

### 合唱の群

この山と森との中におとなしく

暮そうとはお思おもひないさらないの。

今に道端や岡の上にある

葡萄の実だの、無花果だの、

9830

金きんいろ色の林檎だのを

採って上げます。

ねえ、こんな結構な国に

結構にしていらっしやいましな。

### 童子

お前方は平和の夢を見ているのか。

9835

夢を見たい人は見ているが好いい。

戦争。これが合図ことばの詞だ。



戦勝。これが続いて響く音だ。<sup>おん</sup>

合唱の群

誰でも平和の世にいて、

昔の戦争の日に戻りたがる人は、  
望<sup>のぞ</sup>の幸<sup>きわい</sup>に

暇乞するのですわ。

童子

危険の中から危険の中へ、

自由に、どこまでも大胆に、

自分の血を吝<sup>おし</sup>まないように、

この国が生み附けた人々だ。

この抑えることの出来ない人々には、

高尚な志が授けてある。

闘う人々には

総て福利が与えてある。

9840

9845

9850

## 合唱の群

上<sup>うえ</sup>を向いて御覧なさい。あんな高い所へお登<sup>のぼり</sup>なすつてよ。それでも小さくはお見えなならない。

武装しておいでなさるような、軍にお勝<sup>かち</sup>なさるような、鉄や刃金<sup>はがね</sup>でお体が出来ているような御様子ね。

## 童子

掩堡もなければ、塙<sup>しやうへき</sup>壁もない。

一人々々自信の力で遣つて行く。

物にこたえる堅塁は

金鉄のような男児の胸だ。

人に侵されずに生きていようと思うなら、

早く軽装して戦場に出ろ。

女は娘子軍になるが好<sup>い</sup>い。

小さい子までが皆勇士になるが好<sup>い</sup>い。

## 合唱の群

あれは神聖な詩だわ。  
天へ<sup>てん</sup>升って行くが好い。

あれは一番美しい星だわ。

次第に遠く遠く光って行くが好い。

どうしたってその声がわたくし達の所へ

届かないことはない。どうしたって聞えてよ。

聞くのが好<sup>すき</sup>だわ。

童子

なに。己は子供になつて出て来はしない。

武装してこの青年は来たのだ。

強い、自由な、大胆な人達に交つて、

胸ではもう手柄をしている。

さあ、行こう。

ああ、あそこに

名誉の衢<sup>みち</sup>が開<sup>あ</sup>いている。

9865

9870

9875

## ヘレネとファウストと

まだこの世に、やっと生れて来たばかりで、  
晴やかな幾日かに、やっと出合つたばかりで、  
眩暈めまいのするような階段を踏んで、

お前は憂の多い境へあこがれて行くか。

己達の事を

なんとも思わぬか。

この可哀らしい家庭が夢であつたか。

## 童子

あなた方あの海の上の雷かみなりの音をお聞きこでしよう。

その谷々こたまに響こた響ましています。

塵の中に、波の上に、兵と兵とが出会つて、

迫り合つて苦戦するのです。

そして死は

掟おきてです。

それはそうしたものののです。

ヘレネ、ファウスト及合唱の群

恐ろしい事。気味の悪い事。

お前には死が掟かい。

童子

わたしに遠くから見えていられましょうか。  
いやいや。往つて艱難辛苦を共にします。

上の人々

ぼうこひようが  
暴虎馮河だ。

死ぬるが命か。

童子

でも行かなくては。

もうわたしの羽が広がります。

あちらへです。行かなくては。行かなくては。

飛びますから、悪く思わないで下さい。

（エウフォリオン空に飛び騰る。刹那の間衣裳の身を空中に支ふるを見る。頭よりは光を放てり。背後には光の尾を曳けり。）

合唱の群

イカルスですね。イカルスですね。

まあ、おいたわしい事。

（美少年ありて、両親の脚の下に墜つ。この屍はその人の姿かと疑はる。されどその形骸は直ちに消え失せ、毫<sup>ごうこう</sup>光は彗星の如く天に升起去り、跡に衣と袍<sup>ほう</sup>とリラの琴と残れり。）

ヘレネとファウストと

ああ、喜の跡から

すぐに恐ろしい憂が来た。

童子の声（地底より。）

お母あ様、この暗い国に

わたしを一人で置かないで下さい。

（間。）

## 合唱の群

(輓歌。)

なんの一人で置きましょう。どこにおいでなさいましょうと、  
あなたは知った方のはずです。

あなたはこの世をお去さりなすつても、

誰の胸もあなたをお忘わすれ申すことは出来ません。

あなたをお悔み申すことも出来ない位です。

御運命を羨うらやましがって歌うのですから。

喜よろこびの日にも悲かなしみの日にも、あなたの歌と意地とは

美しくまた大きゆうございました。

立派なお家柄で、大した御器量で、

この世の福を受けにお生れになったのに、

惜しい事には、早くそれをお亡くしなすつて、

お若い盛りにお隠れになりました。

世間を観察する、鋭い御眼力があつて、  
あらゆる人心の発動に御同情なすつて、  
優れた女の限に思われておいでになつて、  
特色のある詩をお作つくになりました。

9920

しかしあなたは断えず検束のない網の中へ  
お駆け込みなすつて、

民俗や国法に

9925

無謀にも御牴触なさいました。

それでもおしまいには極ごく高尚な御思案が、  
清浄な勇氣に重きを置かせて、あなたは  
立派な物を得ようとなさいました。

だがそれは御成功になりませんでした。

9930

誰が成功するでしょう。これは不幸の極きわみの日に



国民<sup>くにたみ</sup>皆血を流し口を噤みます時、

運命がその中に跡をくらます

悲しい問題でございます。

だがいつまでも歎<sup>なげき</sup>に屈めた首を屈めているには

及びません。新しい歌に蘇ります。なぜと云うに、

土地はこれまでそう云う歌を産んだように、

これから後もそれを産みましようから。

(全き休憩。音楽息む。)

ヘレネ(ファウストに。)

美と福とが長く一しよになつてはいないと云う

古い諺を、残念ながらこの身に思い合せます。

命の緒も愛の絆<sup>きずな</sup>も切れました。どちらをも

痛ましゆう思いながら、つらいお別<sup>わかれ</sup>をいたします。

お別<sup>わかれ</sup>にもう一度寄り添わせて下さいまし。

さあ、地獄の女神<sup>めがみ</sup>、子供とこの身とお引取<sup>ひきとり</sup>下さい。

(ヘレネがファウストに抱き附く時、その形骸は消え失せ、衣裳と面紗とファウストの手に留まる。)

闇の女(ファウストに。)

その一切の物の中から残った物を、しっかり持っておいでなさい。

9945

その衣裳を手から放してはいけませむ。

もう悪鬼共が棲を引つ張つて、

地獄へ持つて行こうとしています。

しっかり持っておいでなさい。お亡くなしなされた

女神めがみはもういない。しかし神々こうしゅうしい跡は残っている。

9950

値踏の出来ぬ程尊い恵を忘れずに、

向上の道にお進すすみなさい。お命のある限、あなたはそれを力に

所有あらゆる卑しい境を脱はなして、瀬氣こつきの中をお升のぼりなさい。

いずれまた遠い、極遠ごくい所でお目に掛かりましょう。

(ヘレネの衣裳散じて雲となり、ファウストを包擁して空に騰らしめ、ファウスト

は雲に駕して過ぎ去る。)

## 闇の女

（エウフォリオンの衣と外套とリラの琴とを地上より拾ひ上げ、舞台の前端へ出で、遺物を捧げ持ちて語る。）

これでも旨く取り留めたと云うものです。  
無論 は消えてしまいました。

9955

しかし何も世間のために惜むには当りません。

これが残つていれば、詩人に免許を遣り、

商売忌敵の党派を立てさせるには十分です。

9960

わたしは技倆を授けて遣ることは出来ませんが、  
せめて衣裳でも貸して遣ることにしましょう。

（舞台の前端にて、一木の柱の下に坐す。）

## 先導の女

さあ、皆さん早くおし。魔法は破れました。

古いテッサリアの婆あさんの怪しい、心の縛は解けました。  
ばく

耳よりも心を迷わする、籠み入った音の、

演奏の酔も醒めました。さあ、地獄へ降りましょう。

9965

お后様はしとやかなお歩あるきつ附きで、

急いでお降くだりなされた。忠義な女中達はすぐお跡を

お慕した申すが道です。お后様には不可思議なお方の

玉座の側でお目に掛かられることでしょう。

### 合唱の群

お后様はどこにだって喜んでおいででしょう。

9970

地獄でもペルセフォネイア様とお心安くなすって、

外のお后様同士御一しよに、

息張かみつて上に立って入らっしゃるのですもの。

わたし共はそれとは違って、低いアスフォデロスの野の奥に、

実のならない柳や、ひよろひよろした

9975

白楊の木のお仲間にせられていて、

何を慰なぐさにして日を送りましょう。

面白くもない、お化のような囁をいたすのが、

お方蝙蝠の鳴くように  
 ぴいぴいと聞えることでしょう。

先導の女

名を揚げたでもなく、優れた事を企てるでもないものは、  
 四大に帰る外はない。さあ、おいで。  
 わたしは是非お后様のお側へ行きたい。  
 人格には功ばかりでは足りない。忠実がなくては。

一同

まあ、これで日向ひなたへ出られましたね。  
 もう人と云う資格はなくなつたのが、  
 自分にも分かるようです。

だが決して地獄へは帰りますまいね。  
 永遠に活動している自然は、  
 わたし達、靈共に信頼していますから、  
 こちらも自然にすっかり信頼いいしていいのです。

## 合唱の群の一部

わたし達は、この百千の枝の囁く揺ぎ、ざわ附く靡きの中で、  
笑談にくすぐり、そつとおびいて、生の泉を根から梢へ上げさせましょう。

たつぷり葉を著けたり、花を咲かせたりして、

あの乱髪をふわふわと自由に栄えるように飾って遣りましょう。

9995

実が落ちると、すぐに面白く暮らしている群が押し合つて、

急いで集まつて来て、取つて食べようとしそうです。

そして皆が一番古い神様達の前へ出たように、わたし達の周囲にしやがむでしよう。

## 他の一部

わたし達はやさしい波のように体をゆすつて、機嫌を取つて、

この滑つこい岩壁の、遠くまで鏡のように光っているのに身を寄せましょう。

10000

鳥の啼声でも、葦の笛の音でも、よしやパンの神の恐ろしい声であろうとも、どんな声にも

耳を傾けて聞いている、すぐに返事をして遣りましょう。

ざわつきの返事なら、ざわつきでしましょう。

かみなり

雷なら、こっちの、震り動かすような雷を、二倍にして、また跡から三倍にも十倍にもして聞かせましょう。

### 第三部

きようだい達。気の軽いわたし達は小川と一しよに急ぎましょう。

10005

あの遠い所の美しく草木の茂っている丘が好ですからね。

それから次第に流れ落ちて、マイアンドロスのようにうねって、

先ず外牧場に、それから内牧場に、それからまた家の周囲の畑に水を遣りましょう。

あそこに平地や、岸や、水を越して、すらりと空を指している

糸杉の頂が目標になつています。

10010

### 第四部

お前さん達はどこへでも勝手に飛んでおいで。わたし達は、棚に葡萄の茂っている、

あの一面に畑にしてある岡を取り巻いて、翔つていきましょう。

あそこでは朝も晩も、葡萄造が熱心に、優しい限、手を尽して、

実のりを覚束ながっているのが見られます。

鋤鍬で掘ったり、根に土を盛ったり、摘んだり、縛ったりして、

10015

あらゆる神様達を、中にも日の神様を祈っています。

意気地なしのバクホス様は忠義な家隸けらいにも余り構わずに、

小屋に寝たり、洞の中で物にもたれて、一番若いファウニと無駄話をしたりしています。

あの神様の夢見心の微酔ほろよいに、いつでもいるだけの酒は、

遠い世の後まで、冷たい穴蔵の右左に並べてある

10020

甕かめの中や、革囊の中にしまっておりあります。

しかしあらゆる神様達、中にも日の神様が、風を通し、

濡らし、温め、日に曝さらして、実の入った房うずたかを堆つみくお積かさね累ねになりますと、

葡萄造つくりのひっそり働いている所が、急に賑やかになって来て、小屋の中にも音がします。

10025

幹から幹へと騒ぎが移って行きます。

籠がみしみし、小桶がことごと、担ない桶おけがきいきいと、

大桶まで漕ぎ附けます、酒さけしほり絞ぼりの元気な踊まで。

そこで淨く生れた、露たつぷりな葡萄の房の神聖な豊けさが、

不作法に踏まれ、醜く潰されて、泡を立て、とぼしりを跳ねさせて交り合います。

そこで銅鑼どら鑢よう鉞はちの音が耳を裂くように聞えます。

10030



これはジオニゾスの神様が深秘しんぴの中からお現れなすったからです。

山羊の脚の男神様が、山羊の脚の女神達と踊つて出て来る、その間に

セイレノスを載せた、耳の長い獣けだものが締まりのない大声で叫びます。

何一ついたわりません。割れた蹄あしが所有あらずの風俗を踏みにじります。

所有あらずの官能がよろめき、渦巻きます。厭いやな、ひどい騒ぎに耳が聳こたになります。

10035

酔っぱらいが杯を捜します。頭も腹も溢れます。

誰やらあちこちにまだ世話を焼いてはいますが、それは騒ぎを大きくするばかりです。

無理はありません。新しい濁にごり酒ざけを入れるには、古い革囊くわふを早くあけたいのですから。

（幕下る。）

闇の女フォルキアス舞台の前端にて、巨人の如き姿をなして立ち上がり、履くつを脱ぎ、  
仮面と面紗とを背後へ掻い遣り、メフィストフェレスの相を現じ、事によりては、  
後序を述べ、この脚本に解釈を加ふることあるべし。

## 第四幕

高山。屹立せる、稜角ある岩の頂。一団の雲たなびき来て、岩に倚りて止まり、突出せる段の上に降る。雲破る。

ファウスト（現れ出づ。）

晴れた日に陸や海を越して、穩かに己を載せて来てくれた  
雲の乗物のりものに暇を遣つて、

足の下に極深ごくい寂しさを見卸しながら、

己は十分気を落ち著けて、この絶頂の岩端に足を踏み入れる。

雲は散らずに、ゆっくり己の身を離れる。

その群がまろがった列になって、東を指して行くのを、  
感心して、驚いて、己の目が見送っている。

10045

雲は動きながら破れて、波立って、形を変える。

何かの形に纏まるらしい。そうだ。見違ではない。

日に照された褥の上に、美しく体を横えて、

巨人のように大きくはあるが、神々達に似た女が現れている。

見えるわ、見えるわ。ユノか、レダか、いや、ヘレネか。

10050

あの神々しく可哀らしく変化して目に映ること。

や。もういざつてしまう。遠い氷山のように、

幅広く堆く、不極まりな形をして、東の空に止まって、

移り行く日の大きい意味を目映く写している。

それでもまだ己の額や胸の辺には、薄い、明るい

10055

霧が漂って、優しく、冷たく、気を霽らしてくれる。

それが今たゆたいながら、軽々と、次第次第に

高く升<sup>のぼ</sup>つて一しよになる。目の迷か、あの姿は疾<sup>と</sup>うに失った、若かった昔の、無上の物じやないか。心の奥の一番早く出来た宝の数々が湧き上がる。軽快にはずんだアウロラの恋を己に見せる。

10060

あの最初の快速には感じてても、理解することのほとんど出来ぬ一目がこれだ。そのくせ捉え得て見れば、どの宝よりも赫<sup>かがや</sup>くのだ。あれ、あの形の美は霊の美のように増して来て、解けずに、瀨<sup>こしき</sup>気の中に升つて、己の心の内の最善の物を持つて行つてしまう。

10065

七里靴一つぱたりと地を踏み出づ。間もなくまた一つ出づ。メフィストフ  
エレス脱ぎて降り立つ。靴は急ぎ過ぎ去る。

メフィストフエレス

これなら可なり歩いたと云うものだろう。  
ところで、あなた、なんだと思つているのです。  
こんな不気味な所の真ん中で、恐ろしい岩穴の

（あ）を開けている処で雲から降りるなんて。

10070

わたしはこんな所もよく知っています。しかしこの土地ではありません。地獄の底で見たのです。

ファウスト

なに附けても馬鹿げたお伽話を知っていて、こんな時にまでそれをさらけ出すのかい。

メフィストフェレス（真面目に。）

10075

昔神様がわたし共を、真ん中一面に永遠な火が熱く燃え立っている、底の底のどん底へ虚空から墮しておよこしなすった時の事ですネ。

なぜお墮しなすったと云うことも知っていますがね。わたし共は明るいことは明る過ぎる場所で、

随分籠み合った、窮屈な体からだつき附つをしていたのです。

10080

悪魔連一同ひどく咳をし出しまして、

上からはごほんごほん、下からはぶうぶう云わせます。

地獄は硫黄の臭と酸とで一ぱいになる。

その瓦斯<sup>ガス</sup>つてない。それが非常な物になって、

幾ら厚くても、国々の平たい地盤が

程なくどうどうと鳴つて、はじけたのです。

そこで尻尾<sup>しっぽ</sup>を撮<sup>つま</sup>んで倒<sup>さか</sup>さに吊るしたように

これまでどん底であつた所が、こん度は絶頂になります。

なんでも上を下へと云う結構な教訓は、

この時悪魔連が発明したらしいのです。

わたし共は押し籠められていた、熱い穴から逃れ出て、

自由な空氣の結構さ加減の絶頂に來ましたからね。

これは無論秘密で、大事に隠して置いて、

人間には後になってから知らせて遣るのですが。

#### ファウスト

己のためには、山は高尚に沈黙しているもので、  
どうして、なぜ出來たとは、己は問わない。

10085

10090

10095

自然が始て自分で自分の基礎を立てた時、  
地球を綺麗に円めたのだ。山は山、谷は谷になった所を  
面白がつて、岩と岩、頂と頂を並べたのだ。

そして旨く斜面を附けて岡を拵え、なだらかな勾配で、  
次第に低く、谷まで下るようにしたのだ。

その所々で、草木が緑に芽ぐんで、生長する。

自然が慰なぐさめをするのに、何も物狂おしい

渦巻なんぞをさせなくても好いのだから。

#### メフィストフェレス

あなたはそんな風に言いますがね。

なるほどそれがあなたには太陽のように明かでしょう。

しかしその場にいたものは、そうでないことを知っています。

まだ地の底があの下の方で、煮え上がって、火を噴いて

流れていた時、わたしはそこにいました。

まだあのモロホの槌が、岩と岩とを敲たたき合せて、

10100

10105

10110

山の<sup>かけ</sup>欠らを遠方へ飛ばせていた時です。今でも外から来た、何千斤かの重さの物が、国々に動かずにいる。

あれを飛ばせた力を誰が説明しますか。哲学者には分からない。そこに岩が在る。そのまま在らせる外、<sup>しかた</sup>為方がない。

随分今まで行き著く程考えたのです。

ただ淳樸な下民にはそれが分かつていて、

縦<sup>たと</sup>え人がなんと云つても、自分の考を改めない。

その疾うから煉れている考はと云うと、あれは奇蹟だ。

悪魔の手柄になるのですね。

行者共は信仰の杖を衝いて、魔の岩とか、

魔の橋とかを見に行くではありませんか。

ファウスト

ふん。悪魔がどう自然を観察しているかと聞いて見て、それを顧慮するのも、無価値ではないよ。

メフィストフェレス

10115

10120



自然は有<sup>あり</sup>のままでいるが好い。わたしは構わない。

嘘は衝かない。わたしは見<sup>で</sup>ていたのだ。

わたし共は大きい事をし出来<sup>で</sup>す連中です。

騒動と暴力とむちやとで遣るのです。その岩山が証拠です。

さてこれからいよいよ分かるようなお話をするとして、

この地球の表面はお気に入りしましたかな。

兎に角あなたはこの世界の国々と、その立派さ加減とを、

随分際限もない広さに、御覧になつたのですが。

しかしどうも満足と云うことのない先生だから、

これなら欲しいと云う物もなかったでしょうね。

ファウスト

所が、有るよ。大きい物が己の心を惹いた。

なんだか、当てて見給え。

メフィストフェレス

それは造<sup>ぞう</sup>倣<sup>ばう</sup>はありません。

10125

10130

10135

わたしはある都を選り出しますね。真ん中には  
市民の食物くいものの不気味さがあります。

曲がりくねった、狭い町、とんがった搏風はふ、  
けちな市場、大根、菜っ葉、葱がある。

脂の乗った肉を啄つきに、

青蠅の寄る屠肉場がある。

いつでも、あなた、行つて御覧なさるが好い。

きつと賑やかで、臭いのです。

それから僭上に、上品らしい見えをする

おおしおり  
大通

や広い辻がある。

それからしまいには、関門しきで為切つてないと、

場末がどこまでも際限なく延びる。

そこでわたしは、馬車の車輪がごろごろと

あっちへ走つて行き、こっちへ走つて来き、

散らばった、うようよする蟻の群が

永遠に馳せ違うのを楽しんでおきましょう。

そこでわたしは馬や車に乗って出ると、

いつもそいつ等の中心になつて、

千百の人間に敬われるとおしましょう。

#### ファウスト

そんな事では己は満足しない。

人口が繁殖して、自分の流義で、

気楽に口腹を養つて、場合によつては

教育を受け、学問をするのを見て喜んで

いるうちに、ただ叛逆人が出来上がるのだ。

#### メフィストフェレス

それからわたしは、自分で見ても壮大だ思うように、

面白い土地へ、慰なぐさめのために城を造らせましょう。

森や岡や原や牧や畑を、

立派に庭園に築き直させましょう。

緑いろに聳えた垣の前に、天鵝絨のような牧や、  
髪<sup>はつ</sup>の如き道や、巧に結<sup>ゆ</sup>つた生木<sup>いきぎ</sup>の屋根や、  
岩組で築いた滝や、種々の噴水がある。

10165

真ん中はすなおに升るが、

脇からは形が變つて小さく噴き出る。

それから一番の美人を畜えるために、

気の置けない、のん気な小家<sup>こいえ</sup>を立てさせましょう。

10170

限のない月日を、なんとも言えない

面白い、差向いの寂しみに暮そうと思うのですね。

わたしは美人と云つたが、

それは一人ではない。わたしの女と云うのは、

いつでも複数に考えて言うのですからね。

10175

ファウスト

悪く現代的だ。サルダナパールの驕奢だ。

メフィストフェレス

そう仰やると、大抵お望の見当が附きますね。  
 そいつは飛び離れて大胆です。

もう大抵月宮の近所まであなたは升つたのですが、  
 やはり天上界へ気が引かれていますのでしよう。

ファウスト

おおちがい  
 大 違だ。この地球上に

まだ偉大な事業をする余地がある。

驚歎すべき物が成就しなくてはならぬ。

己はまだ大胆な努力をするだけの元氣を感じている。

メフィストフェレス

では名聞を博せようと云うのですね。

あなたは女英雄の色になっただけありますね。

ファウスト

主権を取るのだ。占有するのだ。

事業が一切だ。名聞はいらぬ。

10180

10185

## メフィストフェレス

いらなくても、詩人が出て来て、

あなたの栄華を後世に伝えて、馬鹿話で

馬鹿の真似をさせるように、人をおびくでしょう。

## ファウスト

ところがそれが兎に角君の得にはならぬのだ。

人間の欲望が君に分かるものか。

君の皮肉な、悪辣な、厭いやな性質で、

人間が何を要求するかが分かるものか。

## メフィストフェレス

どうでも好いから、あなたのお望どおりにさせましょう。

そこであなたの気まぐれの範囲をお打明うちあけなさい。

## ファウスト

己の目は海の沖に捕えられていた。

水が湧き立って、堆く盛り上がった。

それが凪いで、平<sup>たいら</sup>な岸の一带を襲<sup>襲</sup>わせに、  
波をばら蒔<sup>ま</sup>いた。

10200

それが癪に障った。あらゆる権利を尊重する  
自由の精神を、専横の心が、

喜怒哀楽に鞭うたれた血の勢で、

感情の悩<sup>なやみ</sup>に陥らせるようなものだ。

10205

己は偶然かと思つて、また瞳を定めて見た。

波は止<sup>と</sup>まつて返して行く。

息張<sup>しと</sup>つて為遂げた目的から退いて行く。

また時が来ては、同じ戯を繰り返すのだ。

メフィストフェレス（見物に。）

あれではなんの新しい事も聞き取られませんね。

10210

そんな事は千百年前からわたしも知っている。

ファウスト

（興奮して語り続く。）

波は自分が不生産的で、その不生産的な力を

八方へ逞うしようとして這つて来る。

膨<sup>ふく</sup>れて、太つて、転がつて、荒地<sup>あれち</sup>の

厭な境に溢れる。寄せては返す波が

力を恃<sup>たの</sup>んで専横を窮めていて、

さて引いて行つた跡に、何一つ己を恐怖させる程の事を

為遂げてはいない。溜まらんじやないか。

検束のない四大の、目的のない威力だ。

そこで己の精神は自力の限量以上の事を敢てしたい。

あれと闘つて勝ちたいのだ。

それは出来る事だ。あの汎濫する性質はあつても、

どんな丘陵でもあると、避<sup>よ</sup>けて滑<sup>すべ</sup>つて通る。

いかに傍若無人に振舞つても、

瑣細の高まりも中流の砥柱<sup>しちゆう</sup>になつて、

10215

10220

10225



瑣細の窪みも低きに就かせる。

そこで己は心中で急に段々の計画を立てる。

あの専横な海を岸から遠ざけて、

干潟の境界を狭めて、

海を遥かに沖へ逐い返したら、

さぞ愉快な事だろう。

己はその計画を一步一步心に運<sup>めぐ</sup>らして見た。

これが望だ。己はこれをはかどらせる積<sup>つも</sup>りだ。

(見物の背後、右の方遠き所より、鼓の音と軍樂と聞ゆ。)

メフィストフェレス

造倣もない事です。あの遠くの鼓が聞えますか。

ファウスト

また軍<sup>いくさ</sup>か。智者の聞くことを好まぬ響だ。

メフィストフェレス

戦争でも平和でも好い。己<sup>おのれ</sup>を利するように

10230

10235

それを利用しようと努めるのが賢いのです。  
あらゆる好機会を待つのです、窺うのです。  
機会があります。さあ、先生、お掴まえなさい。

ファウスト

そんな謎なら、己は御免を蒙る。

どうしろと云うのだ。手短かに言い給え。

メフィストフェレス

わたしは歩く途中で聞きましたが、

お気の毒な殿様が大頭痛の様子です。

御承知のあの人は。御一しよに機嫌を取って、

虚偽の富を手に入れさせた時は、

あの人は世界中を買い占めることが出来ましたつけ。

一体あの人は余り早く即位をなさったので、

快楽の受用と国家の政治とが、

随分一しよに出来て、

そうするのがひどく都合が好く、また結構でもあると、飛んだ間違った判断をせられたのです。

10250

### ファウスト

大変な間違だ。命令をする人は、命令その物に快楽を覚えんではならん。

高遠な意志が胸に一ぱいあって、

何を考えているか、それを誰一人窺うことが出来ぬ。

10255

そして一番忠実な臣下の耳に囁いて、

それが行われると、天下瞠目する。

そんな風で、永く最高の地位、最大の権威を保つのだ。

受用は人を陋<sup>いや</sup>しゆうする。

### メフィストフェレス

あの人はそんな風ではありませんね。

10260

受用をしたのです。どんなにかしたでしょう。

そのうちに国は無政府の状態になって、上下交々<sup>こもこも</sup>争い、

兄弟牆<sup>かき</sup>に閱<sup>せめ</sup>ぎ、相殺し、

城と城との間、市と市との間、工業組合と

貴族との間、僧官と僧侶と信徒との間、

それぞれに争が出来、

目を見合わせるものは皆敵である。

寺で人が殺される。関門の外に出れば、

旅客も商人も性命財産があぶない。

そこで人民一同が可なり大胆になった。

自家防禦で生存するのです。遣つて見ればそれでも行<sup>い</sup>けますよ。

ファウスト

それは行<sup>い</sup>く。歩<sup>ひ</sup>く。跛<sup>びつこ</sup>を引く。倒れてまた起きる。

それから翻<sup>とんぼがえり</sup>筋斗をして、転<sup>ころ</sup>がつて一しよに死ぬる。

メフィストフェレス

その状態でいて、誰も苦情を言つてはならないのですね。

てんでに頭を出そうとする。また随分出しもする。

10265

10270

10275

極小さい人物がすっかりした奴と云われる。

そこで余りひどいと、一番好人までが言い出す。

とうとう豪い奴等が根を固めて置いて謀叛して、

こんな宣言をしました。「治めてくれるのが君主だ。

当代は治めようともせず、治める力もない。

新しい君を選んで、国に新しく魂を入れて貰おう。

そしたら個人を堅固に保護してくれて、

その新設せられた社会では、

平和と正義とが相嫁ぐだろう」と云うのです。

ファウスト

坊主でも言いそうな事だな。

メフィストフェレス

坊主が言ったのです。

そして便々たる腹に本領安堵をさせました。

外のものより余計に交ぜ返したのは彼奴等です。

一揆は広がる。神聖にせられる。

そこでわたし共が機嫌を取って上げた、あの殿様は、  
今この場で多分最後の決戦をするのでしよう。

10290

ファウスト

気の毒だな。あんな分<sup>わけへだて</sup>隔<sup>へだて</sup>のない、好い人だから。

メフィストフェレス

さあ、おいでなさい、見物しましょう。「生きている間は有望だ。」

こつちの手でこの狭隘から救い出しましょう。

今一度救えば、後の千度も救うことになります。

采<sup>さい</sup>の目はまだどう出るか、分らない。

10295

殿様の身に運があれば、その麾下<sup>きか</sup>に人もある。

（二人は山の中腹を蹴<sup>こ</sup>えて前に出で、谷間の陣を望む。鼓、その他の軍樂下より聞

ゆ。）

あの陣地を御覧なさい。旨く取ってあります。

わたし達が這入って行けば、全勝ですね。

ファウスト

君はここで何を遣つて見せる積だ。<sup>つもり</sup>

まやかし、目くらがし、空虚な見えだろう。

メフィストフェレス

戦争に勝てる計略を遣るのです。

どうかあなたも前途の目的を考えて、

気を大きく持つことに、腹を極めて下さい。

殿様に玉座と版図とを保たせて上げた上で、

あなたは御前<sup>ごぜん</sup>に平伏して、海岸一帯の地を

所領<sup>もらい</sup>にお貰なすることが出来るのです。

ファウスト

そうか。君も随分色々な事をして来たが、

そんなら今度は会戦に一つ勝つて見せ給え。

メフィストフェレス

なに。勝つのはあなたです。

10300

10305

こん度はあなたが上將軍だ。

10310

ファウスト

「それが己に適当な高座だろうよ。」

まるで知らない為事じごとで、采配を振るのだから。

メフィストフェレス

幕僚をお拵こしらえなさい。そうすれば元帥は枕を高うしていられます。

戦争のらんぼうは疾とうから知っていますが、

10315

戦争のさんぼうは、こん度前以て、

山奥の原人で編成して置きました。

あいつ等を集めたものには、利運が向きますよ。

ファウスト

あそこに武器を執つて来るのは、あれはなんだ。

君、山の中の人民共を煽動したのかい。

10320

メフィストフェレス

なに。ペエテル・クウインチエの役者の組と同じ事で、



やくざな中の選抜<sup>えりぬき</sup>です。

(三人の有力者登場。)

メフィストフェレス

やあ。奴共<sup>やつこ</sup>があそこに来ました。

御覧の通、年配も区々<sup>まちまち</sup>で、

被服装具もそれぞれ違います。

だが存外御用に立つでしょう。

(見物に。)

当節はどの子供でも、

鎧と武者領<sup>むしやえり</sup>とが大好<sup>だいすき</sup>です。

符牒<sup>み</sup>のような、実のない奴等ですが、

それだけ却ってお気に入るでしょう。

喧嘩坊

(年若く、軽装して、はでなる服を著る。)

どいつでも己と目を見合せりやあ、

10325

10330

すぐ拳骨を に叩き込むのだ。

逃げ出すような臆病者は

後髪を攫<sup>つか</sup>んで引き戻して遣る。

はやとり

（男らしく、武具好く整ひ、奢りたる服を著る。）

そんな実のない喧嘩なんぞは

笑談同様の暇潰しだ。

何にもひるまず取り込んで、

外は一切跡にする。

かたもち

（年寄りたり。厳かに武器を執りて、下に服を著ず。）

それも余り役には立たぬ。

大財産もすぐ蕩<sup>とろ</sup>けて、

生活の川水に流れ落ちる。

取るのも悪くはないが、持っているのが一層好い。

万事この薄黒い野郎に任せて御覧なさい。  
あなたの物を何一つ、人手には渡さない。

(一同群がりて山より下る。)

## 外山の端

鼓と軍樂と下より聞ゆ。帝の帷幄いあく開張せらる。

帝。上將軍。護衛者等。

上將軍

この丁度好い狹隘へ

全軍を密集して背進させたのは、

今から見ても、熟慮した計画でした。

決戦が勝利に帰するのを、わたくしはまだ確信しています。

帝

どうなるかは、今に分かるだろう。

その背進が敗走に似ているのが、己には不愉快だ。

10350

### 上將軍

あれ、あの我軍の右翼を御覧なさい。

戦略はああ云う地形を望むのです。

丘陵が余り嶮しくもなく、余り行進し易くもない。

我には有利で、敵には危険だ。

我兵があゝの波状をなしている平地に半ば隠れていれば、

10355

敵の騎兵もうかとは来ません。

### 帝

いや。今となればその処置を称讃するより外はない。

我軍の精神も手腕もここで験<sup>ため</sup>されるのだ。

### 上將軍

あの中央の牧の平地で、

我部隊が勇悍<sup>ゆうかん</sup>に闘っているのを御覧なさい。

10360

空中に、朝霧の中に、日に照されて  
槍の穂尖がきらめいています。

あの大方陣が真つ黒に波を打っていますね。

数千の士卒が大功を立てようとあせっています。

あれで多数の気力が分かります。

敵の力を分割することが、あれになら出来ましょう。

帝

うん。こんな美しい戦況を、己は始て見る。

我兵には倍数だけの威力があるなあ。

上將軍

我左翼については別に申すことはございません。

嶮しい岩山を勇士が守っています。

今武器が一面に光っている、あの石道が

狭い谷の重要な通路を掩護えんごしています。

ここで期せずして敵の兵力が一敗地まみに塗れるのが、

もうわたくしには見えるようです。

帝

あそこに忒心の親戚共が遣つて来おる。

己をおじだ、従兄弟だ、兄弟だと云つて、

次第次第に我儘になつて、玉座に尊敬をなくさせ、

命令の杖に威信をなくさせ、

それから同士討をして国内を荒し、

とうとう一しよになつて己に刃向かつて来たのだ。

部下の群は腹が極まらずに觀望していて、

風向かぜむきの好い方に附こうとしているのだ。

上將軍

間牒に出した、信用の置かれる一兵卒が、

今岩を降りて来ます。旨く遣つて来たか知らぬ。

第一の間牒

こつちの為事しごとは旨く参りました。

10375

10380

10385

大胆に、狡猾に立ち働いて、

随分あちこちと潜<sup>もぐ</sup>つて来ました。

所がたんと思わしいお土産ありません。

忠実なお身方のように、

殿様に心からの尊敬をいたしているものは多いが、

そのくせ袖<sup>しゅう</sup>手<sup>しゅ</sup>傍<sup>ぼう</sup>看<sup>かん</sup>の分<sup>い</sup>疏<sup>わ</sup>しありません。

内乱<sup>きざし</sup>の萌<sup>も</sup>があるの、民心が危険だのと。

帝

自己の安全を謀るのが、利己主義の教だ。

恩義も情誼も、義務心も名誉心もない。

罪惡<sup>み</sup>が盈<sup>み</sup>ちて来ると、隣家の火災で

身を焼くと云うことが分からぬのか。

上將軍

二人目のが帰つて来る。そろそろと降りて来る。

あの疲れ切った兵卒は、手足が震えているらしい。

## 第二の間牒

最初は面白半分の暴行が、

怪しげにはかどるのを見ていました。

そのうちに思い掛けず、急劇に

新しい帝王が擁立せられました。

それから群集が指図どおり通の路を取つて、

野原を進んで参るようになりました。

押し立てられた偽朝の旗に、

皆附いて来るのです。羊のような根性の奴等が。

## 帝

僭号を称える奴の出来たのは、己の利益だ。

己が帝王だと云うことが、これで切に感ぜられる。

単に一軍人として己は甲よろいを著たが、

今それが高遠な目的があつて著たことになった。

今まで己ははでな限の祝に出て、

10400

10405

10410



何一つ闕けた事のない時も、危険のないのが惜しかった。

お前方の流義で、己に為合しあいを勧めた。

あの時己は胸を躍らせて、中世の為合の気分になっていた。

もしお前方が疾とつくに戦争に反対しなかったら、

己は今頃大手柄を顕もよおしよるしているだろう。

またいつかの催もよおしよるの夜、鏡に向うように火の境を覗いて見て、

その火と云うものが恐ろしく肉薄して来たとき、

己の胸には独立特行の決心が附いた。

あれは幻影だが、しかし偉大な幻影だった。

己は夢現の境に、勝利と名誉とを夢みた。

当時等閑にして過した事を、己は今取り返したい。

（偽帝の挑戦に応ぜんとして使を発す。ファウスト甲を著、半ば鎖せる鍪かぶとを戴き、

三人の有力者上に記せる衣裳を著、武具を取り装ひて登場。）

ファウスト

多分お叱しかりはあるまいと存じて、参著しました。

10415

10420

危険はなくても、御用心はおありなさるが宜しいでしょう。

御承知の通、<sup>とお</sup>山の中の人民は平生物を案じて、

岩に現れた自然の文章を読んでいます。

もう疾つくに平地を遁れた霊どもは、常よりも

岩石に同情を寄せています。霊どもは

金<sup>きん</sup>氣をたつぷり帯びて立つ、尊<sup>き</sup>い氣の中で、

迷路のような谷間に潜<sup>ひそ</sup>んで、密かに働いています。

その唯一の欲望は、絶えず分析したり、湊合したり、

試験したりして、新しい物を発見したがるに過ぎませぬ。

霊の力の静かな指で、

透き徹る形を築き上げて、

その結晶の永遠な沈黙の中に、

<sup>うへ</sup>上の世界の出来事を窺うのです。

帝

それは己も聞いている。お前の詞<sup>ことば</sup>に謊はあるまい。

10425

10430

10435

だが、それがこの場でなんの用に立つのか。

フアウスト

サブスの裔すえの魔術師で、ノルチアに住んで

いるものが、あなたに誠実に帰服しています。

昔あの男は恐ろしい否運に迫られていました。

もう焚たきつけ附ほのおがばちばち云つて、の舌が閃きました。

体の周囲まわりに積み上げた、乾いた薪には

児ちゃんや硫黄の棒が交ぜてあつたのです。

神も人も悪魔ももう助けようのなかった時、

御威勢が燃ゆる鎖を絶ちました。

ロオマでの事でした。それをひどく恩に被きて、

あの男はあなたの前途に目を著けています。

あの時から自分の事は考えずに、ただあなたの

お為ために、天文を觀、深秘を探っています。

あれが御救助に参るようにと、火急の用事を

10440

10445

10450

わたくし共に托しました。山の力は偉大です。  
あそこで自然が、自由に非常な力を展のすのを、  
魯おろな僧侶共は魔法と申すのです。

帝

祝の日に機嫌好く遊びに機嫌好く来る客を  
出迎えて挨拶するときでも、あの押し合い  
急せぎ合いして、一人毎にその間まを狭める客を、  
こつちでは歓迎する。それとは違つて、

運命の秤はかりがどちらに傾くかと云う、  
心許ないその日の朝、力強く身方を助けようと、  
わざわざ出て来る、忠実な人なら、

己は此上もなく歓迎しなくてはならぬ。

とは云うものの、大切なこの刹那には、

抜かれるのを待つ刀かたなから、勇ましい手も引いて貰わんではならぬ。

敵身方と立ち別れて、数千の人が争っている、

10455

10460

10465

この刹那は尊敬して貰わんではならぬ。

独立するのが男だ。宝冠玉座を望むものは、

自身にそれだけの値打がなくてはならぬ。

己に刃向かつて起つて、帝だの、この国の主だの、<sup>ぬし</sup>

大元帥だの、百官の司だのと、

僭称している非類は、

この手一つで死の国へ衝き落さんではならぬ。

ファウスト

それはそうでもございましょうが、大事を成そうと思召すには、  
<sup>こつべ</sup>と

首を賭することは宜しゅうございますまい。

あの胄と云うものは鶏冠<sup>とさか</sup>や立毛<sup>たてげ</sup>で飾つてあるではございせんか。

あれは人の勇気を励ます頭を保護する武具です。

頭がなくては、手足は何になりますよう。

頭が寐入れば、体は皆萎える。

頭が傷けば、体は皆傷く。

10470

10475

頭が<sup>い</sup>えれば、体は皆えるのです。

10480

それゆえいざと云う時には、腕はすぐ己<sup>おの</sup>が強さを利用して  
盾を挙げて頭を禦<sup>ふせ</sup>ぎ、

刃はすぐ自分の職務を心得て、

受け流してはまた切り込みます。

丈夫な足も幸運な仲間をばはずれまいと、

10485

打たれた敵の項<sup>うなじ</sup>を踏みます。

帝

己の怒もその通<sup>とお</sup>り。驕<sup>う</sup>った敵の素<sup>す</sup>首<sup>こうべ</sup>を、  
足の台<sup>だい</sup>にして遣<sup>や</sup>りたい。

使者等（帰り来る。）

わたくし共は余り優待もせられず、  
余りお役にも立ちませんでした。

10490

手強い、立派な、こちらの口上<sup>くさし</sup>を、  
先<sup>さき</sup>では古い洒落だと申して笑いました。

「お前の所の帝王はもう行方不明になったのだ。

その谷間に<sup>こだま</sup>銜響がしている。

あれが記念は何かと云えば、お伽話に云う通<sup>とおり</sup>、

昔々あったとさだ」なぞと、無礼を申しまして。

ファウスト

それでは動かぬ忠義の心で、お側にいる

我々の望どおりになったのだ。

あれ、あそこに敵が寄せます。身方はきおつて待っています。

攻撃をお命じなさい。好い時期です。

帝

ここでは己は指揮をすまい。

(上將軍に。)

責任は、侯爵、やはりお前の手に委ねて置こう。

上將軍

そんなら、右翼、さあ、進め。

10495

10500

丁度今坂道に掛かっている、敵の左翼は、  
もう一足と云う所で、<sup>ため</sup>験された忠誠の  
壮んな力に譲らんではなるまい。

10505

## ファウスト

それではどうぞ、この元気な物共を、  
すぐあなたの戦列に加えて、  
隊の士卒と深く入り交らせ、  
一つになって、大きい伎倆を揮わせて見て下さい。

10510

(ファウスト右の方を指す。)

## 喧嘩坊(進み出づ。)

己に顔を向けた奴は、上 と下 とが碎かれた上でなくては、  
顔を向け換えることは出来ぬ。

己に背中を向けた奴は、<sup>あたま</sup>頸と頭と髪<sup>たちま</sup>の毛とが  
忽ちぐにやりと項に垂れる。

そこでわたしが荒れる通に、<sup>とわり</sup>

10515



お前様の兵卒が棒や刀かたなを振り廻したら、  
敵は自分の血の中に

一人々々倒れましょう。（退場。）

上將軍

中央部隊は徐かに続いて、  
十分の威力を以て、巧に敵に当たってくれ。  
あの少し右の方では、敵がもう奮起して、  
我軍の計画を動揺させているのだから。

ファウスト

（中央の有力者を指さす。）

そこでこの男にも御命令を受けさせてお貰申したい。  
素早く、傍はたを鼓舞して猛進する男です。

はやり（進み出づ。）

官軍の勇氣には、

分捕熱も加わらなくてはいけません。

偽<sup>にせ</sup>皇帝の贅<sup>ぜい</sup>沢な幕の中を、  
皆に目<sup>め</sup>当<sup>あ</sup>にさせるが好<sup>い</sup>い。

もう長くは椅子の上で、きやつも息張<sup>いきは</sup>つてはいられまい。  
どれ、その隊の先頭<sup>せんとう</sup>に立ちましよう。

陣中の女商人はやえ

（はやとりに寄り添<sup>よ</sup>ふ。）

わたしこの方<sup>かた</sup>のお上<sup>かみ</sup>さんにはなっていないが、  
やつぱりこの方<sup>かた</sup>が一番好<sup>すき</sup>な人なのよ。

わたし達の取<sup>とり</sup>入<sup>いれ</sup>をする好<sup>い</sup>い秋<sup>あき</sup>が来<sup>き</sup>たのね。

女は握<sup>にぎ</sup>るときは凄<sup>すご</sup>いもので、

取<sup>と</sup>るに遠慮<sup>えんりょ</sup>はしませんわ。

勝軍<sup>しょうぐん</sup>にはいつも先<sup>さき</sup>へ出<sup>で</sup>てよ。どんな事でも出<sup>で</sup>来るから。

（二人退場。）

上將軍

兼ねて予期<sup>よき</sup>していた通<sup>とお</sup>、敵<sup>てき</sup>の右翼<sup>うよく</sup>は我<sup>われ</sup>左翼<sup>さよく</sup>に

猛烈に衝突して来た。あの狹隘の岩道を

是非取ろうとして奮進する敵兵に、

身方は一人々々抗抵するに違ない。

ファウスト（左の方を揮く。さしまね。）

そこでどうぞこの男もお見知置みしりおきを願います。

強い物に強い物の加わるのは、損のない道理ですから。

かたもち（進み出づ。）

左翼に御心配はありません。

どこでもわたしがいさえすれば、持った物は亡くさない。

昔の話にある通とお、稲妻の火が落ちて来ても、

わたしの持った物は放しません。（退場。）

メフィストフェレス

（上の方より降り来る。）

さあ、御覧なさい。あの背後うしろの方で、

どのいつつした岩穴からも、

10540

10545

武装した兵隊が押し合つて出て来て、  
元から狭い山道を一層狭くしています。

10550

甲冑に、太刀と盾とで、  
身方の背後に石垣を築いて、相図をすれば打つて出る  
用意をして待つています。

（小声にて解事者等に。）

どこから連れて来たなんぞと、野暮を言うのじやありませんよ。  
無論わたしはぐずぐずせずに、

10555

あたり近所の甲冑蔵をさらけ出した。

あれでも徒歩立かちだちもあり騎馬もあり、

まだこの世の物らしい風をして蔵の中に立つていた。

昔は騎士だ、帝王だと云っていたのだが、

今は蝸牛でむしの殻ばかりだ。

10560

その中へ色々な怪物が潜り込んで、支度をして、  
中昔をそのままに、蘇らせて見せるのだ。

中実<sup>なかみ</sup>は悪魔の小僧でも、

この場はやんやと云わせるのだ。

(声高く。)

御覧なさい。打ち合わぬうちから勇氣を出して、  
急<sup>せ</sup>ぎあつて、金物<sup>かなもの</sup>をからから云わせています。

旗竿に結んだ旗のちぎれも、爽かな風に

吹き靡<sup>なび</sup>けて貰いたがつて、あんなにじれています。

昔の勇士が今様の戦争に出たがつて、

待ち構えているのだから、どうぞ察して遣つて下さい。

(上の方より恐ろしき金笛の音聞ゆ。敵軍たじろく。)

ファウスト

地平線は暗くなつた。

ただここかしこに意味ありげな

赤い火の光が見えるばかりだ。

もう刃が血に染まつて光っている。

岩も、森も、吹く風も、

10575

大空さえも我軍を助けるのだ。

メフィストフェレス

右翼はしつかりこたえている。

中にも目立って見えるのは、あの素早い大男の

喧嘩坊のハンス奴が、

あいつの流義で働いているのだ。

10580

帝

最初は腕をただ一本振り上げたと思ったが、

もう十二本も振り廻している。

只事ではないな。

ファウスト

あのシチリアの海岸に立つと云う

霧の話をお聞ききになつたことはありませんか。

10585

あそこでは昼の空に清くゆらいで、

丁度空そらの中程の高さに、

特別な蒸氣に映って、

不思議な影が見えます。

市街が見えたり隠れたりする。

庭園が浮いたり沈んだりする。そう云う画図えずが次々に、

瀨氣こきを穿うがつて出て来ます。これも同じわけです。

帝

しかしいかにも心許ない。どの長い槍の尖も、

皆稲妻のように光って見える。

殊に身方の部隊の槍は、穂尖から穂尖へと、

小さい が忙しげに飛んでいる。

余り怪物臭いじゃないか。

ファウスト

お免下ゆるしさい。あれは過ぎ去った

霊なる物の名残です。

10590

10595

航海者の皆祈誓を掛ける

10600

ジオスコロイの同胞はらからの火です。

あれが今靈験の限をここで見せるのです。

帝

しかし自然が己達に對して、

不思議の限を見せるのは、

誰しわざの為業か、それが聞きたい。

10605

メフィストフェレス

別な人ではありません。

殿様の御運を胸に蓄えている、あの尊い先生です。

余りきびしい迫害を、敵が御身に加えるので、

先生は心からおこっています。

よしや自分の身は棄てても、あなたを助けて

10610

御高恩に報いたいと云っているのです。

帝



そう云えば、いつか人民が謹呼<sup>かんこ</sup>して、己を連れて廻つてくれた時、己も己の威勢<sup>たいめ</sup>を験<sup>た</sup>して見たいと思つたので、好<sup>よ</sup>い機会と見て、思案もせず、

あの親爺の白鬚に涼しい風を送つたまでだ。

無論坊主共は慰<sup>なぐさ</sup>をし損ねて、

あれからは己の事を好く思わなくなつた。

それに何年も立つてから、

あの時喜んでした事の報<sup>むくい</sup>に、今ここで逢うのかなあ。

ファウスト

心から出た善行の報<sup>むくい</sup>は次第に大きくなります。

どうぞ一寸上の方を御覧下さいまし。

今先生が何か相図<sup>あひづ</sup>をせられそうです。

お氣をお附<sup>つけ</sup>なさいまし。今それが現れます。

帝

や。空高く舞う鷺の跡を、すさまじい勢で

10615

10620

グリップス鳥が追い掛けおる。

10625

ファウスト

気を附けて御覧なさい。善兆です。

昔話にばかり聞く

グリップス鳥の分際で、

まことの驚と戦うとは。

帝

今は大きい輪をかいて、二羽が覗い寄っている。

10630

それと見る間に

もう双方から飛び附いて、

頭や胸を掻き裂こうとする。

ファウスト

御覧なさい。あの笑止なグリップス奴は、

引つ掻かれ、引つ裂かれ、身を傷<sup>そこな</sup>うばかりで、

10635

とうとう獅子の尾を垂れて、

あの絶頂の森の中へ飛び込んでなくなりました。

帝

なるほど、お前の判断する通とおりかも知れぬ。

不思議ではあるが、さもあるうか。

メフィストフェレス（右に向きて。）

数度の突撃が功を奏して、

敵は余儀なく退却します。

まだ覚束ない抗抵を試みながら、

右へ右へと崩れ掛かり、

その乱戦の結果として、

主力の左翼に混乱を来します。

我部隊の、堅固な前列は

右に方嚮ほうこうを転ずるや否や、

電光の如くに敵軍の虚に附け入ります。

あれ、双方の大軍が、

10640

10645

暴風<sup>あらし</sup>に打たれる波のように、

火花を散らして奮闘します。

これより花々しい軍は想像にも及びません。

この会戦には勝ちましたね。

帝

(左側にてファウストに。)

あれを見い。あそこが己には心許ない。

あそこの我拠点がどうもあぶない。

礫の飛ぶのも見えぬ。

低い岩には、もう敵が上<sup>のぼ</sup>っている。

上の岩はもう身方が棄てた。

あ、今だ。敵の一団が

次第に肉薄して来た。

もうあの狭隘を取ったかも知れぬ。

祝福のない努力の結果はこれか。

10650

10655

10660

お前方の奇術も徒勞であつたぞ。

(間。)

メフィストフェレス

はあ。あそこへわたしの二羽の鴉<sup>からす</sup>が来ました。

なんの便<sup>たより</sup>を持って来たやら。

悪い知らせでなければ好<sup>い</sup>いが。

帝

笑止な鳥奴。何をする気か。

あの岩の上の激戦の中から、

黒い帆を揚げてこつちへ来おる。

メフィストフェレス

(鴉等に。)

さあ、己の耳の側へ来て止<sup>と</sup>まれ。

お前の保護してくれるものが、滅びると云うことはない。

お前の献策は道理に愜<sup>かな</sup>つてゐるからな。

10665

10670

ファウスト（帝に。）

鳩と云う鳥が、餌を貰い子を育てる巢へ、  
遠い国から帰ることは、

あなたも聞いておいでしよう。

ここに大事な差別があります。

平和に鳩の便があれば、

軍には鴉の使があります。

メフィストフェレス

これは重大な悲報に接しました。

あの岩角で我勇士が

難儀しているのを御覧なさい。

手近な高地はもう敵が占めました。

あの狭隘が敵手に落ちると、

身方の立場は困難です。

帝

10675

10680

やはり己は騙されたのか。

10685

お前方は己を網に入れた。

その糸が身に絡むのを、己は気味悪く思っているのだ。

メフィストフェレス

御落胆なさいますな。まだ敗北はいたしません。

耐忍と機智とは結局まで入用です。

末になって来ると、事情は切迫するものです。

10690

わたくしは慥かな斥候を持っています。

命令権をわたくしにお授下さい。

上將軍

(この隙に歩み寄る。)

この人達と御結託なされたのを、

わたくしは疾うから心配していました。

幻術では堅固な幸福は得られません。

もうこの戦況を一転する策はない。

10695

為しはじ始めた人が片を附けるが好よい。

わたくしは指揮の杖をお返し申しましょう。

帝

いやまた好運の向いて来ることもあるうから、  
それまで杖はあずかつて置け。

10700

己はあの忌々しい情報や、

この男の鴉からすづきあい附合いやが厭でならぬ。

（メフィストフェレスに。）

どうもお前に杖は遣られぬ。

お前は適任の男ではなさそうだ。

だが命令はしても好い。救われるものなら救ってくれ。

10705

まあ、どうにかなるようになる事だろう。

（上將軍と共に帷幄の中へ退場。）

メフィストフェレス

そんならあの鈍い棒に身を護つて貰うが好い。



己達にはあんな物は余り役に立ちそうでない。  
なんだか厭に十字架に似ているて。

ファウスト

そこでどうする。

メフィストフェレス

もうする様になります。

さあ、黒い従弟共、急用だ。お前達は山の<sup>おおみづうみ</sup>大湖に往つて、  
ウンジネに己から宜しくと云つて、

水の影を借りて来てくれ。

なかなか学びにくい女の奇術で、

あいつ等は物の体と影とを分けて使う。

所で誰が見てもその影を体だと思ふから妙だ。

(間。)

ファウスト

あの鴉共が水の少女に<sup>おとめ</sup>

10710

10715

心しんからお世辞を言つたと見えるな。

あれ、もうあそこへ流れて来出した。

方々の水みづ気のない兀岩の上に、

たつぷり泉の早瀬が涌く。

敵の勝利ももう駄目だ。

メフィストフェレス

随分意外なお待受ですから、

どんな大胆な登のぼり手も途方に暮れるでしょうて。

ファウスト

もう一本の小川こがわが何本にもなつて、勢強く流れ落ちる。

谷間に隠れては、倍の水みづ嵩かさになつて出て来る。

一本の滝になつて、弓なりに落ちる。

それがまた忽ち平たいちな、幅広な岩の上に広がつて、

しぶきを飛ばして、あらゆる方角へ流れて、

段々になつて谷底へ落ちて来る。

10720

10725

10730

大胆に男らしく抗抵した所で、なんになろう。

大波が押し流そうとして寄せるのだから。

こうひどく溢れて来ては己までがぞつとする。

### メフィストフェレス

わたしなんぞにはその水の贗物にせものは丸で見えません。

騙されるのは人間の目だけだ。

わたしはこの不思議な出来事が面白くてなりません。

やあ。群になって逃げ出しますね。

馬鹿共は水に溺れるかと思うのだ。

陸おかにいるのに、為方しかたで、水を吹き出す真似をして、

滑稽な、泳ぐような身振をして駈けている。

もう全軍の騷擾そうじょうになった。

### (鴉等再び来る。)

お前達の事を大先生の所で褒めて遣る。

だがここで自分が先生になって遣って見る気なら、

これから火を焚いている鍛冶屋へ往け。

あの一寸坊共が、草臥くたびれると云うことなしに、

金や石を赤く焼いて敲たたいている所なのだ。

そして随分念の入った口上を言つて、

黒くろ人の消さずに焚いているような、

ぴかぴか光る、ぱちぱち鳴る火を所望して来るのだ。

遠い空の稲妻や、

一番高い所から瞬く隙に落ちる星は、

夏は毎晩見られましょう。

だが木立の茂みの中で稲妻がしたり、

湿った土に打ぶつ附かつて星がしゅつと云うのは、

そうめつたには見られまい。

そこでお前達、何も大して面倒を見なくても好いいが、

最初は丁寧せりふに頼んで見て、それから出せと指図するのだ。

(鴉等退場。白の通の事共実現す。)

10745

10750

10755

メフィストフェレス

敵は目の前が真つ暗だ。

一足踏むのも心許ない。

どこの隅にも鬼火が燃える。

出し抜けに目映まばゆい光物がする。

そこいらは皆至極好い。

この上何かこわい音でもさせようかな。

ファウスト

あの蔵の穴から出されて来た空洞うつろな武具が、

外の風そとに当って気丈夫になつたと見えて、

あそこの高い所で、さつきからがたがたかちやかちや、

不思議な怪しい音をさせているなあ。

メフィストフェレス

そうです。もう止とめても止とまりませむ。

結構な昔の世に戻つたように、

10760

10765

騎士らしく打って廻る音が、もうここへ聞えますね。

10770

籠手こてやら脛すねあて当やらが、

ゲルフェンになり、ギベルリイネンになつて、

永遠たまたかいな闘たたかいを繰り返す。

先祖から受けた習慣で、頑強に遣つていて、

構話くわなんぞは誓つてしない。

10775

もう物音が大幅がつて来た。

悪魔の手伝う催しは皆そうだが、

しまいに功を奏するのは党派ぞうおの憎悪どくおで、

止めとどを刺すまでそいつを息やめないのだ。

なかなか気持悪く、人に驚慌を起させるように、

10780

どうかするとまた大袈裟に、悪魔らしく威して、

物音を谷々へ響き渡らせますね。

（奏楽団の初め戦争の騷擾を学びたるが、終に晴やかなる軍楽の音に變ず。）

僭帝の帷幕いはく

玉座。奢侈しゃしなる周囲の装飾。

はやとり。はやえ。

はやえ

とうとう一番先へここへ来たのね。

はやとり

己達より早くは鴉からすにも飛べまいよ。

はやえ

まあ、好い物がうんとあるわねえ。

どれを先に取りうかしら。どれを跡にしようかしら。

はやとり

ほんに幕の中に一ぱいあるのだから、

己にもやつぱり手が著かない。

はやえ

この敷物なんか丁度好いわ。

わたしどうかすると随分ひどい所に寝るのだから。

はやとり

ここに鋼鉄<sup>はがね</sup>で宵の明星が拵えてある。

己はとうからこんな物が欲しかったのだ。

はやえ

この金糸で縁を取った緋の引廻しね、

こんなのが疾<sup>と</sup>うから欲しかったわ。

はやとり

(武器を手にする。)

こいつはこれで重宝だぞ。

人を敲<sup>たた</sup>き切つて置いて、先へ出られる。

お前もう随分たくし込んだが、

まだ何一つろくな物は取らないなあ。

10790

10795



そのがらくたはそこに置いて、  
この箱を一つ持つて行け。

10800

これは兵隊に払う給金で、  
中実<sup>なかみ</sup>は金貨ばかりだ。

はやえ

まあ、恐ろしく重いこと。

わたしには持ち上がらないわ。

はやとり

早くしやがめよ。しやがむのだよ。

10805

己が背中へ背負<sup>しよ</sup>わせて遣る。

はやえ

おう痛。わたしもう駄目よ。

重くて腰が折れそうだわ。

（箱転がり落ち、蓋開く。）

はやとり

見ろ。金貨が一ぱいだ。

早く取らねえか。

はやえ（蹲る。<sup>うすくま</sup>）

早くこの前掛にしやくい込んでおくれよ。

この位持つて行けばかなりあるわねえ。

はやとり

それが好<sup>い</sup>い。早くしろよ。

（女立ち上がる。）

や、大変。前掛に穴が開<sup>あ</sup>いているぜ。

立っている所<sup>ところ</sup>にも、歩いて行く先にも、

お前金<sup>かね</sup>をばら蒔<sup>ま</sup>いているじゃねえか。

我帝の護衛等

この大切な場所は何をしている。

お手元金になぜ手を著ける。

はやとり

10810

10815

なに。こつちは体を売物にして出たのだから、勝利品の割前を貰うのです。

10820

敵の天幕に來れば、これは極まりだ。  
こつちもやはり兵士だから。

## 護衛等

いや。そんな奴は我々の仲間には向かぬぞ。

兵士と盜坊とは兼ねられぬからな。

こつちの殿様の方へ来るものは、

10825

正直な軍人でなくてはならぬ。

## はやとり

所が正直と云う奴は分かつていらあ。

すぐに徵発と来るのだ。

お前さん達だつて一つ穴だ。

「よこせ」と云うのが仲間の挨拶だ。

10830

(はやえに。)

往けよ。持っている物は引き摩つて行くのだ。  
ここでは己達はもてないからな。（退場。）

#### 第一の護衛

おい。なぜすぐにあいつの横つ面を  
ぶんなぐつて遣らないのだ。

#### 第二の護衛

なぜだか己は力が抜けて手が出せなかった。  
変に怪物臭い奴等だから。

#### 第三の護衛

己もなんだか目の前に  
火花が散るようで、好く見えなかった。

#### 第四の護衛

己もなんと云つたら好いか知らんが、変だよ。  
きようは一日厭に暑くて、何やら氣になるように、  
息が詰まるように蒸々していた。

平気で立っている奴がある。遣られて倒れる奴がある。

てさぐり  
手探で歩きながら人を切る。

刀を一振振る度に、敵は倒れる。

目の前には霧が掛かっているようで、

耳はがんがん鳴っている。

始終そんな風で、とうとうここへ遣つて来たが、

どうして来たのか、自分にも分からないのだ。

帝と四諸侯と登場。

護衛等退場。

帝

どうしてこれがこうなったにしても、兎に角会戦には勝った。

逃げた敵はもうちりぢりに野原に散らばった。

玉座は空しく残っていて、絨緞にくるまれながら、

ほの  
微かに見える宝物が所狭ところせきまで置いてある。

己達はここで立派に身方の護衛を随えて、帝王の威厳を以て、

10845

10850

あがたあがた  
県々あがたあがたの使者を待ち受けるのだ。

どの方面からも好い便たよりが来る。

国内は平穩になつて、民は帰服したそうだ。

よしや戦争に幻術が手を貸したとしても、

詰まり戦うことは自分で戦つたのだ。

昔から偶然の事が軍隊たすけの助になつたことは往々有る。

隕石いんせきがある。敵陣の上に血が降る。

身方を鼓舞して、敵の心をひるまする

怪しい物音が岩穴からした例ためしもある。

敗者は殪たおれて、謗そしりは必ず下流に歸し、

勝者は榮華を受けて、助くる神たたを称う。

命令もちを須もちいずして、万民信服し、

異口同音いこうどうおんに「神よ我等汝を称う」と呼ぶ。

しかし今まで己は忽ゆるかせにし勝がちであつたが、敬虔な目を

今我胸に注いで、ここに最高の価値を認める。

10855

10860

10865

年若な、気軽な君主は徒に日を送りもしようが、  
年を取つては重大な、刹那々々の意義を考える。

10870

だから己は今すぐに、お前達四人の元勳と、

内こんだい外一切の事を掟てようと思う。

(第一の臣に。)

侯爵。軍隊の巧妙な部署をしたのはお前だ。

それから機を見て大胆な処置に出たのもお前だ。

以後は平時相応な事業をお前に托する。

10875

お前を式部卿にして、この刀をお前に授ける。

式部卿

今まで国内に働いていた、忠実な軍隊が、

玉体と御位との固に、疆を安く成る上は、

代々お住まいなさる広い城の大広間で、祭の日に

御膳部の用意をいたすことをお許下さいまし。

10880

清浄にして献上し、清浄にお給仕をいたして、

尊いお側を離れませぬ。

帝（第二の臣に。）

次には天<sup>あつぱれ</sup>晴の勇士であつて、しかも優美に、おとなしい

お前を侍従長にする。これは容易な役ではない。

お前は宮中一切の職員<sup>かしら</sup>の頭だ、好く和合せぬと、

職員が己の役に立たぬ。主君にも、同僚にも、

誰にも氣に入るようにして、これからお前

職員一同の模範になつてくれなければならぬ。

侍従長

善人をば助けて遣り、悪人にも害を加えず、

その上潔白で欺かず、沈著で偽らなかつたら、

上<sup>かみ</sup>の御意図に副<sup>かな</sup>うわけで、必ずお氣に入りましょう。

ただこの胸の中をお見<sup>み</sup>抜<sup>ぬ</sup>下されば、それだけで満足いたします。

お祭の日の事まで想像いたして宜しゅうございましょうか。

あなたが食卓にお就<sup>つ</sup>きなれば、

10885

10890



わたくしは金のお盥の耳を持っていて、お楽の央に  
折々お手をお滌なさる時、お顔を拝して喜びましょう。

帝

いや。己は今重大な事を思っていて、祭の事は  
考えぬが、それは宜しい。それも務の励になる。

(第三の臣に。)

次にお前には光禄卿を申附ける。獵の事、鳥屋、  
菜園の事は、今後お前に受け持たせる。

月々出来る物の中で、好きな物を選ぶことは  
己に任せて、料理を旨くさせてくれい。

光禄卿

味の好いものを差し上げて、御賞味あそばすまでは、  
わたくしは義務として、何も戴かずにいましょう。  
御料の季節を早めたり、遠方の品を取り寄せたり、  
厨の役人と打ち合せて、油断なくいたしましょう。

10895

10900

10905

もつと  
尤も食卓の飾にする初物はつものや珍物ちんぶつはお好きなこのみならず、  
滋養になる常の品が、お望のぞみだとは存じていますが。

帝（第四の臣に。）

どうも祭の話は所詮逃のがれられぬと見えるから、  
次には若い勇士のお前を、良醞令うんにして遣つかそう。  
その役になったからには、好い酒がたつぷりと  
いつも穴倉にあるようにいたして置け。

しかし自分は節酒して、うかと機会に誘われて、  
酔ってしまわぬようにいたせ。

良醞令

殿様の御信任さえ受けますると、若い者も、  
三日見ぬ間に、立派な男に変っています。

わたくしも一つ大宴会の時間を想像いたしましょう。  
金や銀の、美しい盃で、なるたけ立派にわたくしが  
御殿の食卓を装飾いたしますが、

しかし一番結構なお杯は御用にとつて置きましょう。

10920

それは透き徹とおつたヴェネチアの玻璃レイドロで、

なかたのしみ

中に樂が待ち受けて酒を旨くし、酔わせませぬ。

しかしさような宝を手頼たよりにいたすは尋常よのつねで、

寡欲のお徳はそれに増すお身の備でございます。

帝

この大切な日にお前達に言おうと思つた事だけは、

10925

お前達、慥たしかな口から、信じて聞いたことだろう。

綸言りんげんは重いもので、授けた物に相違はないが、

それを確めるには書物かきものがある、印璽いんじがある。

方式かたに愜かなうように、それを調べて取らする事は、

その司つかさのものが然るべき時にいたすであらう。

10930

(大司祭兼相しょうこく 国登場。)

円天井の建物も、土台の石に重おもを托して、

それで永く崩れずに立っている。

そこにいる四人の諸侯を見い。今差当り内廷を維持して行くに有利だと思ふ<sup>かどかど</sup>廉々を話していた。

国内全体の政治に関した事は、これから五人に

しつかりと申し附けて置くことにしよう。

お前達の領分は余の<sup>よ</sup>臣下より立派にしたい。

そこで己に叛いたもの共の地所を併せて、

今直<sup>す</sup>にお前達の領地界を広めて遣<sup>つかわ</sup>す。

お前達には随分結構な土地を遣つた上に、

今後譲受、買受、交換の折毎に、

それを広めて行く権利をも授ける。

その外領主として正当に行うはずの廉々は、

故障なく行うように、この場できつと許して置く。

裁判官としては最後の審判をいたして好<sup>よ</sup>い。

その審判に異議は申させぬことにする。

それから賦割、利足、献納物、道銭、租金、税金から、

10935

10940

10945

塩や鉾産物の専売、貨幣の鑄造まで、皆差し許す。

これは己の感謝の意を十分に表すために、  
帝位の次に引き上げたお前達であるからだ。

### 大司祭

一同に代つて厚くお礼を申し上げます。

我々を強く堅固になさるのも、詰まり王室のお為ためでござります。

### 帝

まだお前達五人に托する一層重い事がある。

現に己は生きていて、これからも生きていたいが、

祖宗歴代の鎖くさりは、落ち著いた己の目を、

邁まい往おうの衢みちから畏敬の道へ呼び戻す。

己もいつかは親族に別れずばなるまい。

その時は、お前達、己の世嗣よつぎを選んでくれい。

宝冠を戴かせた上、贅にえつくえ卓に登らせて、

騒がしかつた世の末を、太平に結んでくれい。

10950

10955

10960

## 相国

誇ほこりを深い胸に蔵め、敬うやまいを色あらいに表して、

人臣の最上たる諸侯がお前まえに拝伏します。

忠義の血がこの脈みなぎを漲り流れております間は、

我々は君の意志で働く、一つの体からだでござります。

## 帝

そこで最後に言つて置くが、これまで申し渡した

一切の事は、追つて書附かきつけにして、親署つかわして遣す。

総てお前達の所有物は自由に処理して宜しいが、

分割することはならぬ。それが唯一の条件だ。

また己に貰つた物を、どれだけ殖やしていようと、

それをそのままお前達の嫡子に譲つて遣つて好いよ。

## 相国

国家さかえの栄、我々の栄のため、大切なお定さだめを、

直様すぐさま、謹んで記録に留めまして、

浄書、封緘<sup>ふうかん</sup>は記録所で扱わせます。  
どうぞ御親署を遊ばして下さりませ。

帝

それでは一同暇を取らせる。大切な日であるから、  
銘々この場を引き取って、内省いたしているが好<sup>よ</sup>い。

(世俗の四諸侯退場。)

大司祭

(一人残りて、莊重に言ふ。)

相国は引き取りましても、大司祭は残りました。  
あなたのお耳に入れたい諫<sup>いさめ</sup>の情に駆られました、  
父のような心がお身の上を氣遣うのでござります。

帝

この喜<sup>よろこび</sup>の日に何の氣遣<sup>きづかい</sup>があるのか。それを申せ。

大司祭

こう云う日に、神聖な、あなたのお心が、

10975

10980

悪魔と結托しておいでなさるのを、いかにも苦痛に存じます。

無論見掛<sup>みかけ</sup>は御位<sup>みくらい</sup>が安全なようでござりますが、

惜むらくは主<sup>しゅ</sup>や法王の祝福がおりなさりません。

法王がもしお聞<sup>きき</sup>になつたら、すぐに神聖な御權威で、

罪の深いこの国をお罰しになりましょう。

あなたが戴冠式の日<sup>すくい</sup>に、今殺そうと云う悪魔師を、

お救<sup>すくい</sup>になつたことを、法王はまだお忘<sup>わすれ</sup>にはなりませんから。

お冠から出た、特赦の第一の光は、

クリスト教世界に危害を与え、咀<sup>のろ</sup>われた人の頭<sup>こうべ</sup>に落ちました。

どうぞお胸<sup>むね</sup>にお問<sup>と</sup>になつて、擅<sup>ほし</sup>に受けられた

この幸福の一分を、ロオマへお返しなさりませ。

あの悪魔がお身方をしに出て参つて、

あなたが偽貴族の甘い詞<sup>ことば</sup>をお聴<sup>きき</sup>納<sup>いれ</sup>になつた時、

あなたの帷幕の張つてあつた、あの一帯の丘陵を、

過を悔いて、敬虔に、ロオマへ御寄附なさりませ。



山や茂った森の広がっている限、

肥えた牧場になつてゐる高地も、魚の多い、澄んだ湖水も、

迂<sup>まが</sup>りながら急いで谷に灌<sup>そそ</sup>ぐ、無数の小川<sup>こがわ</sup>も、

下の牧場や、原や、谷<sup>たにあい</sup>合になつてゐる、広い低地も、

そつくり御寄附なさりませ。そうなされたら、お詫が愜つて、

お赦免になるでございましょう。

帝

いや。思い掛けぬ失錯を教えられて恐<sup>きようく</sup>懼に堪えぬ。

寄附の地所の境界は、お前勝手に極<sup>き</sup>めてくれい。

大司祭

先ず取り敢えず、あの罪惡の場所であつた、

咀われた土地を、なるべく早く、尊い祭の場所にすると、

御沙汰をなされて下さりませ。厚い石壁<sup>たちま</sup>が忽ち聳え、

歌者<sup>かしや</sup>の座に朝日がさし込み、段々建て添えられる寺院が

十字形に広がり、信者のいる中<sup>ま</sup>の間が延び、高まり、

11000

11005

歓喜する信者の群が、

11010

熱心に立派な門から籠み入って、

天に聳立つ塔の上から、鳴り響く第一の鐘の音が、

山にも谷にも聞え渡り、再造の恩が受けたさに、

懺悔ざんげの民が寄って来るのが、もう心に浮んで来る。

どうぞこの霊場の落成の日に早く逢いたい。

11015

上かみの御臨場が当日の最大の光榮でござりましょう。

帝

なるほど神の徳を称え、己の罪障を消滅させるには、

そんな大工事で、真心を広く知らせるも好かろう。

好よい。己の心の澄んで来るのが、もう分かるようだ。

大司祭

御決裁と文書の作成とを、相国としてお願申します。

11020

帝

その寄附の合式証書をお前作って、己の前へ持って来い。

己は喜んで署名をいたして遣す。

大司祭

(暇乞して起ち、出口にて顧みる。)

さて追つて出来上がりまする寺院には、

十分<sup>ぶ</sup>一金、利足金、上納金など、一切の租税を、

永遠に御免除下さりませ。立派に維持してまいるにも、

綿密に経営いたすにも、大した費用が掛かります。

かような荒地へ、至急に工事をいたすには、

戦利品の財宝を多少お下渡<sup>さげわた</sup>し下さりませ。

その外遠方の材木、石炭、スレエトなんぞを使うと申すことも、

申し上げずには置かれません。

運搬だけは、説教いたして、人民に負担いたさせます。

冥<sup>みよう</sup>加<sup>が</sup>のために運んで来て、祝福を受けるのでござります。

(退場。)

帝

11025

11030

いや。己の身に負った罪は重くて大きい。

風来の魔法使奴が己にえらい迷惑を掛けおった。

大司祭

（また帰り来て、最敬礼を行ひつゝ。）

今一つ申し上げます。あの評判の悪い男に、

全国の海岸をお遣しになりましたね。

11035

あそこの十分<sup>ぶ</sup>一金、利足金、上納金、一切の租税も、懺悔の思召で、寺院へ御寄附なさらぬと、あの男が寺院の罰を受けます。

帝（不機嫌に。）

あれはまだ海の底で、土地にはなっていないのだ。

大司祭

権利を戴いて忍耐していれば、時節が参るのでござります。

11040

お詞は有功だと、わたくし共は心得ておりましたよう。

（退場。）

帝（一人残る。）

あの様子では国を皆遣つても満足はすまいなあ。

## 第五幕

開<sup>かい</sup>豁<sup>かつ</sup>なる土地

旅人

うん。あれだ。あの勢の好い、  
茂った古木の菩提樹だ。

11045

こんな長旅をして来て、  
またあれを見ることがか。

波風に、あの沙<sup>すな</sup>原<sup>はら</sup>へ

打ち上げられた時、

己<sup>やど</sup>を舍<sup>やど</sup>してくれたのはあの小屋<sup>こや</sup>だ。

これが昔の場所なのだ。

11050

実に祝福して遣りたい主人あるじであつた。

人を助けることの好すきな、正直な夫婦だつた。

しかしあの時もう大ぶ老人であつたから、

もう再会することは出来まい。

ああ。ほんに敬虔な人達であつたなあ。

戸を叩こうか。呼んで見ようか。おい。

今も猶客なわを好んで、積善の余慶を受けているなら、

己の挨拶を聞いてくれい。

おうな  
媼バウチス

(甚だ老いたり。)

お客様。お静かになすつて下さいまし。

爺じい様を休ませて下さいまし。

年寄は長く寐なくてはちよいと寤さめている間に、

しつかり働くことが出来ませぬ。

旅人

11055

11060

おばさん。昔御亭主と一しよに、  
若いものの命を助けて下さったのは  
あなたですか。その時のお礼を

11065

聞いておもらい申したいのですが。

半分死んでいた、わたしの口を、

まめに養って下さったバウチスさんはあなたですか。

(翁登場。)

わたしの荷物を、骨を折って、波間から

引き上げて下さったフイレモンさんはあなたですか。

11070

あの恐ろしい、不慮の事の跡始末は、

あなた方に、あなた方の所の

手早く焚き附けた火の光に、

白金しろがねのように鳴った鐘の音に任せてあったのだ。

そこでわたしに今一度外そとへ出て、

あの果はてのない海を見渡させて下さい。

11075



わたしに据わって祈禱をさせて下さい。  
わたしは胸が一ぱいになっているから。

(旅人沙原に歩み出づ。)

おきな  
翁フイレモン(媼に。)

晴やかに花の咲いている、あの庭へ  
急いで食卓の用意をおし。

11080

お客は走り廻って、驚いていても好い。  
目で見ながら、不思議に思っているのだから。

(旅人の傍に来て立つ。)

荒波がしぶきを飛ばして、

お前さんをひどい目に逢わせた海が、

花園のようになっているのが見えますでしょう。

11085

天国のような画図えずになつて見えるでしょう。

わたしも年を取って、もう昔のように手ぐすね引いて  
人を助けようとしてはいられません。

わたしの力の衰えるに連れて、  
波も遠く沖の方へ引きました。

11090

賢い殿様の、大胆な御家<sup>けらい</sup>隸衆が、  
溝を掘って、土手を築いて、

海の権力を狭めて、

代って主<sup>ぬし</sup>になろうとせられます。

並んで緑に栄える牧場や、草苅場や、

11095

畑や、村や、森の出来たのを御覧なさい。

だが早くあちらで何か上がって下さい。

もう今に日が入ってしまします。

あのですつと遠くに帆が見えていますね。

夜泊<sup>よる</sup>まる港を搜しているのでしょうか。

11100

鳥だつて<sup>ねぐら</sup>罫は知っていますから、

今あそこに出来ている港をさして行くのでしょうか。

あの遠くに青い縁<sup>へり</sup>の見える、

あそこがやつと海なのです。

右も左も、広い間が<sup>あいだ</sup>

皆賑やかな人里になっています。

（庭にて三人卓を囲みて坐す。）

媼

なぜあなたは黙っていて、お中<sup>なか</sup>が透いていまいしょうに、一口も物を上がりませんか。

翁

あの不思議な話が聞きたいと仰やるのだ。  
話の好<sup>すき</sup>なお前が言ってお聞せ申すが好<sup>い</sup>い。

媼

そうですね。奇蹟だとも申しましようか。  
今になつてもわたくしは気が鎮まりません。  
どうもあの出来事は

正<sup>しょうとう</sup>当な事ではございませんからね。

## 翁

でもこの海岸をあの方<sup>かた</sup>にお授<sup>さずけ</sup>になつたお上<sup>かみ</sup>が、  
なんで罪の深い事をなされよう。

11115

その御沙汰はお使<sup>つかい</sup>が鳴物を鳴らして触れて

この家の前をも通つたじやないか。

工事に手を著けられた場所は、

この沙原から遠くない所でございました。

11120

天幕や小屋が最初に出来ましたが、

間もなく草木<sup>くさき</sup>の緑の中に、立派な御殿が立ちました。

## 媼

昼間<sup>ひるま</sup>は御家隸達が鋤鉤を使つて、

無駄に騒いでばかりお出<sup>いで</sup>になるようでしたが、

夜<sup>よる</sup>沢山火が燃えていた跡に、

11125

翌日は立派に土手が築<sup>つ</sup>いてございました。

牲<sup>にえ</sup>にせられて血を流した人達があつたとかで、

夜<sup>よ</sup>苦しがつて泣く声がいたしまして、

海の方へ火が流れて参つたと思ひますと、

朝はそこが溝になつておりました。

不人情な檀那で、この小屋や地面を

欲しがつてお出になります。

隣で息張<sup>いば</sup>つていらつしやるので、

こちらではただ恐れ入つていなくてはなりません。

翁

でもこの地面の代<sup>かわり</sup>に、新しく拓いた土地の

立派な場所をくれようと仰やつたのだ。

媼

あんな海であつた土地を頼<sup>たのみ</sup>におしでない。

やはりこの高い所を持ちこたえている事ですよ。

翁

さあ、みんなでお堂<sup>どう</sup>へ這入つて

夕日の名残を惜みましょう。

そして鐘を撞いて、据わって、お祈いのりを上げて、  
昔からの神様にお縋すがり申しましょう。

11140

## 宮殿

広き遊苑。真直に穿うがちたる大溝渠こうきよ。

老いさらぼひたるファウスト沈思しつゝ歩めり。

望楼守リンケウス

(通話筒にて話す。)

日は入り掛かる。

遅れた舟が面白げに港に這入って行く。

大きな舟が一艘、

掘割ほりわりをこちらへ来掛かっている。

11145

いろど 彩った旗が心地好く靡いて、

強い檣ほばしらがいつでも用に立つように聳えている。

お前に乗り込んでゐる船長は嬉しい事だろう。

福ふくがお前を待ち兼ねてゐるだろう。

すなはち (沙原にて撞く鐘の声す。)

ファウスト

(耳そぼだを欻くつ。)

また咀のろわれた鐘の音ねがする。

不意に矢を射掛けるように、ひどく己きずを傷けおる。

目の前には己の領地が果はてもなく横わつてゐるのに、

背後うしろからは懊おう惱のうが己おのを擲から揶かう。

物もの妬ねたみの聲がこんな事を思い出させる。

己の立派な領地は不浄だ。

あの菩提樹の岡、茶いろの家、朽ちそうになった、あの寺は

己のではないと思ひ出させる。

保養にあそこへ行つて見ようと思つと、  
余所々々しい影が己に身みづるい顫をさせる。  
あれは目に刺された刺とげ、足の蹠うらの刺とげだ。  
ああ。こんな所にはもういたくない。

望楼守（同上。）

あの彩つた舟が、

爽かな夕風に気持好く帆を揚げて近寄ること。

どんなにか堆うずたかく、大箱、小箱、囊などを積み上げて、  
急いで持つて来るだろう。

外国の産物を、豊富に、雑駁に積みたる華麗なる舟。

メフィストフェレス。三人の有力者。

合唱の群

それ、陸揚りくあげだ。

それ、もう著いた。

わが保護者に、



わが主<sup>しゅさいわい</sup>に幸あれ。

11170

(陸に上りて、荷を陸に運ぶ。)

メフィストフェレス

これで運<sup>うんだめし</sup>験をしたと云うものだ。

檀那さえ褒めてくれれば、万歳だ。

たった二艘の舟で出て、

二十艘にして港へ帰った。

大した為事<sup>しごと</sup>をしたと云うことは、

11175

積荷を見れば分かるのだ。

自由な海は人の心を解放する。

思案なんぞを誰がしているものか。

なんでも手ばしこく攫<sup>つか</sup>むに限る。

肴も捕<sup>と</sup>れば舟も捕る。

11180

舟三艘の頭<sup>かしら</sup>になると、

四艘目の舟も、鉤索で引き寄せる。

お気の毒だが、五艘目も助からない。

暴力のある所に正義は帰する。何を持っているかが問題だ。

どうして取ったかは問題にならぬ。

ふないくさ  
舟軍と貿易と海賊の為事とは、

分けることの出来ない三一団体だと云うのが嘘なら、

己は航海業の白人だ。

三人の有力者

礼も言わねば挨拶もせぬ。

挨拶もせねば礼も言わぬ。

檀那に臭い物でも

持つて来て上げたようだ。

檀那は厭いやな

顔をなさる。

王者の獲えものも

お気には入らない。

11185

11190

11195

メフィストフェレス

此上御褒美を貰おうと

思っているなら、間違だ。

てんでに取るだけの物は

取っているじゃないか。

有力者

あれはその折々の

退屈凌ぎだ。

割前は平等にして、

もらわなくては。

メフィストフェレス

何より先に

宝<sup>たからもの</sup>物を

上<sup>うえ</sup>の座敷々々に

並べるのだ。

11200

11205

そこで檀那が数々の品物を、  
お出になつて御覧になつて、

11210

そこで一々何もかも

精しく当つて見なさるが、

なかなかごまかせては

お置<sup>おき</sup>なさらぬ。

さてその上で乗組員に

11215

御馳走は何度もあるのだ。

五色の鳥はあした来る。

その世話は己がしっかりと引き受ける。

（荷物を運び去る。）

メフィストフェレス（ファウストに。）

あなたは顔を蹙<sup>しか</sup>めて、陰気な目をして、

優<sup>すぐ</sup>れた好運の話をお聴<sup>ききとり</sup>取になりますね。

11220

雄大な智謀が功を奏して、

岸と海との和親は成就した。

岸を離れる舟を、海は喜んで引受けて、

脚早く遠方へ持つて行く。

ここにいて、この御殿にいて、あなたの手が

全世界を抱擁しておいでになると仰やつても好い。

最初手を著けたのはこの場所でした。

ここに始て小屋掛をしました。

そしてあの時溝を掘った所に、

今は忙しい<sup>ろ</sup>が波を切っています。

あなたの智略と、御家隸<sup>けらい</sup>の骨折とで、

水と土<sup>つち</sup>との利を収めたのです。

丁度ここから。

ファウスト

その<sup>のろ</sup>こが咀<sup>のろ</sup>われている。

それがひどく己を悩ましているのだ。

11225

11230

気の利いたお前に己は打明けるが、

11235

それが己の胸を断えず刺して、

もう辛抱が出来なくなつた。

どうも口に出すのも恥かしい事だ。

実はあの岡の上にいる爺婆しじばばを逐い除けて、

あの菩提樹の蔭に己は住みたい。

11240

あの何本かの木が我物でないのが、

世界を我物にしている己の興を損ずる。

己はあそこから四方を見渡されるように、

枝から枝へ足場を掛けさせ、

十分に展望の利くようにして、

11245

己のしただけの事を見渡し、

土着した人民共の安堵するように、

賢く政治をして遣りながら、

未曾有の人為の大功を

一目に眺めていたいのだ。

11250

富を得ていながら、闕けた事を思う程、  
苦しい事は世間はない。

あの鐘を聞き、菩提樹の花を嗅げば、  
寺の中か、墓の中にいるような気がする。

物毎に自由になる威勢が

11255

あそこの砂に挫かれる。

どうしたらこれを気に掛けずにいられよう。

あの鐘が鳴れば、己は気が狂いそうだ。

メフィストフェレス

そうでしょうとも。そんな気になる事があつては、  
面白くなく日をお暮しになるのはあたりまえ当おと前だ。

11260

誰も無理とは云いません。あの鐘の音は、  
誰の上品な耳にも厭に聞えます。

あの咀われた、ぼおん、ぼおんが

晴れた夕空をも曇らせて、

産湯から葬式までの、

あらゆる世間の出来事に交って聞える。

まるで人生と云うものが、ぼおんとぼおんとの間の、  
消えてしまった夢のようだ。

ファウスト

どうも人の片意地と反抗とが

どんな立派な成功をも萎<sup>いじ</sup>けさせるので、

大きい、恐ろしい苦痛の中に、

正義の心さえ倦み疲れてしまうようになるのだ。

メフィストフェレス

ここぞなんの遠慮がいるものですか。

疾<sup>と</sup>つくの昔新開地へお遣<sup>やり</sup>になっても好かつたのだ。

ファウスト

そんなら往って、あれを立ち退かせてくれい。

11265

11270

11275



爺婆のために己の見立てた、立派な地所は、  
お前、前から知っているはずだ。

メフィストフェレス

なに。そつとさらって行つて、据えて置けば、  
見返る隙に起き上がっています。  
圧制も、受けた跡で、立派な住いを見れば、  
我慢が出来るものですよ。

（鋭く口笛を吹く。）

三人の有力者登場。

さあ、来い。殿様の御沙汰がある。  
それからあしたは乗組員の宴会だ。

有力者

随分まずいお待受でした。  
御馳走位あつても好い。

（退場。）

メフィストフェレス

（見物に。）

やっぱりここでも昔あつた事がまたあるのです。  
ナボトの葡萄山と云うのがありましたっけね。

## 深夜

望楼守

（城の望楼にありて歌ふ。）

物見に生れて、

物見をせいと言い附けられて、

塔にこの身を委ねていれば、

まあ、世の中の面白いこと。

遠くも見れば、

近くも見る。

月と星とを見る。

森と鹿とを見る。

万物を永遠なる

<sup>かざり</sup>飾として見る。

そして総てが己に氣に入るように、

己自身も己に氣に入る。

<sup>さいわい</sup>幸ある我目よ。

これまで見た程の物は、

何がなんと云つても、

兎に角皆美しかった。

(<sup>ま</sup>間。)

だが己は自分の慰<sup>なぐさみ</sup>にばかり、

こんな高い所へ上げられているのじゃない。

闇黒の世界から、なんと云う氣味の悪い

11295

11300

11305

恐怖が己を襲つて来ることだろう。

二重<sup>ふたえ</sup>に暗い菩提樹の蔭から、

火の子が飛び出して来た。

風に翻<sup>あお</sup>り立てられて

火勢はいよいよ強くなる。

や。あの苔蒸して湿つて立つていた、

中<sup>なか</sup>の小屋が燃え上がる。

早く救つて遣らなくてはなるまい。

いや。もう救うことは出来まい。

ああ。不断火の用心を善くしていた、

人の好い老夫婦が、

烟<sup>えもの</sup>の獲にせられてしまう。

なんと云う恐ろしい災難だろう。

ほのお  
が燃え立って、黒かった苔<sup>や</sup>の屋が

火の中に赤く立っている。

11310

11315

11320

あの地獄の猛火の中から

老人達は逃げ延びただろうか。

梢の間から、葉の間から

火の舌が閃き出ている。

枯枝にちよろちよろ火が移って、

すぐに焼けては落ちてしまう。

我目よ。あれを見なくてはならぬか。

己はこんなに遠くが見えなくてはならぬか。

落ちた大枝の重りで、

小さい祠は潰れてしまう。

もう木の頂が、尖ったに、

蛇のように纏<sup>まと</sup>い附かれた。

空洞<sup>うつろ</sup>な幹が根まで焼けて、

真っ赤になって立っている。

(長き間<sup>ま</sup>。歌。)

11325

11330

11335

つね人の目を慰めた  
幾百年の樹も滅びた。

## ファウスト

(出窓にありて砂原を望む。)

上の方<sup>ほう</sup>から聞えるのは、なんと云う<sup>なげき</sup>歎の歌だろう。  
今はあの一<sup>ひと</sup>言<sup>こと</sup>一<sup>ひと</sup>声<sup>こゑ</sup>がもう時機に後れている。

望楼守が泣いている。

心の奥で、早まった<sup>わざ</sup>業<sup>わざ</sup>が己を悩ます。

あの半分炭になつた幹には氣の毒だが、  
こうなれば菩提樹の木立を伐り開いて、  
眼界を遮る物のないような

望楼をすぐ立てよう。

己<sup>なげ</sup>の情<sup>なさけ</sup>に救われた恩を思つて

楽しく余年を送る、

老人夫婦の住んでいる

新しい家も、もう目に見るようだ。

メフィストフェレスと三人の有力者と（下にて。）

大急ぎで遣つて来ました。

11350

御免なさい。穩和手段は駄目でした。

戸を叩いても叩いても、

とうとう開けてはくれません。

懲りずに叩いて、ゆさぶるうちに、

朽ちた扉は倒れました。

11355

大声でどなったり、ひどく嚇したりしたが、

どうしても聴きません。

兎角そんな時の習で、

聴きもしない、聴こうともしない。

しかしわたし共はぐずぐずせずに、

あいつ等を早速逐い退けて遣りました。

11360

老人共は大した苦みもしませんでした。

驚いて倒れたきり、死んだのです。

旅人が一人隠れていて、

切つて掛かりましたから、片附けました。

荒<sup>あつし</sup>為<sup>い</sup>事<sup>こと</sup>をしている、ちよいとの間<sup>ま</sup>に

炭火がそこら中へ散らばつて、

藁に移りました。そこで三人が

旨く火葬になるわけです。

#### ファウスト

己<sup>ことば</sup>の詞<sup>ことば</sup>が耳に聞えなかつたのか。

交換しようとは云つたが、強奪しようとは云わなかつた。

無謀な暴挙を己<sup>のろ</sup>は咀<sup>く</sup>う。

責任はお前達が分けて負うが好<sup>い</sup>い。

#### 合唱の群

古い詞<sup>ことば</sup>が聞えるぞ。

威勢<sup>なび</sup>にはすなおに靡<sup>なび</sup>け。

11365

11370

11375



大胆で逆<sup>さ</sup>いたけりや、  
家も地面も身も賭<sup>か</sup>ける。

(退場。)

ファウスト (出窓の上にて。)

星がもう光を隠して、

火も下火になつて来た。

風がそよそよと吹いて来て、

烟を己<sup>ほう</sup>の方へ吹き靡ける。

早まつて言い附けた事を、早まつてした。

や。なんだ。影のような物が来る。

## 半夜

灰色の女四人登場。

## 第一の女

わたしの名は不足だ。

## 第二の女

わたしの名は罪だ。

## 第三の女

わたしの名は憂だ。

## 第四の女

わたしの名は艱<sup>なやみ</sup>だ。

## 三人諸共に

戸<sup>なか</sup>が締まっていて這入られませんのね。

中には金持がいるから、這入りたくもないわ。

## 不足

そんならわたし影になるわ。

## 罪

わたしなんでもなくなるわ。

艱

奢っている人はわたしに顔を背けるのね。

憂

お前<sup>まえがた</sup>方は這入られもしないが、這入ってもならないわ。  
わたし錠前の穴から這入ってよ。

(憂消え失す。)

不足

さあ、皆さん、一しよにここを逃げましょうね。

罪

わたしお前さんの傍に引っ附いて行つてよ。

艱

わたしお前さんの跡から食つ附いて行つてよ。

三人諸共に

雲が出て来て、星が隠れたのね。

あの奥の、遠い、遠いところから、

11390

11395

兄弟が来ますのね。あれ、あそこに。兄弟の死が。

(退場。)

ファウスト (宮殿にて。)

四人来て、三人帰った。

話の意味は分からなかった。

なんだか艱<sup>なやみ</sup>と云うような後<sup>しりごえ</sup>声が聞えて、

その跡から陰気な死<sup>し</sup>と云う詞<sup>ことば</sup>が聞えた。

空洞<sup>うつろ</sup>な、怪物染<sup>うつろ</sup>みた、鈍い声であつた。

まだ己は圈<sup>わ</sup>の外<sup>そと</sup>へ遁<sup>は</sup>れずにいるが、

どうぞ己の生涯から魔法を除<sup>の</sup>けて、

呪文<sup>じゆもん</sup>と云うものを綺麗に忘<sup>わす</sup>れたいものだ。

そして自然の面<sup>めん</sup>前<sup>ぜん</sup>に男一人になつて立つたら、

人間として生きる甲斐があるだろうに。

己も、闇黒の中を探<sup>さが</sup>つて、傲慢な詞で

身をも世をも咀<sup>のろ</sup>つた、あの時までは、男一人であつたのだ。

11400

11405

今は怪異があたりの空氣に満ちて、

11410

どうして避<sup>よ</sup>けて好いか、分からぬ。よしやある時

昼の日が真面目に、晴やかに笑つてくれても、

夜<sup>よる</sup>が己を夢の網に捕えてしまう。

心嬉しく新<sup>にいくさ</sup>草の野を見て帰れば、鳥が啼く。

なんと啼くか。凶事と啼きおる。

11415

虚妄の糸が旦<sup>あけくれ</sup>暮この身に纏<sup>まつわ</sup>つて、

形が見える。物を告げる。警戒を勧める。

そこで己はいじけて孤立している。

門ががたりと云う。そして誰も這入つては来ぬ。

(竦然として。)

誰かいるのか。

憂

そのお尋には否<sup>いな</sup>とは申されませぬ。

11420

ファウスト

そしてお前は誰だ。

憂

兎に角ここに参っているものです。

ファウスト

下がれ。

憂

いえ。ここはわたくしのいて好い所です。

ファウスト

(初め怒り、既にして自ら慰む。)

だがな、用心している。呪文などを唱えるなよ。

憂

耳にはわたしの声が聞えなくても、

その方<sup>かた</sup>の胸にはしっかりと響きましよう。

これでわたしは色々に姿を変えて、

人を随分こわい目に遇わせますの。

陸<sup>おか</sup>にいても、海にいても、

心配げなわたしは、いつもお連<sup>つれ</sup>になっています。

誰も来いとは申しませんが、わたしはいつも附<sup>つ</sup>いていて、

お世辞<sup>せじ</sup>も言われ、咀<sup>く</sup>われもします。

あなた、憂<sup>うれ</sup>をまだ御存じなかったの。

# ファウスト

己は世の中を駆けて通った。そしてあらゆる歡樂を、  
髪を攫<sup>つか</sup>んで引き寄せるようにした。

意に満たないものは衝き放し、

手を脱<sup>はな</sup>れたものは勝手に逃がし、

ただ望を掛けては、望を遂げ、

また新しく望を掛け、そんな風に勢好く、

生涯を駆け抜けた。初は盛んに、押強<sup>おしつよ</sup>く遣ったが、

今では賢く、落ち著いて遣る。

この世の中はもう知り抜いた。

11430

11435

11440

その埒の外へ出抜ける当は無い。

誰にもしろ、目映まばゆそうに上うえを向いて、

天の上に自分のようなものがあると思うのは、馬鹿だ。

それよりしつかり踏み止とまって、周囲まわりを見ろ。

えらい奴には世界が隠かくしだて立はせぬ。

何も永遠の境にさまようには及ばぬ。

自分の認識した事は、手に握ることが出来る。

そうしてこの世で日を送るが好い。

よしや怪物が出ていても、自分は自分の道を行くが好い。

そのゆくてには苦もあるう。楽もあるう。

どうせ、どの刹那にも満足はせぬのだから。

### 憂

誰でもわたしが手に入れると、

その方かたには世界はなんにもなりませぬ。

永遠の闇が被さって来て、

11445

11450

11455



日が出もせねば入りもせぬ。

目や耳は満足でいながら

心の内には闇が巢を食う。

世の中のどの宝をも

その方<sup>かた</sup>は手に入れることが出来ぬ。

福<sup>さいわい</sup>も禍<sup>わざはひ</sup>もその折々の気まぐれになつて、

有り余<sup>な</sup>る中で餓<sup>う</sup>えている。

嬉しい事も、つらい事も、

次の日へ送<sup>い</sup>つて行く。

よしや向うが見えていても、

物が出来上がると云うことはありません。

ファウスト

廃<sup>よ</sup>せ。己はその手は食<sup>く</sup>わぬ。

そんな無意味な事は聞<sup>き</sup>きたくない。

そこを退<sup>の</sup>け。その称<sup>となえごと</sup>言<sup>こと</sup>には、どんな賢い男も

11460

11465

惚<sup>ぼ</sup>かされてしまいそうだ。

11470

## 憂

往こうか、来ようか、

決心がその方<sup>かた</sup>には附きません。

開<sup>ひら</sup>けている道の途中を、探<sup>さぐり</sup>足<sup>あし</sup>で、

小股に、よろけながら歩いている。

次第に方角が立たなくなつて、

見<sup>けん</sup>当<sup>とう</sup>が皆間違つて来て、

小さくなりながら、人の邪魔になつて、

溜息を衝いては、息苦しがる。

息は詰まらぬが、元氣も無い。

絶望はせぬが、諦<sup>あきらめ</sup>念<sup>ねん</sup>も附かない。

こう云う絶間のない経<sup>へめくり</sup>歴、

惜みながら措くこと、嫌いながらすること、

楽<sup>らく</sup>になつたかと思つては、また悩<sup>なや</sup>まれること、

11480

11475

おちおち寐ないで、気分の直らぬことが  
 体をその場に釘附にしてい、  
 地獄に堕ちる支度をさせます。

11485

ファウスト

咀われた悪霊奴。あくりようめ お前達は人間を、

幾度となく、そんな風に扱うのだ。

あたりまえ 当前の日をもお前達が、網に罹ったような煩惱の、

いや 厭な混雑にしようのだ。

11490

れいきび 霊の厳しい結托は引き放しにくくて、

附いた悪霊の退かぬことは、己も知っている。

だが、こりや、憂、お前の密かな、強い力をも、

己は認めて遣さぬぞ。

憂

いえ。わたしがすばやく咀って置いて、

あなたに背中を向けるとき、わたしの力をお験下さい。

11495

一体人間は生涯<sup>めくら</sup>盲<sup>めくら</sup>でいるものです。

そこで、ファウストさん、あなたは盲に今おなりなさい。

（ファウストに息を嘘<sup>ふ</sup>き掛け、退場。）

ファウスト（失明して。）

夜が次第に更けて来たらしい。

だが心の中には明るい火が赫<sup>かがや</sup>いている。

己の思っただけの事は早くしてしまわんではならぬ。

主人の詞の外に重いものはない。

家隸<sup>けらい</sup>共。一人も残らず、寢<sup>ね</sup>床から起きい。

大胆に己の工夫した事を、面白く己に見せてくれ。

道具を手にて。鋤<sup>くわ</sup>鋤<sup>くわ</sup>を使え。

極<sup>き</sup>めた為<sup>しごと</sup>事をすぐしてしまえ。

掟<sup>おきて</sup>を守って、急いで励めば、

無類の立派な功が立つ。

この大業を完成するには、千本の手を使う

11500

11505

ただ一つの心があれば十分なのだ。

11510

### 宮城内の大いなる中庭

松明。  
たいまつ

メフィストフェレス

（支配人として先に立つ。）

寄つて来い。這入つて来い。

よろめく死霊共。  
しりょうども

骨と筋と紐とを繕い合せた  
半端物共。  
はんぱ

死霊レムレス（合唱。）

御用を早速勤めましょう。

聞きはつりました所では、

11515

どうやら広い地面があつて、  
それをわたくし共が戴くのだそうですね。

先を尖らせた杵くも、測量に使う

長い鎖も、ここにありますが。

だがなぜ呼ばれたのだから、

実はもう忘れました。

#### メフィストフェレス

ここではそんな技師のするような手数はいらぬ。

尺は自分の体で取るが好いい。

一番背の高い奴がそこへ横に寝ろ。

外の奴等は周囲まわりの草を取れ。

親爺共を葬る時にしたように、

長方形に掘り窪めろ。

御殿から出て、狭い家に這入る。

11520

11525

どうせしまいはこんな馬鹿氣た事になる。

死霊

(おどけたる態度にて土を掘る。)

己も若くて生きていて、色もした。

なんだか随分好かつたかと思われる。

どこかで好い音がして、面白そうだと、

己も出掛けて踊つたものだ。

そのうち老おいと云う横著ものが、

杖を持つて来てくれた。

己はちよつと躓つまずいて、墓の戸口へ転げ込んだ。

なぜまたあの戸が折おり悪く開あいていたやら。

ファウスト

(宮殿より出で、戸口の柱を手もて摸索す。)

あの鋤のからから鳴るのが、実に好い心持だ。

あれは己に奉公している物共だ。

11540

土をその所に安んぜさせ、

波を程好き界に堰き留め、

海まわり おごその周圍に嚴かな埒を結うのだ。

メフィストフェレス（独言。）

そのお前さんが土や木の束たばつつみで隄を築くのも、

詰まり己達のために骨を折るのだ。

11545

なぜと云うに、お前さんは水の魔の

ポセイドンに大御馳走をするのだから。

どの道お前方は助からない。

四大は己達とぐるになっいて、

なんでもしまいには滅びるのだ。

11550

ファウスト

支配人。

メフィストフェレス



ここにいます。

ファウスト

どんな手段をでもして、

人夫を集められるだけ集めて、

馳走と嚇おどしとで元気を付け、

金も遣り、おびきもし、虐しいたげもせい。

そして計画した溝渠こうきよがどれだけ延びたか、

毎日己に知らせるようにせい。

メフィストフェレス（中音にて。）

こつちの聞いた知らせには、

溝渠の話なんぞはないが、薨去こうきよの話ならあるのだて。

ファウスト

あの山の麓に沼があつて、

悪い蒸気がこれまで拓いた土地を皆汚している。

あのきたない水の決口はけぐちを附けるのが、

1155

1156

最後の為事<sup>しごと</sup>で、また最上の為事だ。

そこで己は数百万の民に土地を開いて遣る。

安全ではないが、働いて自由に住まれる。

土地は肥えて草木が茂る。

大胆に働いた民等の築いた、高い丘を繞つて、

新開地に面白<sup>おもしろ</sup>そうに、すぐ人畜が居著<sup>い</sup>くのだ。

よしや外<sup>そと</sup>では海の潮が、岸の縁まで騒ぎ立つても、

ここの中<sup>なか</sup>は天国のような土地になっている。

海の潮が無理に土を抱<sup>だ</sup>き込もうとして、

意地きたなく岸を噬<sup>か</sup>んでも、

衆人力を一つにして、急いでその穴を填<sup>う</sup>めに往く。

好<sup>よ</sup>い。己の服膺<sup>ふくよう</sup>しているのは、

人智の最上の断案で、それはこうだ。

凡そ生活でも、自由でも、日々これを贏<sup>か</sup>ち得て、

始てこれを享有する権利を生ずる。

11565

11570

11575

だからここでは、子供も大人も年寄も

そう云う危険に取り巻かれて、まめやかな年を送るのだ。

己はそう云う群を目の前に見て、

自由な民と共に、自由な土地の上に住みたい。

己は「刹那」に向つて、

「止まれ、お前はいかにも美しいから」と呼びたい。

己のこの世に残す痕は

劫を歴ても滅びはすまい。

そう云う大きい幸福を予想して、

今己は最高の刹那を味うのだ。

（ファウスト倒る。死霊等支へ持ちて地上に置く。）

メフィストフェレス

この男はなんの楽にも飽かず、なんの福にも安んぜず、

移り変る姿を追うて、挑んで歩いた。

そしてこの気の毒な奴は、

11580

11585

最後の、悪い、空洞<sup>うつろ</sup>な刹那を取り留めて置こうと思った。

11590

己に随分手痛く逆<sup>さから</sup>つたものだが、時は功を奏して、  
親爺<sup>すな</sup>奴、今この沙の上に身を委ねた。

時計は止<sup>と</sup>まった。

合唱の群

止<sup>と</sup>まった。そして真夜中のように

黙っている。針は落ちる。

メフィストフェレス

落ちる。用は済んだ。

合唱の群

過ぎ去った。

メフィストフェレス

過ぎ去ったと。馬鹿な詞だ。

11595

なぜ過ぎ去らせるのだ。

過ぎ去ったのと、何もないのとは、全く同じだ。

何のために永遠に物を造るのだ。

そして造られた物を「無」に逐い込むのだ。

今何やらが過ぎ去った。それになんの意味がある。

元から無かったのと同じじゃないか。

そして何かがあるように、どうどう廻めぐりをしている。

それよりか、己は「永遠な虚無」が好すきだ。

## 埋葬

死霊（単吟。）

こんなにあらずい家の普請を誰がした。

鋤で、鋤で。

死霊等（合唱。）

麻の襦じゆばん袷の陰気男のお前には

11600

11605

ちと出来過ぎた。

死霊（単吟。）

こんなにけちな座敷の飾を誰がした。  
卓つくえもない、椅子もない。

死霊等（合唱。）

ありやちよいとの間借りたのだ。  
掛取共の多いこと。

メフィストフェレス

体は倒れている。霊が逃げようとしている。  
早くあの血で書いた手形を見せよう。  
どうも此頃は悪魔の手から霊を取り上げるに、  
色々な手段があつて困る。

11615

もう昔の流儀では間に合わない。  
新しい流儀にはまだ慣れていない。  
昔は己がひとりで遣つたが、

11610

今は手伝を連れて来なくちやならない。

どうも己達は何をするにも都合が悪くなつた。

在来の習慣も、昔の権利も、

何一つ引当<sup>ひきあて</sup>にすることが出来ない。

元は極<sup>き</sup>まつて最後の息と一しよに飛び出すのを、  
己が待ち受けていて、極<sup>ごく</sup>すばしこい鼠のように、  
ひよいと、堅く握つた拳の中に攫<sup>つか</sup>むのだつた。

所が今では靈奴<sup>れいめ</sup>が用心深くなつて、

陰気な場所を、厭<sup>いや</sup>な死骸の、胸の悪い家を容易に出ない。

とうとう互に嫉<sup>にく</sup>み合う元素が、

情なくもそいつを逐い出してしまうのだ。

そこで朝から晩まで己は苦勞するのだが、

いつ、どんな風に、どこから出るかが、厄介な問題だ。

死と云う古い奴<sup>やつ</sup>がすばやい力を亡くしてからは、

11620

11625

11630

果して死んだかと云う事からが、長い間疑わしい。

己がしやつちこ張った体に色目を使っていると、

それはただ見掛<sup>みかけ</sup>だけで、そろそろ動き出すことがある。

（羽の生えたる神人の如き、奇怪なる呪咀<sup>じゆそ</sup>の挙動。）

さつさと遣つて来い。もっと駈足をして来い。

角の直<sup>すぐ</sup>な先生に、角の曲つた先生。

どれもこれも、正真正銘の悪魔の門閥家だ。

ついでに地獄<sup>あじ</sup>の も持つて来い。

勿論地獄には が沢山、沢山ある。

そいつが身分次第、位階次第で呑み込むのだ。

だが未来へ逐い込む、この最後の洒落を遣るのに、

格別窮屈<sup>よ</sup>に選り分けるわけではない。

（左<sup>かた</sup>の方に恐るべき地獄<sup>ひら</sup>の開く。）

や。地獄の口の糸切歯<sup>あ</sup>が開いた。

吭<sup>のど</sup>の天井から恐ろしい勢で火<sup>かえん</sup>が涌き出る。



そしてその奥の沸き返る蒸気の中に、

永遠に燃えている、<sup>ほのお</sup>の城が己に見える。

赤い波が齒の直後<sup>じきしろ</sup>まで打ち寄せて来る。

咀<sup>のろ</sup>われた奴等が助かりたさに泳ぎ附く。

ところをハイエナの牙めく牙にひどく噬<sup>か</sup>まれて、

奴等は心細い、火の中の彷徨<sup>さまよひ</sup>をまた繰り返す。

あの隅々にはまだ気の附かなかった物を

沢山に見ることが出来る。狭い間<sup>あいだ</sup>に許多<sup>あまた</sup>の恐怖がある。

まあ、こんな風に罪人共を威<sup>おど</sup>かすも好かろう。

どうせ夢だ、まやかしかどしか思やあしない。

(短き直なる角の胖大鬼等に。)

おい。火のような頬つぺたをした、太った横著者共。

硫黄で肥えて、好く燃えているぞ。

短い、動いたことのない、木の株のような項<sup>うなじ</sup>をしているな。

今に燐のように光る物が出るから、

ここの下の所で待っている。それが霊だ。

11660

羽の生えたプシヘエだ、それをむしると、きたない蛆になる。  
己がそいつに極印を打って遣る。

その時火の渦巻く中を持って逃げて貰うのだ。

なんでも体の下の方に氣を附けている。

食もたれ奴。それがお前達の職分だ。

11665

霊殿がその辺にお住いになっているか、

それはしかとは分からない。なんでも臍には住みたがる奴だ。

あそこから飛び出すかも知れないから、

好く氣を附けているのだぞ。

(長く曲れる角を戴ける瘦鬼等に。)

そつちの風来もの共。羽の生えた巨人共。

11670

お前達は止所なく虚空を攫んで見てくれ。

臂をずっと伸ばして、尖った爪を見せて、

ふらふら飛んで逃げる奴を掴まえてくれなくちやならない。

奴は古家の中にいるのが厭ちがひに違ちがない。

それに天才と云う奴はすぐ上へ抜けたがるのだ。

(上右の方より光明さす。)

天人の群

つみびとゆる  
罪人免し、

塵に命あらせんため、

ゆるやかに天あまがけ翔こり来よ。

みつかい  
御使よ。

あまうから  
天の族よ。

つら  
たゆたふ列の

そら  
空に漂ふ隙に、

あらゆる物の上に

やさしき痕を留めよ。

メフィストフェレス

11675

11680

厭<sup>おと</sup>な音が聞えるぞ。溜まらない調子だ。

11685

待ちもしない夜明と一しよに上の方から来おる。

敬虔がる趣味の奴に気に入りそうな、

野郎とも娘つ子とも附かない歌いざまだ。

己達がやけになって、人間の根だやしをしようと思ったことは、  
お前達も知っているはずだ。

11690

なんでも己達の工夫した、一番ひどい罪惡を、  
奴等は祈つて救うに丁度好いとしている位だ。

畜生奴。陰險に遣つて来やがる。

これまで幾人横取をして行かれたか知れない。

己達の武器を、奴等は使つて、己達を退治なのだ。

11695

あいつ等もやつぱり惡魔だ。ただ仮面<sup>めん</sup>を被っているだけだ。

ここで負けようものなら、永遠な恥辱だ。

墓の側へ寄つて、穴の縁<sup>ふち</sup>をしっかりと守っている。

合唱する天使等（薔薇の花を蒔<sup>ま</sup>く。）

色<sup>かがや</sup>赫ける、

高き香<sup>か</sup>送る薔薇<sup>そうび</sup>の花よ。

閃き、漂ひ、

みそかに物を活かすものよ。

小枝を翼とせる、

蕾<sup>つぼみ</sup>の封<sup>ふう</sup>の披<sup>ひら</sup>かれたるものよ。

疾<sup>と</sup>く往きて花咲け。

春よ。芽ぐめ。

紅に、はた緑に。

楽土を

憩へるものに与へよ。

メフィストフェレス（悪魔等に。）

なんだって屈<sup>こじ</sup>んだり、びく附いたりするのだ。

それが地獄の流儀かい。蒔くなら蒔かせて、こたえていろ。

11700

11705

11710

銘々持場に就くのだ。

多分奴等は、こんな花を雪のように降らして、  
火のような悪魔を埋めてしま<sup>つもり</sup>う積だろ<sup>ち</sup>う。

お前達が息をすれば、融けて縮<sup>ちぢ</sup>れてしま<sup>つもり</sup>うのだ。

ぷつぷと吹くのだ。頬<sup>ほ</sup>膨<sup>おふくれ</sup>奴<sup>め</sup>。それで好<sup>い</sup>い、好<sup>い</sup>い。

お前達の息で飛んでくる花の色が皆褪<sup>さ</sup>める。

そうひどく遣るな。鼻を塞いで、口を締めい。

やれやれ、余りひどく吹き過ぎたのだ。

どうも程と云うものを知らぬから困る。

縮<sup>ちぢ</sup>れたばかりなら好<sup>い</sup>いが、乾いて、茶色になって、燃えるわ。

もう毒々しい赤い火になって、飛んで来る。

皆固ま<sup>も</sup>つていて、こたえろ。

や。勢が挫けたな。丸で意気地がなくなつた。悪魔共。

そろそろへんな不気味な熱さを感じて来<sup>き</sup>おつたな。

天使等（合唱。）

11715

11720

11725

尊き花弁<sup>はなびら</sup>、

悦ばしきは

愛を広く世に施し、

心の願ふ

よろこび  
喜を生ぜしむ。

まことことは  
真の詞は

澄める瀨氣<sup>こうき</sup>の中に、

とはの天人の群に、

到る処に曙光を仰がしむ。

メフィストフェレス

馬鹿者共、咀われていろ。恥をかきおれ。

悪魔ともあろうものが逆立をして、

不細工な体で<sup>とんぼがえり</sup>翻筋斗をして、

けつから先へ<sup>さき</sup>地獄に堕ちて往きやあがる。

自業自得の熱い湯に難<sup>ありがた</sup>有く這入るが好い。

11730

11735

己はここにこたえているぞ。

11740

(漂ひ来る花を払ひく。)

鬼火奴。逃げんか。どんなに光つても、

握ると、胸の悪い、べとべとした物になるのだ。

何をふら附くのだ。引つ込まんか。

厭に ちゃん 児か硫黄のように、項に引つ附きやあがる。

天使等 (合唱。)

汝 なんたち 達の物ならぬ物をば

11745

汝達 さ 避けでは かな 慚はじ。

汝達の心を乱るものをば

汝達の受け容るべきことかは。

さはれ尚力強く迫り来るときは、

我等心を励さでは慚はじ。

11750

愛する人をば

たゞ愛のみ引き入るゝもので。



メフィストフェレス

ああ。頭が燃える。胸が、肝<sup>きも</sup>が燃える。

悪魔以上の火だ。

地獄の火よりよほど痛い。

お前達、失恋の人達が、棄てられて、

首を振<sup>ほう</sup>じ向けて、恋人の方を見て、

恐ろしく苦しがるのは、こんな火のせいだね。

11755

己もへんだぞ。妙にあつちへ顔が向けたくなる。

あいつ等と仲直りの出来ぬ喧嘩をしている己ではないか。

いつも見ると、ひどく厭なのだな。

なんだかおつな物が己の体に染み渡ったようだぞ。

己はあの妙に愛くるしい餓鬼共が見たくてならない。

何もここで悪態を衝いてならんと云うわけはあるまい。

もし己が旨くぼかされてしまったら、

11760

11765

跡になつて馬鹿だと云われるのは誰だろう。

大嫌な横著小僧共。

どうも厭に愛くるしく見えてならないぞ。

おい。綺麗な餓鬼共。己に言つてくれ。

お前達もやつぱりルチフェルの裔<sup>すえ</sup>ではないか。

いかにも可哀らしいなあ。ほんにキスでもして遣りたい。

丁度好い所へ来てくれたように思われてならぬ。

なんだか内証らしく、小猫のように、物欲しげな様子が、

もう千遍も見ることがあるようで、

己は気楽に、好い心持になった。

見れば見る程美しくなりやあがる。

もつと傍へ来ないかい。己を一目見てくれんかい。

天使等

往きますとも。なぜあなたお逃<sup>にげ</sup>なさるの。

11770

11775

今傍へ往きますから、そこにいられるなら、おいでなさい。

（天使等回旋しつゝ、この場所を全く填む。）

メフィストフェレス

（舞台の前端へ押し出さる。）

お前達は己達を咀われた霊だと云つてゐるが、

そつちの方が本当の魔法使だ。なぜと云つて見る。

お前達は男をも女をも迷わすのだ。

己はなんと云う怪しからん目に逢う事だろう。

一体この火が愛情の元素なのかい。

己は体中がその火のようになつてゐるから、

項に焼け附くのが分らん位だ。

そんなにふらふら往つたり来たりしないで、降りて来い。

そしてその可哀らしい手足を、少し人間らしく働かさないか。

実にその真面目くさつた所が似合つてゐるなあ。

だが一度で好いから、ちよつと笑つて見せてくれ。

11780

11785

11790

そうしたらどんなにか己が喜ぶだろう。

あの色気のある奴が互に見交す目附だ。あれがして貰いたい。  
口の角をちよつと引き吊らせてくれれば好いのだ。

おい。その背の高い小僧。

己は貴様が一番好だ。その坊主面はちつとも似合つてはいない。

少し色気のある目で見ないかい。

それにもつと肌の見えるような風が出来そうなものだ。

その長い、襷のある襦袢は行儀が好過ぎる。

おや。あつちへ向いたな。餓鬼奴。

旨そうな背後附をしていやがるなあ。

合唱する天使等

愛の 等よ。

いざ澄む方へ向け。

己を咀ふもの等を、

真よ、救へ。

11795

11800

かくて喜ばしく

11805

悪を逃れて、

諸共に

救はれよ。

メフィストフェレス

(気を取り直す。)

己は妙な気がするぞ。体中が、ヒオツプのように、  
火ぶくれだらけになって、自分でも気味が悪いが、

11810

同時にまた自分を底まで見窮めて、

自分と自分の種族とに信頼して、凱歌を奏しているのだ。

悪魔の高尚な部分は助かって、

愛の祟が皮の上に出た。

もう厭な火は燃えてしまった。

11815

そこで己はお前達一同を咀つて遣る。それが当然なのだ。

合唱する天使等

聖なる火よ。<sup>せい</sup>

周囲にその火の燃えなむ人は、<sup>めぐり</sup>

世にありて、善き人と共に

安らかに思ひてぞあるべき。

汝達諸共に

起ちて称へよ。

風は浄められたり。

霊よ、息衝け。

(天使等ファウストの不死の霊を取り持ちて空に<sup>のぼ</sup>り去る。)

メフィストフェレス

(あたりを見廻す。)

はてな、どうしたのだ。どこへ行つてしまったのだ。

丁年未満の奴等。出し抜けに来やがつて、

獲を<sup>えもの</sup>さらつて天へ升つて行きやあがつたな。

道理でこの墓の傍で、撮<sup>つまみぐい</sup>食をしそうにしていたのだ。

11820

11825

己はたった一つの大きな霊を取られてしまった。  
己の質に取って置いた、高尚な霊なのを、  
それをすばしこく搔かつ撈さらつて行きやがったな。

11830

そこで誰に苦情を持ち込んだら好いいだろう。  
誰が己の己得権を恢復してくれるだろう。  
手前、年が寄つて人に騙だまさりやあがつたぞ。  
自業自得だ。ひどく景気が悪いぞ。

11835

己は馬鹿げた下手を遣つた。外聞の悪い。  
おおしごと大為事おおしごとが無駄になつてしまった。  
ふじみ不仁身ふじみになつてゐる悪魔のくせに、  
劣情や無意味な色気を出したからな。

世間を知つた己が、子供らしい、

11840

途方もない事に掛かり合つていて見れば、  
跡になつて、己のした馬鹿さ加減は、

小さくない事になるのだて。

山中の谷、森、岩、凄まじき所

山の上、巖穴の間に、神聖なる隠遁者等分かれゐる。

合唱の声と<sup>こだま</sup>飴響と

揺<sup>ゆら</sup>ぎて靡<sup>なび</sup>き寄る木立。

かたわ<sup>かたわ</sup>ふさ<sup>ふさ</sup>ないわお  
傍に<sup>そば</sup>置る巖。

絡み附く木の根。

幹と幹とはひたと並べり。

谷川は波立ちて<sup>ほとばし</sup>迸り、

いと深き岩<sup>いわ</sup>穴<sup>あな</sup>は蔭をなせり。

獅子は<sup>もだ</sup>黙ありて優しく、

我等の<sup>めぐり</sup>周囲を歩み、



尊き境を、

聖なる愛の御庫を畏み守れり。

感奮せる師父

(虚空を昇降しつゝ。)

とはなる喜の火。

燃ゆる愛の契。

沸きかへる胸の痛。

泡立つ神の興。

征箭よ。我を貫け。

槍よ。我を刺せ。

杖よ。我を砕け。

雷火よ。我を焼け。

徒なるものを

渾て散けしめ、

とはなる愛の核心たる、

とはなる星を照らしめよ。

11865

沈思せる師父（低き所にて。）

深き谷底の上に、

わが脚<sup>あしもと</sup>下なる巖<sup>いわお</sup>の重くすわれる如く、

千筋の小川<sup>おがわ</sup>の、

恐ろしき滝のしぶきと、流れ落つる如く、

おのが強き力もて、

11870

木の幹の真直<sup>ますぐ</sup>に空に聳ゆる如く、

所有<sup>あらゆ</sup>る物を造り、所有<sup>あらゆ</sup>る物を育つる

大威力の愛現前せり。

森も石根<sup>いわね</sup>も波立つ如く、

激する水音は身の周囲<sup>めぐり</sup>に聞ゆれど、

11875

怒号しつゝも心優しく、

谷間の土を肥やさんため、

その豊かなる滝の水は滝壺にぞ流れ落つる。

毒ある霧を懷ける

下界の空気を浄めんため、

雷火は赫<sup>かがや</sup>きつゝぞ下<sup>くだ</sup>り撃つ。

11880

こは皆愛の使なり。

この身の周囲<sup>めぐり</sup>にありて、永遠に物を造る力を、この使は宣伝す。

あはれ、その力よ。鈍き官能の埒に限られ、

緊<sup>きび</sup>しく煩惱の鎖に繋がれ、

冷かに、糾紛せる霊の艱<sup>なや</sup>める、

わが胸のうちをも照せよかし。

あはれ、神よ。わが思量を黙<sup>もく</sup>せしめ、

わが饑<sup>う</sup>ゑたる心を照せよかし。

天使めく師父（高低の中間の所にて。）

や。あの髪の毛のゆらめくような櫛<sup>あいだ</sup>の木立の間を抜けて、

11890

11885

靡いて来る暁の雲はなんだろう。

あの雲の中に生きているものの中なかてて見ようか。

あれは穉い靈共れいどもの群ぐんだな。

合唱する神々こうごうしき童子の群

お父うさん。わたくし共はどこを飛んでいますか。

好い方かた。わたくし共はなんですか、仰おほやつて下さい。

わたくし共は為合せしあわせです。

誰にも、誰にもこの世が、ほんに樂らくでございます。

天使めく師父

子供達。夜なかに生れて、

精神や官能の半分醒めた子供達。

両親がすぐ亡くした代かわりに、

天使の群が儲物をした子供達。

愛する人が一人ひとりいると云うことは、

お前達も感じているだろう。好いからこつちへ来い。

11895

11900

兎に角、為合せもの共、

世間の艱難は少しも知らないのだな。

己の目と云う、

この世で用に立つ道具の中へ降りて来い。

そして己の目を我物にして使つて、

この土地の様子を見ろ。

(師父童子等を目の中に受け容る。)

あれが木だ。あれが岩だ。

あれが落ちて行つて、

恐ろしい瀬になつて、

嶮しい道を縮める水の流だ。

神々しき童子等(目の中より。)

大<sup>たい</sup>した見物<sup>みもの</sup>でございますね。

でもここは余り陰気です。

恐ろしくて体が震えます。

11905

11910

11915

好<sup>い</sup>方<sup>かた</sup>。親切な<sup>かた</sup>お方<sup>かた</sup>。逃<sup>が</sup>がして下さいまし。

天使めく師父

そんなら段々高い世界へ昇<sup>のぼ</sup>つて行け。

そして神様<sup>そと</sup>が傍<sup>そば</sup>においでになつて、

力を添<sup>そ</sup>えて下さるのだから、いつも淨<sup>し</sup>い為<sup>かた</sup>方で、

いつとなく次第に大きくなるが好<sup>い</sup>い。なぜと云<sup>い</sup>つて見る。

それが広<sup>ひろ</sup>大な瀨<sup>せ</sup>氣<sup>き</sup>の中<sup>な</sup>に出来<sup>でき</sup>ている、

靈<sup>たま</sup>共<sup>ども</sup>の餌<sup>えさ</sup>だ。

それが広<sup>ひろ</sup>がつて神々<sup>しんしん</sup>しきになる、

永遠<sup>えいゑん</sup>な愛<sup>あい</sup>の啓<sup>けい</sup>示<sup>し</sup>だ。

11925

合唱する神々しき童子の群

(山の絶頂<sup>ぜつてい</sup>をめぐりつゝ。)

うれしく

手を輪<sup>りん</sup>に

繋<sup>つな</sup>ぎて動<sup>うご</sup>き、

11920

尊き心を歌へ。

畏く教へられて

汝達なんたちよすがを得ん。

さて汝達が敬ふ神を

拝むことを得ん。

天使等

(ファウストの不死の霊を載せてやゝ高き空中に漂ふ。)

悪の手から、

霊の世界の尊い一人が救われました。

「誰でも、断えず努力しているものは、

われ等が救うことが出来る。」

それにこの人には

上の方ほうからも愛の同情が加わっています。

神々しい群が

心しんからこの人を歓迎します。

11930

11935

11940

やや未熟なる天使等

愛して下さる、

聖<sup>せい</sup>なる贖罪の少女達の手で授けて下さった、あの薔薇の花が、

わたくし共を助けて勝たせてくれました。

この霊の宝を手に入れる

大きい為<sup>しごと</sup>事を成就させてくれました。

わたくし共がそれを蒔<sup>ま</sup>くと、悪が避<sup>よ</sup>けました。

わたくし共がそれを中てると、魔が逃げました。

慣れた地獄の刑罰<sup>かわり</sup>の代に

悪霊共が愛慾を起しました。

あの年の寄った悪魔の先生でさえ

鋭い苦痛を身に覚えしました。

さあ、凱歌を挙げましょう。為<sup>しごと</sup>事は出来ました。

やや成熟せる天使等

どうもわたくし共には

11945

11950



下界の屑を舁<sup>か</sup>き載せて持っているのがつろつろございます。

11955

よしやその屑が石綿で出来ていても、  
清浄ではございません。

強い霊の力が

元素を

掻き寄せて、持っていると、

11960

霊と物との二つが密接して

一つになった両面体を割くことは、

どの天使にも出来ません。

それを分けることの出来るのは、

ただ永遠な愛ばかりでございます。

11965

やや未熟なる天使

岩山の巔<sup>いただき</sup>のめぐりに、霧のように棚引いて、

それから気<sup>けぢか</sup>近く動いて来る

霊共の振舞が

今わたくしに感ぜられます。

雲が澄んで来て、

11970

神々しい子供達の賑やかな群が、

わたくしに見えます。

下界の縛いましめを遁れて、

輪になつて集つて、

天上の

11975

新しい春と飾かざりとを味っている

子供達でございます。

この人も、追々すっかり得とくの附くように、

最初はちよつと

この子供達と一しよになるが宜しゅうございましょう。

11980

神々しい童子等

蛹さなぎのようになつてお出いでなさるこの方かたを、

わたくし共は喜んでお引受ひきうけ申します。

そういたすと、わたくし共は

天使の質しちを持つているわけになります。

この方かたに引つ附かたいてゐる綿屑わたがしを

取とつて上あげて下ください。

もうこれで聖せいなる生活せいにお入いりになつて、

美しく、大きくおなりなさいました。

マリアを敬うやまつう学士

(最高さいこうき、最浄さいじやうき石せき龕がんにて。)

ここは展望てんぼうが自由じゆうに利きいて、

心こころが高尚かうかうになる。

あそこを、漂たふつて昇のぼつて行きながら、

女達おんなたちが通とほり過すぎる。

あの真まん中ちゆうに、星ほしの飾しをして、

立派りつぱな方かたがおおいでになる。

あれが天妃てんひだ。

11985

11990

11995

あの光明で己には分かる。

（歓喜して。）

ああ。世界の最高の女王<sup>じよおう</sup>。

あの青く張った

天の幔幕の中で、

あなたの秘密を拝ませて下さい。

男の胸を

厳かに、優しく動して、  
<sup>おごそ</sup>

聖なる愛の喜<sup>よろこび</sup>を以て、

あなたに向わせる物を、受け容れて下さい。

あなたが莊重にお命じなされると、

我々の勇氣は侵されないようになります。

あなたが満足をお与<sup>あたえ</sup>下さると、

熱した心<sup>たちまち</sup>が忽に爽かになります。

12000

12005

最も美しい意味での神かみ少女おとめよ。  
尊むに堪えたる神母しんぼよ。

12010

我等がためには選ばれたる天妃よ。  
神々と同じ種すじよう性めがみなる女神めがみよ。

あなたの周囲めぐりを繞めぐっている

軽い雲があります。

あれは贖罪の女達です。

12015

お膝元で

瀧こうき氣を吸って、

お恵めぐみを仰いでいる

優しい群です。

お障さわり申すことの出来ぬあなたにも、

誘惑に陥り易い人達が

12020

たよりに思つてお近づき申すことは、  
禁じてないのです。

あの人達は自分の弱みの方へ引き込まれると、  
救つて遣るのがむずかしいのです。

意欲の鎖を自分の力で引きちぎることが

誰に出来ましょう。

斜に、平な床を踏む足は

どんなにか早く滑るでしょう。

目附や挨拶や世辞の息に、

誰が騙されずにいましょう。

(赫く神母天翔り来る。)

合唱する贖罪の女の群

とはの国々の空へ

おん身は翔り来給ふ。

譬へん物なきおん身よ。

12025

12030

恵深きおん身よ。

12035

われ等の訴ふるを聞き給へ。

大なる女罪人

フアリセイの人々に嘲られつつも、

神々しく浄められたる御子みこの御足みあしのもとに、

バルサムなす涙を流しし

愛に頼りて願ひまつる。

12040

奇しき香かをいと多く滴したたらせし

瓶いに頼りて願ひまつる。

尊き御手みて御足みあしを柔かに拭ひまつりし

髪に頼りて願ひまつる。

サマリアの女

昔はやくアブラムが家畜の群に水飼ひし

12045

泉に頼りて願ひまつる。

救世主の御みくちびる唇くちびるに冷かに触るゝことを得し

釣瓶<sup>つるべ</sup>に頼りて願ひまつる。

かなたより灌<sup>そそ</sup>ぎ来て、

とはに清く、さはに溢れ、

あらゆる世界を繞り流るる、

清き、豊かなる泉に頼りて願ひまつる。

エジプトのマリア

主を据ゑまつりし

いと畏き所に頼りて願ひまつる。

警<sup>いまし</sup>めて門<sup>かど</sup>より我身<sup>わがみ</sup>を押し出だしし

腕<sup>かいな</sup>に頼りて願ひまつる。

沙漠にて我が怠らずなしし

四<sup>よ</sup>十<sup>そ</sup>年<sup>とせ</sup>の贖罪に頼りて願ひまつる。

わが沙<sup>すな</sup>の上に書きつる

喜<sup>わか</sup>ばしき別の辞<sup>かれ</sup>に頼りて願ひまつる。

三人諸共に

12050

12055

12060



大いなる罪ある女子共をおみなことも

傍かたはらより遠ざけ給はで、

贖罪りやくの利益を

永遠とこしえに加へ給ふおん身なれば、

ただ一たび自ら忘れしのみにて、

過あやまちすとも、自ら曉さとらざりし、

この善き靈れいにも、

ふさはしく御免みゆるしを賜へ。

贖罪の女等の一人

(かつてグレエトヘンと呼ばれしもの。神母に縋すがりまつりて。)

較べる物のないあなた様。

光明の沢山さしているあなた様。

どうぞお恵深くお顔をこちらへお向遊むけばして、

わたくしの為合しあわせを御覧なされて下さいまし。

昔お慕われなされたお方かた、

12065

12070

今はもう濁にごりのないようにおなりなされたお方が  
帰っておいでなさいました。

神々しき童子等

(輪なりに動きて近づきつつ。)

もうこの方は手足が大層伸びて、

わたくし共より大きくおなりになりました。

おお方かた大事にお世話をして上げた御返報を

沢山なすって下さるでしょう。

わたくし共は人の世の群から

早く引き放されましたが、

この方はお学まなびになったのです。

おお方わたくし共にお教おしえなすって下さるでしょう。

一人の贖罪の女

(かつてグレエトヘンと呼ばれしもの。)

難ありがた有い靈の群に取り巻かれていらつしやるので、

12075

12080

新参のあの方は自分で自分がお分かりにならない位です。

12085

まだ新しい生活にお氣が附かない位です。

それでももう難有い<sup>かたがた</sup>方々に似ておいでになりました。

御覽なさい。下界の絆<sup>きずな</sup>を皆切つて、

古い身の皮からそっくり抜け出しておしまいなすつて、

新しい若々しいお力が、

12090

霞の衣の表<sup>へら</sup>に顯れておいでなさいます。

あの方にお教申<sup>おしえ</sup>すことをお許<sup>ゆるし</sup>下さいまし。

まだ新しい日の光を目映<sup>まばゆ</sup>がつておいでなさいますから。

赫く神母

さあ、おいで。お前もつと高い空<sup>そら</sup>へお升<sup>のぼり</sup>。

お前がいると思うと、その人も附<sup>ひと</sup>いて行くから。

12095

マリアを敬う学士。

(俯伏して崇拜しつつ。)

悔を知る、優しきもの等よ。

汝<sup>なんたち</sup>達皆畏き境界に

度<sup>つし</sup>みて身を置き換へんため、  
救<sup>すくい</sup>の御<sup>みめ</sup>目を仰ぎまつれ。

あらゆる向上の心は

皆汝<sup>なんじ</sup>が用をなせかし。

童貞女よ。 神母よ。 天妃よ。 女神よ。

永く御<sup>みめぐみ</sup>恵を垂れ給へ。

### 合唱する深秘の群

一切の無常なるものは

ただ影像たるに過ぎず。

かつて及ばざりし所のもの、

こゝには既に行はれたり。

名状すべからざる所のもの、

こゝには既に遂げられたり。

永遠に女性なるもの、

12100

12105

12110

我等を引きて往かしむ。

終



## 青空文庫情報

底本：「ファウスト 森鷗外全集二」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年2月22日第1刷発行

2007（平成19）年6月25日第5刷発行

※原題「FAUST. EINE [TRAGO:DIE]」は、ファイル冒頭ではアクセント符号を略し、「FAUST. EINE TRAGODIE」としました。

※底本では一行が長くて二行にわたっているところは、二行目が1字下げになっています。  
※「槓杆《てこ》や螺牡《ねじ》で開《あ》けて見ることは出来ない。」の下の地付きの行番号「675」は、一つ前の行につくべきだと思われませんが、底本どおりにしました。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2012年10月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# ファウスト

## FAUST. EINE TRAGODIE

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>